

テーマ 「戦後復興期を語ろう！」

とき 2018年2月12日

ところ 福山市南公民館

参加者 松井 元相 (マツイ モトゾウ)
廣保 登 (ヒロヤス ノボル)
高橋 實 (タカハシ ミノル)
檀上 裕 (ダンジョウ ユタカ)
大村 修司 (オオムラ シュウジ)
高橋 加造 (タカハシ マスゾウ)
田口 正造 (タグチ ショウゾウ)
司会 堀家 美智子 (ホリケ ミチコ)
〔ふくやまピース・ナビ〕



司会

今日は雪が降るといっておりましたが、なんとか降らずに済みました。寒い中、どうもありがとうございます。よろしくお願いいたします。

私は、福山市人権平和資料館で、平和ボランティアサークル「ふくやまピース・ナビ」の代表をしている堀家と申します。今日、進行をさせていただきますので、よろしくお願い致します。

では、まず初めに、今回、会を開催するにあたってご尽力をいただきました、田口南公民館館長様よりご挨拶をいただきます。田口館長さん、よろしくお願い致します。

田口南公民館館長

みなさん、おはようございます。今日は、座談会に来ていただいて、大変ありがとうございます。寒い中、また3階まで足を運んでいただ

きまして、感謝しております。また、人権平和資料館の寺地副館長さんをはじめ、ふくやまピース・ナビの方々がたくさんおいでいただき、大変ありがとうございます。今日は、お世話になります。

本日の集まりは、ふくやまピース・ナビがされている「戦後体験を記録に残す取組み」ということで、最終的には、証言集にまとめられるということ聞いております。今日は、その前段階ということで、聴き取りのための座談会でございます。

皆様には、過酷な戦争体験をされただけでなく、戦後の復興期についても、一口では言えない大変なご経験をされたこととっております。今日は、その当時の実体験を、ご遠慮なく、忌憚（キタン）なく、伝えていただければ幸いです。

この南学区は、戦争の被害を最も受けた地域ということで、趣旨に合わせて南学区が選ばれたと思いますけれども、本日の出席者につきましては、幼年時や少年期に戦争を体験された方を設定させていただきました。なお、今日は、おひとり都合が悪くてお休みです。出席できなかった方については、また聴き取りをして頂くことをお願いしていますので、本日はよろしくお願い致します。

司会

続いて、こちらの会を代表して、寺地福山市人権平和資料館副館長さんに、挨拶をしていただきます。

寺地福山市人権平和資料館副館長

皆さん、おはようございます。今年から、福山市人権平和資料館の副館長をさせていただいております寺地と申します。よろしくお願い致します。

重複するようになるんですが、今日は、本当

にすごい寒波がきて、体調もなかなかすぐれない方もいらっしゃるのではないかと思うのですが、そういったなかで、わざわざおいでいただいて、本当にありがたいと思っております。どうも、ありがとうございます。

先ほど公民館長さんもおっしゃられたんですが、「ふくやまピース・ナビ」というのは、戦前・戦中・戦後の日本の戦争体験から、我々新しい世代が、何を考えていかないといけないかということで、平和について考える活動をずっとやっている会です。今まで、戦時下の体験の聴き取りをしてきていたんですけども、今年度は、戦後の復興に関わる掘り起こしをしようと、取り組んでいます。今の日本の国の土台を作っていた先人の方々が、本当に厳しい苦勞をされ、それを乗り越えるための知恵、あるいは勇気、そういったものを発揮されてきた過程を、是非とも、我々が引き継いでいかなければいけないという思いに立って、このプロジェクトを組んでいるということでございます。

昔の記憶だと思いますので、今日は、座談会ということで、きちっと話をするということではなく、思い立ったことをどんどん出していただいて、我々の編集の資料にさせていただきたいと思えます。また、詳しい部分については、再度聴き取りをさせていただくということで、今回は忌憚のない思いであったり、思い出を出し合っていたいただければ有難いと思えますので、どうぞよろしくお願いいたします。

最後になったのですが、南公民館の館長さんにおかれましては、この会を開催するうえで、本当にいろいろと細かいご配慮や会場の準備もしていただきました。本当に、どうもありがとうございます。すばらしい会にしていくように、我々も頑張ります。どうぞ、よろしくお願いいたします。

司会

丁寧なご挨拶をいただきまして、ありがとうございました。今日は、最初に予定されていたゲストの方のなかで、土屋輝子さんが欠席されています。

田口正造さん、松井元相さん、檀上裕さん、廣保登さん、高橋實さん、大村修司さん、高橋加造さんにいらしていただいていますので、すみませんが、お一人ずつ、自己紹介をしていただきたいと思えます。個人情報で失礼なんですけど、最初に、お名前のあとに、生年月日を言っただいて、それから、終戦直後の年齢が何歳だったということと、その時就いておられた職業、学生でしたら国民学校の4年生とかの学年を教えてください。それから、終戦の時にどこにお住まいだったかということ織り交ぜて、自己紹介を簡単にさせていただくとありがたいです。終戦時に、今のご住所と違う所にお住まいだった方もいらっしゃると思えますので、申し訳ございませんが、よろしくお願いいたします。

松井元相さん

私は、松井元相です。昭和7年2月16日生まれの85歳です。終戦時には、13歳でした。今は明治町と言っていますが、当時の町名は御門町で、そこに住んでいました。福山空襲では、焼夷弾のなかをくぐって逃げました。それにつきましては、2016年8月に、『広報ふくやま』へ体験を載せていただいたことがあります。

檀上裕さん

私は、姓は檀上、名は裕でございます。昭和13年11月25日生まれ。終戦時には、6歳でした。

中央公園に、福山空襲の母子三人像の銅像がありますね。あの男の子と年齢が近いんです。あの頃、福山の空襲に遭った。ですから、この空襲のことは、あんまり思い出したくない。とにかく、恐怖心でいっぱい、もう怖い。何が怖

いのか、自分でもようわからんけれども、怖い。警戒警報、空襲警報というのは、いつも鳴っておりました。何回も聞くと、慣れるというのはあるんですが、なかでも空襲警報というのは、これはとにかく低音の音で、人々を地の底に引きずり込むような低い音で、この音は何回聞いても、震えがくるというような感じでした。いつも、おとなの陰へ隠れて、怯えておりました。

そういうなか、いよいよ福山空襲という日、その時点では、市内の新涯町の方に疎開しておりました。その当時は、車もなければ、自転車もなかった。てくてく、てくてく歩くと、家から疎開先まで4キロぐらいの道のりで、当時6歳ですから、行くだけでくたびれるというような状況でした。子どもだから、全て歩くことによってしか見聞を広げられない。ラジオがわが家にはなかった。ですから、情報源ってというのは、もうほとんどない。まあ、そういうなかで、終戦を迎えました。続きは、後で話します。



廣保登さん

廣保登です。私は、当時住んでおったのは、新涯です。生まれも新涯で、今も、町名が変わらずに残っている地域の新涯です。昔でいう、新涯町二番。将棋隅。角にお墓があります。そこに、福山空襲当日おりました。終戦の年には、5年生で、11歳。昭和9年6月15日生まれです。

当時、川口小学校に通っていたのですが、やはり百姓なものですから、昼はネギを抜いて、夜それをきれいに束ねて、それから、あくる日

福山の市場に持って行くわけです。空襲の当日は、5時頃にネギを抜く作業は終わり、夕食を済まして、それからネギを束ね始めて、作業が終わったのが夜9時過ぎ頃でした。「もう終わったから、寝ようか。」と言うた頃に、すぐ空襲警報を聞きました。

その当時は、毎日バケツに防火用の水を汲んで置いてあった。バケツといっても、穴が開いたバケツです。家のバケツは、みな穴が開いていた。それをきれいに重ね合わせて、水を入れて、家のまわりに汲んで置いていたわけです。水が少なくなったそのバケツを持って、消火に備えていました。夜、飛行機の音がした時は、私は、5年生の男ながら、ちょっと怖いというか、家から外に出て、空を見上げるのが怖かった。空襲のことについては、今もよう覚えております。それから後のことは、また話しましょう。

高橋實さん

高橋實といいます。私は、昭和10年7月26日生まれの82歳です。空襲の時には、小学校4年生で、10歳でした。

一番怖かったのは、焼夷弾が落ちる一週間ぐらい前です。アメリカの飛行機から、ビラが6万枚くらい落ちてきたんです。そのビラのなかには、「お父さんやお母さんや友達の命は、惜しくないか。」と、書かれていた。「命が惜しいなら、みなさん、爆撃する前に逃げてください。」とも、書かれていました。そのビラには、「あなたの親、兄弟、友達の命を助けたいと思いませんか。助けようと思えば、このビラをよく読んでください。数日のうち、ビラの裏にある地域を攻撃します。」と、書いてありました。

まもなく、8月8日、午後10時前後、警戒警報のサイレンが鳴り、すぐ空襲警報のサイレンが鳴りました。米軍の照明弾が投下され、真昼のように明るく、同時にザーっという音が

して、焼夷弾が雨あられのように、降ってきました。私は命からがら、逃げました。空襲の時は、そういうようなことでした。



司会

3年半前の8月11日に、高橋さんが福山空襲のことについてお話をされた「体験を語る会」があったんですが、その時の新聞の記事とお写真を、今日持ってきてくださっていますので、今度、これをみなさんに回して見ていただきます。

高橋さんは、小学校4年生当時、どちらにお住まいでしたか。

高橋實さん

松浜町です。終戦後に今住んでる所に移りました。

大村修司さん

大村修司と申します。昭和17年6月3日生まれで、75歳です。終戦の頃は、南町へ住んでました。

そこで、家族は終戦を迎えたわけなんですけど、昭和20年には、私は3歳で、祖母と二人で津之郷村の加屋というところへ疎開しておりました。私の一番古い思い出として残っておりますのが、祖母の膝で、疎開先の縁側へ座って福山の町を見ると、真っ赤に燃えていたことです。おそらく、あれが、福山城が燃えた時の炎だろうと思ったんですけれど、ワーッと燃え上がっているその姿が、私の一番古い記憶です。

昭和21年か22年に、疎開先から南町へまた戻ってきました。そこから後のことは、また後で、話をさせていただきたいと思っております。

高橋加造さん

高橋加造と申します。昭和19年3月18日生まれで、73歳です。終戦当時は、1歳5カ月でした。今、なんか、場違いな所に来たような気がしています。生まれは、当時の町名で、東霞町です。今の中央図書館の辺りで生まれまして、現在もそこに住んでいます

先ほど高橋實さんの話に出ていた「伝単」が撒かれた時に、母親がそれを拾って見たようで、怖いということで、私を連れて、芦名郡新市町宮内の母の実家に疎開していたようです。終戦の時、1歳5カ月でしたから、当然戦争のことは全く分かりません。私は、3月生まれで、同級生のなかで一番遅く生まれているので、昭和18年4月に生まれた友だちに聞きますと、防空壕に入った記憶がある人もいます。私は空襲の記憶があるわけではありませんが、当時女生だった叔母は、誠之館中学校のプールの陰に隠れて助かり、自分の家やお城が焼け落ちるのを見た、戦後に話してくれました。以上です。

田口正造さん

田口正造です。戦後生まれで、団塊の世代のトップバッターでございます。生年月日は、昭和22年11月4日で、71歳です。戦後の記憶と言われましても、「金髪の人がおったなあ。」というくらいのもので、あまり記憶に残っておりません。また思い出しましたら、お話させていただきます。

司会

ここに、参加しておられる方、全員に自己紹介していただきたいので、主事さんもお願ひします。

高橋佳子さん

南公民館の主事の高橋佳子と申します。今日、南学区の方が証言者として発表してくださるということだったので、とても良い機会だと思ひまして、私も聴かせていただこうと思ひて参加させていただきました。よろしくお願ひします。

司会

高橋主事さんは、公民館だよりも戦争のことについての特集を組まれて、これまで連載されていらしたんだそうです。また、コピーして、みなさんにもお配りします。ありがとうございます。

ピース・ナビのメンバーの自己紹介（省略）

井崎・大井・杉原・田中・田原・坪山・中山・船井・堀家・森近の10名

職員の自己紹介（省略）

市川・井上・寺地の3名

司会

みなさんは、戦時中のことや福山空襲のことを、機会があるごとに、市民の方や子どもたちに話してこられたと思ひます。私たちも今までは、そういう証言を伺う活動をしてきました。

これから、戦後の占領下の非常に混乱した時代に、福山空襲で家を焼失して、戦時中よりも苦しい生活をされたり、戦時中は疎開をしてなかったのに戦後せざるを得ない状況になったり、親戚の家を転々とされたり、それから、本当にピタッと食べる物がなくなって大変ご苦労をされた方もあったかと思ひます。逆に、戦争が終わって新しい時代が来るといふことで、希望を持ったりと、いろんな場面があったと思ひます。そういうふうには、戦後は、終戦から朝鮮戦争が始まる昭和25年ぐらいまでの5年間が大

変で、朝鮮戦争の軍需景気で、多少食べ物なども手に入りやすくなったり、アメリカからの支援物資で子どもたちも給食が始まったりして、昭和25年を過ぎると落ち着いてきます。その一番大変だった時期のお話を体験者の方に伺って、それを記録に残して、後世の福山市の子どもたちや市民に伝えていこうと思ひています。戦後のことをもっとしっかり伺って、それを記録に残しておきたいといふことです。

それで、漠然とお話をさせていただくのも難しいと思ひますので、一つずつ項目を設けてまして、お手元のレジュメにあるように、「衣」着る物、衣類、「食」食べる物、食料、「住」住む所、住まい、それから、四番目に「教育や子どもの生活」です。終戦の時に、幼児または小学生、中学2年生くらいという方がいらっしゃるので、教育、学校への復学とか、遊びとか、いろんな子どもの生活について、記憶されていることをお話ししていただきたいと思ひます。

それから、福山には、戦後早くに競馬場ができ、それで福山の財政も潤って、公民館が建ったというお話を伺う機会もありましたので、五番目に「娯楽や文化」ですよね。『リンゴの唄』で有名な『そよかぜ』という映画は、終戦2カ月めの10月には、封切られておりました。そういった文化面のこと。それから、六番目に「その他」で、アメリカ軍の後、入れ替わって、オーストラリアの進駐軍が来ていたようですので、そういった、衣・食・住・教育・娯楽などに属さない「その他」の項目について、ご記憶があることをお話しください。

これからは、お話を順番にさせていただく形ではなく、どなたかにお話いただくと、思い出された方が、またその話に追加して下さるといふ形で、進めたいと思ひます。よろしいでしょうか。

では、最初に「着る物」について、終戦後、昭和25年ぐらいまでの間に、衣類などはどう

されていたのか、どういう工夫をされていたのかということ伺いたと思います。一応、目安になるように、年表のようなものを次のページに作ってきています。国民に関係あるだろうと思うことを、羅列して記入しています。講和条約を結んで、日本の占領が終了するまでの期間です。ここで話していただくのは、終戦から朝鮮戦争が勃発した1950年ぐらいまでの間のことですので、その5年間を想定して、お話をさせていただけたらと思います。

では、「着る物」について、何か覚えていらっしゃるものがございましたら、お話ください。みなさん、いかがでしょうか。

廣保登さん

着る物とおっしゃられても、非常に種類が多いですな。「着る物の中にどんなものが入るのか。」と想像もしたんですが、先ほど申しあげたように、私の住む新涯は、田舎で、いろいろなものを家で作っておったので、食べる物は多いぐらいでした。

それで、着る物とはいいますと、履く物にしても、ズックというものは配給でもらったぎり、すぐにダメになり、藁草履（ワラゾウリ）を自分で作って履いとるというのが常識でした。着るものは、大事に、大事に「よそ行き」を着て、それがいつの間にやら「普段着」になって、その普段着が、いつの間にやら破れて、破れて、着られんようになる。それで、お店へお米を持って行って、着る物と換えるわけです。今の人は、ちょっとおわかりにならんかもわからんけど。そのうちに、米は持って行っても、交換する着物がなくなってきました。やがて、その店に高級な着物だけが残ってきます。その高級な着物も、どんどん出さなかったら、米をいただけない。やがて、当然その着物もなくなってくる。

赤ちゃんのいるお母さんは、乳も出ません。

当時は、お母さんの乳が出ないと、重湯を飲まして育てるしかなかった。その重湯のお米はどこにあるのか、田んぼにあります。稲があります。その稲を持って帰れば、重湯やお粥ができます。本当は、手を出してはいけませんけれど、道のほりから稲穂をつかんで、バリバリと摘み取って帰る。粃は、手に入ります。それを瓶に入れて、搗いていけばお米になるんですね。それがなかったら、子どもさんの乳ができないんですね。そのような行為は、私たち子どもも見ておるわけですが、それでもよそを向いて、多少稲穂をむしってお帰りになっても、知らぬ顔をしていました。

こういうような寛大な気持ちを、皆様方もお持ちだろうと思うんですが、私たちの田舎の人間にとっては、当然のこと。芋が掘られて少なくなっても、「まあ、こんくらいはいいじゃないか。」というようなことで、だいたい済ましておりました。イナゴという稲穂につく虫がおったんです。そのイナゴも見ないくらい、みんな捕って食べた。そんな時代です。田畑の作物には、そういうようなことが、毎日起こっておったという事実をお知らせしておきたいと思います。

司会

それは、何年ぐらいまで、そういう状況でしたか。

廣保登さん

そうですねえ、これは、この辺りも戦後1年ぐらいまでは頻繁にありましたが、やはり、食糧を親戚に何とかお世話になったりというようなことで、だんだん少なくなったのではなからうかと思います。

司会

ありがとうございます。今、着る物、履く物以外にも、食べる物についてもお話をしてくだ

さったんですが、多少お話が、広がっても構いませんので、お願いします。

高橋實さん

私は、ちょうど4年生の時に空襲に遭ったんですが、家も焼け、食いもん（物）も何もなかった頃に親戚に行きました。そこに子どもの服があったんですが、それは長いこと押し入れへ入れてしもう（仕舞う）とったような服で、虱（シラミ）やノミがいっぱいこと、服についていました。それを知らずに着て、歩きょうたんです。痒うて、痒うて、たまらんぐらい痒かったんですよ。

食事としたら、さつま芋の芋づるやなんかを食べて、配給いうたら、「厚生団子」。みなさん、厚生団子を知ってってでしょうか。厚生団子を食べても、腹が太るいうだけで、栄養いうものは全然なかったんです。それでも、食べんと腹が減るので、それを食べました。

戦後は、親戚を転々としましたけれど、親が、「やっぱり、家を建てないといけな。」と言うて、掘っ立て小屋を建てました。

そこから、今度は学校いうても、南小学校も焼けてしもうて、行かれん。それで、先生方が勉強できるようにと考えてくれて、東小学校へ移ったんです。南小学校の全員が、東小学校の校舎で勉強したんですよ。本当は、向こうの人と仲ようしゃあええのに、やっぱりこっちのプライドなんかもあって、喧嘩もしました。けれど、そういう気持ちがありまして、「南小学校が、早よう建てくれえ。」と思うから、本当に建った時は、どんぐりゃあ（どれぐらい）、嬉しかったことか。やっと、南小学校へ帰られるいうことで、嬉しゅうて、嬉しゅうて、たまらなんだです。

そういう状況で、私らが南小学校へ帰った頃も、ご飯といったら、お粥か芋。芋粥をお粥さんじゃいうて食べた。それで、腹を太らしよう

たんです。その頃には、よう（よく）痩せとったんですわ。そういうことで、皆さんも記憶にあらうと思いますが、そういう場面を、なん遍も経験してきたようなことです。



司会

南小学校が建ったのは、何年後ぐらいですか。

高橋實さん

私らが6年生ぐらいかな。卒業する前ぐらいじゃったと思うんですがね。

司会

高橋さんは4年生でいらっしゃったから、2年後ぐらいには学校ができたんですね。

大村修司さん

南小学校は、その後、もう一回焼けとるじゃろ。

高橋實さん

建てて、また、火事がいったんです。その時駆けつけて、腰かけなんかを、外に出したという事は覚えとるんじゃけど。

田口正造さん

その火事で、南小学校が全焼したんですが、昭和26年のことです。

司会

2年後に建った校舎は、立派だったんですか。

それとも、仮小屋みたいな感じでしたか。

高橋實さん

結構、いい建物でした。

司会

では、学校の再建に必要な材木は、ちゃんと準備できたということですね。

高橋實さんは、お住まいを、「掘っ立て小屋」とおっしゃっていましたが、焼け残っている木とかを利用して建てられたのですか。

高橋實さん

木をこうやって組んで、莫産（ゴザ）というか、筵（ムシロ）を敷いて住んでました。

廣保登さん

戦後の建築は、基準が非常に厳しくて、新しいのを建てるのに、屋根の高さや柱の長さを設定してしもうて、「頭がちょうど当たらないぐらいの柱の長さの寸法でなかったら、家を建てさせない。」というようなことが、何年かあった。

その終戦直後の建物は、今は、あちらこちらというような言葉が使えないほど、すくのう（少なく）になりましたね。一軒だけは、私も知っております。戦後のそのまんまの家を、今も使おうてん所は、壁で保つとるんです。ご存知のように、家というものは柱でなくて、壁で強度が保てる。壁だけは、後に新しく塗り替えて、柱はその昔のままになつとるのが一軒あります。当時は、建築の規格が難しかったんです。

松井元相さん

住居の問題ですが、自分のところは、わりと早く、11月にはもう家を建てました。なんで建てられたかというのと、親父が福塩線の沿線の駅長をやっていたものですから、話を付けて、その辺りの人から材木をもらってできたわけで

す。それまでの経過、例えば瓦礫の処分、機材の入手方法とか、ものすごく大変だったわけです。みんな大変な状況ですから、誰も手伝ってくれません。自分の家族で全部片づけて、やっと家が11月にできたわけです。終戦後3カ月では、そういうふうな住居を建てるにあたっての苦労はありましたね。

家ができてすぐ、屋根へ上がって駅の方を見ると、焼け野原となった中に、お城や駅の焼け跡が見え、空襲の恐ろしさと、悲しさを改めて感じました。



司会

着る物や食事、それから、住むところや学校のことなど、3～4項目ぐらい一緒に話をさせていただいているんですが、なかなか、一つのことだけに絞るのは難しいようですね。構いませんので、思いついたお話をさせていただいたら、こちらのほうで、またお聴きたいことを質問しますので、まだ話していらっしゃらない方、特にお願ひします。

大村修司さん

「食」といいましたら、当時は配給制度のなかで、米という主食は、完全に配給制でした。それでは足りないの、先ほども話にでたように、ヤミ米を買っていました。高橋實さんが言われていた団子みたいなものですが、あの匂いは、今でも嗅いだ時を思い出すような、言っちゃあ悪いけど嫌な臭いです。「厚生団子」は、焼いてはあるんだけど、臭いが鼻について食べられない。

| | | | | | |
|-----|-----|-----------|------|------|------|
| 姓名 | 住所 | 職業 | 配給 | 配給 | 配給 |
| 松永町 | 松永町 | 家庭用米穀購入通帳 | 西配給所 | 西配給所 | 西配給所 |
| 松永町 | 松永町 | 松永町 | 西配給所 | 西配給所 | 西配給所 |
| 松永町 | 松永町 | 松永町 | 西配給所 | 西配給所 | 西配給所 |
| 松永町 | 松永町 | 松永町 | 西配給所 | 西配給所 | 西配給所 |
| 松永町 | 松永町 | 松永町 | 西配給所 | 西配給所 | 西配給所 |
| 松永町 | 松永町 | 松永町 | 西配給所 | 西配給所 | 西配給所 |
| 松永町 | 松永町 | 松永町 | 西配給所 | 西配給所 | 西配給所 |
| 松永町 | 松永町 | 松永町 | 西配給所 | 西配給所 | 西配給所 |
| 松永町 | 松永町 | 松永町 | 西配給所 | 西配給所 | 西配給所 |

高橋實さん

米糠を入れてある。本当に、よっぽど腹が減つたらんと食べられん。今、「食べえ。」と言われたら、捨てるでしょうね。

司会

私たちふくやまピース・ナビでは、昨年、試しに作って食べました。

高橋實さん

どうじゃった。

司会

温かい時は、糠とサツマイモの蔓の甘味で、のどに引っかからないように食べられるんですけど、冷めたら、ちょっと食べにくかったですわね。

高橋實さん

私らも、「何の蔓じゃ。かんの蔓じゃ」、「これは食べられるんじゃ。これは食べられんのんじゃ。」と言うて選んで、食べられるのは、全部食べようたけえねえ。道をずっと歩いて行きようと、お百姓が、野菜の葉っぱを捨てとるのがあるんじゃ。結構食べられる状態なんで、それを拾ってきて食べようた。今頃じゃったら、捨てるようなもん（物）だけど、あの頃は、本当

に貴重な野菜じゃったけえね。百姓家（ヒヤクショウヤ：農家）なんかに行って、「米を分けてくれえ。」言うたら、「ダメ。」いうて、ようわりようたしねえ。

司会

ヤミ米を、どこら辺りまで買い出しに行かれてましたか。

大村修司さん

うちは、神辺ぐらいじゃった。

高橋實さん

私らは、新涯や川口の方まで行きようた。それが警察に見つかると、没収。全部。

司会

没収された米は、どこに行ったのですか。

廣保登さん

さあ、そこまではわからん。

司会

警察官が、食べてたんですかね。

高橋實さん

警察が食べたとったか、誰が食べたとったかどうかは、わかりません。

廣保登さん

当時は、表にでないことは、いっぱいあった。表に出ないことがあるから、生きておるんです。

司会

表に出ないことを、今、蓋を開けてみたいですね。

廣保登さん

蓋を開けたら、大変なことになると思うから、私も、蓋を開けかけて止めて、これ以上は開けないと決めたいです。「絶対にヤミ米を食べたらいけない。」と、言うて食べなかったら、人がいっぱい死んでますよ。ヤミ米で命を繋いできたという人が、半分くらいおられます。特に、お金のない人、身分のない人は、ヤミ米じゃなくして、タダでもらう。それで命を繋いだ人が、莫大おられます。

だから、どこまでそういうことを本気で考えるかということ、その裏を考えていただいて、それでその時の世の中いうものは、どんなだったかというのを想像する。

猫や犬、人間の家族も、みな繋がりというのは同じだろうと思うんですよ。そういうことで、特に食べ物、これは、思っているほど簡単に手に入るものではありません。食べ物を手に入れないければ、生きていけない時代です。先ほど私が申しあげたように、よそを向いて見逃しとかかなんだら、ダメです。まともに考えたら、解決にならない。

高橋實さん

そういえば、配給といっても、主食でなく砂糖の配給があったことがある。それを百姓家(ヒャクショウヤ)に持って行って、米と換えてもらったことがあるねえ。

廣保登さん

私は10年を超えるほど、福山大空襲の劇をしました。メンバーが75人おったわけですが、11年間、毎年一回上演していました。毎年70人出演で、リーデンローズでもしておりますし、県民文化センターでもやったわけです。私も年が年なんで、平成11年を最後に、終わらせていただきました。

皆さんに何を汲んでほしかったかということ、先ほど申しあげたように、理屈でもない、文書

でもない、「人の心」というもので世間が成り立っておる。

さっきのお話でも、私が言うたことに、もう一つ付け加えさせていただきたい事実があるわけです。せっかくヤミ米を手に入れても、先ほどの話に出ていたように、警察の方がヤミ米を没収してしまうことはあります。その米が、「どこに行ったか。」というようなことをおっしゃってましたが、それはどこに行ってもいいと、私は思うんです。それを食べると、命が続かない人に食べてほしいんです。それで、あえて捕まるんですよ。捕まらない道はあるんですよ。捕まる道を通らにゃあいんですから。あえて通って、捕まえられるんですよ。それで助かった人がおるんですよ。米のない人の口に入る。

もう、お分かりでしょう。没収したヤミ米は、どこへ行くんだらう。お腹が空いて、お金もない、何もない人の口の中に入るんです。だから、やはり、捕まえられる方も捕まえる方も、ひっくり返えしてみると、悪いことをしたとは言えない。そういうことになる。それで、一つの命が助かるのであれば結構だと思います。

大井さん

ヤミ米は、農家へ買いに行ったそうですが、街のなかでは「市(イチ)」というのは、なかったんですか。

大村修司さん

駅の裏へあったね。

廣保登さん

米はありません。米は扱えないんで。野菜とか古着とか、そういうものはありました。

大井さん

厚生団子も、そんなところで売られてたんですか。

廣保登さん

田舎の人が、作って売るといのはありませんでした。かといって、町の人が商業的にという言葉は当たらないかもわかりませんが。

大井さん

配給だけじゃあ、お腹も太らないですよ。どのくらいのペースで、配給があったんですか。

廣保登さん

配給は、本当に「配給」です。お腹がパンパンになるような配給というのは、この世の中にはないです。もう最低限の量しかない。

大井さん

それは、定期的に配給日が決まっているんですか。それとも、「今日、配給があるよ。」と言われて、急にもらいに行くんですか。

大村修司さん

帳面があって、それを持って、配給がお米なら、米屋さんへ行って受け取るんです。判子を押してもらって、いただいて帰ってね。だから、その一回分の量というのが、今のカロリーでいったら、到底、足りるようなカロリーじゃあないですよ。

司会

戦後、何年間ぐらい、配給が続きましたか。

大村修司さん

朝鮮動乱（朝鮮戦争。1950年～1953年。）があったでしょ。あの頃ぐらいまでかね。食生活が、少し良くなったんで。

司会

食生活が良くなって落ち着いてきたので、配給という形がなくなったということですか。

廣保登さん

これは、お米だけでなく、着る物から何から、全体的によ。私は、小学校5年生の時が、終戦の昭和20年になるわけですが、もう、昭和16・17年ぐらいから履物がなくなりましたからね。だから、一年に一回だけ券をもらって、それで靴を買いに行く。たくさん券をもらって、たくさん買ってというようなことを、子ども同士でもやってたですけど、その代り、券をもらうでも、いろいろもめ事がありました。

司会

檀上さん、何かございますか。

檀上裕さん

衣食住の「衣」は、私自身も子ども頃に、自分自身が何を着ていたか思い出せませんので、戦時中の着物の状況を、ちょっと話させていただきます。

お父さんとか若い男の人は、もう全部兵隊にとられて、残ったのは女性と子どもとおじいさんとおばあさんです。そのお母さん方が着ていらっしゃる着物は、緋のモンペで、首に、絶えず防空頭巾をかけて、町内の防火訓練、バケツリレーにも出ていました。町内のあるおじいさんが町内の連絡員をしていて、そのおじいさんの服装は、兵隊さんが着ておるような国防色の服で、ゲートルを巻いてらっしゃたと思う。戦闘帽をかぶって、首にメガホンを二つぶら下げて、私たち子どもを見ると、「何かことがあったら、防空壕に避難せえよ。」と、絶えず私ら子どもに呼びかけてくださっておりました。男性の服の記憶がはっきりしているのは、その連絡員さんぐらい。戦後は、よく覚えていないね。

戦後の食に関して、今お米の話が出ましたけれど、ちゃんと配給があったんです。その配給は、外米。今のように、国内でお米を植えて育つお米じゃあない。どこの国から来たのか、ど

ここに眠っておったのか、もう、とにかく臭いいうもんじゃないぐらい臭いがきつい。お袋が洗っても洗っても、臭いがとれない。だけど、人間はいいようにできていて、それも我慢すりゃあ、食べられるんです。外米は、一粒がちょっと細長い。悪く考えれば、よその国では、家畜の飼料かなんかにしとったんかなと、いうぐらいです。ですが、その外米も、加工して食べればおいしいんです。でも、とにかく臭いというのが子ども心に染み付いている。ですが、我慢して食べて、命を繋がせていただきました。

食糧事情が大変悪いので、私は南小学校でお世話になったんですが、校庭の隅にさつま芋を植えて、それが生（ナ）ったら先生が蒸してくれて、みんなでいただいたという楽しい思い出もあります。

五番目の娯楽・文化では、映画の話をしします。映画のことを、「活動」と言っていました。「おい、活動を観に行こうや。」と言って、他の人を誘う感覚です。当時は、無声映画でした。全然、声が出てこないんです。その無声映画も、だんだん世の中が変わってきて、映画ということになったんです。「活動いうものは、こういうものじゃ。」と、先生が子どもたちと手を繋いで、連れて行ってくださいました。その時の入場料金が、1円99銭でした。子どもがみんな1円99銭出して、大勝館へ行ったように記憶しています。内容は、物語でもなんでもなく、ただ川が流れる映画でした。その時に、「スクリーンというのは、どういうものか。」と、関心を持ったようなことです。

六番目の進駐軍などについてですが、終戦後、大津野の駐屯地に、進駐軍のたくさんの兵隊さんが移動してくるんですが、これを見た時、日本男児として、「あいつらにやられた。こん畜生！」というような、ちょっと複雑な気持ちが湧いてきたのを覚えております。

その進駐軍から、兵隊にいろんな物資が配ら

れるんですね。兵隊さんが小遣いにするために、非番の日にその物資をリュックサックへ入れて、各家庭に売って歩くんです。その中で、チューインガムとかチョコレートとかパイナップルの缶詰とかそんな物を、わが家にも訪れて、「こうて（買って）くれえ。」と、言って売りつける。その時に、チョコレートとパイナップル缶を買った。パイナップルの缶詰は、今でもスーパーで100円ぐらいで売っている、全くあれと同じなんです。私のところは、戦前、菓子を製造しとったもので、甘いものは食べとったんですけども、戦後芋ばっかしの生活をしてきとるもので、そのパイナップルを食べた時のおいしかったこと。もう、命が洗われると言うてええか、心の中に染みし渡っていく。ですから、その当時は思い起こすためにも、今でも、時々スーパーで100円のパイナップル缶を買って帰って、その当時は惚ぶんです。

森近さん

映画館の入場料が、1円99銭って言われてましたよね。チョコレートとかパイ缶は、だいたいどれくらいだったか、覚えていらっしゃいますか。

檀上裕さん

もう、覚えてない。進駐軍には、だいたいおとなが対応しようたけえね。お母さんが、対応しようたんで、記憶に残ってないね。

大村修司さん

昭和26年に、南小学校が火事になったわけなんですけども、焼け跡に脱脂粉乳の臭いが、すごく残とったんですよ。一番忘れられない臭いです。

この「脱脂粉乳（生乳や牛乳から脂肪分と水分を除去し、粉末状にしたもの）」というと、給食の中で、子どもの不人気の一つだったんです

よ。だけど、それを飲まずに、残しちゃあいけん。怒られるんで、無理して飲んでた。物が不足しとった時代でも、あの脱脂粉乳は、まずかった。今でも嫌いですね。

田口正造さん

給食には、「脱脂粉乳」と「はったい粉（大麦や裸麦を炒って挽いた粉）」。今からいうたら贅沢なんだけど、「鯨の竜田焼き」というのが僕らの時代には出ていました。昭和25年より後ですね。

松井さんから、「住」の話が出たんですが、焼け残った家を、あっちこっち「家引き」してましたね。あっちへ移したり、こっちへ持って行ったり。「家引き」は、戦後すぐからあったんですかね。

松井元相さん

「家引き」は、昭和24年、25年ぐらいからですね。

大村修司さん

都市計画です。

廣保登さん

この辺りは、バラ公園を作るのに、この家の一つこっちへ持ってきて、それから、向こうの家は花園の方へいき、こっちのもう一軒あった家は、引くいうてたけど、結局は距離が遠いからいうてやめた。引く支度をしたけど。

田口正造さん

それは、何年頃ですか。

廣保登さん

都市計画ができてから。御門町の南公園へ、バラを植えた。公園を作ろうという話が市会のほうから出て、線引きをしたら、動かす家が三

つあるけえいうて、移動したように聞いた。結局、動かすのに、一週間くらいかかるんよ。

大村修司さん

そうですね。「回せえ。回せえ。」言うて、家を持ち上げるんですよ。私、南町へおったんですけども、南町の家は、ほとんど縦列の家が動いとるんです。今は、あまり広く感じなくなりましたが、当時あの道路は、すっごく広く感じたんです。

司会

駅前大通りのことですか。

大村修司さん

いや。駅前じゃなくて、国道2号線からバラ公園へ行く道ですね。

廣保登さん

あそこは、元々、田んぼじゃったんです。畑と田んぼ。「本通り」というところは、家がダーッと並んどります。その裏になるわけです。家の並びに平行して東側には家もないし、田んぼが多かったから、そこへ広い道を造ったんでしょう。駅前も、ちょうど、家の並んだ裏側のそういう農地をつこうて（使って）、広い道をつけたのがほとんどです。広い道はそういうように、家のないところの田んぼをつこうて（使って）、作ったような感じではありましたがね。

大村修司さん

轆線に関連するところは、福德町・住吉町・南町・松浜町、あの辺りが、都市計画のなかで家を動かした。今でも覚えています、N社っていう家引きをする業者がいました。

司会

では、仮に、昭和20年に家が焼けたので、

家を自分たちの力で建てたとします。建てたけど、区画整理で動けと言われたら、「引き家」をして、動かしたっていいことですか。

廣保登さん

「引き家」と言うのは、焼けてない家をしたんです。終戦後すぐに建てた家は、引くほどの家でもない。引いたら壊れる。

司会

建坪7坪で、6畳と3畳に、便所と土間と押し入れが一つぐらいついた組立式簡易住宅500戸を、市が、戦後すぐに、希望者に売りに出したっていいことなんですか、ご存知でしょうか。

廣保登さん

それは、御門町か野上町になるのか、元競馬場の所、今の体育館の所にあったんです。その場所は、戦時中まで焼き場（火葬場）だったんです。終戦になる前頃まで使ようたかな。

福山の戦災で亡くなられた人を運んだのは、芦田川。そういう話は聞いてないかな。

司会

そのことは、お聞きしています。ただ、ラッキョ自動車（軀鉄道の蒸気機関車の通称名）だとか、今、線路もなくてピンとこないことも多くて。川や地形が、現在と変わってたりするので、お聞きしてもよくわからないんです。

廣保登さん

あまり変わってないですよ。皆、一部は残りますよ。私ら、わかりますよ。

高橋加造さん

芦田川が今ようになったのは、昭和になってからです。大正時代には、鷹取川というのが、

神島橋の少し下流から、水道局の表を通過して体育館の方へ流れていました。あの川が、芦田川の支流でしたが、水量は多かったです。

大正8年7月5日に、増水して、鷹取川の土手が崩れて、水道局の前の方から霞町通りの方にむけて、水がドーンと流れてきたので、福山も大水害になったんです。軀鉄の鉄橋に、藁葺屋根がかかっている状態だったそうです。

それで、結局、芦田川を直線で流そうということで、鷹取川、後の淀川ですが、それを廢川地（ハイセンチ）にして、そこが住宅になった。だから、芦田川は、昔は2本に分かれてとったんです。光学区とか霞学区の人は、よくご存じです。南学区の人は離れているから、わからないかもしれない。



廣保登さん

福山市には、多治米、川口、新涯と、大きな農地があったんです。そこへ水を取るのに、芦田川の本流そのものを、ちょっと嵩上げして、堰をして、それで水を農地の方へ引いた。嵩上げしなかったら、水が農地へ行かないんです。その時の川も、今も残っています。あの狭いのが、本流です。これは、水利組合の中で、ものすごい難しいことがありましてね。そういうので、あそこに残ってるんですが、一番初めの川が、道三川（ドウサンガワ）ですね。この道三川が、今かろうじて、一部残っています。

高橋加造さん

廣保さんがおっしゃっている川の正式名称が、

下井出川というんです。これが多治米、川口へ行ってるんです。道三川は、その下井出川が古野上町のところから分かれてきているんですけど、南学区に、今、田が一枚しかないわけです。福山市土地改良区の水利権がそこへありますから、農業用の水を使わないんだったら、もう流れてこないようにしているんですね。ほとんど水が入ってこないんです。今、道三川では、南学区で一カ所、霞学区で二カ所ぐらいが、地下水を汲み上げている。それも、時間制で、夜間も止まっている。だから、道三川の水量が少ないんです。

それから、新涯・箕島については、先ほど出た鷹取川の水が行ってたんです。今では、サイフォンという方式で、稲荷神社のところから、芦田川の下をくぐって、直接、芦田川の左岸に沿って水が行ってます。その鷹取川も、淀川と違って残っていましたが、その淀川も廃川になって、今は、道路になっています。フレスタ草戸店の裏側の道が、ずっと体育館までいってますが、それが淀川跡です。

しばらく鷹取川いう大きな川があって、それを洪水の後、埋めたんです。廃川地にするんですけど、新涯学区に水をまわすために、淀川という川だけにして、残したわけですよね。

今の草戸は、鷹取川を渡ったら、中州になってたんです。ずっと、今の草戸大橋西詰のところに、銭取橋（ゼニトリバシ）という橋があったんです。軌鉄道は、二つの橋を渡っていくことになるんです。

司会

今、衣食住のお話をいただいたんですが、学校の話では、南小学校の火事のことが出ました。

その他で、小学校の子どもの遊びなどはどうでしたか。また、戦時中はしっかり勉強できなかったと思いますが、戦後は勉強のほうはどうでしたでしょうか。

廣保登さん

戦時中のことですが、私は、南ではなくて川口ですが、終戦の時、川口の小学校で5年生だったんです。だいたい3年生ぐらいから、勉強のほうは、あまりなかったです。主に、作業奉仕がありました。その作業奉仕のなかで、芦田川の土手の草を取って、そこにさつま芋を植えたりもしました。いい芋は生（ナ）りませんわね。水をやらんかったらね。それから肥もないしね。でも、「やれ。」という命令だから、「やらにゃあならん。」ということで、運動場も鍬で掘って、さつま芋を植えました。これも、肥もないし土は硬いし、出来はひどいものでした。しかしながら、少しでも収穫があればというようなことで、運動場の一部に芋を植え、食料の増産ということが考えられておりました。

授業の方は、本も非常に少なく、二人で一冊、あるいは三人で一冊になったりしました。ノートは、配給でも足りん状態ですね。習字は、新聞紙を持って行きました。新聞紙しか、書くものがなかった。川口小学校は焼けなかったけれど、勉強するということについては、非常に難しかった。

司会

教科書で勉強するような授業は、終戦後はどうでしたか。

廣保登さん

終戦前も、終戦後も少なかった。生徒の数だけ、配給で教科書は届いていなかった。

司会

一番おもしろい授業だと思われた授業とかは、ありましたか。どんな授業だったんでしょうか。

廣保登さん

戦時中は、授業では、「おもしろい。」という

ようなものは、なかった。私らは、授業そのものがないようなもので。外へ出て、作業がほとんどですからね、授業の時間いうものはほとんどなかった。戦後は、授業はあったけど。

それに、今のような娯楽というのは、考えたこともありませんね。なかったです。

先ほど、檀上さんが言われましたが、町の映画館へ行って、映画を観るのが、1円99銭じやいうのは、ちょっと覚えてなかったです。その頃、人気の弁士は「徳川夢声」さん。映画を観に行くのではないんですよ。徳川夢声さんを聴きに行く。映画の題名は、そんなものは関係ない。弁士が、どなたが来るかが一番の関心事じゃった。しゃべらん弁士さん、おもしろおかしゅうになんぼでもしゃべる弁士さん。「泉詩郎」さんなんか、ターターと、口をつむぐ（喋む：ツグム）ことがないぐらい楽しくしゃべってねえ。大勝館とか、ニュース館、それから、大黒座ですね。

大黒座は、座席が枱（マス）になっておる。枱いうて、6畳間、4畳半くらいの枱で、真ん中に火鉢を入れてあるんです。冬は火鉢にあたる。それで、早く来た人が燠（オキ）を買うんです。火の熾（オコ）った炭を買うていくんですよ。そうして、一人が燠を入れる。多少熱くなって、次に来た人が、新しいところへ座るよりは、誰かが燠を入れとってるところへ、もう一つ入れれば温かくなるということで、だいたい一つの枱からだんだん埋まる。それで、座席がいっぱいになったら、朝10時頃に開（ア）きました。昼にお弁当を持って行きますから、火鉢に当たってお弁当を食べて、それから映画を観て帰るというようなことが楽しみでした。ニュース館は、映画を椅子で観ました。

司会

缶蹴りとかこま回しとか、そういうもの以外に、戦後は、野球をしたり、キャッチボール

をしたりしたそうですが。

廣保登さん

戦後は六・三制になりました。野球で思い出したんですが、「六・三制 野球ばかりが強くなり。」というのが、新聞へ出てましてねえ。何を意味したんでしょうか、腹が立ちました。自分が勉強しなかったのを棚に上げて、腹を立てたりしてましたよ。でも、腹を立てるほどのことではなかった。

司会

野球というと、キャッチボールとか、野球の試合とかを、よくされたんですか。

廣保登さん

本を開くより、ボールを握っとる方が長かったのではないのでしょうか。

司会

でも、ボールやグローブなどは十分にありませんよね。

廣保登さん

グローブはね、自分で作るものでしたね。しかし、そんなことは、あまり長くは続かなかったですね。すぐ、輸入で入りました。昭和23年ぐらいには、福山でも、もう見かけようたですよ。福山市内で、売ってたかどうかわかりませんが。大阪の方から入ってきていたという話は、聞いております。

大村修司さん

一般の子どものベースボールっていうのは、どちらかというと、軟球のテニスボールがあるでしょ。あれで、やってたよね。グローブはやっぱり高いから、素手ですれば買わんで済む。

高橋加造さん

「ワンバン、ノーバン。」と、軟式のテニスボールみたいな玉を投げて、ワンバウンドで取るか、ノーバウンドで取ると、打つことができた。

田口正造さん

僕らの時には、ノーバンで、田んぼの中でも、三角ベースでできたね。

高橋實さん

空襲の時は、学校に着いてカバンを置いて、「やれのう。」言うたら、警戒警報が鳴る。すると、先生に、「はよう（早く）、帰れ！」と言われて、本当に、4年、5年生くらいまでは、全然勉強いうことをしたことがないけえね。机に座ったら、警戒警報、次に空襲警報。先生が、「みなさん、すぐ帰りなさい。」と言うて、先生が帰らしようた。

カバンも風呂敷で包んだようなカバンを持って行きようたねえ。勉強いうのは、したことがない。

司会

戦後、勉強をしたいと思われたりしましたか。

高橋實さん

5年か、6年ぐらいになると、みんなに遅れとるから、「こりゃあ、ちいと（ちょっと）勉強せんといけんのんかなあ。」と思うた。そりゃあ、頭のええ子も、仰山おる。じゃが、一年間、なかなか勉強が追いついていかれんようなことがあったですね。ただ、「もう勉強せずに、悪いことをしたろう（してやろう）か。」という気もなかったしねえ。泣き泣きついていったというのが、本音ですわ。

それでも、家も何も焼けんと、のうのうとしとる人を見りゃあ、腹が立ってねえ。「こんなあ（こいつ）、ええ服を着てきとらあ。」とか思っ

て、悔しかったよね。私は、ボロ服を着て行きようたけえねえ。やっぱり、学校で、たまに「あんなあ（あいつ）、ボロ服着てから、貧乏人じゃあのを。」と言うのを、聞いたことがあるんです。

司会

ちゃんとしたお洋服を着てる人と、そうでない人と、少しずつ溝のようなものができた感じですかね。

大村修司さん

だから、差別的なものっていうのは、今よりは、全然比べ物にならんぐらいあったですよ。いじめっていうのも、「昔のいじめはさっぱり、今のいじめはイジイジしとる。」と言うが、比べても、時代が違うから何とも言えない。今も昔も、いじめはいじめだよな。

高橋實さん

昔は、ケガをさせたりといういじめはなかったよね。

大村修司さん

でも、結構、ひどいことをしようたよ。先生なんかも、ひどかったよ。

高橋實さん

先生は、もう、ひどかったです。気に食わなかったら、棒で頭を叩いていくんです。先生に、「私らの頭は、木魚じゃないんです。」と、言っておりました。先生に叩かれて、家へ帰ってお母さんに言うたら、「お前が悪いけえ、叩かれたんじゃ。」と言われた。今頃の学校の先生とは、全然違う。今は、叩いたら大事（オオゴト）じゃけど、昔は、叩かれるんが普通じゃいう考えがあったですね。

大村修司さん

「叩く方より、叩かれる方が悪い。」という考えがあったね。

司会

皆さん、ほとんどの方が、小学生とか、3歳とか、1歳とかなので、小学生の方は、戦後は学校に復帰されたと思うんですが、松井さんは大きくなっていらしたので、仕事をしよう思えばできるような年齢に近くなってくると、終戦後、同級生の方はどんなふうでしたか。皆さん、学校に戻ってこられましたか。それとも、働きに行かれましたか。

松井元相さん

みんな、学校に戻ってきました。僕は、工業学校（広島県立福山工業学校）に通っていました。福塩線の沿線で、神辺よりまだ奥の方からでも、歩いてくる人がおりましたからね。ほとんど休むことなしに、勉強はしていました。

工業学校は、空襲で焼けてないですからね。学校の講堂の中に、ものすごい物資があったんです。靴とか帽子とか軍服といった物が、いっぱいありました。それが、終戦後、いつの間にかなくなってしまったんです。

戦時中、「英語は、習ったらいかん。」という話があったでしょ。国のほうからも、そういうことを禁止されていたと思うんですが、英語の先生は、戦時中もそのままおって、英語の時間もそのままあったんです。だから、戦時中も英語を習っていたんです。そういうふうなこともあったわけです。

司会

戦時中は、旧制中学校より、工業学校の方が、授業がちゃんとできていたということですね。

松井元相さん

おそらく、誠之館中学校やなんかは、動員さ

れて、勉強をしてなかったと思います。

司会

やっぱり、戦時中は、戦争に役立つ技術者になる人材は、大事にされたんですね。

松井元相さん

子どもなので、そのところはどうか知りませんがね。終戦前には、学徒動員で1日ほど行きましたけど、それ以外は行った覚えがありません。

廣保登さん

戦後の学校のことを、話させてもらいます。

南小学校と川口小学校の進学先は、福山市立第三中学校（現福山市立城南中学校）になりました。昭和22年から新制中学になったんです。私は、その最初の1年生です。その1年生の入学式が、あったか、なかったか覚えていません。第三中学校の校章は、私がおる時に作った。第三だから、「三」の三本線、「中（ちゅう）」をまん中に入れてある。

第一・第二・第三と、中学校が三つありました。第一中学校（現福山市立東中学校）いうたら、東小学校の子が行く。（昭和49年より東小学校の児童は福山市立中央中学校へ通学）第二中学校（現福山市立城北中学校）いうたら、樹徳小学校の子が行くというふうになっとった。鷹取中学校（元福山市立第四中学校）は、あとでできました。（昭和24年設立）

新しい学制になってから、初めて1年生で入ったのが私らです。私らは、昭和22年に入って25年に卒業した。

それがなんと、入った教室が、陸軍歩兵第四十一連隊の倉庫。第四十一連隊の東南の角に、衣服倉庫がありました。L字型の建物で、被服の下着の倉庫があった。当時、全部の窓には、ガラスが1枚もありませんでした。第四十一連

隊は、焼けなかった。それで、中にあるものを全部出して、窓ガラスさえありませんでした。私らがきれいに掃除して、窓には新聞紙を貼って、1年生、2年生の時には、そこで勉強しました。いっぱいいろんな虫が飛んでくるし、外に出たら、どうにもならないような所でした。

司会

第三中学校ができたというのは名ばかりで、陸軍歩兵第四十一連隊の跡地の倉庫をきれいにして、勉強したということなんですね。

廣保登さん

はい。ガラスありません。虫はいっぱい、なんぼでもいます。

高橋實さん

一番いい場所は、今の広大附属中学校（当時広島青年師範学校附属福山中学校。現広島大学附属福山中学校・高等学校）が取ったよね。附属中学校が、前側の赤茶色の建物、一番ええ所を使おうた。一番奥の悪い所を、第三中学校が使って。

廣保登さん

第四十一連隊の東南の角、L字になった所の2階建てを第三中学校が使って、入口左側には、附属中学校と高等学校が入っていました。

私らが中学校の2年生になって、一番裏の校舎を建て替えて、私らが3年生の二学期に完成したんです。その時に、私らが、芦田川から砂を担いで運んだりして、ベースボールができるぐらいの校庭を2学期の時に造りました。それで、新しい校舎で卒業させてほしかったんですね。それまで、校舎を建てるのに、一生懸命に手伝つとるわけですから。どっちかいうたら、勉強なんかしとく（したく）ない者ばかりです。それでも、そういうような形で、手合（テ

ゴウ:手伝い)しに行つとるんだから、「せめて、中学校を卒業するのは、新しい校舎で卒業させてくれえ。」ということで、教育委員会に言うたら、「そんなことはせんでも、今の所でせえ。」言うんです。生徒の方は「新しい校舎です。」と言うし、教育委員会は「今の所でいい。」と言うし。結果的に、どうしたかという、「それじゃあ、黙って卒業式をしようか。」と言うて、二学期に自分たちの机と腰掛を新しい校舎へ、みな持つ行って、否応なしに、「新しい校舎じゃないとできん。」ということにしました。

司会

じゃあ、4学年下の檀上さんから後の生徒さんは、みんな新しい校舎で、入学し勉強ができたとうことですか。廣保さんは、昭和25年の3月のご卒業ですよ。

廣保登さん

ええ、25年です。それが、第一期生です。そんなようなことがあって、今の城南中学校の場合は、同窓会を作るのが遅くなりまして、30年くらい経った時でしたか、先生が「同窓会ができとらんのじゃが。」と、言われたんで、「じゃあ、作ろうか。」と言うて、作りました。30年も経ってから、支度して、ようよう声をかけて、一応、私が作ったようにはなつとるんですけどね。ええ（いい）ようにできてないんが、ちょっと心残りです。

司会

あと残り時間が、15分ぐらいになりました。皆さん、だいたい羅列して話して下さっているんで、その中で、もっと突っ込んで聞きたいことがあれば、質問をしてください。

松井元相さん

「戦後復興期を語ろう！」ということだった

んで、戦時中のことが、これだけ話に出ると思わなかったです。戦後の復興期というたら、それから後のことを話さなきゃいかんわけです。終戦直後から、いろんなことが発生しと思うんです。

例えば、昭和22年には、「福山産業復興博覧会」いうのが開催されています。それから、福山の道路の建設とか、かなり後になるけど福山城の再建とか、こういうことがもうずっとできてきているわけです。そのことが、全然、話題にならずに、戦時中はこうじゃったという話になってしまったのは、ちょっと残念な気がします。

実際に、図書館へ行ってから、いろんな本を見てみたんですけど、案外、福山の戦後関係の本がないんです。種類が、全然ない。ということは、「市民の皆さんの関心がない。」と、いうことかなと思っているわけなんです。本がないから調べようがないということ、つくづく感じました。

それで、今回、「戦後復興期を語ろう！」ということで、そういうことが取り上げられるんじゃないかと思うていたので、このまま終わるんでは、復興の大事なことが語られていないようで、心残りです。



司会

今日、参加されたみなさんにお話を伺って、また、更に個別に詳しく伺う予定です。今日は、顔合わせでもあるので、自由に思いついたことを話させていただくというような形をとらせていただきました。

でも、確かに、どこの項目かはっきりしないことや、産業復興博覧会の開催など行政が主導したことについては、お話が出なかったのも、そのままパスしてしまっていました。すみません。

高橋加造さん

図書館に『福山戦災復興誌』いうのがあります。資料は充分あると思います、松井さん。

松井元相さん

『福山戦災復興誌』は、持ち出し禁止になっているんですよ。今、持って帰られるのは、『福山市史』だけですかね。

司会

『福山戦災復興誌』というのは、私も個人的にいただいて持ってるんですけど、これは、区画整理を主に、昭和47年までの都市計画に基づいて実施したことを、事細かく書いてあります。それに、ところどころ関係あるものをはさみ込んであったり、人口のことが書いてあったりとかって感じなんですよ。これだけを読んでも戦後復興の全体がつかめないし、福山市史は、何冊も編集されて出てるんですけど、項目別に読むとその項目の全部わかるかという、案外に難しいですね。

だから、松井さんがおっしゃるように、私たち市民の関心がないのではなくて、限られている資料を全部ならべて、比較しながら見て考えないと、全部わかるという状況にはならないわけです。それで、みなさんからできるだけお話を聞いて、それをヒントに調べていこうというふうに考えているんです。今、松井さんが良いヒントをくださったので、そこの分野は調べてみたいと思います。

松井元相さん

意見として、今日は、このことが言いたかったわけですね。終戦までのことは、今、皆さんがおっしゃられていたようなことですが、それから以後の、「日本が再建していく過程はどうだったのか。政府はどういうふうに関わってきたか。」ということまで検討されてから、編集されたらいいんじゃないかなあというように感じたから、一言申しあげました。

司会

戦時中とか福山空襲っていうのは、期間も限られて、特に太平洋戦争は4年間に限られていて、押し並べて、国民がみな同じような生活だったりするので、まとめやすいんですけど、戦後は違います。戦後は、本当に混乱しているなかで、親や兄弟を原爆や空襲で失われた方の人生や、いろんな方の人生を、時代といろんな出来事と合わせながら見てみると、ものすごく複雑多岐に渡ります。「戦後」と言っても、日本が本当に落ち着いて平和になったと感じる時期までとすると、期間が長いので、お一人ずつのお話を聞いて、ある程度方向性を見つけて、詳しくお話を聴く形でやっていくしかないと思っています。そのために、みなさんに教えていただいたことを、個人的に勉強して役立てるといようにしていきたいと思っています。

産業復興博覧会の開催のこととかは、完全に頭から抜けておりました。松井さん、ご指摘いただいてありがとうございました。

田口正造さん

さっき区画整理の話がでましたが、都市計画に沿って、みなさん戦後いろいろ協力して街づくりをしたんですけども、今はかなり人権が尊重されて、なかなか人の土地を取り上げるのは難しいですね。その頃の市民の協力は、どうだったんでしょうか。ほとんど、全面協力ですか。それなりの補償はあったのでしょうか、

その辺がよくわからないんですが。

廣保登さん

昭和20年から25年は、どのように語りゃあいいか言うても、これほど複雑なものはありません。私らにしてみれば、自分自身が辛かった時期の大きな節目です。親父が戦地から帰って来ると思やあ、帰ってこん。そこから始まるわけですから。そこまでの間も大変ですが、そこからがもっと大変です。家があったのがなくなる。あれもなくなる、これもなくなる、あれもこれも変わっていく。どうように変わって、どうようにすりやあいいか、先も見えんが、今も見えん。今日のことも、思うようにならない。こういうような時期が、昭和20年から25年の間じゃろうと思うんです。

それからは、ある程度安定して、「お城を建てるから寄付をせえ。」と言うから、私らも、「瓦1枚1万円」ということで、寄付もしましたね。瓦に名前を書いてね。その時は、もう幸せがつかめたと思えるような頃ですから、寄付などもできました。(昭和41年福山城再建)

それまでがそういう時代だから、いろんな困難が混ぜくりかえって、どうなるやら、自分がどこにおるんやら、自分の立場がどうなるとるか、生活がどうなるか、全く想像もできんかった。だから若い人が、一回きり聞いてもわかりませんよ。何回も寄って、皆さんの意見を聞いて、初めて、わかることじゃないかと思いますね。もつれた糸を解くというか、一人や二人の話でわかることではありませんよ。

私も、先ほど申し上げたように、福山空襲の劇を毎年やってみて、結果的に一番難しいのは、その部分をどのように表現すればよいかということです。結局よう表現できんかったと、自分ではそう思うとるんですけどね。こういう時は、皆さんのいろいろなご意見を聞いて、それから、お互いに意見を出し合って、そのなか

ら、自分自身で考えていく以外にないんじゃないかと思うんです。一人二人の意見や話では、物も、方向も、おそらく見えないんじゃないかと思う。昭和20年から25年の間というのは、こういう「話す機会」を、何回も持ったらいいと思うんです。

司会

今、田口公民館長さんが、お聞きになった区画整理の件ですが、市役所にお勤めだったの方の話では、その区画整理で代替えの土地を提供するとか、賠償金を払うとか、そういったことを扱う専門の部署が福山市役所にあったらしいです。そのお話をしてくださった方は、「自分は専門じゃないから、どれぐらいの金額で折り合いをつけてたかは知らん。」っておっしゃっていました。

区画整理については、かなり揉めて、遅くまでかかっているみたいなので、その部門だけでも詳しく調べると、内容的には、一人ひとりの住む権利をどういうふうにまるめこんだり、おさえこんだり、なだめたりしながら進めていったか、というのがわかるかもしれません。戦後の行政の対応が、よく見えて整理できるのではないかと。だからと言って、市役所のその部署にいなかった人は、誰も知らないみたいなので、詳しいことは、市の取組みと個人の記憶や思いをすり合わせないと理解できないかなと思います。土地の代替えかなんかで賠償金が少ないとかいう不満をお持ちだった方は、腹も立っていらしゃったので、個人的に覚えていらっしゃるでしょうけど、もう亡くなっていらっしゃる。市が被災されたたくさんの方にどういうふうに対応していったかというのは、案外わかりにくいというか、見えにくいでしょうね。

そこをよく調べたら、「住」については、おもしろくなると思うので、各自、その部分も勉強したいと思います。

松井元相さん

僕もそれを言いたかったんですわ。うちも、区画整理にかかるとるわけです。福山市に、100坪程度取られましたからね。

司会

そうですね。特に、この南学区や霞学区など、特に被災の大きかった中心部が、道路建設もあって、そういう状況だったんですね。大きい道路をつけようとしても反対が多く、住民との摩擦や計画の変更もあったようです。

高橋實さん

うちも、家の裏から表いうたら、90坪くらいあったのにね。家を移動させられて50坪ほどになって、結局40坪くらいの土地は、市が取ってしもうたけえね。市役所は、タダでとるんじゃないけえ。あの頃は、なんでもかんでも、無理に取っておいて、知らん顔じゃけえね。

森近さん

今、こちらにいらっしゃる方たちは、ほとんどの方がご記憶にあると思いますけど、大きな道路ができたなら、必ず、今おっしゃるような問題が起きて、長いこと、家が出っ張ったまま残ったりしましたよね。あそこの道へあの家が残るとる、ここの道へこの家が残るとるいうように、納得できない人の家が立ち退かずに残ってありました。道路の建設は、難しかったんだと思います。

高橋實さん

道路を作るのに、立ち退き対象になつとる家が、「もう絶対嫌だ。」と言うたら、この道路のほとりを取って工事をやるけえね。昔は、強制的に家を移動させて、道路を作ったんじゃないけえね。

司会

今は、ちゃんと法律に則して、強制退去になるまでの段階がありますけど、あの当時は、有無を言えなかったでしょうから。

高橋實さん

何も言われん。

司会

市の職員だった方に話を聞いても、臨時採用の方が、たくさんいらっしゃった時代だったようなので、その方たちも、仕事としては苦労も多かったでしょうし、住民の方とやり取りをするには、まだ不慣れな部分もあったのかもしれませんが。焼け野原の街の区画整理なんて、歴史上なかったことですから。

まだ、みなさんも、聞きたいことがおありかもしれないんですが、私たちピース・ナビも、「衣」「食」「住」と「教育や子どもの生活に関すること」、「娯楽や文化に関すること」、「その他、進駐軍などについてのこと」などを、それぞれの項目について、メンバーが各自勉強し、それを共有することにしております。

これから記録を起こして、冊子を出させていただくにあたり、引き続きご協力願えればと思います。個人的にいろんな詳しいお話を、「特に自分はこのことを話したい。」と、いうことだけでも伺いたいと思いますので、よろしく願い致します。

高橋實さん

結局、こういう座談会の形がいいと思うんですがね。いろんな人が聞いてくれた方が、話しやすい。

司会

ご本人さんの細かいことは、こういう座談会ではなかなか聞けないし、自分のお考えの中で

も「実際にはこうだったけど、私はこんなふう考えている。」といった、じっくりとお考えになったことも聞けるので、個人的にお話を聴かせていただきたいと思います。

杉原さん

体験ということになると、当時の年齢が違いますと、体験の記憶もものすごく違ってくるんです。私は、昭和13年生まれなんで、今ちょうど80歳です。昭和22年頃だったと記憶しているんですが、福山城の焼け跡で「福山産業復興博覧会」というのがあった。松井さんがお話になったので、頭に浮かんだんです。でなければ、思い出せなかった。

その時には、自分がしゃべる以上、ある程度正しいことを言わなければいかん思うて。そしたら、私はその時、9歳なんですよね。だけど、「産業復興博覧会って、何があったんか。」と聞かれたら、これはちょっと話すのは難しいと思ったんです。行ったということは、紛れもない事実なんです。大勢の人が行きました。でも、内容の記憶がほとんどない。

戦時中の記憶は、その時より小さかったのに、はっきり覚えていたりする。おまけに、博覧会の頃、福山市内の復興は、まだまだできていなかった。そういう状況は浮かんでくるわけなんですよね。

その辺も紐解いていくと、「ひょっとしたら、命まで賭けなきゃあいけなんだろうな。」というような体験の記憶は、平和な時の記憶より、ずっとはっきりしているのではないかと思うんです。

司会

そうかもしれませんね。幼くても、衝撃的なことは鮮明に記憶していたりしますから。

福山産業復興博覧会や福山城の再建の話を出してくださったので、みなさん思い出されたん

ですけど、私たちがそういったことの位置づけを全然してなかったものですから、今日、お話が出ることを想定していませんでした。今後、復興のシンボルになるような存在に対して、行政や市民がどう関わっていたのか拾い出し、まとめていきたいと思います。今日は、いろいろ気づかせていただいて、とても有難かったです。

これで、「戦後復興期を語ろう！」の座談会を終わらせていただきます。

今日は、お疲れ様でございました。みなさん、ありがとうございました。

【証言者の皆さん】

※生まれ年順

松井 元相 (マツイ モトゾウ)
昭和7年生まれ
終戦時 13歳 (工業学校2年生)
御門町在住

廣安 登 (ヒロヤス ノボル)
昭和9年生まれ
終戦時 11歳 (小学校5年生)
新涯町在住

高橋 實 (タカハシ ミノル)
昭和10年生まれ
終戦時 10歳 (小学校4年生)
松浜町在住

檀上 裕 (ダンジョウ ユタカ)
昭和13年生まれ
終戦時 6歳 (幼稚園)
松浜町在住 (新涯町疎開中)

大村 修司 (オオムラ シュウジ)
昭和17年生まれ
終戦時 3歳
南町在住 (津之郷村疎開中)

高橋 加造 (タカハシ マスゾウ)
昭和19年生まれ
終戦時 1歳
東霞町在住 (新市町疎開中)

田口 正造 (タグチ ショウゾウ)
昭和22年生まれ

テーマ

「戦後の福山を生きただ々

～わたしも聞きたい！話したい！～

とき 2018年6月10日

ところ まなびの館ローズコム 中会議室

パネリスト 高橋 加造(タカハシ マスゾウ)

森近 静子(モリチカ シズコ)

檀上 裕(ダンジョウ ユタカ)

司会 堀家 美智子(ホリケ ミチコ)

〔ふくやまピース・ナビ〕



司会

皆さん、おはようございます。

本日は、『戦後の福山を生きただ々』と題しまして、パネリスト三名の方と、そして、そのお話を聞いて、それぞれ感じたことや、ご自身が体験されたことを語りあうトークセッションを予定しております。皆さまも機会を逃さず、たくさんご発言いただきますよう、よろしく願いいたします。

では、会の始まりにあたりまして、主催者を代表して、福山市人権平和資料館の館長であります高橋雅和より、ご挨拶をさせていただきます。

高橋福山市人権平和資料館館長

皆さん、おはようございます。今日は、ようこそおいでいただきまして、本当にありがとうございます。

昭和20年8月8日の福山空襲から、もう73年目を迎えようとしております。市街地の8

割を焼失し、多くの尊い命を奪ったこの空襲。

73年の長い歳月のなかで、戦争を体験された方はもちろんですけれども、その実情を語ることでできる方が、年々少なくなっている現状でございます。と同時に、福山空襲というのが、風化してきているのではないかという危惧をしているところでございます。

先日、「私たちは、なぜ、歴史を学ぶ必要があるのでしょうか。」という問いを受けました。私は、「それは、戦争という同じ過ちを、二度と起こさないためだ。」、そんなふうに答えました。まさに、そのことを、私共はしっかり肝に銘じて啓発し、戦争の悲惨さや平和の大切さ、こういったことを、多くの方に語り継いでいくことが、非常に大事になってきています。そういう実情ではないかと思えます。

そして、今日のテーマでもありますように、今日(コンニチ)の平和な社会を築かれたのは、多くの先人の方々の復興に向けた努力があってこそ、実現できたのだと思っております。

戦後復興に向けた暮らしはどうだったのか、そして、その当時の方々の思い、それから、努力といったことを、しっかり学びあいながら、平和な社会に向けて、私たちはどう考えていけばいいのか、そして、何をすればいいのか、そういったことを、今日、会場の皆さんと一緒に考えながら、進めていければというふうに思います。

どうぞ、今日は最後までのご参加をお願いしまして、開会にあたりましてのご挨拶とさせていただきます。今日は、本当に、どうもありがとうございます。

司会

さて、パネリストの方々のお話の前に、連絡をさせていただきます。

お手元に、こういう茶色い封筒が配られていると思います。中の資料のうち、本日のパンフ

レットには、三人のパネリストさんのご紹介とメモがございます。その裏面には、それぞれ、福山市及び全国で起こった事柄が、年表の形で載っております。ご利用ください。

次に、今日のパネリストの方が南学区中心ですので、中央公園を中心とした周辺の戦前の地図を入れてございます。その他、イベント情報やアンケートが入っておりますので、目を通してください。お願い致します。

(以下、注意事項省略)

では、お待たせ致しました。パネリストの方々の紹介に移らせていただきます。お手元のパンフレットの紹介文とあわせてご覧ください。

皆さんから向かって左側、高橋加造さんです。次に、森近静子さんです。次に、檀上裕さんです。

今回、南公民館の田口館長さんを通して、南学区の方にご協力をお願いしました。高橋さんと檀上さんは、南学区の方です。森近さんはピース・ナビのメンバーで、霞学区の方です。みなさん、お話をさせていただくことを、快く引き受けてくださいました。ありがとうございます。よろしくお願い致します。

三人の方には、福山空襲後の生活を中心に、その中で見聞きしたこと、衣食住や心に残っていることを、お話していただきます。なかには、ご自身の体験でないことも含まれますけども、福山の復興期といわれる昭和20年から昭和25、26年の占領されていた時期、この時期の事柄を中心にお話をさせていただこうと思います。

では、最初に、高橋加造さんからお願い致します。

高橋さんは、終戦時、1歳5カ月でいらっしゃいますので、そのあたりのことはご理解いただいて、お話を聞いていただいたらと思います。高橋さん、どうぞよろしく申し上げます。

高橋加造さん

おはようございます。私は、霞町一丁目に住んでいます高橋加造と申します。ここ、まなびの館ローズコムのある、霞町一丁目南部町内会の会長をしています。

昭和19年3月生まれで、現在74歳です。私の家は、終戦時に、現在のこのローズコムのある遊園地の中にありました。当時の町名は東霞町です。

福山空襲の時は、7月31日に撒かれた「伝単(デンタン)」と呼ばれる空襲予告ビラを見た母が、子どもがいたんでは危ないと感じて、私を連れて、芦品郡新市町にある母の実家に疎開致しました。私は、当時、1歳5カ月なので、空襲のことは全く記憶にございません。

当時の様子をちょっとお話しますが、先ほども申しましたように、私の家がこの場所にあり、ちょうどこの位置に誠之館中学校のプールがございました。当時、私の家は8人家族だったんですが、父と父の弟が戦地に赴いて、それで、私と母が新市町に疎開していました。結局、家には、おじいさんとおばあさんと、それから、当時女学生だった叔母の2人、計4人がいて、空襲の時は、誠之館中学校のプールの建物の陰に隠れて、どうにか命だけは助かりました。

自分の家は、もちろん焼けたんですけど、19歳だった叔母が、私が少し大きくなってから、こう話してくれました。「自分の家が焼けたことよりも、福山城の天守閣が焼けて崩れていくのを見た時に『ああ、戦争に負けたんよなあ。』と、感じた。それが、もう非常にショックだった。」と。

私は、今、福山城のボランティアガイドをやっていますが、ガイドの先輩の話を知ったので、紹介させていただきます。

戦後すぐの昭和22年5月から約一カ月間、福山駅周辺で、「福山産業復興博覧会」というのが開かれておるんです。当時、その先輩は、ま

だ小学生でしたが、「山手橋がまだ石橋だったと思うが、遠く離れた津之郷（ツノゴウ：当時、沼隈郡津之郷村）から歩いて、福山の駅前まで来て博覧会を見た。」と、おっしゃっていました。

第一会場が、駅前の元三菱第一工場跡で、全国の物産展があり、第二会場は、福山城の天守閣の跡で、天守閣の石垣の中に日本風の建物を建てて、その中で、華道とか茶道の各流派の展示があったようです。また、伏見櫓（フシミヤグラ）では、美術展が開かれたということです。

先輩は、「見た記憶があるけれど、内容はよく覚えていない。」と、おっしゃっていました。その産業復興博覧会というのは、日本で、戦後、初めて開かれた博覧会で、入場者の数が、なんと、約24万人を超えたそうで、福山市民の復興への強い意欲が感じられます。

次に、「市民遊園地」なのですが、現在は、中央公園と呼ばれています。ここは、元々、「鶴の飛来地」として確保されまして、その後、藩の下屋敷、それからお茶屋が建ち、その後藩校誠之館が建った。

その後、誠之館中学校が、昭和7年に三吉町のほうに移転致しまして、昭和12年に、市民遊園地として整備されたわけです。翌昭和13年に、現在の東側の所にあります誠之館跡の記念碑が、設立されました。古い時分には、しばらくこの辺りに、民家も残っていました。

誠之館中学校のプールがこの中にあったんですけども、ちょうどこの東側あたりに、麦畑が残ってまして、稲は実ると穂を垂れるんですが、麦というのはスーッとこう伸びたままなんです。伸びてる穂のなかに黒い穂があったんで、私たちが小さい頃はいたずらして、麦畑に入って行って、その黒い麦の穂を抜いて、友達同士で顔にその墨を塗りつけ合って、遊んだような記憶がございます。

私の家は、この公園の中にあっただけですけど、だんだん、区画整理で倒される家もあれば、昔

は、「家引き」といって、家にコロを付けて引いて移動させたりする家もあって、子どもの私は、それをずーっと眺めていました。そうやって家が消えて行って、だんだんと子どもが少なくなっていくのを、子ども心に淋しく感じました。

子どもたちは、ここの市民遊園地を、単に「遊園地」と呼んで、誠之館記念碑のことは、「石垣」と呼んでいました。石垣の一番上に記念碑があったんですが、その石垣で紙芝居を見るのが楽しみでした。当時、水飴が10円だったんですね。10円札を持って、そこへ行きました。10円をおじさんに渡して水飴をもらって、その水飴の棒を、グルグル、グルグル、回しながら、紙芝居を観たのを覚えています。

当時の遊園地は、福山城址公園に次いで、広い広場でした。たいした遊具はなかったんですけど、仲間がいましたので、朝から晩まで遊んでいて、よく母から、「いい加減には、帰りなさい。」と言われたのを覚えています。

子どもの遊びというのは、当時、「瓦こかし」、「缶けり」、「にくだん」、「三角ベース」、「釘立ち」、「かくれんぼ」などの、お金のかからない遊びがたくさんありました。

（注）三角ベースとは、2塁あるいは3塁のない野球で、人数が揃わないときに行う簡易野球遊び。守備チームはピッチャー、1塁、3塁の守りに付き、攻撃チームはバッター、ランナーで、キャッチャーや球拾いもした。

夏は、おじさんが自転車にアイスクャンディを積んで、売りに来られていたんですけど、確か、「バクダン」というのが、その中にあったと思います。

冬は、おばさんが、屋台を引いて、焼き芋を売っておられました。屋台には、「きゅうり よりうまい 十三里」と書いてあったんですね。「きゅうり」いうのは、距離の「九里（キュウリ・クリ）」と食べ物「栗」を掛けている言葉

です。そして、「より」というのが、「～より」と距離の「四里（ヨンリ）」を掛ける言葉ということで、九里（キュウリ）と四里（ヨンリ）を足したら十三里（ジュウサンリ）で、「焼き芋が栗よりもおいしいんだよ。」っていう洒落だったんです。

当時、焼き芋は、大きな屋台に壺が入れてあって、それへ針金で芋をつるして売っておられました。お婆さんは、軍手をした手で焼き芋を取り出して、天秤竿でうまいこと測っていました。私は、その秤を初めて見たんですが、お金を払って、持って帰って家族で食べてました。

それから、当時のお金の話を致しますが、戦後しばらくは、まだ、50銭という単位のお金がありました。50銭は、板垣退助の肖像画の紙幣で、それから、硬貨のほうは2種類ありまして、大きな50銭と小さな50銭。でも、50銭という単位は、もう戦後のインフレで、すぐに消えてなくなりまして、単位そのものがなくなりました。

それから、親類のお婆あさんの所に行った時に、初めて百円札という大きなお金をもらった時は、子どもの小遣いが、だいたい10円か20円だった時代で、非常にうれしかったのを覚えています。

お金は、昔から集めるのが好きで、今、こうして持ってるんですけど、なんかこれが一番、歴史を感じさせるんじゃないかなあと、思います。この後、すぐに、お金が高額化するわけなんですね。それが、やはり、日本の復興を物語っていったんじゃないかという気がしています。

以上で、私の話を終わります。

司会

どうも、ありがとうございました。終戦時に、1歳5カ月ですが、その後の幼い頃の記憶がとてもはっきりしていらっちゃって、遊んでいた

内容とか、それから、誠之館中学校が、場所を変えて移転するわけですけども、そのあたりのこともよくご理解いただけたと思います。

それから、1946年（昭和21年）2月に行われました新円の切り替えによって、インフレを抑えようとした政府の施策とか、そういったことも、子どもながらに感じていらっしやるところを、話していただいたのではないかなと思います。

先ほど、福山産業復興博覧会についてのお話にもございましたが、入場者数が24万人余り、約24万7千人だったそうです。当時の福山市は、合併前ですから小さいですけども、人口が引揚げ者や復員兵などを入れても、約6万人ぐらいだったそうですから、博覧会に集まられた方が、人口の約4倍になります。たくさんの方が観られたということは、福山市以外からも、たくさん参加されていたことが、よくわかるお話でした。どうもありがとうございました。

次に、森近静子さん、お願いします。

森近静子さん

失礼致します。先ほど、ご紹介いただきました森近静子と申します。どうぞ、よろしく願い致します。

昭和12年に、現在住んでいる所で終戦を迎えました。終戦時、私を含めて、昭和9年生まれのお姉から、昭和19年に生まれました妹まで、あわせて5人の女の子がおり、両親と7人で生活しておりました。

ただ今、高橋館長さんのお話にも、「二度と再び」というお言葉がございました。そしてまた、司会の方からは「心に残った話を」ということなので、本日は復興ということについてのお話のなか、「衣・食・住」について、お話させていただけたらと思っております。

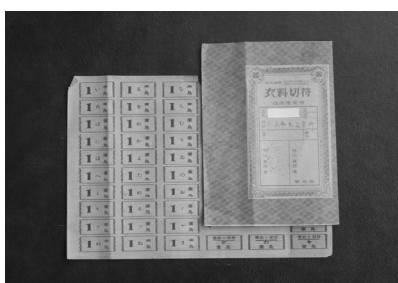
長い話になると思いますが、どうか最後まで、お耳を貸していただきたいと思っております。よろし

くお願いいたします。

まず、「衣・食・住」の中の「衣」について、お話をさせていただきます。

「衣」につきましても、本当に、終戦後物資が乏しく、全市が焼野原になったという状態のなかで、やっと生き残った私たちにとって、どうやって生きていったらいいかという気持ちでいっぱいでした。ですから、衣類といっても、着る物も履く物も、まともなものはございません。その中で、とにかく、「親のおさがり」あるいは、「姉妹のおさがり」で、生活をしておりました。

そして、ちょうど昭和22年に、「衣料切符」というものが制定されて、福山市では、一戸ごとに80点が最高点でした。その制度は、昭和26年には終わったのですが、例えば、男性の背広を新調すれば、50点。世帯に80点しかないわけですから、背広一着新調したのみで、あと残りは30点です。その30点で、一年間何とか頑張らなくっちゃあいけない。



そういうなかで、本当に、厳しいのは女性です。女性では、浴衣を一着購入すれば12点。また、袴の着物なんかですと、48点も必要になりました。そして、単衣（ヒトエ）の着物が必要だということになりますと、単衣の着物が24点です。全てそれを調達すれば、すでに80点以上必要です。おこしも、長襦袢も必要です。

そういう現実のなかで、私の母は、自分がお嫁入りの時に持ってきた着物を解いて、別の物に直しました。戦前・戦中、親たちの世代には、

銘仙という織物が非常に流行っておりましたので、銘仙の着物を「もんぺ」に作り直しておりました。もんぺは、皆さん、ご存じですよね。そういう日常着で生活できるように、戦時中、戦後も、親が夜なべをして作ってくれました。私は、小学3年生で、初めて針というものを持って手習いをしました。父以外は女性ですから、上の姉から妹まで、みんな夜なべに針仕事をしました。



ついでになりますが、当時、ソックスの修繕もしていましたが、当時は照明が電球ですから、電球の球をソックスの中に突っ込んで、丸みを帯びたソックスへきちんと合わせて、繕っておりました。きれいに、丸くできあがって、履き心地もようございました。

ソックスの話をしたので、ついでに、ストッキングの話もさせていただきます。皆様もご存知だと思いますが、ストッキングは、戦後しばらくまでは、後ろ側に縦の線がスーッと入っていました。そうしたなかで、戦後25年ごろから、アメリカの技術を輸入して、石油繊維産業が発展し、そして、また、日本国が関心を寄せ努力を致しました結果、すばらしい「ナイロン」という製品ができあがりました。このナイロンによって、今度は、後ろ脚に線がなく、美しい脚線美を持つ女性の心を捉えることが、初めてできたわけです。その時に、今でもご記憶にある方もあるかと思いますが、「戦後強くなったのは、女性とストッキングだ。」と言われていました。この言葉が、現在でも残っておりま

すね。

次に、「食」に移らせてもらいます。

戦後は、非常に食糧難の時代でございましたので、両親が、ヤミ米を親戚や知人から譲っていただいていた。一升瓶へ、その玄米を四合ぐらい詰めまして、長い棒を持って、一生懸命搗（ツ）いて糠を落とし、次の朝ご飯を炊いていました。

そういうことが続くと、だんだんと、親戚からも知人からも、譲ってもらえなくなりました。このことはぜひとも、お話しておきたいと思うんですけど、私が小学3年生の時に、母がヤミ米を隠すために私を乳母車に乗せて、川口や新涯方面から、お米を調達して帰っていたのを覚えております。当時父は、「男性が動くが目立つから。」ということで、買い出しには、母と私が行っておりました。

子ども心に、赤ちゃんのように装うには大き過ぎて心地が悪く、正直嫌でした。今もその辺りを通ると、涙が出そうになります。

最後の「住」について、お話を続けたいと思います。

住まいのことについては、福山市は非常に復興が早うございましたので、昭和20年の12月には、500戸という公営の住宅を用意して、今の体育館の敷地の中に、引揚げ住宅を造りました。

そして、その後、昭和22年には、今の工業高校のちょうど向かい側に、当時火葬場があったんですが、その火葬場のちょっと東へ行った所から下（シモ）の体育館のそばまで、市営の住宅がたくさん並びました。

しかし、そういうことで、全て終わったというわけにはいきません。住宅難の時代に、たくさん作られた市営の住宅に、住むことができない人もたくさんおりました。昭和26、27年になりましたが、まだ焼け跡で、拾ってきたトタン板を屋根にし、そして看板を壁にした家が

ありました。そんなことで、雨風が凌げるからいいということではありません。

私も、友だちの家に遊びに行った時、露がポトポト落ちてきたのを、今でも覚えております。その時、「私は、まだ幸せなんだなあ。」と、思いました。

と、申しますのは、当時、焼け残った家はどこも、一軒の家に5・6世帯入って、一部屋で一家族ぐらいつつが生活しておりました。ご多聞にもれず、私の家も、親戚とはいえ私の知らない方を入れて5世帯が同居するという、大変な生活を余儀なくされておりました。

そのような状況で、福山市は、非常に早く復興に心を合わせ、力を入れてくださったと思います。

このように、この復興が早かったことも、福山市の市民がしっかりと、一人ひとりが力を集め、そして協力したからで、そうしたこともあって、今日（コンニチ）のすばらしい福山市が生まれたと思います。と同時に、親から子へ、子から孫へと、どうかそれぞれのご家庭で、今日のお話を伝承していただきながら、平和社会、あるいは、平和な世界へ繋いでいただきたいものだと思います。

長時間、最後まで、耳を傾けていただきまして、誠にありがとうございました。

司会

ありがとうございました。衣料、食料、住居などについて、お話いただいたんですけども、衣料と食料は、当時配給制で、切符、または通帳などを使って、配給の物を受取る、購入するというやり方だったそうです。

ヤミ米を買うために、お母様の嫁入りの着物と交換するというのはよくご存じの話ですが、日本政府は、ダイヤモンドはもちろんのこと、金、銀、鍋、釜まで、貴金属や金属類を供出させておりましたので、唯一、女性の嫁入り道具

であった着物や大風呂敷などは、供出品から除外されていたわけです。ということで、それらを食料に代えて生活せざるを得ない現実が、戦中・戦後と続いたということでした。そして、着る物も、そんな嫁入りに持参した着物を再利用して、作り直したというお話をいただきました。

先ほど、女性が戦後強くなったと話されていましたが、マッカーサーが「五大改革」を指令した中の一つが、「女性の解放」ということで、選挙権とともに、女性が発言する場を作っていたり、かなり縛られた生活のなかから、女性の権利を認めるということが行われました。ただ単に、女性が戦後強くなったのではなく、そういう社会の状況があったということに基づき、お話をいただいたと思います。

また、森近さんが、ヤミ米を手に入れるために、乳母車にカモフラージュのために乗って行ったお話をされました。女性だと咎（トガ）められなかったわけではないのですが、ヤミ米を男性が持ち歩いていると、警察官に目を付けられて連行され、当時は取り上げられるだけでなく、罰金もあつたり、拘留されたりしたようです。女性には、警察も当たりが少し柔らかかったということで、女性が買い出しをされていたという話をしてくださったんだと思います。

住居の件につきましては、先ほど、引揚げ者用の住宅ということでしたが、芦田川の川がなくなっている場所の砂地の所、三菱電機や太陽重機、占部建設に配されていた一部の土地を返還させ、引揚げ者用の住宅を建てたという記録が、『福山市史』に残っておりました。それが、その場所だったということが、森近さんのお話の裏付けになっていると思います。

森近さん、どうもありがとうございました。続いて、檀上裕さん、よろしくお願ひします。

檀上裕さん

檀上裕と申します。

私の家は、松浜町にあり、空襲で被災いたしました。当時、6歳。新涯町に疎開していて、難を逃れました。今日は、戦後復興期の福山の様子を、少しお話しさせていただきます。

当時、私は6歳で、村上幼稚園に所属しておりました。

戦時下でも、幼稚園では、給食があつたように記憶しています。その時の印象が、少し残っております。給食の時、缶詰が出たんです。何の缶詰かは忘れましたが、一人に一缶。次の時には、二人に一缶。だんだん、戦争の雲行きがおかしくなるにつれて、三人に一缶になりました。四人に一缶になった時が、福山空襲でした。その頃、幼稚園の先生方がおっしゃるのに、「お国の為に、頑張ってくださいている兵隊さんへ。」と、いうことでした。「私たちは、我慢しましょう。」という意味だったんでしょう。

終戦後、主食のお米は統制でしたから、親戚とか知り合いとかで譲っていただく以外、なかなか入ってこないし、ヤミ米はというと、取り締まる警察の目が光って、なかなか白米は手に入らない。その代わりに、外米というのが入ってきました。このお米は、もう、大人も子どもも、口に馴染まない。どこの倉庫に眠っておったのか、どこの国から来たのかもわからない。わが家の食卓は、さつま芋中心でした。

そんな折に、行政の皆さんで、手づくりのおいしいものを提供してくださいました。「厚生団子」と言っていました。よく食べました。糠を丸めて、干して、焼いてあるだけなんです。非常にシンプルな食べ物ですが、お腹もすいとるし、食べられるものはいただきました。お腹は太るわけです。そのうち、厚生団子は、糠自身が不足して、味がコロッと変わったですね。糠の代わりに団栗の粉でも入れたのか、えぐみがあるというか、酸味もあつて苦くなった。それで食べるのをやめました。

そんな時代に、ひととき、活気がある場所があったんです。これは福山駅前周辺、駅裏とか、駅前周辺。ここに、「闇市（ヤミイチ）」というのがありまして、活気を帯びて、人が右往左往。そこへ、ひととき目立った人が、たくさん来ていらっしゃいました。その方は、戦闘帽で、白の着物を着て、ある人はハーモニカ、ある人はバイオリン、ある人はアコーディオン、胸には首からかけた箱があって、道行く人の気を引いて、少しでも、恵んでいただきたいということだったんでしょう。こういう方が何人もいらっしゃいました。その兵隊さんは、傷痕（ショウイ）軍人。よく見れば、片足のない人、片腕のない人、または、腕を吊ってらっしゃる人もいました。ふと、その時に、戦前幼稚園の先生がおっしゃってた、「お国の為に、頑張ってくださいている兵隊さん。」という言葉思い出しました。でも、闇市のその光景は、子ども心にも、複雑な思いが致しました。

人々は、戦後、歯を食いしばって再建に頑張っていたいらっしゃいました。何とか、福山も元気ということで、「福山恒例夏祭り」というのがありました。三々五々、納涼大会をして、花火も打ち上げられました。その時点から、だんだん世の中が明るくなり、福山も元気を取り戻したように思います。

以上です。ありがとうございました。

司会

檀上さん、ありがとうございました。

食べ物と闇市の様子をお話していただきました。給食は、戦後始まったものだというふうに、認識をされてた方も多かったと思うんですけれども、幼稚園で、ちゃんと給食があって、缶詰などが食べられていたそうで、びっくりしました。

檀上さんは、お話にならなかったんですけれども、檀上さんのおばあ様は、お菓子を作って、

軍隊に納めていらっしかったです。歩兵第四十一連隊に、商売で出入りされていたので、食べ物に、そんなに困るということではなかったのではないかと思います。戦後、お家（ウチ）も全部焼けて、焼け残った中から、鍋や釜や、そういったものを掘り出して、バラックを建てて再出発をされたそうで、ご苦労もありがとうございましたかと思えます。

当時、配給だけで得られるカロリーは1000キロカロリー。一般の成人男子が、ただ座っているだけで、1日1500キロカロリーぐらいは消費しますので、配給だけでは生きていけないということで、闇で物を買っていらっしゃる人は多かったと思います。先ほど、駅周辺とおっしゃったのは、露天商が並んで商売をされていたということです。

興味深かったのは、当時、いわゆる傷痕軍人とか、復員兵、空襲被災者の方が帰ってきて、男性は、すぐに仕事に就けないので、先ほど、高橋さんがお話になったような、紙芝居屋さんになったり、それから、檀上さんが言われていたように、皆さまからご寄付をいただくために、楽器を弾いて歌を歌われたりとか、そういうことをしていらっしかった、ということだと思います。

ヤミ米の取引きについては、昭和25年頃、ヤミ米の価格が公定価格を下回るという現象が起きまして、昭和25年過ぎに、米の闇買いがほぼ終息に向かったということです。また、昭和27年ぐらいには、小麦も自由になり、うどんやパンが自由に買えるようになったので、その時点で、ほぼ配給は終了したというふうに聞いております。

でも、その昭和26、27年までが、今おっしゃったように、本当に大変な食糧難でした。昭和20年に東北が冷害で、米がたくさんできなかったことも大きな原因でした。また、よくご存じでしょうが、広島県が、昭和20年9月に

大きな台風（枕崎台風）に襲われたこともあって、不作でした。

従って、米糠もないわけですから、厚生団子の中身が、米糠を炒った香ばしい厚生団子から、団栗の粉を何度も水にさらして、それを混ぜて作ったもの変わったので、味が変わったと、檀上さんはおっしゃっていたのだと思います。やはり、灰汁（アク）が強いので、苦みや酸味を帯びてしまったのでしょうか。食べられる代物（シロモノ）ではなかったとも言われていました。

以上、「食」を中心に、お話をさせていただきました。檀上さん、どうもありがとうございました。

お時間があまりないのですが、これから、三人の方へのご質問を受け付けます。ご質問がございましたら、手をあげてご質問ください。



渡辺さん

私は、渡辺と申します。質問ではなくて、すみません。

檀上先生の先ほどの給食のお話を伺って、同じ体験をしましたので、記憶違いではないと安心しました。「私は、幼稚園で給食を食べた。」と言うと、「そりゃあ、うそじゃろう。」と、今まで誰も信じてくれませんでした。でも、給食があったのは事実で、その頃は檀上先生の言われるように、缶詰でした。昭和20年に幼稚園に通っていたのですが、その時の先生のお話が、「兵隊さんが残していったもん（物）だから、

大事に食べるんですよ。」とのことでした。

それから、空襲の事ですが、私は、昨日のことのように覚えていて、みなさんも同じではないかと思うのでお話します。70年以上経っているのに、いまだに、雷がなっても怖いし、自動車が「ブー！」とクラクションを鳴らしても怖い。なんか、あの時の感覚がずっといまだに残っていて、「ああ、怖かったなあ。」と、思い出してしまうんです。変な話ですが、夜中に一人でトイレに行けなくて、誰かを起こして行っていましたし、あの頃の恐怖っていうのは、70年過ぎても消えません。戦争は怖いです。だから、子どもたちには、そういう思いをさせてはいけないと思っています。質問でなくて、ごめんなさい。

司会

今、共感を覚えたというお話をいただきました。何か、パネリストの方にご質問がありましたら、お願いします。

伊達さん

南学区の伊達と申します。高橋さんに、ちょっとお聞きしたいんですが、福山城のボランティアをされていらして、専門的な分野だと思えますが、福山城は、今、かなり脚光を浴びております。

それで、空襲で福山城が焼け落ちた状況っていうのは、焼夷弾の直撃で焼け落ちたものか、諸々の火災が原因で焼け落ちたものかどうか、福山城の焼け落ちた状況を教えていただけたら、ありがたいなと思います。よろしくお願いします。

高橋加造さん

私は、ガイドをしていますけれど、何分（ナニブン）、生まれてはいたんですけど、当時を知

りません。でも、聞くところによると、やはり、焼夷弾に当たったということらしいです。

福山のお城の場合は、焼けたところと焼けずに残っているところがあるんですね。結局、東南方向から、B29が91機来たわけですよ。それで、伏見櫓（フシミヤグラ）と筋鉄御門（スジガネゴモン）と鐘櫓（カネヤグラ）とは、焼けないで残っているんです。一番はつきり、その爪痕を見ることができるのは、石垣を見てもらったらいんですがね。石垣には、はつきりと、焼けたところとそうでないところの違いが見られます。

伏見櫓の石垣というのは、本当に立派な石垣です。あれは、角っこは「算木積（サンギツミ）」というんですけど、角がピンと出て、天守閣なんかの火にかざされた所は、角が丸くなったり、焼けて赤茶けたりしています。

石垣というのは、積み方が非常に大事なんです。この前も熊本で地震があった時、熊本城は、加藤清正が城を築いた時の古い方の石垣は残って、新しい方が崩れたんです。古い方が、積み方が工夫されているというんですかね。「裏込め（ウラゴメ）」と言って、表側の石垣の裏にぐり石、つまり川原石をすき間なくぎっしりと十分に詰め、そして、表側に石垣を積んでいき、角の所は、「算木積（サンギツミ）」とあって、石垣の角の長辺と短辺が、交互になるように積んであるので、非常に強いんです。そういう所を、一番見てほしいんです。

福山城は、空襲もあったんですが、そのずうっと前、幕末に長州軍が攻めてきて、一度大砲で撃たれたこともあったんです。

福山城は、地元福山の人が、あまり自慢はしておられないんですが、日本の六大名城の一つなんですよ。江戸・名古屋・大阪・姫路・熊本、次が福山。十大名城いうと、それに岡山・広島・伊予の松山と、それから津山なんですよ。明治になって、城が壊されていたんですけど（1

873年廃城令）、福山城が空襲の時まで残っていたということは、福山の人が、すごく誇りに思っているんじゃないかと思います。回答になってなくて、すみません。

伊達さん

ありがとうございました。

司会

高橋さん、確か、終戦までに空襲で焼けたお城の最後が、福山城だったんですよ。

高橋加造さん

そうですね。お話するのを忘れてました。

福山城は、建てられたのも、大きいお城では、日本で一番最後のお城なんですよ。1615年に「一国一城令」いうのができて、簡単に築城はできなくなった。それでも、福山城が建てられたのは、1622年なんです。もうすぐ、400年が経つんですけど、城を築くことが禁止された時代に許されたというのは、結局、時の幕府が、福山城を重要視していたということなんですよ。

それらは、あくまでも、西国大名に「睨みを利かす」のに造られたお城で、それまでは、西の姫路城が「西の城塞」と言うていたんです。今度は、福山城が一番西となって、しかも、武将が、当時とてかく戦では、負けたことがない水野勝成という、宰領が来たんです。みんなが、「恐れとったすごい人が来た。」と言うてね。福山の人は、誇りにしていいと思います。

司会

話が広く展開されましたけど、もうすぐ、築城400年を迎えますので、福山市のイベントのためにも、この情報は、しっかり受け止めていただけたらと思います。

江戸時代に、一番最後に作られて、そして、

終戦前に、一番最後に焼けたお城ということで、空襲で福山城が焼け崩れて落ちるのを、皆さん午前2時、3時ぐらいに見ていて、とても胸が痛んだとおっしゃっています。「福山は、もうダメだなあと思った。」というぐらい、福山のシンボルでもあるわけですね。

とても貴重なお話をいただきまして、ありがとうございました。

では、時間が少し過ぎましたので、次の内容に移らせていただきたいと思います。

これから、お時間は、35分ぐらいあるんですが、それまでの間、演題にもございます、「わたしも聞きたい！話したい！」ということで、ご自身の体験などを、自由にフリートークでお話をさせていただきたいと思います。

特に、戦後の街の変化の様子などは、区画整理のことを高橋さんが少しお話になりましたけれど、パネリストさんのお話の中にはほとんど出ておりませんでしたので、お話いただければと思います。よろしいでしょうか。自由に手をあげてください。

坪山さん

すみません、ピース・ナビの坪山です。

今日のパネリストの紹介のところの檀上さんの紹介文に、「子どもの頃から近くの海で魚釣りをして過ごし、戦前の工場廃液の怖さを知っている。」というふうに書いてあります。

私の興味の一つとしては、福山が、なんで空襲に遭ったのか、第四十一連隊とか軍需工場とか、いろんなことがあります、いろんな証言集を見ても、軍とか軍需工場とかのことが、あまりよくわからないので、少し話していただけますか。なかなか、そういう時代ですし、難しいかなと思うんですけど。

司会

質問の内容としては、檀上さんは松浜町にお住まいだったので、今の海岸線とは違いますが、海がすぐそばにあって、子どもの頃、よく魚釣りをされていました。魚がどういう状態だったとか、よくご存じだということで、檀上さん、そういったことをお話していただけますか。

檀上裕さん

これはですね、わが家の裏がちょうど海でした。これは、一文字沖から、天下橋、木綿橋と、今のお城のほうへ続いていた海が、私が物心ついた時には、元月世界の辺りで、一区切りついたんです。

その海は魚の宝庫で、何でもいたんです。大きな魚は少なかったんですが、小魚、特に、鯿（イナ）の子が、満潮時にたくさん釣れるんです。けども、残念なことに、工場の排水で、年柄年中水が濁るとるんです。ですが、魚が泳いでいるので、子どもがこの場所に入っても、おとなは別に注意も何もせんのです。それが普通。私は、その海で遊んで育ったんです。魚は、獲っても、臭いで、食卓にのぼるということはなかった。おとなは、当時、一文字沖、引野の方まで、釣りに行っておられたようです。

もう一カ所は、芦田川。芦田川はハマグリのお宝庫。私もよく採りにいきました。そんなところですよ。

司会

この辺の土地言葉で、「ダベ」というんですかね。ヘドロ状態の堆積している泥の中を、元気よく、鯿（イナ）の子がたくさん泳いでいて、釣るのは楽しい遊びなんだけれども、食べるのは、ちょっと無理な状態だったということですね。今、おっしゃったように、そういうダベの溜まっている海で、子どもが泳いだり遊んだり、魚を釣ったりすることは、親は、魚が生きてるから、気にしなかったの、海で遊ばれていた

というお話でした。

檀上さんは、以前、海の水の状態について、こんなお話をしてくださいました。戦時中より、戦後工場が材料不足で稼働しなくなり、戦時中動員されて働いていた方も働かなくなったので、一時的に工場の操業がストップした。それから平和産業に切り替えるまでの間は、排水が出ないので、水がきれいになって、臭さも薄らいでいたというふうにおっしゃっていました。

特に、戦前から繊維産業が盛んな福山では、もちろん、上流からも、そして、河口付近にも染料工場がありましたから、たくさんの排水が、ろ過装置がないまま、多量に芦田川や海に流されていたという事実はあったようです。

檀上さん、どうも、ありがとうございます。

他に、質問やご意見があれば、お話ください。どうぞ。

高橋さん

東深津に住んでおります高橋といいます。

福山との関わりについて、ちょっとお話をさせていただきたいと思うんですけども、私は、敗戦の年、8月の初めに、茨城県の水戸におりまして、空襲で家が焼けて、家族6人で、父親の郷里である現在の芦田町（アシダチョウ：当時、芦品郡有磨村）の柞磨（タルマ）へ引き揚げてきました。その時、父は仕事の関係で水戸に残りました。

ちょうど三日かけて空襲を避けながら、福山駅に着いたのが、8月7日の午後3時か4時頃でしたかねえ。福塩線で、府中に行く乗り換え時間に駅前へ出て、街をちょっと見た記憶があります。それで、柞磨に到着した翌日、福山の空襲がありました。20何キロ離れていますから、山肌の向こうが真っ赤に染まって、「福山がやられている。」と、みんなが盛んに大声でしゃべっているのを、聞いた記憶があります。

茨城県の水戸というのは、非常に空襲も激し

く、艦砲射撃も増えたこともありますし、私は、その頃旧制中学の1年生でしたので、アメリカ軍の攻撃に備えて、海岸の近くで作業というようなことを2～3カ月いたしました。そういった状況で、被災して柞磨へ帰ってきて、一握りのごく少しの田んぼと畑を貸してましたんで、それを返してもらって、5年ほど農作業をやりました。

国民学校の5年生の時には、校庭で防空壕を盛んに掘ったり、茨城県は農業県ですから農作業、例えば田んぼの草取り、麦踏み、それから、新聞配達、そんなことをしているうちに、体が非常に丈夫になってたんですね。ですから、柞磨で、食べ物が半年ほどはなかったですけども、あとは、なんとか、体を動かして農業をやって、生きのびてきたというような経験があります。

そして、福山の戦後の印象としては、昭和天皇が、昭和22年に巡幸のために、福山にいられたことや、先ほどお話のあった産業復興博覧会というようなことは、所々、記憶しております。

ということで、とりとめのない話で、失礼致しました。

司会

ありがとうございます。

では、他に、お話し下さる方いらっしゃいませんか。

高橋さん

霞町の高橋と申します。

私の夫が、以前、パネラーになってリーデンローズで、戦争のことをお話ししたことがあります。家族には、思い出したくないから直接話さなかったけど、その時、いろいろ話を聞きました。それで、さっきみなさんが話されたことが、本当に胸にグサッとくるようなことも多いんで

す。

夫は、空襲に遭った時に、家族が6、7人いたんですが、一番小さい子どもが赤ちゃんで、母親が背負うて、二人の兄を連れて逃げたそうです。明王院のどこまで逃げたのが夜中だったので、次の日もご飯を食べられず、昼をだいぶんなまわって、お腹がペコペコのまま、小さい子もみな歩いて公会堂があった所へ行き、やっと、少しのおむすびをいただいたと言っていました。明王院でも、炊き出しがあったようですが、自分にはまわってこなかったらしいです。家に帰ってみると、全部焼けていて、周りのあちこちの防空壕で、4、5人亡くなっているのを見たそうです。そんなことを、夫が話していました。

舅からは、「家の焼け跡に戻ったら、ちょうど、駅が見えていて、家族を住ませにやいけんから、竹を敷いて、そして、そこらにある使えそうな物を寄せてから、家族を寝かせた。」ということも聞いたりします。

戦後、福山は復興がものすごく早かったと言われるけど、間口が決まっていた、平屋の家しか建てたらいけないとか、そういうふうなことで、大変だったようです。私が嫁に来たのは、昭和35年ですが、その時でも、まだ復興しきっていませんでした。私は、田舎で過ごしていたので、空襲で焼けだされた人の苦労はわからないけど、大変じゃったと思います。

さっき、森近先生がおっしゃった衣料の点数というのは、私は初めて聞きました。

私は、昭和13年生まれで、戦時中も戦後も田舎で過ごしたから、自給自足でした。田舎では、そう服を買えるわけじゃあないから、家で羊を4、5匹飼って、自分らも羊の毛を摘んで、それを、最初の頃は、母が自分で糸を撚って、私にセーターを編んでくれたりしてました。本当に戦中・戦後を生き残った人は、根性ができているというか、私は、本当にそう思います。

舅の話では、配給米じゃあ食べていられない

から、田舎が出所（デショ）の鉄道へ勤めている人に頼んで、田舎の米を譲ってもらって、生きのびたそうです。

舅の妹二人と一緒に住んで、姑が、ご飯の量を見て、「これだけあれば、今晚、なんとか食べられる。」と思うていたら、病気の妹が、仏さんの御仏飯まで全部食べてしまった。「腹が細かったから食べた。」と言われ、もう涙が出て、涙が出て、「どうやって今日、暮らしゃあええんかしら。」と、辛くて途方に暮れたと、姑が話していました。戦時中と戦後がごちゃ混ぜになってしまって、いろいろとりとめのない話で、失礼致しました。

司会

高橋さん、ありがとうございます。今、お話をしているこの地域が、福山空襲で焼失した場所ですので、こちらのほうに焦点を合わせて、お話を伺ってたんですけれども、農家の方も自給自足とはいえ、まさか羊を飼って羊毛を紡いで、セーターなどもこしらえていらっしやったというお話は、なかなか聞く機会がなくて、ビックリするようなお話でした。

「福山の復興が早かった。」と、私達も以前に、そういうふうには聞いたんですが、なんとなくピンとこなかったんです。けれども、『福山市史』などによりますと、土木課の課長さんと、市長さんに立候補されたことのある方ですけれども、とても、頭の切れる土木課の課長さんがいらっしやって、昭和20年10月には、復興の青写真を作っていたらっしやたらしいんです。それをもとにして、復興計画の立案に着手した。日本国中のどこの都市よりも早く、昭和21年4月、計画案を国へ出されたそうです。ただ焼けた所だけを直すということではなく、将来的な都市計画を合わせて組んだ、凄まじく素晴らしい内容だったということで、戦災復興院の担当官の胸を打ったそうです。

よその都市が、準備不足で、なかなか計画に着手できず、補助金をあっちの都市もいらん、こっちの都市もお断り、「まだ、うちは計画を立ててないから。」と言って断ってくるなか、素早く、福山にその補助金が流れて、福山は、早くに、復興に着手できたという経緯があるようです。それで、「福山は、復興が早かった。」とされているんです。

ただ、この南学区は、その後選挙で選ばれた30人の区画整理委員会の中でも、反対派の方が多かったので、地域の方が、旧南国民学校で定期集会などをしたりして、自発的に、自分たちで福山市の区画整理に反対運動をされていたということで、この学区は非常に民主的な、そして、意見をしっかりと言える地域だったようです。

どなたか、区画整理などについて、体験をされた方とか、お話を聞かれた方はいらっしゃいませんか。

森近静子さん

区画整理について、私が、記憶があるのは、福山市は、非常に早く、復興に取りかかりましたので、本当に強引なところもあったろうかと思えます。

だから、福山の駅前から、まっすぐ大きな広い道がついておりますが、あの辺りでも、競馬場のあの道に抜けるまでは、家が一軒、家引きのコロを下へ挟んだまま、長い間、生活しておられました。

そして、その他の二軒の方も、長い間、残っておりました。その家のそばに、大きな楠があって、今でも、その光景が目には浮かびます。ずっと先祖から住んでいらっしゃった場所から離れるということは、よほど条件が良いか、あるいは、自分もその気になって福山市に協力しようという気がないと、移転ということはな

かなかできません。福山の駅前から、まっすぐに大きな広い道ができておりますが、道路を新しく真っすぐするまでには、かなり、福山市民の方々のご協力が必要だったろうと思います。

そして、また、役所でその仕事に関わる方々にも、いろいろご苦労があったんじゃないかと思えますね。

司会

空襲で焼けた家の廃材のトタンとか、そういったものを寄せ集めて、急ごしらえの家を造ったとおっしゃる方も多かったのですが、焼け残った家を、「意地でも動かない。」と言いながら、粘っていらした方もあったかもしれないですね。かなり強い反対運動もあったように伺っております。

以前、証言していただいた方のなかに、国道2号線なども、当分うまく工事が進まないの、立ち退きの後、長く空き地のままで、「ノッポンポン」と呼んで、そこで子どもたちが野球をしていたとお話を聞いたことがあります。

戦後学校に行かれていた年齢の方がご参加くださっていますので、遊び以外で、学校生活について何か話していただければと思うのですが、どうでしょうか。どんなことでも構わないです。

渡辺さん

昭和14年生まれまでの人は、「カタカナ入学」じゃからね。

昭和14年生まれで小学校に上がった人は、入学して最初にカタカタを習うけど、昭和15年からあとに生まれた人は、ひらがなを習ったからね。で、私は、昭和15年生まれで、先生に、「あんたなんかは、ひらがななんだから、今まで覚えていたカタカナを全部忘れなさい。」と言われたのを覚えています。だから、私は、昭和14年までに生まれた人に、「あんたは戦前の

子で、カタカナだけど、私はひらがなじゃけえ、若いんじゃ。」言うて、変な自慢をしてました。

司会

では、国語の教科書に、急に、ひらがなで、「さいた、さいた。」と書いてあったんですね。

渡辺さん

はい。

司会

他に、学校のそういったお話を共有したいと思いますが、何かございますか。

高橋さん

小学校時代からのことですが、入学した時は、「尋常小学校」。それから、昭和16年に、「国民学校」というふうに名前が変わりました。

音楽ですと、ドレミファの音階がありますね。それは、外国人が作ったということで、日本人は日本人の音階でうまくやろうということで、ハニホヘトイロハ、になりました。ですから、そういうのが、今でも残ってまして、ドレミの音符も読めません。

それから、歴史ですが、「国史」と言いましたけれども、年代が西暦でなくて、「紀元」ですよ。ですから、昭和15年が2600年ですから、西暦に660年をプラスして言わないといけません。年代の覚え方が違うんで、戦後は非常に混乱しました。

それから、途中から新制中学校に入ったんですけれども、やがて、それが高等女学校と一緒に、新制中学から新制高校になって、男女共学というのを、初めて経験しました。学制だけでなく、学校の教育内容が変化したことは、大きな驚きでした。いくら子どもでも、一度身についたことは、そうそう切り替えることはで

きない。戦後、身に染みて感じるが多かったです。

司会

「カタカナかひらがなか」というお話も、「はあ、なるほどな。」と思ったんですけども、よく戦時中に学校生活を送られた方の中に、「最後の1年間は、強制的に動員されて勉強しなかったから、算数がわからないのはそのせいだ。漢字が書けないのはそのせいだ。とか言いながら、自分が不勉強なのを笑ってごまかしてきた。」という人が、結構、いらっしゃるんです。

先ほどのお話にありましたように、終戦まで音楽もハニホで歌う。もちろん、野球も英語は使えない。「ビラ」も、ビラというのは外国の言葉だからというので、「伝単」というふうに言い換えていた。全て、換えて言っていましたから、当然のことなんですが、戦後、内容だけでなく、覚え方や呼び方の基本が変わってしまい、子どもたちは混乱してしまったというのは、興味深いお話でした。

教育関係のことですと、皆さん、わりと覚えていらっしゃることが多いと思うんですけど、私たちピース・ナビの仲間も、勉強しても、なかなかわからないところが「おとなの世界」なんです。つまり、娯楽や文化や、そういったことについて、戦後すぐに、どのような動きがあったのかということがなかなかわからなくて、勉強を続けているところなんです。

さっき、福山で行われた産業復興博覧会ですね、それでは、高橋さんがおっしゃってくださったように、第二会場になっていた福山城の天守閣の跡ところに、仮の日本風の家を建てて、そこで、華道と茶道が三日間ずつ、流派を変えて展示をされたと聞いております。

私の勝手な推測ですが、その頃は、展示しようにも、展示物が空襲で残っていなかったり、それから、そういう、いわゆる芸術作品を作る

ことが難しかった時代です。ですから、お茶やお花のようにその道を極めている人材を、終戦後すぐに確保でき、来場者にお見せしたり、お点前（テマエ）のサービスをして、来場者を労（ネギラ）えたのではないかと思います。

ただ、その博覧会で、戦後日本で初めての絵画の展示もあったということで、芸術も芽吹き、絵を描く人たちの励みになったというふうに言われています。

ですから、その辺のところは、私たちもわかるのですが、いわゆる、映画とか、競馬とか、ジャズとか、進駐軍によってもたらされてたものも含めて、みなさんもお楽しみなっていたものがあると思うんですね。そういったことについて、もし、ご存知の方がいらっしゃれば、お話をさせていただければと思います。

私たちも、映画館の名前なども少し聞いて、どの辺りにあったということまでは聞いているんですが、皆さんがどういう状況で、映画を観ていらしたかまではわからないので、もし、体験していらっしゃれば、お話をさせていただいたらうれしいです。

檀上さん、お願い致します。

檀上裕さん

福山では、大勝館、日米館、大黒座、こういった所が柱でしたね。

その後、福山劇場、名画座、それから、KO劇場。こういうふうなのができました。が、もう一つ、以前に、駅前大通りのところに、映画館があった。芝居小屋も一緒じゃったかどうか、ちょっと、記憶にないんですけども、名前だけは、覚えとるんです。地球座、スバル座、千鳥座。ここが、おとなの唯一の娯楽の殿堂。映画館の名前に、もし記憶違いがあったら申し訳ないけど。

司会

並木道子さんの『リンゴの唄』で有名な『そよかぜ』という映画も、昭和20年10月には、封切られたと聞いていますから、映画産業は、戦後すぐに、復興したようですね。今、伺いましたら、すごい数の映画館や芝居小屋の名前があがっております、今の映画産業とは、比較にならないようです。

今、映画館の話が出ましたが、娯楽関係でどうでしょうか。

では、高橋さん、お願いします。

高橋さん

私、洋画が好きだったから、さっき、おっしゃった駅前のKO劇場で、洋画をして、『ローマの休日』（1953年製作）だとか、ユル・ブリナーの『王様と私』（1956年製作）とか見た覚えがあるよね。でも、それは、戦後すぐではなくて、私が大きくなって、田舎から福山へ一人で出かけられた頃の話。バスが、昼と晩しか来ないような神辺の奥に住んでいたから、バスの待ち時間に2回でも3回でも観ていたね。

戦後は、私たちの田舎と違って、街の人は復興のために働き続けて、本当に、大変な思いをなさってる。田舎の者は、食べる事には不自由がないというか、自給自足のようものですから、そういう娯楽のようなことも、田舎のわりには、早くにできるのはできたと思いますけど。

南小学校の近所の方から聞いたお話ですが、戦時中は、子どもが小学校から並んで帰る時、班長さんが、馬の糞やら牛の糞やらみな集めて、それを肥料にして、南小学校の校庭で、さつま芋を作る。そして、みんなで食べたそうです。「街の人は、大変な思いをしてらっしゃる。田舎と街との格差がある。」と思いながら、聞いたことがあります。

福山空襲の時、私たちはちょうど6歳ぐらいで、おじいさんが、「はよう（早く）来てみろ。」と言うので、山の上に上がって、福山が燃える

のを見ました。ドンドン、飛行機がやって来るのを、小そうても、覚えてます。空襲の一週間くらい後に、おじいさんが私を連れて、12キロの距離を歩いて、お城の下のほうをずっと連れて見せてくれました。大方、まだ煙が出てましたけど、その中を田舎で見たことのないジープのような車が走ってきて、私は、恐れて走って逃げました。そのことを人に話したら、「戦後に、すぐ、ジープのようなものが、こにゃせなんだ（来はしなかった）。」と言われたので、記憶違いかもしれません。神辺の田舎では、自動車そのものを見たことがなかったので、ジープだと思い込んだのかもしれませんが。見物のつもりで、おじいさんに付いて来たのに、死んだ人や、馬が死んで倒れているのを見て、帰りしなは、何もしゃべられんで、おじいさんの後をただついて歩いてだけ。おじいさんも心臓が弱かったから、おんぶしないという約束で行ってるから、頑張って往復24キロを歩きました。

話が、戦時中や空襲のことになって、すみません。

司会

昭和35年に結婚される前、子どもや学生の頃、街のなかに、何度も来られていて、思い出されたことをお話いただいたんだと思います。

他の方に、「そんなに早くから、ジープが来ていない。」と言われたとおっしゃっていましたが、進駐軍が入ってきたのは、昭和20年の9月20日に、厚木の進駐軍の部隊から、広島県に通告があり、実際には、10月6日、呉の広港に輸送船団が、30隻入港したそうです。それから、広島県内各地に配置され、福山には、昭和20年11月2日、ノートン大尉以下、約1000名のアメリカの歩兵大隊が、大津野の旧海軍航空隊施設を兵舎として、進駐してきたそうです。

その後、11月17日には、進駐軍の憲兵に相当するMP（軍警察 Military Police）という部隊長以下16名が、呉の駅前と福山の警察署に、常時勤務して、進駐軍とのめめ事がないように、目を光らせていたということです。

高橋さんが自動車を見られたのが、空襲直後であれば、日本の軍隊の車をご覧になったか、11月以降であれば、焼け野原になっている福山市街地に進駐軍が入ってきたのをご覧になったかどうかでしょうね。

さて、翌昭和21年に、アメリカが引き揚げまして、3月23日に、オーストラリア軍が入ってきたということで、皆さんがよく覚えていらっしゃるのとは、アメリカではなくて、オーストラリアの軍隊が入ってきてからのことだと思います。いろいろ軍から放出された、確か、檀上さんもお食べになったそうですけれども、パイナップルの缶詰などが放出されたわけですね。

「放出」には二通りありまして、アメリカ軍が、日本と戦争をしていた頃に備蓄されていた軍の物資の缶詰などを、日本に譲り渡したというものと、それから、オーストラリアの兵隊さんが来て、自分たちが手に入る物品を、駐留先の日本人に横流しをしていたものがあるようです。確か、檀上さんは、オーストラリア軍の兵隊のリュックの中に入っていたパイナップルの缶詰を、買って食べて、「こんなに、甘くておいしいものがあるのか！」と感激したと、おっしゃってました。今でも、当時の事を思い出して、無性にパイナップルの缶詰が食べたくなるそうです。

さて、残念なことですが、お時間が参りました。いろいろお話をいただきまして、ありがとうございました。パネリストの皆様も、参加していただいた皆様も、お疲れ様でした。ありがとうございました。

今日、ご発言いただいた方だけでなく、参加されたすべての皆さんの平和への強いお気持ち

が、しっかりと伝わってきました。

「戦争」は、戦時下だけでなく、戦争へ向かう「戦前」と、戦争が終わった後の「戦後」を入れた、それらひと続きの長い年月全てが、「戦争」と言えます。現代の軍事力や核の保有等を考えますと、戦争は、「命・物・自然・国」全てを奪う恐ろしいものです。戦争による破壊の規模から考えて、今戦争が起きたら、「復興」は、とても難しいと言えます。

今日の皆様の熱い思いを大事にしながら、次の世代に、その思いと実相を伝えていきたいと思えます。そのために、今日のように手をつなぐ仲間を作り、これからも一緒に活動を続けていきたいと強く望んでおります。これからも、よろしくお願い致します。

本当に、ありがとうございました。

最後に、この度、共に準備にあたり、ご協力いただきました南学区を代表して、田口南公民館館長様よりご挨拶をいただきます。

田口南公民館館長

本日は、ご参加いただきまして、ありがとうございました。戦後の復興を語り合うということで、貴重な体験をお聴きすることができました。

最も、大きな被害を受けた方が、ますます高齢化するなかで、この近年、戦争体験を聴く機会も、めっきり減りました。

しかし、戦争を体験された方々に、戦争体験、空襲体験など、過酷な体験を語っていただいただけでなく、今回は、戦後体験を語っていただく機会が持てました。この3月21日には、満州での戦後体験を聞く機会もいただき、新しく知り得たことも多く、心が震えたことも記憶に新しいところがございます。

本日、戦後の大変厳しい状況下での生活などを中心に、三名のパネリストの方にお話をいた

だき、そして、会場で証言をして下さった皆様のおかげで、よい時間を共有できました事に、感謝しております。大変、お世話になりました。

私自身は、昭和22年生まれで、戦後の記憶がほとんどございません。強いて言えば、外国人がたくさん歩いていたとか、はったい粉をかき混ぜて食べたといった、断片的な記憶だけです。

お聞きしたところでは、これまでの様々な証言をもとに、ふくやまピース・ナビのみなさんが、証言集の編集、来春には発行をされる予定と聞いております。

改めて、本日、お話になりました三人のパネリストの方、そして、これを企画して下さったピース・ナビのみなさんに、そして、おいでいただいた皆さんに感謝申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

本日は、本当にありがとうございました。

【パネリスト】

高橋 加造 (タカハシ マスゾウ)

昭和19年生まれ

終戦時 1歳5カ月

東霞町在住 (新市町に疎開中)

森近 静子 (モリチカ シズコ)

昭和12年生まれ

終戦時 7歳

野上町在住

檀上 裕 (ダンジョウ ユタカ)

昭和13年生まれ

終戦時 6歳

松浜町在住 (新涯町に疎開中)

テーマ

「戦後 福山復興の実態を学ぼう！」

とき 2017年11月25日

ところ 福山市人権平和資料館

証言者 池尻 博（イケジリ ヒロシ）

佐伯 新三（サイキ シンゾウ）

門田 一已（モンデン カズミ）

司会 堀家 美智子（ホリケ ミチコ）

【ふくやまピース・ナビ】



司会

今日は、戦後復興を記録に残す取り組みの第一弾として、学習会を開くことにしています。ふくやまピース・ナビと申しまして、人権平和資料館で平和のためのボランティア活動をしている者が参加して、勉強させていただきますので、よろしくお願いします。

では、福山市人権平和資料館の寺地副館長から、ご挨拶をさせていただきます。

寺地福山市人権平和資料館副館長

先週から寒波がきて、非常に寒い時に来ていただいて、ありがとうございます。

本日は、福山の復興の実態を学ぼうという趣旨の学習会です。戦前あるいは戦中の暮らしについては、各方面で実態の掘り起こしが、かなり進んできております。しかし、戦後の復興となると、まだまだ、掘り起こしが十分にできていないというのが、日本全体でも言えるのではないかと思います。特に、今年、『暮らしの手帖』という雑誌が、特集を組みまして、戦後の

復興についての手記を集めるということで、全国レベルの掘り起こしを出版社が始めたということです。ふくやまピース・ナビが取り組んでいる課題は、やはり、日本の国の全体の課題で、先端の取り組みをしているのではないかと自負しているところです。

今日は、三人の方にご尽力いただいて、当時の様子をお聞かせいただければと思っております。

池尻博さん、門田一已さん、佐伯新三さん、よろしくお願いします。

司会

三人の方にお話を伺うにあたり、門田さんは、長い期間、建設関係に従事されていたので、話せば長くなるから、皆さんからの質問に答える形で話をさせてもらいたいとおっしゃっています。

まず、自己紹介を、池尻さんからお願いします。

池尻博さん

池尻博です。生まれは、大正14年4月21日で、満92歳と7カ月になります。今、松永町に住んでいます。

私は、昭和18年9月に呉の海軍工廠に徴用工として徴用されまして、戦艦大和などの高角砲という艦砲の弾を作ってたんです。昭和20年1月10日に、一年早く、徴兵検査を受けまして、広島野砲隊に入隊したんです。それから、8月までは、演習をしたりしていたんですが、ちょうど8月6日に、「朝、早く起きて、馬の餌を刈りに行きなさい。」と言われ、4時30分頃起きました。12名だったと思うんですが、馬車を1台引いて、ちょうど広島駅の北側にある二葉山という山に行きました。その山中で青草刈りをしている時に、原爆が落ちたんです。

ピカッと光って、あとまた、風がドーンとききました。どこもケガもなく済んだんですが、上官の人が、「これじゃ、市内がどうなっとるかわからんし、われわれの部隊もどうなっとるかわからないから、山をおりて帰ろうや。」ということで、山をおりたんですが、市の中心部は燃えとりまして、部隊に帰ることができませんでした。それで、その辺りの避難民の方の手当てをしたりしたんです。ちょうど、街の火が消えたのが、晩の8時頃でした。

ようやく、自分の部隊へ帰ってみたら、建物はみな焼けとりましたし、営門のところに、大勢の人が折り重なるようにして死んでました。あとから聞いてみましたら、ちょうどその日に、入営があったらしいんですね。そして、一般の方が、一緒に営門のところへ来ておられて、その人たちが、直撃で亡くなられたんだそうです。私たちは、「生きている人は、おらんかな。」ということで、防空壕の中を探したり、いろいろしました。逃げることができんような人で、まだ生きとる人が20～30人おられました。そういう人たちを一カ所に集めました。ひどい人は、頭が割れて脳みそが出とるような人がおられました。「水がほしい。水がほしい。」と言われとったんですが、「水をあげたらおしまいになるから、あげなさんな。」ということで、水は差し上げませんでした。一晚、皆さんと一緒に過ごして、明けの日に、その人たちを三篠（ミササ：当時、広島市三篠町）へ連れて行ってあげるとということで、衛生隊の人も来ておられまして、生きている方は連れて行きました。当時、馬を三篠に疎開させていましたので、そうすることにしたんです。実際、部隊に帰ってみると、逃げるができなくて、真っ黒焦げになって亡くなった人が、たくさんいらっしゃいました。一カ所に集めて火葬にしたんですが、ちょうど100体ぐらいあったのでしょうか、2日間、かかりました。

そういうことがあって、明けの日から、「生きとる人がおらんか。」ということで、市内を探して歩いたりしたんです。そういうことがあって、後始末をしたり、何やかやして、9月25日まで広島におりました。

9月25日に、「宇品から船が出るから、東の方に帰る人は帰りなさい。」ということで、船に乗って、尾道へ着いて、尾道から松永（マツナガ：当時、沼隈郡松永町）まで歩いて帰りました。原爆の影響か、帰ってきてから体がだるく、頭の毛も抜けるということで、尾道の病院で診てもらいました。すると、先生が「これはもう、薬も何もないし、ええものを食べて、安静にしときんしゃあ（しておきなさい）。」ということで、それですと、家でぶらぶらしとったんです。

そうしたら、昭和23年の4月でしたか、「松永の役場へ、仕事に出てみんか。」という話があり、役場へ入りまして、衛生とか、今でいう福祉とかの方面の仕事をしました。その時に、「福山は、B29が91機来てやられたんだ。」ということが伝わってきました。

1年経った頃、福山で伝染病のコレラが流行ったということがありまして、広島県が福山市全体を隔離すると、人が出ていけないし、人が入ることもできないというような形で、コレラの伝染を防いだりしたんです。後から調べてみますと、コレラに感染したのが110何人でしたか、おられたらしいんです。『福山戦災復興誌』という本がありますが、亡くなった人が30人いたという事が、その中に書いてあります。食料はどうなってたかということ、食料とか水とかは、福山市内に入る人がいて、特別に、出入りしてもよいということになっていたらしいです。

ただ、今日、私が申し上げたいのは、復興して良い町ができて、良い都市ができたということだけでなく、別の側面として、コレラになったり、いろんな人にいろんなことが起こったん

だということです。「目に見える復興」と「目に見えない復興」があるんじゃないかと、私は思うんです。

もう一つ、これも『福山戦災復興誌』に出とりますが、戦災があったその日に、家が焼けたり、外へ逃げたりした人が多かったそうです。やはり、戦災を受けても、食べるものは食べなければいけないし、水も飲まなければいけない。その当時は、町内会長さんが、いろんな食料の配給の仕事をされていたらしいんですが、空襲の後、町内会長さんがどこに行かれたかわからないということで、探しに行ったのは、学徒動員でかりだされた中学校の学生たちだったそうです。中学生が町内会長を探しに歩いて、明けの日に、70何人の町内会長がどこにいるか、所在がわかったということが本の中に出ています。こういった目に見えない形の貢献のおかげで、今日（コンニチ）があるんじゃないかと、私は思うんです。

学生は、ただ町内会長を探しただけでなく、復興のために道路にあったものを片づけたり、水を運んであげたりというようなこともしてくれたりしています。延べ人員にして、15000人だそうです。学校の子どもたちが、一生懸命にやったということが、『福山戦災復興誌』に出とります。今じゃったら、携帯電話はあるし、スマホもあって、人を探すのは何のことはない。もう、すぐできるんです。その当時は、そんなものはなかったんで、学生の皆さんがそこまでのことをやってくれていたことを、私は、『福山戦災復興誌』を読んで、初めて知りました。よくやってくれたなあと思うんです。

それから、皆さんもご承知のように、母子三人像のことですが、福山の戦災を形に残そうということで、一般市民の人はどういうものがあるか、募集されたんです。どうも、いい案がなかったらしいです。これについては、当時、社会教育委員会議長をされていた荒木計三さんと

いう方が、戦災があった明けの日に、おじさんを訪ねて住吉町（スミヨシチョウ：当時、福山市住吉町）のほうへ行かれたそうです。そうしたら、田んぼで三人の親子が亡くなっているのを見て、こういうことがあったんだということ委員会では話されて、それが取り上げられたそうです。それと同時に、母子三人像を作った人は、今城國忠さんとおっしゃる被爆した方で、広島で惨（ムゴ）たらしい体験をされていました。母子三人像の幼気（イタイケ）な姿を見るにつけ、そういった経緯を思い出し、感慨深いです。

実は、私どもの原爆慰霊碑も、母子三人像の近くに作っていただいたんです。これも、もともとは、8月6日の日に、朝早くから起きて広島に行って、みんなで慰霊することにしてたんですが、だんだん、全国からも集まる人が多くなってね。しまいには、朝起きて車を仕立てて行っても、時間に間に合わないようになったんですよ。それで、「これじゃいけんから、福山の土地へ自分らで作ろうや。」ということになって、母子三人像ができた（昭和47年3月制作）ちょうど17年目に、母子三人像と同じ場所に原爆慰霊碑を作っていただいた。原爆のようなことが今後はないようにと、恒久平和を願って作ったわけです。母子三人像と私どもの原爆慰霊碑が並んで作られたことは、本当に、当時の福山市のみなさん方のおかげだと思っています。これは、永遠に語り継がれていくだろうと思っていますので、今後とも、永遠に残るように、市民の皆さんのご協力をお願いしたいと思います。

そういうことで、私は、直接福山の戦災に遭っていません。ただ、昭和40年に松永市と福山市が合併して、その時、私は、衛生関係の仕事をしていました。その当時、戦災の時の名残りに関わったのは、墓石ですね。戦災に遭った墓石が、本庄の射撃場があったところにそのま

まにしてあったものを、「ここにあったんではいけん。」というので、蔵王山のところへ移設するという仕事をさせていただきました。

今日、皆さんのおかげで、こういうお話をする機会をいただきました。私は、戦時中福山市になくて、福山空襲にもその後の復興にも直接関わっていないと思って、どう話をしようかといういろいろと思ったんですが、「目にみえない復興」のことも、皆さんと一緒に勉強したいと思ってやってきました。よろしく願いいたします。

佐伯新三さん

佐伯新三です。私は、福山市役所の衛生課に、昭和26年9月に入りました。その後、衛生課、管理課の労務係、それから、水道課に変わりましたが、その間の5年間、当時は職員の定数がなくて、臨時職員として働きました。その後、定年まで、水質関係、水道の浄水関係の仕事をしました。

水道事業を振り返ってみると、水道は先ほど話がありましたように、終戦後コレラとかチフス、赤痢など、戦後3年の間に、福山市で伝染病の発生など困ったことが起こったんですが、その間に、水道をなんとか復旧したいということで、関係者が頑張ってこられた経緯があります。今は、水質関係ということで、水の衛生について、専門でやってこられたことを、幸いに思っています。最後は、水質試験所の初代の水質試験所長として仕事を終えました。そのなかで、渇水時の水源の確保、赤水対策、芦田川の汚染対策などで、苦心した覚えがあります。自己紹介ということで、簡単ですが、次の方にバトンタッチをしたいと思います。

門田一已さん

門田一已です。私は、市役所に入ったのは、昭和21年12月です。

戦時中は予科練（海軍飛行予科練習生の略。

海軍における航空兵養成制度の一つで志願制。）に行っておりました。その前に、昭和18年の4月に、「沖縄に転勤せえ。」という命令がありました。その時、もし沖縄に行っていたら、私は死んどります。なぜ生き残ったかという、鹿児島まで行ったのに、鹿児島から沖縄へ船が出なかったんです。船に乗れなかった。「お前ら、ここに残れ。」ということで残ったから、今まで生きておったんです。

昭和20年8月に復員しまして、昭和20年10月くらいから、中学校に復学しました。昭和21年3月に、「卒業証書をくれえ。」と言うたら、校長は「やらん。」言うて、「へえじゃあ（それでは）、もう一年、学校へ来るか。」いうやりとりがあったんです。その後、校長が考え直して、「お前らみたいに兵隊から帰った者が、いつまでもおったら邪魔になる。卒業せえ。」と言って、修了証書をくれたんです。「終了証書をくれるんなら、学校をやめるかあ。」ということで、その時予科練から帰った者が40人くらいおりましたが、一緒に辞めました。

福山市役所に入る前の話ですが、昭和21年の5月くらいから7・8月まで、住宅営団におりました。福山の焼け跡に、住宅営団が家を建てとりました。6坪ぐらいの家を、木造のセットで、200戸くらいありましたよ。それを売る住宅営団というのがありまして、職員は、男性が所長と私ともう一人で、女性が2人、合わせて5人くらいいて、仕事は、特に、市役所の人が家屋登記を取るの、手続きをやっていた。

しばらく行って、仕事がないということで家におったら、伯父が「ちょっと、市役所へ来い。」ということで、市役所で働くことになりました。昭和21年12月で、焼け跡だらけの何もない頃です。仕事は、焼け瓦を一枚ずつ、全部大八車で松浜に運ぶんですが、その時、積むところと降ろすところにおいて、その数を数える仕事で

す。途中で捨てたらわかりませんから、その数を数える仕事は、21年12月から始まったんです。それから、昭和22年12月に、初めて福山市の公定の職員になり、月給をもらうようになりました。

昭和21年頃はね、飲み屋は朝鮮通りにしかなかった。そこは、元のNHKがあった反対側の場所で、朝鮮酒を造りようた。そこで酒を飲んだことがありますよ。

それから、記憶があるのは、大津野（オオツノ：当時、深安郡大津野村）にオーストラリア軍が進駐して、街の中を並んで歩いていました。その時に、たばこを売ってもらいました。「Have a cigarette! (たばこをくれ!)」と言うたら、たばこを渡してくれるんです。確か7円だったと思う。買って吸っていたことがあります。

話を戻しますが、私は、市役所に入って34年間、福山市の復興の土木関係しかやっていないんです。今、みなさんが、その間の土木関係のことについて聞かれたら、覚えていることは何でも話します。

私としては、今でも一番記憶に残っているのは、今の体育館のところに市民球場を造ったんです。理由は、昭和26年に、『第6回国民体育大会』というのが、広島県であってね。福山で、高校野球が開催されることになったんです。それで、「市民球場を作れえ。」ということになり、そこへ、私を含め担当者3名が決まりまして、初めからずうっと、市民球場が完成するまで関わりました。「国民体育大会までに作りなさい。」というので、10月までという工期を守って造りましたよ。

そもそも、市民球場を造る場所は、護国神社の跡地だったんで、鳥居がそのまま残っていた。空襲で神社は焼けても、大きな鳥居は建ったまんまだったんです。それを、野球場を造るんで、倒して、動かして、西の端ぐらいのところに埋めたんです。まあ、鳥居なんか、そう簡単に掘

り出すこともないと思ってた。そしたら、掘り出して今の場所（丸之内町）に建てることになった。まさか、また掘り出すとは思わなかったんで、驚きました。



余談ですが、市民球場の工事で掘削する人が、「ちょっと、門田さん。まんじゅうを買って来てくれ。」と言うので、20円くらい持って競馬場へ行ったことがありました。まんじゅうを売っている人が、「20円持ってきたんでは、みんなに売られんようになるけい、待ちようてくれ。」と言われたことがありました。20円あれば、まんじゅうがようけい(たくさん)買えたから、品切れになるということだった。

福山市の戦災復興で、今はずいぶん変わりましたが、駅前を三回、いらい(手を入れ)ました。それと、昔、「天満屋」が今の鞆鉄(キャスパ跡)の所にあっただけです。反対側に今の天満屋の所に「鳩屋」があっただけです。それから、天満屋が鳩屋の所に移って、鳩屋がなくなった。今、鞆鉄があるところには、昔は市場がありました。露店市場があつた辺にありました。その頃のことを話しても、みなさんは、ピンとこないでしょう。

34年間、土木関係しかやっていないんですよ。戦災復興の土木関係は全部やりました。図面がありましたが、戦災復興都市計画ということで、土地区画整理は81カ所ありました。図面を見たら、全部わかります。道三川に橋も架けました。私が担当しました。昭和37年までは、市役所に復興課というのがあって、そこで

担当していました。それから、区画整理は、手城とか、吉津の所にもありましたが、それらを初めの頃にやりました。

司会

ありがとうございました。

今のお話の中で、「もっと、ここが聞きたい。」というところがあれば、先にみなさんから出していただいて、三人の方に答えていただく形で進めます。じゃあ、何かありますか。

坪山さん

門田さんのお話を、貴重なお話として、聞かせていただきました。

今、たちまち二つほど考えているんですが、一つは、護国神社の鳥居の話です。私も、以前、空襲に遭われた方から、「護国神社というのは、福山空襲の時に建設途中で、鳥居は残っていたんだが、建物は焼失した。鳥居は、一旦、埋めたんだ。」と、聞きました。今日、門田さんが話されたので、ああ、そうだったのかと思いました。日本が占領された時に、そういう神社関係の物は没収されたり、壊されるので、地中に埋めて残しておこうということで埋めたんだと、聞いたことがある。占領が解除して、講和条約後独立したので、掘り起こして今の場所に護国神社を作ろうというので、鳥居を建てた。埋めた理由は、「占領下、日本の天皇制のなかで、神社関係のものが壊されるのを危惧して埋めた。」というのは、本当だったのでしょうか。

二点目は、昨年5月、戦後復興に携わられた佐道弘之さんが、「福山の戦災復興の区画整理は、全国81カ所ある中で、福山は非常に早く区画整理が終わって、福山の空襲後の復興を促進した。それは、市民の協力や犠牲を払ってできたんだ。」とおっしゃっていました。福山が、全国に先がけて戦災復興の区画整理が完成した理由というか、その背景を教えてください。

門田一巳さん

鳥居を埋めたのは、空襲で焼け残ったんで、野球場を作るのに邪魔になった。それで、倒して埋めたんです。

司会

坪山さんは、占領軍が来るから、武器を埋めたり、天皇制に関係する物を隠したりして、抗戦の意思がないことを示すみたいな理由で神社を埋めたのではないかとおっしゃっていますが、どうですか。

門田一巳さん

占領軍は、関係ないよ。

司会

もう一つは、全国で81カ所、復興のために区画整理計画を立てているけれども、全国的にも、福山は早くに整備ができた。その理由は何でしょうか。

門田一巳さん

福山は戦災区域が狭い、小さかった。それと、その当時の市長徳永豊さん（第7代福山市長）は、偉かったです。徳永さんとは、私は長く付き合いましたが、あの人は熱心にやりました。あの人が、もしその前の選挙に勝っていたら、駅前の道路はまだ広い。国道までは100メートル道路、それから、道三町までは55メートル。そこから先は36メートル。そういう計画だった。その計画を、藤井正男さん（第6代福山市長）が止めてしまった。計画に反対だった藤井さんの方が、先に市長になったんでね。

最終的には、県や国が作りしましたが、初めは、全部福山市が作った。今の国道の北側に6メートルの小さい道路があった。それが境めで、そこから30メートル取った。それと、今の市役所、あの付近には、昔は工場があつて砂場が

あったんです。そこから30メートル。

戦災復興についての市街地の区画整理のことについては、計画図面がありました。赤い図面があるので、それを見たら、みなわかりますよ。

司会

『福山戦災復興誌』の中にも付録の図面があって、黒字の線が元で、赤字の線が計画実施後らしいです。対照図が載っていました。

門田さんは、計画の線引きなどにも携わられたので、どのようにしたのかは、全部、答えられるということですね。

門田一巳さん

全部ね。国から補助をもらうために、毎年計画を出した。図面上に赤い線があります。

司会

計画は立てられたが、設計図を作っても、ダメになった話はたくさんあるんですか。市長が変わったり、方針が変わったりして。

門田一巳さん

計画路線は変わっていない。道路幅が変わっただけです。

坪山さん

福山の場合、空襲で避難されている人が元の場所に帰ってないのに、区画整理を実施したということはありませんか。

門田一巳さん

空襲で焼け出された人に、知らせずにするということはありません。ただ、はじめは、借り換え地を作って移して、また元に帰ってくることはありますよ。そうしないと、自分の家ができるまでは帰れませんから、そういうことはありました。

私は、工事関係だけは全部やりましたが、移転関係はやっていないので、詳しいことは言えない。

佐伯新三さん

減歩率はどうだったんですか。戦災復興で、区画整理することになると、元の土地を減歩するんですよ。

門田一巳さん

あれは、3割減歩です。だから、土地が100坪所有だったら、70坪しか所有できないんです。それで多い少ないと揉めたことはあります。

坪山さん

それは補償しなかったんですよ。

門田一巳さん

補償など土地の問題については、詳しく知りません。私は、工事の担当ですから。土地の割当てには、数名担当者がいました。

司会

3割減って、かなりダメージが大きいですよ。100坪持っていたら、70坪になるわけですから。焼け出された人たちの土地の割当てとかは、焼け出された人たちご本人が、市役所に出向いて申請するんですか。

門田一巳さん

いや、市役所が計画図面上の赤い線によって、換え地を作って、割当てするわけですよ。

司会

市民の方は、市役所が線引きをして、「こういうふうにします。」と言うのを、受け入れるしかないんですか。苦情のある方は、いなかったん

ですか。

門田一巳さん

受け入れる。文句もあつたんでしょう。土地が多いとか少ないとかがあつたでしょう。それでも、市役所の言うとおりに従うしかありません。

森近静子さん

今、区画整理によって役所が整理されたものは、3割減とおっしゃってましたね。

話し合いがつかない場合は、町内会長が中に入っているいろいろと話をつけるのに、裏金が、多少動いたというようなことも聞きました。あくまでも、噂ですけどね。

本当に区画整理を早くなさったから、まっとうにできたのであって、「いつまでもぐずぐずしていたら、もっともっと争いが大きくなって、大変だった。」というようなことを、おとなが話すのを、子どもながらに聞いておりました。

司会

池尻さんと佐伯さんが、共通してお話くださったことが、コレラに続いて、チフスなどの伝染病についてです。

先ほど、打ち合わせで「都市隔離」のことを伺ったら、何か渡したい物などの用事のある人は、駅の改札口のところで渡して、もう福山市内に入られないように、福山市自体を隔離されていたという話をされていました。会の初めにも、池尻さんが、伝染病の福山市の対応とか、コレラで亡くなられた方の人数などもお話くださいました。

池尻さんと佐伯さん、伝染病についての福山市の対応とか様子とかを、もう少し詳しく話していただけますか。お願いします。

池尻博さん

伝染病についてのお話なんですが、ご存知のように、ああいう空襲などの災害が起きた時には、水道施設が壊されたりして水が飲めないですよ。良い水が飲めないんで、溜まり水を飲んだりするようなことがあると思うんです。そういうことが伝染病の原因の一つになるんですが、コレラと天然痘が、一番感染力がものすごいんですよ。

ですから、コレラが流行ったというのは、どこからどのように入ってきたのか、伝染経路がわからなかったんですが、もとは、インドが発生地になってるということは、聞いたことがあるんです。それから、どういうふうにして福山へ入ってきたのか、当時はわからなかった。戦後、外地からの引揚げや復員などの影響と思われる。

ところが、福山でコレラが流行る前は、赤痢とかね、腸チフス、そういったものが流行っていたんです。もともと福山に伝染病棟があったんですが、空襲で焼けてなくなった。そういうことで、周辺の地域の市村（イチムラ）とかの伝染病舎に、そういう人たちを移動させた。

これも、早く処理されて、大きな伝染力を、福山市内だけで終わらせたということになっている。コレラに罹った100何人の患者のうち30人亡くなったが、「都市隔離」をしたことで、他は回復し、最終的には一人になって、都市隔離解除になったと言われている。それから後には、コレラというものは、日本には流行っていないと思うんですね。天然痘は、ご承知のように、腕に予防接種をするんですが、これも、今はほとんどないですね。

今福山医療センター（国立病院機構福山医療センター）になっていますが、終戦後、あの裏側に伝染病棟がありました。私は、衛生関係の仕事をしていたので、松永でも、腸チフスが流行ったりなんかしたんで、そういう患者を伝染病棟に連れてきました。腸チフスは、昭和20

年、105名の患者うちが21名亡くなりました。翌年の昭和21年と22年も、少なからず患者が出て、昭和20年から23年までの3年間に、129名が罹患し、25名の方が亡くなっています。ただ、それ以来、もう福山には大きな伝染病が発生していません。戦後の混乱期とはいえ、市全体を隔離したというのは、全国的にもそういう例がないんだそうです。そういうことが、一番効果があったと言われてしています。

司会

では、「都市隔離」の期間、福山に住んでいる人が、鉄道を使って移動したりすることには、規制があったのですか。

池尻博さん

隔離は、もう徹底してやとったんです。自分の家で隔離することができないから、一カ所に集めて治療して治した。

佐伯新三さん

患者の隔離は、池尻さんの言う通りだけど、「都市隔離」は、福山市が立ち入り禁止になっていた。福山市外に出るんもいけない、市内に入るんもいけない。

坪山さん

「都市隔離」は、どこら辺までですか。例えば、芦田川までの街なかだけとか。

佐伯新三さん

合併する前の福山市全部です。合併後に、福山市はかなり広がったと思うんですが、当時の旧市内だけ隔離した。だから、山手とかああいうところは、後日、合併したところだからね。旧市内というのは限られているから、その地域は隔離して、立ち入り禁止にした。福山市内から出るのもいけないけど、福山市内へ入るの

も禁止ということです。

司会

どれくらい期間ですか。

門田一巳さん

期間は、僕が覚えてるのは、1カ月くらいだったと思う。

佐伯新三さん

私は統計で見たんですが、コレラは、先ほど言われたように、昭和21年の6月～7月にかけて、110数人かかり、30人が死亡しました。

問題は、その後、腸チフスや赤痢が流行ったということです。腸チフスなんかは、昭和20年150人、21年132人、22年24人、23年4人、そういう風に腸チフスが流行っている。同じく、赤痢も流行っている。昭和20年130人、21年22人、22年9人、23年2人、そういう風にコレラの後も伝染病が流行ったということです。

問題は、これが、なんでそういう形になったかといいますと、空襲で水道管が焼けたり壊れたりするからです。各戸の水道の漏水率が70パーセント。水は送るけど、30パーセントしか給水してなかった。そういうことで、各町内会にお願いして、「漏れている水道は止めるように。」ということで、各町内会長に協力したりしてもらったんですが、水は動いてるから、なかなか効果が上がらない。そういうことがあって、やはり、伝染病が流行ったということなんです。

当時は、必ずしも、水道は通ってなかったんですよ。井戸が、各家々にあった。そうすると、水道は高くつくから井戸を利用するということで、井戸を利用されていた人がかなりあった。私の家のちょうど隣に同級生がいたんですが、その子は腸チフスになった。身近に伝染病にな

る人がいたわけです。私の家にも井戸があったけど、「それを、もう使うな。」ということで、使わないようにしたら、私はそういう病気にならずに済みました。

水道というのは、衛生的に非常に厳格にしていますが、井戸は、下はツーツーなんです。汚水が流れて、そこに染みているという形で、細菌の点からいうと、非常に危ない。肉眼じゃわからんですからね。私が、たまたま水質試験に関わっていた関係で、毎日水道の水をチェックするんです。細菌検査といって、「一般細菌数が1ミリリットルに100個以内であること」と「大腸菌が検出されないこと」の二つです。その当時は、検査は二通りしかなかった、水質検査は、特に、それは重点的にやっておった。やはり、細菌というのは、目に見えんですからね。

水道を敷設した時には、汚水が入っているから、かなりきれいになるまで放水はするんです。パイプの中に、どうしても汚れが残っているから、そういう風なところを完全に良くなるまで放水して、使用するという形をとってはあったんです。洪水で浸かった時なんかは、便所の汚水などが全部、流れますからね。そういう時には、つくづく水道の水は、一番安全なんだなと思います。

森近静子さん

腸チフスが福山に蔓延した時に、ちょうど、三菱の社員が感染したことがあったんですよ。私の家のすぐそばに、三菱の社宅があったんです。社宅が淀川を挟んで、向こうとこちらにあって、向こう側の方は各家を消毒しないで、こちら側は各家が消毒されました。子ども達も学校を休むようになってね。そして、私の家もちょうど近くだから、家の消毒をしに来られました。わが家もその当時は水道でなかったのだから、井戸を消毒されました。

そういうことで、あの思い出は本当に悲しい。子どもながらに、「伝染病というものは、こういうきついことがあるんだなあ。」と感じました。つくづく水は大切だと、今でもそのことは記憶に残っております。当時、三菱の社員さんやご家族も、伝染病にかかった方があったのだと思います。

佐伯新三さん

淀川一帯（旧廃川地区の草戸町一帯）というのは、伏流水が十分とれ、井戸が多いかったです。そういう関係で、一カ所汚水が入ると地下は流通していますから、汚水が流されて、確実に伝染病にかかる人がいますねえ。

水道水には、駐留軍の指示により、塩素注入立が2ピーピーエム以上となっていました。塩素消毒、いわゆるカルキによる殺菌です。

司会

事前に、ふくやまピース・ナビのメンバーから質問してほしいという内容が上がっていたので、どなたでも結構ですので、お話をさせていただけたらと思います。

一つは、野球場を作る前に、すでに競馬場ができていたということですが、賭け事をする場所を戦後急いで作らなくてもよいと思うのですが、それには理由があったとのことで、復興の資金に充てるために作ったと聞いています。競馬場の売上で、復興のどれくらいの部分を賄っていたのか、知りたいという質問です。

次に、広島市に市民球場ができていない時に、福山に市民球場があり、広島カープがこちらの方にも来ていたとのことですが、どういう状況だったかを知りたいという質問です。

三つ目は、陸軍歩兵第四十一連隊の跡地が、広島大学ができる前の状況のなかで、どういう風に変化していったのかを知りたいという質問です。

森近静子さん

当時は、地吹の荒神さんから競馬場までは、まだ土手が残ってたんです。その土手の土を使って野球場を作ったから、土手がなくなったんだと聞きました。昭和20年には、荒神さんの際のところには、お大師さんが、まだ高い土手の上に立っていたんですから。あの土手の土をなくして、宅地と田んぼにして、その土を野球場に使ったと聞きました。

門田一巳さん

それは、やっていない。野球場の土は、芦田川から採りました。土はいくらでもあったんです。土手の土は、田んぼに入ったんです。野球場は、女子高校生なども来て作業をやりましたが、よそから土は持ってきてない。川の中だから、土はいくらでもあった。

森近静子さん

川にあるのは、土ではなく、砂ではないんですか。

門田一巳さん

砂です。

高校野球連盟のボスが来て、「間に合わんじやないか。」と言われて、こちらは「間に合わす。」と言いつつ、そんなやり取りがあった。突貫工事をやった。野球場だから、コンクリートでバーを作って、バックネットを立てたんです。半分登ったら、折れたんです。ネットは、東町のNという金網屋が入れた。後から、学校もネットを使いだした。それまで、ネットはなかった。野球場のネットを作った時、私もまだ若い23歳です。国民体育大会で、紺と白の服を作りました。昭和26年です。第6回という開催の数字は、はっきり覚えています。

市民球場造りが済んだ後は、復興の仕事に戻りました。その時に、国道2号線とか、駅前と

か、いろいろありましたよ。日本化薬の西側に国道を作ったんです。一番、困ったのは、日本化薬は燃料を出す。薬物が流れる。樋門がある。鉄の棒でできています。鋼鉄を使って作った。

司会

競馬場のことで、何か覚えていらっしゃることはありますか。

門田一巳さん

競馬場で覚えているのは、さっきも話したけど、まんじゅうを買いに20円を持って行ったら、「待ちようれい。」と言われたのを覚えている。まんじゅうは、1個1円だから、一度に20個買う客は待たされた。他は、そんなに記憶にないなあ。

司会

素朴な疑問なんですけど、昭和25年ぐらいに、まだ食べるのも大変で、子どもにご飯を食べさせて、学校へ行かせるのも大変な時に、競馬場で賭け事をする人がいらしたのかなと思うんです。主婦の感覚からすると、理解できません。

門田一巳さん

私も、競馬へ給料丸ごとを持って行ったことがあります。一日行って、全部使いました。一銭も残らん。それで、競馬は止めた。

司会

公務員は、当時1万円ぐらいの給料ですかね。

佐伯新三さん

私は、当時、8千円くらいだった。

司会

それをまるごと持って行って、一瞬のうちに

使い果たすことができたんですね。

佐伯新三さん

職員と臨時職員というのは給料が違います。臨時職員は職員の半額です。

司会

それが、労働争議の争点になっていたということですね。復興期だから、市の職員がたくさん要るのに、正規職員が10人とすると、臨時職員としてその倍の20人抱え込んで、正規職員は規定の給料をもらって、臨時職員は、給料が正規職員の半額だったんだそうです。

門田一巳さん

私は、昭和27年に臨時になった。それでも、臨時になると恩給が付く。

司会

競馬場の話に戻りますが、結構、競馬場は儲かってたんですね。

佐伯新三さん

当時は、門田さんが言われていたように、市民球場は、元護国神社だったんですよ。戦時中、タダ働きで学生を動員して、トロッコで埋め立てて、護国神社にしたんです。それが、空襲で焼けて、戦後野球場になったんですが、その隣がまだ河原でした。まだ、淀川が流れていた。



あの当時は、競馬は、売上を戦災復興に充てるので、特別に許可してもらったんだというこ

とです。ずっと後の事ですが、立石定夫市長の時（第8代市長。在任期間1970年～1979年。）に、一度、「採算が合わないから、止めたらどうか。」という議論があったんですが、それも、競馬場で働く人の補償の問題などで、ご破算になって実現しませんでした。

森近静子さん

競馬場は、開催の6日間のうちの1日は、農林省の役人が、必ず来ていました。

門田一巳さん

競馬場があったから、市内の公民館ができたんです。毎年、各町村に、競馬場の儲けで公民館ができた。公民館だけでなく、学校もできた。

司会

直接、復興のことと関係ないですが、戦後の娯楽のことについてはどうでしょうか。

佐伯新三さん

戦後は、映画館が流行りました。

司会

市役所のそばに、三つもあったとか。

門田一巳さん

KO劇場と地球座と日米館があった。美空ひばりが小さい時にKO劇場にやってきて、帽子をかぶって歌ったことがありました。

佐伯新三さん

他には、戦後野球が活発だった。「オール福山」とかいうノンプロの都市野球集団が、全国大会に出たことがある。野球が強かったんです。野球には、熱心だったね。

森近静子さん

公会堂に芸人を招いていましたね。元NHKのところ、公会堂だったんです。

司会

公会堂はいつ頃できたんですか。空襲でも、焼け残ったということですね。

森近静子さん

戦前でしょう。ずっと前ですよ。焼け残ったんです。戦前ですよ。あの建物は、お洒落だったから。

(注)福山市公会堂は、武田五一設計。1926年建設。福山空襲でも焼け残り、1965年まで存在。

池尻博さん

私が小学校の一年生の時、今の天皇陛下が生まれました。その時に、公会堂で行事があり、公会堂に行ったのを覚えている。

話が戻りますが、福山は焼夷弾が落ちたわけですが、水道管の太いのがそのまま残っていた。広島原子爆弾は、水道施設がそのまま残っていた。ですが、放射能が残ります。水道の中の水に放射能が影響しているのに、その水をみんな飲んだ。危険なのを知らずに。福山の場合、地下の水道管までやられとったら、大変だった。

佐伯新三さん

各家庭に、漏れる鉛管を潰して、メーターを撤去してしまえば、水が止まる。漏水を防げた。

参考として、水道については、『水道史』があります。水道のことは、『福山市史下巻』にも載っています。

司会

ありがとうございました。質問によっては、疑問がそのままの項目もございますが、時間もまいりましたので、終わらせていただきます。

私たちは、水道を自由に使っているんで、あまり関心を持ってなかったんですが、水は命を繋ぐというだけではなく、汚水が混じっている水を飲むことで、戦後は伝染病につながったということを知ることができました。

伝染病に関すること、インフラでは、水道の状況のこと、道路や区画整理のことなど、数字的なことではわからなかったことを教えていただきました。

私たちは、これからも学習を続けて、お話を伺ったご恩返しをしたいと思います。

みなさん、お疲れ様でした。

講師のみなさま、ありがとうございました。

【証言者】 ※生まれ年順

池尻 博 (イケジリ ヒロシ)

大正14年生まれ

終戦時 19歳

海軍工廠徴用工の後、陸軍野砲隊所属
福山復興期の衛生事業に携わる(松永)
元福山市原爆被害者の会会長

門田 一巳 (モンデン カズミ)

昭和3年生まれ

終戦時 17歳

海軍飛行予科練習生
福山市復興期の建設事業に携わる

佐伯 新三 (サイキ シンゾウ)

昭和6年生まれ

終戦時 14歳

福山地方航空機乗員養成所在籍
福山市復興期の水道事業に携わる

テーマ

「語り部に学ぼう！

～次世代に戦争を語り継ぐリレー証言～

とき 2018年3月21日

ところ 福山市人権平和資料館

証言者 北村 富喜子 (キタムラ フキコ)

皿海 久治 (サラガイ ヒサハル)

司会 堀家 美智子 (ホリケ ミチコ)

〔ふくやまピース・ナビ〕



司会

みなさん、おはようございます。証言会にご参加いただきまして、ありがとうございます。

今日の証言会は、リレー証言という形で行わせていただきます。戦時中、戦後と、福山ではなく、主に外地で過ごされた方のお話を伺ってまいります。

今日、司会進行をさせていただきます、福山市人権平和資料館の平和ボランティア団体ふくやまピース・ナビの代表の堀家と申します。では、会に先立ちまして、福山市人権平和資料館副館長の寺地からご挨拶させていただきます。

寺地福山市人権平和資料館副館長

皆さん、おはようございます。ただ今、紹介にあずかりました人権平和資料館副館長の寺地と申します。よろしくお願いいたします。

本日は、あいにくの雨のなか、こんなにたくさんの方においでいただきまして、この会が盛り上がることを、本当にありがたく思っています。

今回の講演会を企画いたしましたのは、人権平和資料館に所属しておりますふくやまピース・ナビというボランティア団体の会です。この会は、福山における戦争の実相を掘り起こし、それを皆さんと共有することで、人権と平和の大切さを、市民に広めていくことを目的として、日々活動していただいています。

本日は、北村富喜子さん、皿海久治さんをお招き致しまして、満蒙開拓に関わるお話や、満州での大変厳しい生活、あるいは、日本への引揚げに関わって、生死をさまよわれた貴重な体験をお話いただけると思っています。

本日は、短い時間ですが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

司会

では、リレーの第一走者、トップを走っていただく方を紹介させていただきます。

北村富喜子さんです。北村さんは、昭和7年のお生まれで、現在、86歳でいらっしゃいます。長く教職に就かれ、校長先生としてご活躍後、退職。その後も地域や福山市のために、骨身を惜しまず、役職を務めていらっしゃいます。

昭和8年、1歳5カ月の時、お母さま、お兄さまとご一緒に満州に渡られました。昭和7年の満州建国に伴い、農業試験場の管理及び指導者として、すでに赴任されていたお父さまが、齐齐哈尔（チチハル）という都市にお住まいでしたので、北村さんが移動に耐えられる年齢になるまで待つ、出発されたそうです。それから15年間、満州建国直後の戦前、日中戦争、太平洋戦争を、中国東北部の都市で過ごされ、違う民族が同じ土地に生きる様々な面を見てこられました。終戦後も、約3年間中国に留まり、半年かけて日本に帰国されています。

本日は、限られた時間ではございますが、ご自身の体験のなかで、お心に残っていることをお話いただきます。では、北村さん、よろしく

お願い致します。

北村富喜子さん

おはようございます。今日は、雨が降って寒いのに、たくさんおいでいただきまして、恐縮です。ありがとうございます。

今日は、私が体験したことを、少しお話させていただきます。86年生きてきて、いまだに、時に夢に見るのは、日本が負けた後の厳しさです。

内地にいる方は、「国破れて山河在り。」というのを、信じておられたでしょう。でも、外地にいる者は、国が負けたその1秒のちに、まわりの景色が変わるんです。今まで日本人として、街を歩いていたところが歩けない。まず、「天皇が何かわからないが、放送をなさる。」と、いうことを聞いた時から、街がざわつきました。そして、一番に、齊齊哈爾というところから、軍人が全員トラックに乗せられて、ソ連へ連れて行かれました。軍人、警官のいない、無防備体制になりました。そして、日本が負けたと聞いた途端、私たちは「満人」と呼んでいたんですが、中国の人たちの態度が一変しました。

齊齊哈爾というのは、大きな街でした。私は、宮前（ミヤマエ）小学校という齊齊哈爾にある小学校に行ったんです。齊齊哈爾というのは、龍江省（リュウコウショウ）といって、日本の中国地方全体より広いぐらいの省にありました。開拓団は数え切れないほどありました。その中で、女学校は一つだけです。でも、女学校へ行く人というのは、本当に限られた人たちでした。内地にいれば、女学校、中学校へ入学した時から動員されて、勉強の時間が持てなかったようですが、満州にいる子どもたちは、勉強はできました。満州の私たちは、日本人としてのプライドを持っておりました。

でも、日本が負けたと聞いた途端に、まわりの空気が変わりましたが、「日本人は、日本人と

して、凜とした態度を保ち続けよう。」というのが、みんなの合言葉で、「いざという時には、死のう。」と、みんな覚悟を決めていました。みんな、青酸カリをもらっていましたからね。外地にいるから、辱めを受けた場合の覚悟と、日本人としてのプライドを、しっかり持たされていました。だから、「何があっても、自分は日本人なんだ。」というプライドを高く掲げて、頑張りました。物がなくても、人から施しは受けなし、日本人みんなで助け合うという、日本人同士の繋がりは大きいものがありました。

それでも、地域の人たちの暴動には耐えました。みんな、逃げました。逃げるといっても、日本のような木造の家ではなく、煉瓦でできた家ですから、ちょっとやそっと、潜って逃げるわけにいかないです。赤ちゃんを抱いたお母さんは、床の下へ潜りました。赤ちゃんが泣くから、おっぱいを飲ませて、ギュッと抱きしめている間に、赤ちゃんが窒息死した人が何人いたでしょう。死んだ子どもを抱えて、発狂したお母さんもおりました。

戦争というのは、一般国民が望んだ戦いじゃないんです。日本の国に物資がないから、資源がある所を獲ろうとして、現地人に、「そこどけ、そこどけ。」と言って取り上げたのが、日本の軍の政策でした。従って、たくさん、たくさんの反発を受けました。私たちは、土地の人と仲良くしようとして、満人たちとも仲良くしました。齊齊哈爾という町には、日本人小学校が二つありました。そして、満人学校、朝鮮人学校、ロシア人学校、蒙古人学校という、他民族の大きな学校がありました。ロシア人も、たくさんおりました。

私の父は四男坊ですが、祖父は昔の人ですから、子どもが生まれた時から職業を決めていたんです。長男は先生、次男は医者、三男は弁護士、四男は農業というように、決めていたらしいです。父は、親の言うとおりに農業の勉強をし、

学校を卒業しました。そして、花が好きで、吉津に花を栽培するための温室を作りました。「福山で、初めて温室を作った。」というので、たくさんの人が見に来たと聞いております。

でも、「中国に渡った日本人の食べる物を、是非試験場で作ってくれ。」という依頼があって、父は満州へ行くことになりました。しばらくして、私も1歳過ぎて、兄と一緒に、母に連れられて中国へ渡りました。

冬は、零下20度の寒いところです。春になると、蒙古からの蒙古風が吹いて前が見えないので、みんな、「防風眼鏡」という粉塵除けの眼鏡をして外出するほどでした。

でも、子どもの頃、「斉齊哈爾って、いい所だ。斉齊哈爾に住んで、良かったな。」と思いました。斉齊哈爾の幼稚園、小学校、そして、女学校へ行って、「斉齊哈爾は、最高だ。」と思っておりましたけれど、「日本が負けた。」という報が出るや否や、日の丸の旗は降ろされ、破られ、暴徒が日本人の家を襲うのを目の当たりにしました。

敗戦直後といえども、内地へいたらそういうことはないでしょうけれど、戦争に負けることによって、私たち一般人が犠牲になります。一人ひとりが、何も悪いことをしていないのに。そして、そういう所で殺された人は、戦死にはなりません。兵隊さんに行った人は、戦死しても、年金がもらえます。でも、そういうところで死んだ人には、何もありません。何人亡くなったという数字は出ておりますけれど、正確な数字ではありません。たくさんの人が、戦争という名のもとで、お国の一言で、日の丸の旗の下で、たくさん犠牲になりました。

そういうなかで、たくさんの人が惨めな思いをしました。特に、若い娘さんは、ロシア兵が来たり、中国人が来たり、韓国人が来たりして、みんな、引っ張って連れて行かれました。私は、女学校の2年生でした。子どもで、おかつば頭

でしたから、娘とは見られず、難を逃れることができました。若いお母さん方は、顔へ墨を塗ったり、頭を坊主にしたり、胸にさらしを巻いたりしていました。そういうふうにして、女であることを隠そうとしました。でも、いくら坊主にしたって、直前まで髪の毛があった頭ですから、頭が青いんです。男の格好をして、いくら胸にさらしを巻いても、女とわかります。

男は、全員、ソ連へ連れて行かれました。戦争というのは、勝つか負けるかです。勝てば官軍、負けたら惨めなものです。国はそこまで考えずに、自分の領土を広げるために、自分たちの利益を得るために、戦うのでしょうかけれど、戦争という国と国の争いで、一番惨めな思いをするのは、子ども、そして、女性、年寄りなんです。

今でも、戦争をしている国があります。私は、他人事には思えません。少しでも役に立つのなら、そういう所へ出て行って、そして、私のできることをしたいと、今でも思っております。

斉齊哈爾という漢字は、難しいです。土地の言葉ですからね。その町は大都市です。日本人の小学校が二校あるんですけども、一校に1200人から1300人の子ども達がいる大規模校です。

それなのに、終戦と同時に一変しました。日本人は、みんな逃げました。逃げて、逃げて、逃げて、そして隠れて、たくさんの人が死にました。

引き揚げてくるといっても、大連(ダイレン)まで、普通だったら半日で出られるのに、一カ月、あるいは、二カ月かかって無蓋車(ムガイシャ)に揺られ、高粱(コウリャン)畑を逃げ歩きました。本当に、「私が何をしたの。」って、言いたいような気持でした。「日本人だというだけで、満人ばかりじゃなく、たくさんの人に痛めつけられなければならないのだろうか。」と悔しい気持ちになりました。それでも、「どんなこ

とがあっても、日本人であるという誇りを失ってはいけない。」という思いを持ち続け、奥歯を噛みしめて帰ってきました。

新京（シンキョウ）まで歩いて、日の丸の旗を見た途端、日本へ帰ったと錯覚して、たくさんの方が命を落としました。日の丸の旗というのは、それくらい頼りにしている国の印（シルシ）だったんです。日の丸の旗がはためているだけで、「はああ、日本に帰った。」と、思い込んでしまう。帰る母国があるというのを頼りに、長い道のりを耐えて歩いてきたんです。

でも、その日の丸の旗を敵視して、日本人と聞くと、暴動が起きました。戦いというのは、そういうものだと思います。「親が憎けりゃ、子が憎い」というように、人間は仲良く暮らしていても、必ず、ちょっとしたことで、憎しみを持つこともあります。それが国と国の争いに発展することもあるんです。それが、戦争なんです。

今、日本は平和です。終戦と言った日は、日本が負けた日なんです。内地にいる人は、負けたといっても、ピンとこなかったでしょう。外地にいる者は、負けたという声を聞いた途端、周りの人たちの態度が変わりました。日本人は、固まって逃げました。たくさんの方が、自決しました。齐齐哈尔というのは、非常に遠いところですから、葫蘆島（コロトウ）に出るまでに時間がかかり、とても日本に帰られない。たくさん、たくさんの方が死んでいきました。

日本人が自決することを、政府は奨励しました。「辱めを受けたものは、自決しなさい。」と、言われていましたから、女学生は、みんな、足をくくり手をくくり、青酸カリを飲んで、北枕にして死にました。それは、日本人の誇りだと思いました。

私は、両親がなんとかかばいながら、日本へ連れて帰ってきてくれたおかげで、福山の地で、こうして生きてこられました。でも、いまだに、

あの暴動を受けた時の恐ろしい情景を、夢に見ることがあります。そして、うちの町内から、「引揚げ者のつぶやきを書いてくれ。」という依頼を受け、書きだした時には、本当に反吐（へド）が出そうな思いがしました。思い出したくないことを、書かなければいけない。そのものズバリを書いても、読む人にはわかってもらえない。だから、言いたくない。夫にも、子どもにも、家族の誰にも、引き揚げてくるまでの苦しみを、一度も話したことはありません。

話しても、わかってもらうのは難しいし、経験のない人は、「そんなことが、あるわけない。」と思います。でも、非常時ですから、命をかけるような、とんでもないことが起きるのです。外地では、日本の敗戦の声を聞いた途端から、日本人は犯罪者扱いです。道を歩いているだけで、殴られるし、石を投げられる。本当に、侮辱の毎日でした。あれほど親しかった満人や朝鮮人が、態度をコロッと変える。日本人と仲よくしたら、自分たちが大変な目に合うからでしょう。

私は、満州から引き揚げてきて、「引揚者」とわかると、内地の人からこんな言葉をかけられました。「財産があって、豊かな生活をしとっても、大貧乏たれが、裸一貫で戻ってきたんじゃない。」

戦争を起こして、国は、いったい何を得たのでしょうか。戦争だけは、なくなってほしいと思います。

長くなりました。ありがとうございました。

司会

北村さん、ありがとうございました。

お話になったなかで印象深かったことを、少し、こちらから伺ってみたいと思います。

齐齐哈尔というところは、日本人を対象に商店などもあり、技術者や軍人の幹部たちも住んでいたということで、大きくてにぎやかな街だったようです。そこに、日本人の小学校が二校

あったということで、小学生時代の思い出などを、ちょっとお話していただけますか。

北村富喜子さん

外地での日本人は、そこへ行かせてもらっている日本人ですから、日本人小学校がありました。満人小学校はもちろんありますが、白系ロシア人がたくさんおりましたから、ロシア人小学校、朝鮮人小学校、そして、蒙古人小学校という5種類の小学校がありました。そういうふうにかくさんの民族がいるんです。イタリア人やフランス人もおりましたし、国際色豊かな街でした。

日本人学校の先生は、いつも「日本人の道徳心は、素晴らしい。」と、言っていましたし、外地ということもあり、子どもなりにプライドを持って、日本人であることを意識していました。

小学校では、他民族の五校が合同で運動会をしたり、子ども同士の交流もあって、とても楽しかったです。学校対抗リレーは、本当に白熱しました。

司会

五校が合同で運動会をしたり、戦前・戦時下であっても、外地でいろんな民族との交流があったということですね。日本の敗戦によって、外地に住む日本人が、どんな状態に置かれたかをお話していただきました。

北村さん、ありがとうございます。

皿海久治さんのご紹介をさせていただきます。皿海さんは、昭和4年のお生まれで、現在88歳でいらっしゃいます。戦後、ラジオ店にお勤めの後、独立して電気店を経営し、今日に至っていらっしゃいます。

昭和19年、尋常高等小学校を卒業後、すぐに満蒙開拓青少年義勇軍訓練所に入所され、夢を抱いて、満州に渡られました。桑田健一さん

を中隊長とする第一中隊に所属。満州最北端での3カ年の訓練途中で終戦を迎え、昭和21年6月中国を出て、7月初め福山に帰国されました。

帰国後、中隊の生存者と連絡を取りながら、仲間をまとめ、「拓友会」を組織し、50年近く会長を務められました。この会は、4年ほど前に、会員が高齢であることを理由に、解散の運びとなりました。昭和48年3月、護国神社の中にある慰霊碑を建立。平成3年8月、中国訪問の旅を企画。平成6年3月、中隊の記念集制作・発行と、隊員の思いを悔いのないよう、形にしてられました。

本日は、満蒙開拓青少年義勇軍として、戦争末期の中国での生活や、終戦後の中隊の様子をお話していただきます。

なお、時間が限られますので、ご本人のご希望により、こちらで用意した質問にお答えいただく形を取らせていただきます。よろしくお願い致します。

では、項目を少し分けて、質問致します。まず、満蒙開拓青少年義勇軍に入隊されたのは、どうしてでしょうか。入隊された経緯をお話ください。

皿海久治さん

昭和19年3月というても、実際には、2月29日なんです。閏年（ウルウドシ）でね。満蒙開拓青少年義勇軍訓練所、いわゆる内原訓練所は、当時の茨城県東茨城郡、現在の水戸市にありました。

入隊の動機というのは、当時、私たち少年は、軍隊に志願兵として行くことを望んでおったんですよ。ところが、私は当時チビで、身長が155センチないといけんのに、153センチで2センチ足りなかったんです。志願兵として、志願はできないわけです。でも、義勇軍なら、国の第一線で、国防を担う少年兵として活躍で

きると思ったんです。

満州は、当時、日本の最前線だったんですね。ご存知のように、今は、ロシアといいますけど、当時はソビエト連邦、中国の東北部を満州といっておったんです。「少年兵として、第一線に出られる。」ということ胸に、私は、満蒙開拓青少年義勇軍を志願しました。

福山を出たのが、昭和19年の2月29日。3月の卒業前です。卒業式をしないままだったんですよ。満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所に、基礎訓練のため入所しました。

司会

それ以外にも、ご家庭のご事情があったと伺っていますが。

皿海久治さん

私は、八人兄弟でした。貧乏な生活でした。八人兄弟のうち、一番上は兄、次男が私です。その間に、五人、女の子がいました。今は、女性が仕事をされるのが当たり前で、お金にもなります。当時は、一番上の兄が僧侶で大阪におりましたので、その関係で、私の姉たちは、お寺の女中として奉公しました。女中奉公では、家にお金を入れる事はできません。稼ぎとしては、一銭にもなりませんよね。それで、次男の私が、志願して満州に行って、国の最前線で3年間訓練を終えれば、10町歩の土地を国からもらえるということだったので、それじゃったら、親父やお袋を養えると考えました。それで、私は、志願した次第です。



司会

希望を抱かれ、そして、ご家庭のご事情も汲んで、訓練所へ入所されたわけですね。

女中奉公ということで、ちょっと気になった方もあったと思いますが、当時の女性の置かれた立場はそういう状況だったということです。奉公に行かれる方が多かった時代ですので、その辺はお汲み取りください。

今お話になった茨城県の水戸の近くにある内原訓練所というのが、最初、入所された訓練所ということで、そこに2カ月と10日ぐらいいらっしゃったそうですが、そこでは、どんな生活をされていたか。

皿海久治さん

義勇軍ですから、もちろん軍事教練はしました、当然ね。

しかし、目的の一つは開拓ですからね。だから、開墾鋤(カイコングワ)を持って、新しい農地を作る開墾の仕事です。それから、生活せにゃあならんので、炊事班とか、医療班とか、それからいろいろあるんですが、日常生活ができるように分担して、その仕事を皆なろう(習っ)たんです。

私は、内原訓練所では灸療(キュウリョウ)特技生として、按摩、あるいは、お灸をする訓練をしました。現地では、医療施設がないし医者がないんで、現地で役立つように、満州へ行く前にそういうことを勉強しました。

司会

その訓練の後、昭和19年5月に満州に移動されたそうです。孫呉(ソング)訓練所というのが、満州とソ連国境にございます。そちらに、入所されているのですが、その場所はどんなところでしたか。気候や風土などをお話ください。

皿海久治さん

当時は、満州国黒河省（コクガシヨウ）孫呉（ソンゴ）といました。そこは、今の中国東北部、満州では一番北の端で、ソ連との国境地帯なんです。しかも、私たちがおった所は、高原地帯で、ソ連との国境は、距離にして、まあ1キロか2キロぐらい。黒龍江（コクリュウコウ）という大きな川があって、その北がソ連です。そういう国境地帯におりましたので、冬は、気温がマイナス50度。でも、夏は暑くて、あれでも30度ぐらいになったかな。

孫呉に着いたのが、昭和19年5月24日でした。夏になると、草も伸びるのが、すごく早いですよ。どんどん伸びる。そういうところで生活しておったんです。

司会

訓練は、孫呉訓練所で3年。その訓練が終わったら、10町歩の田畑をあげるという約束で行ったわけです。ですが、1年ぐらい経った時点で、中隊が245名ぐらいいらっしまったそうですけれども、バラバラにいろんな工場へ作業に行かれています。

満蒙開拓青少年義勇軍は、軍隊と同じ組織形態をとっていたようで、大隊・中隊・小隊に分かれたそうです。第一中隊長が、桑田健一さんという中隊長さんだったので、桑田中隊と呼んでいたそうですが、桑田中隊の組織を簡単にお話してください。

皿海久治さん

今、お話があったように、孫呉訓練所は6中隊あったんですが、この組織は軍隊と全く一緒です。義勇隊は、6中隊あって、3年間訓練するようになっているんです。私たちは初年次、1年生。それから、2年生、3年生がおりました。3年間を終えたら、実際に、開拓各地へ分けて、村巡業するような組織だったんです。私たちは、昭和19年に現地に行ったんですが、

ところが、1年して、やっと2年になろうかいう時に、終戦になつとるわけなんです。よ。

中隊の中は、だいたい220名だったんです。5個小隊を作って、一個小隊が50名ぐらいで、各作業、農作業をしたり、軍事教練を受けました。冬は、路面が凍っていますが、1メートルぐらいの側溝があって、凍っているその上を歩いて渡ったり、そういう軍事教練を冬でもしました。夏は夏で、農耕が主ですから、その合間に軍事教練をしました。結局、夏は軍事教練をしますが、農作業に重点を置いていました。

司会

そういう組織だったようなので、ほぼ軍隊と同じだったという状況ですけれども、入所されて、一年後、中隊がそれぞれ分かれて、勤労挺身隊として、哈爾濱（ハルピン）や撫順（ブジュン）、そういった所に行き、孫呉訓練所に残留された方が33名ぐらいいらっしまったそうです。

皿海さんは、撫順に150名ぐらいで行かれたと伺っていますので、行かれた所での仕事内容などをお話してください。

皿海久治さん

昭和19年の私たちの中隊は、養蜂などいろんな作業を分担していました。

「150名、撫順炭鉱へ行く。」と、関東軍（満州に駐屯していた陸軍部隊。関東とは、万里の長城の東端とされた山海関の東側、つまり満州全体を意味する。）から命令が出ました。なぜ撫順炭鉱へ行ったかということになりますが、中国人労働者がいなくなったんですよ。あの時分になったら、もう日本が負けそうだとわかるんか、炭坑が攻撃された時のことを考えて、命が惜しいから仕事をしなくなる。その代わりに働く人間が必要でした。

そんなことは、私たちは、全く知りませんで

した。撫順に行ってから、後で知ったんです。

第一、「日本が負ける。」ということなど、考えたこともなかった。東京に大空襲があったことも、6月頃まで、全然、知らなかった。ラジオもあったんですが、戦況を全く知りませんでした。

関東軍の命令ということで、昭和20年7月20日、150名が撫順へ行ったんです。労働者がいないから、石炭の生産が思うようにできない。撫順いうのは、当時、日本にある電車と同じ電気機関車があったんです。撫順には、電気が通っていた。石炭を焚いて発電しとったんじゃないと思うんです。それで、石炭の採掘にも、それに必要な機械類の補修も必要で、それで、私たちが派遣になったんですよ。後から、それを知ったんです。そうこうしているうちに、終戦を迎えました。

司会

勤労挺身隊として派遣された会社の正式な名称は、「満鉄撫順炭鉱機械製作所」という会社です。石炭を掘るための機械やそれを修理する工具をつくったり、修理していたようです。皿海さんたちも、ヤスリを研いだり、機械を作るための勉強をした段階で、実働しないうちに終戦を迎えられたということでした。

ここに、150名の方が、孫呉訓練所から派遣されていたわけです。中隊は地域の義勇軍ですから、ほぼ備後地区の方ばかりですけれども、その150名の中の一人の方が、終戦の玉音放送を聞いて、みんなにお話になったそうですが、中隊の仲間は、みんな信じなかったそうです。

150名の方が帰国されるまでの間、約1年近くあるんですけれども、その間に、もう、義勇軍自体は解散状態になりました。終戦後日本へ帰国されるまでの間、その撫順でどのような生活をされたか、お話しください。

皿海久治さん

私たちは、『孫呉に陽は落ちて』という中隊の記念誌を出しました。私が提案したら、みんなが、賛成してくれて、こういう本を発行しました。これは国会図書館、それから、各自治体の図書館へ贈りました。ドイツの国会図書館からも、「一冊送ってもらえないか。」ということで、ドイツの国会図書館まで送っております。

内容は、中隊の戦時中の動向や中国訪問記などの他に、各隊員の思い出や、生死、本籍や現住所・家族構成など個人情報の部分が多いんです。個人情報を見ていただくのは、今は難しいですわね。だから、今は一般公開できませんが、こういう本を作ったということだけをご紹介します。かなり、お金がかかったんですけれど、中隊の仲間の協力でできたんです。

話がそれましたが、その中に、隊員各自の終戦後帰国までの生活が、簡単に書いてあります。

私たち150名は、終戦と同時に、各地の寮を転々とする羽目になりました。3回ぐらい替わりました。

そして、昭和20年の9月頃にはね、食べる物がありませんよ。終戦直後はね、関東軍の放出品があるから、缶詰を20個も30個も、もらいました。砂糖も、ジョッキ一杯分ぐらいいただいたんですが、さあ、そのあとがない。9月の下旬、10月、もう何もなくてね。

どうしたかいうたら、隊員は、背に腹は代えられないので、子どもなりに考えました。中国に軍隊が全て置かれたんで、軍の物資のうち、軍服等の衣服が保管されていたんです。中隊の仲間は、その衣類の警備に立ちました。その勤務に就いた者が、帰る時に保管されている衣服を自分で着るんですよ。2枚も3枚も。4枚でも5枚でも着る者がおったそうです。それを着て帰って、その服を、中国人に、每晚、每晚、売るんです。そうして、生活をしとったんですよ。

私は、それはしませんでした。私は、炭鉱本部の小使いに指名されて、毎日もう一人の隊員と一緒に、本部勤務でした。私たちも、ソ連兵の監督官の助手をしてただけで、食うものはなかった。本部にはソ連の兵隊が管理のために来ていて、そのウクライナの方から来とった白人の兵隊は、15歳や16歳の少年から見れば、おじいさんに見えた。その監督官付きの番兵が、トイレに行くんか、どこへ行くんか知らんけど、時々おらんようになるんです。

その部屋には、日本軍から没収した飯盒（ハンゴウ）が20個ぐらいあって、砂糖や煙草などを山積みにしとるんですよ。一つ取ってもわかりゃあせん。

その建物の下には、中国の保安隊がおりました。中国では、みな大きな釜でご飯を炊いていました。その兵隊に、中国語で「マイマイ（取引する）。」と言って、失敬した煙草や砂糖と白米を交換するんです。中国兵は、喜んで交換してくれました。

寮はスチームが通ってるんですよ。ところが、スチームが通っていても使えるわけじゃあない。ましてや、煮炊きができるわけじゃあない。蒸気のコックがあって、それを開いて、蒸気で飯を炊きました。そうやって、私ももう一人の隊員は、命を繋ぎました。他の隊員は、軍隊が引き揚げたあとの保管衣類を売ったり物々交換して、それで生活していました。一番、苦しい時が、昭和20年の9月、10月いっぱいでしたね。

その後は、「脱走」と言っていました。食べる物がなくて、仲間が、次から次へ、夜中に寮を抜けて、食べさせてくれる中国人の家庭や店へ行きました。そこへ行けば、子どもですから、同情して食べさせてくれる。働いても、給金を払わなくても、文句ひとつ言わない。子どもだから、食べさせてもらえれば、どこでもいいんですよ。だから、中国人の家庭に行く人が多か

ったです。食堂や薬局や、なかには、農家の働き手として行った者もありました。150人いたのに、寮に残った者が、ちょうど75人。半分しかいなかった。衰弱して、亡くなった隊員もいました。私は、その75人の一人として残っていて、戦後引き揚げるまで、元の中隊に所属していました。

司会

今、ソ連の管理下にあった日本軍の軍事物資を拝借して、それを中国の方に売って生きてこられたというふうにお話をされました。軍の放出品をもらえたのは、最初だけだったということも伺いました。軍服などの番をしている間に、たくさん着て、外に出て脱いで、それを売りに行くというようなことをする隊員もいて、一番苦しかった昭和20年の9月、10月を乗り切られたということですね。

引揚げ船が出ると決まっても、150名中約半数は、一緒に日本には帰れなかったそうです。今お話になったように、その方たちは、生きていくために義勇軍から脱走して、中国人の商店や飲食店の小間使いをしたり、農家の手伝いをして、食べさせてもらい、中国の方のお世話になって何とか生きのびられたわけです。その方たちも、その後引き揚げの情報が入って、皿海さんたちより後の便で、帰国されたというふうに聞いております。

多くの仲間が栄養失調で亡くなったり、孫呉訓練所に残留された方は、そのままシベリアに連行されたり、殺されたりされたというふうに聞いています。

ですが、皿海さんは、無事に帰って来られて、拓友会を組織して、会長を長くお務めでした。その頑張れたエネルギーというのは、どういったところから湧いていたんでしょうか。

拓友会の会長さんを50年近くされるのにあたって、その心を支えていたものは、どういっ

た思いでいらっしやいましたか。

皿海久治さん

私は、現地では、中隊の主計を担当していました。その関係上、中隊の人員を全員掌握していました。当時は、名前も手書きでしょ。ことあるごとに、隊員の名前を書いていた。だから、すぐ覚えるんですよ。

中隊長よりは、私のほうが、人員の名前や動向をよく知っていたので、帰ってから中隊の世話をするようになったんです。中隊長が、帰国してすぐ、中隊のことを全部県へ報告するんですが、報告も手伝っていました。そういうご縁もあって、拓友会の世話をしていたようなわけです。

司会

私も、驚きましたが、皿海さんは、中隊のメンバーの名前を、フルネームで覚えていらっしやるんです。中隊長や幹部にお付きになって、常に、名前を書いたり、経理に関わるいろんな集計をしたり、役割分担の割り振り表を書いたりして、全員のお名前を覚えてらっしやったということで、拓友会の会長をしたんだと、ご本人はおっしゃってますけれども、50年も続けられるのは、普通できることではないので、「どういう気持ちで続けてこられたんですか。」とお聞きしました。

「〈生きて帰った仲間の団結〉と〈無念に亡くなった仲間たちの慰霊〉、そして、〈生かしてくださった中国の人たちへの感謝〉。この三つが、自分の支えで、ずっとやってこられました。」と、話してくださいました。今、謙遜に、「隊員の名前を、全員覚えていたからです。」と、おっしゃいましたけど、「団結・慰霊・感謝」という、そういう強い思いがあって、ここまでやってこられたというふうに、お話を伺ってます。

皿海さん、どうも、ありがとうございました。

【講師】

北村 富喜子 (キタムラ フキコ)

昭和7年生まれ

終戦時 女学校2年生 13歳

15年間満州で生活 終戦後に引揚げ

皿海 久治 (サラガイ ヒサハル)

昭和4年生まれ

終戦時 16歳

満蒙開拓青少年義勇軍

桑田中隊拓友会 元会長

満州国地図



証言者 内田 温恵 (ウチダ ハルエ)

昭和10年生まれ

終戦時 9歳 藺町在住

聴取日 2018年9月27日

○生年月と年齢を教えてください。

昭和10年10月11日。82歳です。

○8月8日の空襲の頃に住んでおられたのは、どこですか。

藺町 (イマチ)。今は、ない町名ですね。

○藺町 (イマチ) というのは、今の昭和町の辺りですから、ご商売をされている方が多かった地域ですが、内田さんのご実家はどうか。

酒の販売をしていました。

○当時の家族構成を教えてください。

祖母と父と母、姉が二人に兄が二人と私、姉の子ども。その頃、上の姉は結婚してたんだけど、義兄が出征してたから、実家へ姪を連れて帰ってたんです。姪は、まだ1歳半ぐらいだったかな。

○お姉さまのご主人は、戦後、ご無事でお帰りになられたんですか。

はい。帰って来て、長寿を全うしました。その代わりに、姉が昭和35年に、38歳で亡くなりました。

母も、早くに亡くなったけど、戦時中、戦後と、結核でずっと寝てました。

○それは、いつ頃からですか。

昭和16年頃は、多少、立って歩いてたかな。だんだん、ひどくなって、寝たきりのようになって、もう、終戦の時には、ずっと寝てました。その頃は、時々血を吐いて、私はそれを見るのが辛かった。もう何年か後なら、ペニシリンで

治療できたでしょうに、戦時中だからどうしようもなかった。

○物心ついた頃から、お母さんは、もうずっとご病気でしたか。

はい。だから私は、母親に可愛がってもらったという記憶が、あまりない。

それなのに、姉の子が初孫なので、その子のことは、ものすごく可愛がるわけ。物が手に入らない時に、たまに珍しいものが入ってくるでしょ。そうすると、姉の子にやるわけね。私は、お母さんの子なのに、もらえない。もう、それがものすごく嫌でね。やきもちというのか、甘えたかったんですね。

○ご兄弟は、何人でしたか。

6人。もう一人兄がいたんだけど、その時には、兵隊に行ってたんです。だから、6人兄弟。

○ご兄弟は、結構、年が離れているんですね。

そうそう。だから、結婚している上の姉とは、14歳ぐらい離れている。その次の兵隊に行った長男が、ちょうど12歳違う。その次の下の姉が10歳違う。

10歳違いの姉は、終戦時に19歳ぐらいだから、まだ結婚してなかったです。一番、心に残っていることは、母が亡くなった後、姉が着る物を縫ってくれた。あの頃、肌着にしても、何にしても、なんでも店に売ってるわけじゃないから、洋裁の上手い姉が作ってくれました。いろいろ、面倒を見てくれて、本当によくしてくれたから、感謝しています。

次男は、私より8歳上で、三男が、3歳上。男と女が3人ずつの6人兄弟。

母は、私を産む時に、相当体が悪くて、私は「八月子 (ヤツキゴ)」いうのかな、早く生まれたようです。

○内田さんの知らないところで、お母さまは、大変なご苦労があったかもしれない。未熟児で生まれたから、子育ても大変だったでしょうね。

そうそう。大変だったという話じゃけど、私には、「子どもを一人、女学校へ行かせるぐらいのお金がかかった。」と、親から言われたことがあったね。粉ミルクがない時代だから、高い粉ミルクを手に入れるために、なんかすごくお金がかかった子なんじゃそうです。

○お母さまが亡くなられ、その後は、お姉さまがお母さま代わりだったんですね。

そうそう。戦後もすぐには嫁に行かずに、家族の世話をしてくれてたね。姉は25、26歳で結婚した。私が高校へ行ってたから、26歳かね。25、26歳というたら、あの頃では結婚が遅いよね。すぐ上の兄も大学へ入って、それぐらいまで家にいてくれたね。

○お父さまは、お姉さまがいらしたから助かったでしょうね。

そう。おばあさんは、可愛がってはくれるんだけど、家事はしない人だったから。食事を作るとか、洗濯をする姿は、あまり見たことがなかった。

○じゃあ、お母さまは、お体が弱いのに、無理をされてたかもしれませんね。

そうじゃろうね。子どもは次から次に生まれるし、大変だったんじゃろうね。

体が弱っていたから、結核にかかったんでしょうけど、その頃の私は、考えが及ばず、可愛がってもらいたい一心だったね。それに、確かに結核だから、母にすれば、子どもにうつらんように気にしてくれてたかもしれんね。

○お母さまは、何歳ぐらいで亡くなられたんですか。

48歳。私が小学校の6年の時だから、昭和22年。戦後は、もうかなり弱って、全然動けんから、姉はもちろん、私も母の下（シモ）の世話をしてたよね。

樹徳小学校の隣に、おばあさんの弟の家があって、本通りの家からそこまで、母をリヤカーに乗せて、兄弟で手分けして、お風呂に入れるために連れて行ってました。空襲で家が焼けて、戦後風呂がなかったから。

それから、母のことで、よく覚えているのは、母親に飲ませる牛の乳をもらいに、昔の引野の小学校の近くへ、瓶を持って歩いて行ったことかな。それも、暑い時じゃった。滋養をつけにゃあいけんけえね。半日は、十分かかったように思う。遠いでしょ。今は国道があるから、スーッと行けるけど、当時は、道があっちへ曲がり、こっちへ曲がり、すごく遠かった。グルグル回って歩いて行くんだけど、不思議と、道をよく覚えてた。今は、どういうふう歩いて行ったんか覚えてないけどね。牛乳をもらいに行くのも、自分としては、母親のためじゃからと思って行ってたけれど、子どもだから、ちょっと辛い、しんどい仕事ではあったね。戦後だったけど。

それでも、子どもじゃから、近所の子と、よく時間を見つけては遊んでた。

私は、空襲で家が焼けたでしょ。焼けてから、母親の実家の手城（当時、福山市手城村）へ疎開して、最初手城小学校へ通ってた。それから、元の焼け跡へ、家を建てて戻って来たんだけど、家といっても、なんか屋根があって、壁があるだけのような家でしたね。雨が降ったら、あっちこっち物を受けとかんと、雨漏りするような、本当に粗末な家だったけど。

○家は、すぐに建てられたんですか。

まあ、すぐでもないけど。

焼けるまでは、南小学校に通っていて、空襲

が夏休み中だったでしょ。夏休みになる前に、グラウンドを掘り返してさつま芋を植えたんですよ。グラウンドを掘り返して植えたさつま芋じゃから、そんな立派に育つわけではない。けども、粗末なさつま芋を収穫して、焼け跡の家に持ってきてくださったの。

○南小学校は焼けたのに、さつま芋は、生き残っていたんですか。

ええ。とにかく、もう細いさつま芋。土も硬いし、肥料もないんだから。味もまずいし。

○先生や生徒が、生徒のいる場所を確認して、連絡を取って、さつま芋を配られたんですね。

そうじゃろうね。それは、覚えとる。うれしかった。

○戦時中は、お酒屋さんの商売の方は、成り立ってましたか。

そういうことは、全然、わからない。店は、開けてたけどね。

○陸軍歩兵第四十一連隊に近いから、そこへ、お酒を納めておられましたか。

あそこへ、お酒を納めるということはなかったと思います。近所に納めていただけでしょう。

○配給制になると、だんだん、売るのがなくなってきていたと思うのですが、お客さんも来られ、商売もできていたんでしょうか。

あんまり、商売にはならなかったけど、酒以外に、醤油とか酢とかいうものも売ってたからね。配給のことも、どうだったか、子どもの私は、聞いてないね。

○家族が多いので、生活も大変だったでしょうね。どのように、暮らしのやりくりをしておられたのでしょうか。

それがねえ、もともとは、何年ぐらいまでか知らないけどね、藺町でお酒を造ってた。そのお酒を造るのに米がいるでしょ。川口（当時、福山市川口村）に田んぼを持っていて、酒米を作る田んぼを、小作に出してたわけ。だから、お米を収穫したら、うちへ俵で積んであったのを見たことはあるんだけど。だから、たぶん酒米を作らなくなっても、米はあったんでしょね。白米ばかりじゃあなかったけど、食べる物がなかったという記憶はないね。

ただ、戦後、農地改革で取られたでしょ。で、農地はなくなってしまったけどね。

○代々、お酒屋さんだったのですか。

いえいえ、父の代に、お酒を造り始めた。それも、もとは川口へ住んでたんです。父が、川口から本通りへ出てきて、わりと土地は広がったんで、そこでお酒を造って販売し始めた。

私の上の兄たちが、お酒を造るのに、麴を混ぜるとか、いろんな過程を手伝わされてた。姉も手伝ってたけど、私は小さかったから、全くしてないね。

○お酒を造って販売するのが、商売の始まりで、おばあさまもお父さまも、元々は農家の出身だったのですか。

そうそう。

○そのような状態で、戦時中も暮らしていらして、突然、空襲に遭った日は、ご家族が多いのに、みなさんどうやって、逃げられたんですか。

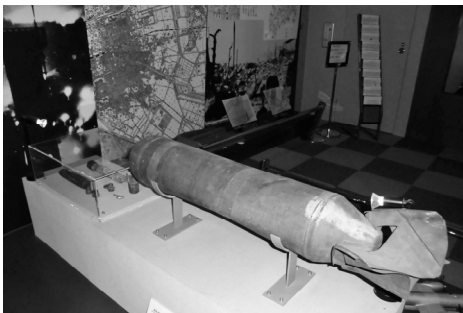
昭和20年7月に、米軍から空襲の予告のビラが撒かれて、そのビラを、二人の兄が拾って来たんよ。

あの当時、二人とも誠之館中学に行ってた。それで、家には危ないからと、祖母と、二人の姉と姪と私は、手城の千間土手（センゲンドテ）という所に畑があって、そこへ行くこと

になったの。父が、畑を作るための道具を置く掘り立て小屋を建ててたんだけど、その農機具置き場へ、私たちは、風呂に入って夕食を済ませて、毎晩泊まりに行くわけ。当時、2歳の姪を、二番目の姉が自転車の荷台に乗せて連れて行ってた。一番上の姉は、疎開させるために、荷物を少しづつリヤカーに乗せて運んでました。一番上の兄は出征していたから、ビラが撒かれてから、夜は藪町の家には、父と母と兄たち二人が残ってました。

8月8日夜の空襲が始まって、市内が火の海になったのを、私たちは手城の方から見てました。今はもうないけど、畑の道を隔てて、川があったんですよ。冬の布団をかぶって、空襲が終わるまで、3時間か4時間しゃがんで、ずっとその川の中にいたんです。もちろん、腰までつかって。

もう、ドンドン、ドンドン、焼夷弾が落ちてくるからね。あれは、ほんとに運じゃねえ。本当に、運がよかった。それが、やたらと落ちてくるからね。あっちへポツン、こっちへポツンと落ちたとか、というんじゃなくて、畑の中にいっぱい落ちてたからね。焼夷弾が、川の中の自分らの布団の上に落ちてこなかったのは、本当に運が良かったと思うよ。



○同じ場所に逃げてる人は、他にいませんでしたか。

いなかったね。隣の道の向こう側の青山さんっていう家だったかな、その人は、どうされとったんかわからんけど。家は焼け残ってたからね。

○9歳だったのに、きちんと、その時の光景を覚えていらっしゃるんですね。

そうじゃねえ。

畑の中の焼夷弾に、私よりちょっと年上の6年生ぐらいの男の子は、興味があるでしょ。「触ってはいけない。」と言われてても、あれを掘り出して、信管かなんかに当たったんか、「バン！」と爆発して、手をなくした子もいました。

○音が聞こえなくなってから、みなさん、布団を払って川の中から出られたんですか。

うん、そう。音がしなくなったから、「そろそろ大丈夫かな。ああ、もう飛行機は帰ったなあ。」と、思いました。

その時、家の方では、二人の兄が川口の方へ逃げて、母は母で一人で逃げて、一斉に同じ方向と一緒に、っていうんじゃなかった。父は警防団というのがあって、そっちへ行って、町の人に逃げるように触れ回ったり、水をかけたりしてたみたいです。

家族はみんな助かって、夜が明けて、千間土手に集まった。それで、無事を確かめ合うことができたね。

○畑の農機具小屋は、無事だったのですか。

無事だった。でも、日常で使う皿だの、釜だのはないもんね。それ以外の物よね。着物だとか、良い物は、うちだけじゃなしに、母の兄弟の所とか母の実家とか、一カ所でなく、いろんな所へ分けて疎開させてた。だから、いい着物とかは残ってたけど、鍋釜はないよね。

○家族で話し合っ、千間土手に集まるということになってたんですね。

福山市の街からちょっと外れてるんで、「千間土手なら、大丈夫だろう。」ということだね。

さっき話した隣の青山さんという人がね、空襲の後、お見舞いにおにぎりを持って来てくだ

さった。考えてみると、畑では煮炊きはできなかった。

○農機具小屋は、寝に行っただけだから、煮炊きしたことはなかったんですよね。飲み水から、ご飯を食べるのまで、すぐさま困りますよね。

今、言われて思い出した。「じゅうじろうさん」と言うてたんだけど、じゅうじろう神社の先に、水をもらいに行ってた。その場所は、今の国道を岡山の方へ向いてくでしょ、イトーヨーカドーをちょっと行った所の左側に、小高い丘がある。丘とか山とか、その方向にずっと行ったら、寺町の方へ抜けていく道があるね。今は、何とかいうお宮があって、鳥居のあるちょっと高い場所になる。そのお宮をもうちょっと行った所へ水をもらいに行ってた。お宮さんを、私ら子どもは、「じゅうじろうさん」って呼んでたね。

千間土手は、手城の町の端の方になるんよね。私の母親の実家は、手城小学校のすぐそばだったから、わりと真ん中辺だった。結局のところは、もう、その小屋は、煮炊きもできんしね。母親の実家の離れに住まわせてもらうことになったわけ。母の実家は、ギリギリ焼け残った感じだったね。母は、そこで、ずっと寝てた。その離れは、そんなに広くはなかった。その家がね、今でもあるんですよ。農協のちょっと先の所へ。築100年になるかな。

まあ、家族で相談したところで、結局、母親の実家へ行かんと、行くところがないから、そこへ行きました。

でも、「じゅうじろうさん」の先へ、水をもらいに行ってたということは、千間土手の小屋に家族の誰かが残ってたかね・・・。とにかく、あそこまで、水をもらいに行った。兄はどうしよったんか、交代で行ってたんか、記憶にないね。ちょっとした煮炊きは、七輪で何とかして、

しばらく千間土手にいたんかもしれんね。一回だけの水汲みではなかったから、よく覚えているんだから。でも、母が弱るから、早くに手城へ行ったんでしょね。

考えてみたら、家族9人、小さい部屋一部屋へおったんじゃないか。狭いよね。大変じゃけど、夏だったから、ごろ寝でもよかったんじゃないかと思う。

それで、一番上の兄は、一カ月後除隊になり、母親の実家に帰ってきました。その頃、母の結核が進んで、胸に水が溜まって、時々水を抜いてもらった。

それからどのくらいのたったか覚えていないけど、父が兵隊に行っていた時の友だちが、「うちの山に木を切りに来るんなら、家を建てる木をやる。」と言ってくださって、もらって家を建てました。

○お父さまの兵隊時代の友だちというと、日中戦争より前、満州ができた頃に入隊されていたかもしれせんね。内田さんが生まれる前に。

父が兵隊に行ってたという記憶は、私にないから、そうかもわからんね。家を建てる木をやると言われて、父と兄たちの三人でもらいに行った。その木を、座床（ザトコ）っていう所で製材してもらい、母の従兄に家を建ててもらったんよ。母の従兄は、大工さんじゃなくて建具屋さんだったと思う。

その時、福山市の制約で、家の建坪が5坪制限だったので、5坪を二棟建てた。藪町の家は、焼ける前、間口が二軒分あったわけ。それで、二棟建てられたんじゃないかな。一軒はね、お酒を造らなくなってから、うどん屋さんに貸してあったのよ。二軒分の家があったから、二棟建ててもよかったんでしょ。

家は、狭くて、トタン板の屋根だった。10月の終わり頃から、藪町の家で生活し始めたから、家を建てたのはわりと早い方よね。家の外

に水道があって、水道管が立っていて蛇口がついてるだけだった。雨が降っても、傘をさして、外で洗いものしたりで、大変だったね。

その家には、風呂がなかったんよね。それで、樹徳小学校の近くまで、母をリヤカーに乗せて風呂に通ったという話をしたでしょ。私は、その時、小学校の4、5年生ぐらいじゃった。とにかく、最初の冬はとても寒かった。家は、トタン屋根とベニヤ板で、しかも、全部焼けたから、着る物もあまりなかったでしょ。空襲前は、トタンの米櫃（コメビツ）か何かをもらって、千間土手の農機具小屋へ置いて、普段着るような物を入れとった。戦後、それは残ったから、それを着るぐらいで、着る物がなくて、特に冬は困ったね。

だからといって、疎開で大事な着物を親戚に預けてたけど、それを解体して、服に縫いかえたりしてもらった覚えはないね。まず、モンペを作ってもらったことはないよ。

○内田さんは、10歳ぐらいだから、たぶん、もう戦後だし、「簡単服」というような洋服を着ていらしたかもしれませんか。かつて、アメリカから寄付された洋服が、お寺の本堂に置いてあったというお話を聞いたことがあります。

どこでもらったのか知らないけど、とにかく大きな寸法の服をもらったのは、覚えてるわ。すぐく体に合わない、大きな寸法の服だった。私は、自分の事しか覚えてないけど、兄たちも、相当困ったと思うよねえ。

○お兄さまたちは、誠之館中学校が焼け残ったから、すぐ学校に行けたんですか。

ずっと、続けて行ってたね。戦時中は、三菱電機かどこかへ動員で行って、学校には行かない。それに、私も、戦時中は全然勉強をしてない。1年生の時ぐらいは、多少なろう（習っ）たかもしれんけど、その後は、学校へ行っても、

草刈りに行くとか、馬糞拾いに行くとかばかりよ。

馬糞なんかね、本当は汚いっていう感覚があるでしょ。全然汚くない。あれをどれだけ集めるか、その量で競争なんよね。馬が歩きようたら、「今、糞をするか。」とか言って、じっと見て構えてた。ちょっとでも、馬が糞をしたら、すぐ取ろうと思うてね。自分の家に持って帰るんじゃないで、それを学校に集めるんよね。それをするのが、勉強じゃないけど、奉仕活動よね。それから、3年生の秋かな、出征兵士の家へ稲刈りに行ったよ。

○高学年ではないのに、行かれたんですか。

ええ。学校から川口の方に、稲刈りに行ったのは覚えとる。農家に手伝いに行くのが楽しみだったのは、農家で作業を手伝うと、白いご飯が食べられたというのもあるけど、何かしら、おいしくてね。それこそ、味噌汁へ、牛乳が入ってるんよ。それも、家でそんなものを飲んだことがないでしょ。牛乳の入ったお汁っていうのは、そういう手伝いに行った時に、初めて飲ませてもらった。おいしかったわあ、あれ。

○農家の人も、お腹を空かせた子どもたちが手伝いに来るんだから、今日ぐらいは、「晴れの日」のようにしてあげようと思って、精一杯もてなしてくださったのかな。

そうかもわからんね。おいしかったわあ。当時は、どこでも農業をしている家は、牛を飼っとならね。田んぼを鋤（ス）くからね。でも、乳牛じゃあないよね。乳牛も飼っとならね。

でも、そういうふうだから、全然、学校で勉強した記憶ない。終戦になったのが、4年生の時、それから、5年生の時も校舎がないでしょ。だから、東小学校の校舎を借りてたしね。南小学校が建ったところで、1年ぐらい通った

かな。卒業は、南小学校でしたんです。

○一生懸命に勉強して、大学に行かれたのは、何か目的があったのですか。

先生になりたかったからね。

○お家から離れて、遠くの大学に行かれたんですか。

それがね、その時ちょうど、戦後で先生がいない時期だったんです。先生を即席っていうか、早く卒業させて、早く先生にということで、福山に2年課程っていうのが、何年かだけあったんです。そこへ行きました。

それが、まだ、私が受験先を決める時にはなかったから、三原には附属があるから、三原へ行ったらいいということで、行くことにしていました。とにかく、私の時には、女の子が勉強して、大学へ行くなんてとんでもない時代だったからね。まして、下宿してとか、遠くへいうのは、無理だった。とにかく、家から通えるところで、三原ならなんとか通学できるということで、決めました。

それで、三原に行くつもりにしてたら、前年の6月か7月ぐらいに、福山に2年課程ができて、そこへ通えたんです。

○大学名は、正式には何っていうんですか。

広島大学教育学部だったと思うよ。

○校舎は、どこにあったんですか？

緑町。陸軍歩兵第四十一連隊の兵舎の跡。あそこも、いろんな学校が入って、いろいろ入れ替わっているからね。

○卒業後、何の教科の先生になられたんですか。

中学校の音楽。

父の妹が、大牟田という炭鉱の景気の良いところで、呉服屋をやっていたんです。景気が良い

から従業員もたくさんいて、わりと裕福な生活をしてて、オルガンを買ってたの。そのオルガンを疎開させるということで、私の家に何年か置いてあった。そしたら、うちも危ないからということで、またどこか別の所に疎開させたかな。戦後、また戻ってきてたから、オルガンがあったの。だから、小さい時から音楽が大好きだったけど、オルガンがあったから、よけいに好きになった。5坪の家ではなく、その後、建て替えた家に、オルガンが戻ったんよ。

○5坪の家を建てて住んでいたのは、本当に、数年なんですね。

そうですね。

○子どもだったから、お父さまがどのようにお金を工面していらしたのかは、わからないでしょうけど、お父さまは、経済力がおありだったんですね。

親戚の人が、わりとよく、家へお金を借りに来てました。千間土手の土地は、二人の兄が大学に行くのにお金がいるから、結局、売ってしまってた。私らの世話をしてくれた姉はしっかりしてたから、父のことを愚痴ってました。父が、気前が良かったからなのか、お人好しだからか、知らないけど。どんぶり勘定だったんかね。

○でも、子どもさんを学校に行かせるために、一生懸命だったんでしょう。

私の時は、反対された。まして、私らの時には、高校にも行かない人はいっぱいいたからね。でも、誠之館高等学校には大学進学コースがあって、そこへ入ってたから、まわりもみんなそういう人でしょ。だから、当たり前だと思ってた。私の仲の良い友達が、勉強できるのに、「大学に行かない。」と言ったから、「行こう、一緒に。どうして行かんのか。」と言うてね。その時に、私は恵まれてるほうだなと思って。しかも、

音楽で、実技がいるでしょ。それに、困った。オルガンでしか練習してないから。

それで、レッスンを受けに行かせてもらった。姉がどこで探してきてくれたんか、お城の八幡さんの下の焼け残ったところに、大学の先生がおられて、習うことができたの。そしたら、ピアノを習いに行くのに、家での練習はオルガンでしょ。オルガンは、このくらいしか鍵盤がないから、弾けないでしょ。ピアノの練習のために、私は、あっちこっちしなくちゃあいけなくて。誠之館高等学校に行ってたから、受験の時期には、学校へ朝早く自転車で行って、学校のピアノを借りて練習をして、一旦帰って朝ご飯を食べて、また歩いて誠之館に行って授業を受けた。

○どれくらいの期間、教員をされたんですか。

5年。23歳で結婚したけど、結婚した後2年ぐらいは勤めてたの。本当は、続けた方がよかったんだろうけど、私は、母親が病気で、温かい家庭に憧れがあった。だから、結婚したら、子どもが温かさを感じるような家庭を持ちたいと思ってたから、仕事を辞めたのね。子どもが生まれたら、経済的には大変でも、教員は辞めて、子どもの傍にいて自分の手で育てたいと、ずっと願ってた。実家が、商売をしてたでしょ。みんな揃っていても、誰かが店番に行かないといけなくて、それがすごく嫌だった。子ども心に、家族そろって、一緒にご飯を食べたかった。

父は、戦後すぐは、八百屋をしてて、それからぼつぼつお酒の販売を再開したんです。正月元旦でも、店を開ける。「せめて、元旦ぐらい休めばいいのに。」と思ってた。家族みんなが、「やめてくれ。」って言っても、やめないんよ。お客さんが、買いに来るんじゃないかと、「持ってきてくれ。」と言われるから、配達するわけだから。兄たちが、配達してたね。正月は、近い所だけだけど、いつもは遠い。川口のバス通りをずっ

と行った所にあるお大師さんの土手までが、うちの配達範囲だったから。おまけに、一般の家だけじゃなくて、飲み屋さんにもお酒を卸していたから大変でした。「つけ」だから、しまいいは、払ってもらえないこともあったみたい。

○当時としては、お父さまの商売の目の付け所は、画期的ですよ。今は、年中無休もあるけど、当時、正月休まないお店はなかったでしょうから。ご商売の才覚があったんですよ。

そうかね。

○戦中・戦後と商売をなさって、大家族を養い、ご病気のお母さまを医者治療してもらって、家を早くに建て替えられ、子どもみんなに高等教育を受けさせるなんて、普通ではできないですよ。親戚の方も助けて。愚痴も言わずに、一人で頑張っていたんですよ。

そうじゃね。私、父親をそういう見方で見ていなかったね。自分のことばかりで……。感謝せんといけんね。

○お子さんが産まれてから、ずっと、お家にいらっしゃったということは、せっかくの音楽の技術を生かされなかったんですか。

ピアノを教えるようになったね。60歳で辞めたけど。

教員の採用試験には受かって、一年目は中学の音楽教諭の席がなくて、中学には採用されなくて、旭小学校の音楽専科をしていたの。そしたら、途中で、「光小学校へ応援に行ってくれ。」ということで、2~3カ月、光小学校にいたわけね。その時の子どもが、私が結婚して沖野上に住むようになった時に、私を覚えていてくれて、女の子が、どっど家に遊びに来てくれたんよ。うれしかった。その時に、ピアノを弾いたら、その子たちが「習いたい。」と言ってくれて、教えるようになったの。ロコミいうんかな、

人づてに紹介された生徒が増えたね。幼稚園の先生になるのに、受験があるでしょ。一時はね、葦陽高校へ行ってる子がたくさん、次から次へ習いに来てね。受かってくれたから、うれしかった。

家でピアノのレッスンをするなんて、学校を辞めた時には、思わなかった。でも、時代よね。ピアノを習う子が増えた時代だったから。

○お子さんは、何人いらっしゃいますか。

三人。一番上が男の子で、昭和36年生まれ。下二人が女の子。今は、どの子も音楽をしてるわけじゃないけど、子どもそれぞれが、みんな温かい家庭で子どもを育てているから、私は、「何よりだなあ。」と思ってね。

○内田さんの子どもの頃に抱いていたイメージを、お子さん達に伝えることができ、良かったですね。

そうよね。今思うのは、みんなもうちょっと家庭の方に目を向けて子どもを育ててたら、世の中が、もう少し良くなっていたんじゃないかなと、思うよね。

○今日は、本当にありがとうございました。

証言者 岡野 幸江 (オカノ ユキエ)

昭和10年生まれ

終戦時 9歳 道三町在住

聴取日 2018年10月16日

〇お名前と生年月日を教えてください。

岡野幸江です。昭和10年11月21日生まれました。

〇終戦の時は、どちらにいらっしゃいましたか。

道三町です。霞小学校の南側です。

〇当時の家族構成を教えてください。

終戦当時は、父と母と、私が昭和10年生まれで小学校4年、昭和8年生まれの兄と6年生まれの兄、さらに昭和4年生まれの姉と妹の7人家族でした。大正6年生まれの長兄と、昭和元年生まれの次兄もおりましたが、出征していました。父は明治28年、母は31年生まれなので、終戦時は、60歳と57歳でした。

〇お父さまは、どんなお仕事をしていたらっしゃいましたか。

鉄工所をしてました。どんなものを作ってたかという、織機関係の仕事をしていたようです。高屋(タカヤ:当時、岡山県後月郡高屋町)とか井原(イバラ:当時、岡山県後月郡井原町)へ織物会社の得意先があったようです。

〇8月8日の空襲の時のことを教えてください。

姉は涼みに出てましたが、私は寝てたんです。姉の声に驚いて、眼が覚めました。私は頭巾をかぶって、黒い服がいいと思って冬の制服を着て、救急袋を身につけて一人で逃げたんです。家族みんな、バラバラに逃げました。母は残って、下の子をおんぶして、乳母車に日常のものを積んで逃げたようです。父は、消火のため、最後まで残ったようです。

〇どちらの方向に逃げましたか。

子どもだから、人の多いほうへ逃げたんです。芦田川までは行かずに、手前に小さい川がありましたが、そこの土手まで逃げたんです。何ていう川でしたか……。大橋へ出る前に小さい橋があったんですが、その橋の下へみんなが入ったんで、私も入りました。1時間ぐらい入っていましたが、夏の夜なのに、体が冷えて寒かったように思います。

荒神さんのこっち側へ川があるでしょ。あの川のこっち側に畑があったんですが、近所の人々が最初に南瓜(ナンキン:かぼちゃ)畑に入った時に、私も一緒でした。あとで、「藤井さん、藤井さん。」と言っていたら、家族と会えました。それから、明王院へ行ったんです。もう朝でした。ものすごい行列でした。そこでおにぎりの炊き出しがあり、1個ずつもらいました。それから、濡れたものを、そこで乾かしたりしました。

〇ご家族はご無事だったんですか。

全員無事でした。母親は「あんたは、何も持たずに逃げた。」と言うんですが、父親は、「とにかく、家族全員無事だったことがよかった。」と言ってくれました。



〇ご自宅はどうになりましたか。

焼けました。母親のおばあさんの家が駅家(エキヤ:当時、芦品郡駅家村)村の万能倉(マナグラ)にあるんです。おばあさんいうても、私

の祖母の出所（デショ）です。学校の先生をしていた夫婦がおりましたが、私と姉はそこへ行ったんです。行くといっても、本庄（ホンジョウ）まで行っても汽車に乗れないんです。横尾（ヨコオ）まで行っても乗れなくて、神辺（カンナベ）まで歩いて行って、やっと乗れました。8月9日のことです。

12歳の兄は、父親の里の神辺（カンナベ：当時、深安郡神辺町）の湯野（ユノ）というところへ行きました。父と母は、14歳の兄と一緒に家の焼け跡に残って、小屋を建てました。鉄工所だから鉄柱があったんで、鉄柱を立てて、その上に焼けたトタンを乗せて、床は瓦を敷いていた記憶があります。

その頃、夏休みはなかったんですかね。空襲の日は、学校から草戸の土手に、食用の草を取りに行っていたんです。昼間、警戒警報が出て、「学校に帰らんでもいい。」ということで、私たちは、各自家に帰ったんです。当時は、草戸の方の子どもも、みな霞小学校へ通ってました。学校も焼けたので、学校へ置いとったものも、焼けて残ってないです。

○田舎の人は、松ヤニを取りに行っていたようですが。

私らも行きました。草刈りもするんです。「何貫目。」と言って、重さを量ってました。馬のえさにするんですかね。私ら子どもはできんで、親が刈ったものを学校へ持って行きました。松ヤニを取っていた場所は、郷分（ゴウブン：当時、福山市郷分村）辺りだったと思います。

○家族のみなさんは、いつ頃、会うことができたのですか。

姉は、すぐ家に帰ったんです。私は15日の玉音（ギョクオン）放送を聞いていないので、どれくらい万能倉におったか、覚えてないです。

実家の西の方は、焼け残った家があったので、そこから、家の材料や布団、日用品などをもらったりして、助けてもらいました。それに、当分炊き出しがあったんです。また、近くに鋳物工場があって、そこにコークスをたくさん積んでおられたんです。それに火がついて、なかなか消えないんです。その火の回りに、各家の鍋を並べて煮炊きしてましたよ。当分、おにぎりを1個ずつもらってました。おにぎりは、確かではありませんが、大津野（オオツノ：当時、深安郡大津野村）から来てたように思います。どれくらいの間か覚えてないですけど。

○当時はどんなものを食べていましたか。

ほとんど南瓜とか茄子ですよ。さつまいもは、お米の代わりとしての配給でした。

○霞小学校は焼けてしまったので、西小学校へ通学していたんですよね。霞小学校へ戻られたのはいつ頃ですか。

いつ頃でしたかね。霞小の校舎の瓦とか釘とかは、拾ったんですよ。形のあるものは、新しい校舎にも使いました。

そういえば、西小学校の子どもと喧嘩したことがあったね。

印象深かったのは、被災しなかった人からか、他からか、救援物資が来てましたけど、数が少ないから、くじかじゃんけんをして、誰がもらうか決めるんです。ある時、「笠」が当たったんです。雨が降るとそれをかぶって行くんです。それが恰好悪いから、嫌だったですね。靴もクラスに何個か来るんですけど、くじですからね。その後、闇市（ヤミイチ）ができたのでね。私は両親がおったし、お米は神辺の遠縁にあたる所にも買ってもらったりしてましたので、そんなにひもじい経験はしてません。

小屋の次に、6畳と2畳のバラックの家へ入りました。姉は、2000円じゃった言うんで

すが、その価値が分かりません。家族全員で、そこに住んでおりました。

父は、織機の代わりに車の輪を作って、横尾の方へ売りに行っていました。横尾の入口に八百屋があつて、そこでみかんと物々交換したのを覚えています。

○前の鉄工所で、少しずつ、お仕事を再開されたのですか。

二番目の兄が帰ってきたので、ボツボツ仕事を始めたんです。

一番上の兄は、レイテ島（フィリピン中部ビサヤ諸島に位置する島）で戦死しました。海軍で、巡洋艦「最上（モガミ）」に乗って、気象部に所属していたらしいです。呉港に寄港した折には、わずかな時間でも帰宅していたようです。私は、18歳も年が離れているので、あまり覚えていないんです。でも、毎年、呉で慰霊祭があるので、今年も行ってきました。

小屋におる時に、一番上の兄の戦死の公報が入ってきたからね。もちろん、遺骨はないんですよ。そのとき、父が涙を流して泣いていたのを、姉から聞きました。私は、父が泣くのを見たことがないけどね。

○二番目のお兄さまは、どちらへ行かれてたんですか。

アンボン島（インドネシア東部モルッカ諸島に位置する島）とかいうところじゃったと思うんです。

（注）アンボン島は、1942年、日本がオランダ海軍基地を占領し、海軍第三十六航空隊の基地が置かれていた。

○岡野さんは、戦中・戦後を街なかで過ごしていらっしゃいますよね。

父親が、「死ぬ時は、みな一緒。」と言って、疎開とかしませんでしたから。親戚いうても、

濃い所はないので、疎開しようにも行くところがなかったんでしょう。

○二番目のお兄さまとは、いくつ違いですか。

10歳違いです。志願だと思えます。下の兄が帰ってきたことは、母親が「人生の中で、一番うれしかった。」と言ってました。子どもが先立つということは、たとえ戦争であっても、一番辛いことだと思えます。

○戦後、どのような衣服を着ておられましたか。

冬物は、少しだけ疎開させておったんです。親の着物などをほどこいて、服にしておりました。着替えに困るということはなかったです。

食べるものは、厚生団子とかね。あれは覚えてますよ。戦後ありました。厚生団子にお汁が付いていたんです。豆腐が入ってました。他に何もなかったです。

○厚生団子はどこで売っていたんですか。

米やなんかを売ってるところでしたね。当時、「食糧営団」というのが、あったように思います。とうもろこしや油を搾った後の大豆も食べてました。それに、父親が、神辺から米を買って来てました。見つければ、没収されるんですが。

○当時は、どんな遊びをしていましたか。

焼けた瓦を立てておいて、それをボウリングみたいにこかす（倒す）んです。ボールはないから、石を投げてね。縄跳びもしてたかね。

父親とラッキョ電車に乗って、田尻（タジリ：当時、沼隈郡鞆町）まで行っていました。近所の子どもを連れて、アサリを採りに。シジミは芦田川まで採りに行っていました。

今の中央公園に土俵だけこしらえて、相撲が来たんです。先生がおぶって、見せてくれるんです。照国というお相撲さんを見せてもらった

のを、覚えています。小学校の5～6年生の頃だったかな。

○当時の福山駅前の様子を教えてください。

清水凡平さん（1929年～2011年。世羅郡甲山町出身。詩人・作詞家・井伏鱒二文学研究会前代表。）が、新聞に駅前のことを書いた連載記事があるので、参考までに差しあげます。

中学校は増川（広島県増川女子中学校）へ行ったんですが、船町に闇市がたくさんあったのを覚えています。

○戦後、一番辛かったことは何ですか。

親もおるし、電気も点けられる、警報もないのでよう寝られるし、辛いということはなかったですね。

戦後、本も何もなくて、アメリカのノートと鉛筆をもらったのがうれしかったです。やっぱり、いいものがあるなと思いました。だから、何を勉強してたんか、どうやって勉強しようたんかわからんのです。ちゃんとした教科書がないんです。西洋紙二枚ぐらいの大きさの紙に印刷されたものを、各自切って綴じて、一冊の本にしていました。疎開先から帰ってない子もおるし。木陰で、数学を地面に書いてしたようなこともあるね。

私らの先生は、6年生の時、女の先生でしたけれど、「これからは、自分の意見を堂々と言えにゃあいけん。」と言われたんです。国語なんかは、お話を作ってきて、それをみんなの前で発表するんです。そういう勉強をしてました。

中学校からは、普通の教科書で、勉強しました。

今思うと、戦時中、子どもがしっかりしとったんですね。月の初めに、八幡さんで必勝祈願のお参りをするんですが、6年生が朝、下級生を連れて行ってくれたり、学校で警戒警報が出て、家へ帰る時なんかは、朝の登校時の子ども

の人数をしっかりと覚えていて、間違いなく人数がいるか数えて帰ってたと思います。

戦後の学校の事でよく覚えているのは、5年生か6年生の時に、ジュースが出たことです。薄めて飲むんです。パイン味でね。甘いジュースなんて、本当に珍しくて、おいしかったです。支援物資だったんですかね。

○若い方々へ、メッセージをお願いします。

こういう戦争は、体験した人でないとわからないと思いますが、驚くほどの復興を成し遂げたのは、先人の皆さんの努力があつてのことで、並大抵のことではないと思います。

とにかく、若い人には、「世界平和を維持するために、もう少し政治に関心を持って。」と、言いたいです。選挙なんか、投票率が低いでしょ。

○今日は、どうもありがとうございました。

証言者 佐伯 新三 (サイキ シンゾウ)
昭和6年生まれ
終戦時 14歳 深安郡大津野村在住
聴取日 2018年5月16日

○今日は、終戦後の暮らしについてお伺いしたいと思います。お名前と生年月日、家族構成を教えてください。

佐伯新三です。昭和6年7月1日生まれ、7人家族です。父、母、兄が2人で、姉と妹がおりました。

○終戦時は、どちらにお住まいでしたか。

家族は、三吉町 (ミヨシチョウ：当時、福山市三吉町) です。私は、福山地方航空機乗員養成所にいたので、当時の大津野村、今の大門町におりました。



○福山空襲のことで、覚えていらっしゃることをお話しください。

焼夷弾が落ちたとき、二番目の兄が東京から戻っていて、焼夷弾が3発ぐらい落ちたのを全部消したそうです。翌日、私が行って見たら、昼は灰だらけでした。近所の方がたくさん来ていらして、家におられるので、私はすぐに帰りました。

○その時は、ご両親とお兄さまが家にいらしたんですか。

両親と、二番目の兄と、姉と妹ですね。

○一番上のお兄さまは、どこにいらしたんですか。

はっきりと覚えていないんだけど、徴兵検査で北海道へ行っと思ったと思うんです。兄は、病気で、毎年徴兵検査を受けていたから、3回目の徴兵検査で、旭川にいたと思います。

○終戦の時のことを、お話しください。

終戦のときには、渡名喜守定 (トナキシユテイ) 大佐 (沖縄出身で、終戦当時、福山海軍航空隊司令) が、乾パンを一週間分ぐらいくれて、あっさりと、「帰れ。」と言いました。特別な訓示は、覚えていないんです。トップのほうも、それどころじゃないから、ごたごたしてたと思うんです。

○家にお帰りになったのは、いつぐらいでしょうか。

終戦の一週間ぐらい後だったと思います。荷物を福山駅まで送ったと思う。そこで隊員は解散。福山駅も焼けとったから、専用のバスがあった。当時、私の家は焼け残ったので、友だちが二人ぐらい一泊したと思うんです。他の人は列車に乗って帰りました。

聞いた話じゃけど、途中、事故に遭うた人もおるしね。当時、汽車にぶらさがって乗ったんです。終戦後、水野勝成公の墓所近くで、鉄道の近くに住んでおったからね。力尽きて落ちた人を見ました。気の毒に思いました。

○その頃は、汽車のダイヤというのはたくさんあったんですか。

そんなにない。だから、来た汽車に乗るという感じでした。私は、親が大八車で迎えに来てくれたので、友だちと自分の三人分の荷物を積んで帰りました。

○パイロットの養成所ですが、武器は海に捨て

たとか、他のものは近所の人がいらいに来たとか聞いています。ほとんど、当時のものが残っていないんですね。

私が聞いた話では、飛行機も海に捨てたとか。フロート（水上飛行機の降着装置）を外して、そのまま飛行機を海中に沈めたんでしょう。通信機なんかも処分したと思うんです。格納庫にも、備品や拳銃や六分器とか、たくさんあったんですよ。でも、福山は、わりと整然と終戦の整理ができたと聞いています。

○戦後の暮らしということですが、朝鮮戦争ぐらいまでのことをお聞きしたいと思います。養成所では、食料は十分だったとお聞きしていますが、ご実家ではどうだったでしょうか。

困っていました。当時、農家でも困ってました。大豆があるでしょ。大豆ご飯いうのかね、それを食べたり、戦後はかぼちゃとかさつま芋が多かった。かぼちゃはね、焼けた畑のところで、よくできよったんです。

量は、全然足りないです。芋の葉っぱがあるでしょ。あれを食べておられた人が、たくさんいるんじゃないかな。

○焼けた家の人は、疎開して、そこにいらっしゃいませんよね。その家の焼けた跡に、かぼちゃなどを植えるんですね。白米はどうですか。

まず食べられなかったですね。農家でも、「供出」というて出さなければいけなかったんで。でも、農家の人は、いくら自分たちの食べ物確保しておったんだと思います。戦時中は、割り当てで、強制的に供出させていましたが、戦後も、特に米は、統制が続いていたと思います。

戦時中は、金物なんかも供出しろと言ってね。ダイヤのような装飾品も出せと。全部まともに受けている人はいないかもしれないが、窓枠なんかも出してたね。よう知られとるように、お

寺の鐘も供出したからね。

○「コウセイダンゴ」というのは、ご存知でしょうか。さつま芋の葉っぱと茎をゆがいて、糠と混ぜて丸めて団子にして、茹でて食べるものなんですか。

売ってました。戦後すぐ。私は、戦後は駅の方へはあまり行かなかったんですが、駅前で売りようたつと聞いています。駅前の昔の「鳩屋」というデパート辺りだと聞いています。

○佐伯さんご自身は、お食べになったことはないんですか。

食べたけど、おいしくない。塩気は多少あったかもしれんけど、味はなかった。

○「コウセイダンゴ」の字はどう書くんでしょう。厚生労働省の厚生か、昔、「更生自転車」というのがあったらしんですが、リムにチューブではなく藁を巻いて走ったそうですが、その更生か。

字は覚えてないですね。他に食べたものと言えば、焼け残った麦を土鍋で厚焼きにして食べた覚えはあります。軍の精米所の麦は、下のほうは焼けずに残っていたんです。近くの人しか、知らないだろうと思います。

○ご自宅は、水野勝成公のお墓の近くだとおっしゃいましたね。

今は道路になっています。東警察署の通りがあるでしょう。その通りにあったんです。戦後に、区画整理で移転したんです。陸橋の高架道にするので、あそこをまっすぐにするということでね。家を立ち退きました。移動するのに、3日ぐらいかかったかな。

○家をそのまま移動させるんですね。

柱に全部鉄枠組んで縛って、ジャッキで上げ

て、コロで移動していくんです。

○動くものなんですね。

動くもんです。路上で電線だけ引いてもらって、電気をつけた覚えがあります。戦前から、道路にすると聞いてましたが、戦後すぐに区画整理を発表したでしょ。所有面積の7割は確保するけど、あと3割は没ですよ。それで、うちのおやじが「動かん。」と言うて、だいぶ粘っていました。でも、最終的には、「家をそのまま動かしてくれるんなら、移動する。」と言うて、引いてもらったんです。区画整理を戦後すぐに発表したから、福山はどうにかできたんじゃないかな。

○三吉町で、焼け残った家は多かったんですか。

結構、三吉町は残っていましたね。そのあと町名変更したから。次に行ったところは、入船町。だから、うちのおやじは、「昔からの町名を消してしもうた。」と言うて、市会のなかで抗議していましたよ。でも、区画で町名を決めたから仕方がない。あの当時は、私らの家の前が、今でいう国道だったのかな。今は南側にできとるけど、前は、国道が駅の南側から東深津の方まで抜けていた。辻の坂のほうへね。まだ舗装も何もなかったけど。だから、大八車にしても、砂利道を引っ張って行ってました。

○実家へ戻られたのが、14歳の時ですか。

満で言えば、小学校を卒業して2年目だから14歳です。

○終戦後、学校はどうでしたか。

中学校は、前からあったね。新制中学はまだない。養成所の人、だいたい鉄道教習所へ無試験で移ったんです。私は行きませんでした。鉄道は、そんなに好きじゃなかったから。

家は、農業をしなくちゃいけませんでした。

親が年寄りだったんで、手伝いをせにゃいけんなど思っていました。でも、中学校へ行ったらどうかということで、福山工業学校の転入試験を受けたんです。試験は、口頭試問だけでしたけど。

○新制中学は、昭和22年頃ですか。それで、福山工業学校へは何年おられたんですか。

卒業して、新制高校があった。それも、ついでに行きました。その当時、学区編成があったでしょ。だから、みな近くの学校に行きましたね。

○高校を卒業されたのは、18歳ですね。それから、お仕事に就かれたんですか。

いや、学校から推薦で、尾道の工場へ就職するように言われたんです。今でいう三光汽船の系列の会社だったと思います。中国化学機械株式会社とあって、水飴を作っていました。当時芋がたくさんあったでしょ。その芋のでんぷんを使って糖化する。塩酸を加えて高压で、そういうプラントを作りようなんです。そこのプラントを運転するのに、僕がちょっと行ってたんです。二交代制ですから、夜も勤務がありました。疲れて、汽車で大門まで乗り過ごしたこともあります。

九州でも四国でも、さつま芋を作っていました。そういう所にプラントを作って、でんぷんを塩酸糖化して水飴を作るんです。お菓子の原料になるんですよ。

○中国化学機械に入られたのは、昭和何年ごろでしょうか。

昭和25年ではなかったかな。そこへ1年ちょっとおりました。

ストライキをするとね、会社がロックアウトをするんですよ。会社へは入れないわけ。そういう労働争議が厳しくて、もう見通しがないと

思って辞めました。辞めるまでに、ボイラーの免許を取りました。広島大学へ試験を受けに行ったことがありますね。

辞めたあと、「ボイラーの免許を持つとるんなら、来てくれんか。」ということで、尾道の醤油会社に行きました。2カ月くらい行ったかな。それが、厳しかったですよ。僕はボイラー技師で行ったつもりが、塩酸が陶器の瓶に入っていて、それを船から上げにゃあいけんかったんです。昔は、「飛び荷」いうて、天秤で両方へ担いで、船から陸へかけた板の上を通るんですよ。ばた板を歩くのが、土地の人は慣れとったな。あれがいやでね。給料をなんぼもらっても、性に合わんで辞めました。辞めたいうても、行かんようになっただけですけど。

僕は、日本化薬に行きたかったんですが、当時不景気で採用がないんです。高卒を採用してなかったね。就職が難しかったんです。それで、帝人を受けました。同僚で福山工業卒業生三人で大阪に受けに行ったんですが、僕だけ落ちたんです。

あの当時、1年早く卒業した者は、三原じゃったけど入っとるんです。帝人は給料がよかったんです。僕らの会社は、その半分ぐらいじゃったけど。

○当時の帝人の給料は、いくらぐらいですか。

帝人に行きようた人は、「万円」でもらうたね。私ら千円単位じゃけね。6000円ぐらいじゃったかな。

それも給料くれんのんですよ。景気が悪い。親会社は三光汽船じゃったけど、工場長はそこから派遣されとる人じゃけ、本気じゃないわな。

途中、市役所へ入ったのは、おやじが知人に、「息子が遊んでおるので、使うてくれえ。」というて頼んだ。そしたら、「明日から来い。」ということになった。市役所に行き始めたのは、9月だったかな。それも、賃金が日当で、臨時で

すよ。その臨時を5年しました。最初は、衛生課だったね。それから、管理課へ行きました。

○管理課は、何をするとところですか。

復興部というのがあってね。その中なんです。労務でした。失業対策事業をやりました。毎日、300人の日当の賃金を支払わなくちゃいけんかった。

○毎日銀行へ行くんですか。

いや、金庫へね。管理課の中でも、庶務と管財とうちで、三つあったから。Tさんという金庫番がおっちゃった。その人が金を調達して来ました。

○当時、日当はいくらぐらいですか。

よく覚えてないけども、200円までいかない人もいたし、300円ぐらいの人もおりました。

男女差がついとったと思う。僕は嫌でね。商業学校を出とる者は得意でしょうけど、僕は専門外でしょ。毎日そろばんで計算せにゃいけんし。

管理課のときに、国体があったんです。そこで「国体へ出向せえ。」言われて、その担当になりました。国体がすんで、元の仕事にもどってから間なしに、管理課を辞めました。その当時、公会堂というのがあって、庁舎にするためにそこへ移った。その時、課長が、「なんで辞めるんか。喧嘩ばあしょうるけえか。」言うから、「そうじゃないんじゃ、自分の性に向いとらん。」というて。

管理課を辞めたのは、同僚が内部告発してね。僕の名前で投書しとったんです。それで、そこのおやじさんがうちに来て、「お前んところの息子は、ろくなもんじゃない。」というから、「わしはそんな覚えはない。」って言いました。他人が名前をかたって、私の名前で投書しとったんです。内部の抗争ということなのか、係長の次

席ぐらいの人が、投書しとったんです。

○投書の内容はどんなことですか。

失業対策事業で雇っている人に賃金を払うべきなのに、職業紹介所の臨時に雇っている人に賃金を出すんですよ。その人たちは、失業対策とは関係ないわけだから、職業紹介所が対処すべきでしょ。私は、そういうことが行われたことも知らないし、内部告発者でもないのに、警察に呼び出されて始末書を書かされた。そういうことがあったけえ、それで辞めたいなあと思いました。

朝鮮戦争の勃発で、自衛隊を作らにゃいけんということで、その時、僕も自衛隊を受けてね。海田まで受けに行ったんです。「是非来てくれ。」ということでしたが、二番目の兄貴が、「戦争をするのはいけん。」と言うので、やめたんです。

○昭和何年ぐらいでしょう。

昭和28年じゃね。それで、水道の仕事に就いたんです。専門の化学がしたいので、岡山の親戚に言うたら、「地元水道があろう。」と言うて、水道に話をしてくれんたんです。

○臨時採用でしたか。

定員がないから。昭和29年4月1日時点で、水道部職員定数55名、準職員定数55名でした。

○正規の職員になられたのは、いつ頃でしょうか。

昭和31年10月に、ようよう職員になった。当時は、技術員じゃった。その上が技手(ギテ)、またその上が技師。

○終戦から、10年以上かかってますね。

結構、苦労しました。技師になったのが38年6月じゃけえ。その当時、水質試験係の係長

が、技師じゃった。

朝鮮動乱があって、景気が良くなったね。福山の場合は、特に日本鋼管の誘致からよくなったが、その前から工場の誘致には熱心じゃった。製紙会社を誘致したらどうかいうてね。日本鋼管福山製鉄所開設は、昭和40年じゃったけど、実際に稼動しだしたのは、昭和42年頃じゃったね。

○戦後の水道の漏水のことを、お話しいただけますか。

本管に問題がなくっても、各家庭の所で、漏れっぱなしでした。当時、漏水率70パーセント。70パーセントの水が、供給されずに漏れていたんです。

メーターも、あの当時は厳しくなかったからね。「一栓いくら」の定額でね。メーターを付けずに、水道を引いている家庭もあった。だから、メーターが正確になってから、段階的にようけ(たくさん)使う人は、料金も高くなるようになった。

○最初、戦後の食べ物のお話をお聞きしましたが、着るものというのはどうでしたか。

服は、軍服の払い下げが多かったな。学校の先生なんか、それを着てました。女の方は、モンペよね。

○市役所の近くに映画館が三つあったということですが。

今の中国銀行のところへK.O.劇場、そして魚勝のところ、何じゃったか忘れたけど一軒、それから大黒座、日米館。

○美空ひばりが、K.O.劇場で歌を歌ったというのは本当ですか。

僕は聞いていないが、結構、有名な人が来てたよ。それから、映画をよう(よく)観に行っ

たな。

○入場料は、いくらぐらいでしたか。

覚えてないが、そんなに高くなかったよ。学生が行けるぐらいじゃから。その代わり、席がないから立ち見よね。

○娯楽ですが、昭和23年頃、都会ではパチンコが流行ってましたが、福山ではどうでしたか。

ない。戦後は、野球が多かったな。ちょっと広場あれば、人数が足りんでもしたね。学校対抗があった。盈進と誠之館。僕ら、家にカバン投げてから、よう（よく）行きようたけどね。

○野球の道具は。

グローブも皮、ボールも硬球で、バットも木のバット。「オール福山」いうチームが、全国大会へ行きましたから。一番上の兄も出てました。大学で野球をしてたから。三菱球場というのがあって、巨人も来てたよ。当時、別所いうんがおったな、彼らも来てましたね。

それと、私はあまり音楽をしてなかったけど、ドーナツ盤のレコードでクラシック音楽を聴かしてくれる会があって、聴かせてもらってました。当時、市民館の中に、そういう会があったんです。岩井重兵衛さんという中国へ長くおられた方で、その会で、彼の話をよく聞かせてもらいました。今でいう、文化連盟などのルートで入ってくるから、無料だね。

それから夏期講座、あれが印象に残ってるね。

○以前、森戸辰夫先生の話がありましたね。これは、誰でも聞けるんですか。今でいう市民大学みたいなものですか。

毎年あったからね。3回ぐらい聞いた。1年に1回、市民館でね。その当時は、若い人を対象にしていた。当時は、修了証書というのをもらっていたと思うが、市長を含め全員で写真を

撮ってましたね。

(注) 森戸辰夫さんは、明治21年、福山生まれ。学者・社会思想家・教育者・政治家。昭和25年より、13年間初代広島大学学長を務める。



昭和29年度第2回市民大学修了式

○終戦から10年間、ご自身の適性を考えて努力されてきたと思いますが、振り返ってみて、どんなこと思われますか。

もうちょっと、勉強しておけばよかったなあと思います。資格がないと、給料も違うのでね。福山市からも、外国へ研修に行く人もおりましたね。

福山空襲の話になるけど、僕より焼け出された女房のほうが切実でした。当時築切町（ツッキリチョウ）で、疎開したり、建物疎開で家も壊したりしてました。夏休みでも学校があって、家へ帰って空襲に遭うたんです。その日、親が帰らなかったら、死んでいただろうというんです。隣にも同年齢の人がおって、声を掛け合って逃げたんじゃと言います。図書館のところに大きな防空壕があって、「入らしてくれえ。」と言うたら、「もういっぱいです。」と言われて、中へ入らしてもらえなかった。仕様がなから、御門町の田んぼの方へ逃げたそうです。頭へ布団かぶって。あの防空壕へ入ったたら、死んどったというんです。各家へ防空壕があるけど、そんなところに入ったら死んどります。人間には、運命というものがあるんでしょうね。

○奥さんとはいくつ違いですか。

一つ違い。僕らは、恋愛結婚だったんです。親が反対したけえ、もう実家を出にゃいけん。27歳ぐらいだったかな。

○どこでお知り合いに。

夏期講座です。

○奥さんは、もうお仕事をされていたんですか。

天満屋へ行きようたんです。学校は、県女（広島県立福山高等女学校）へ行ってたのを、学区編成で「戸手（広島県立戸手高等学校）へ行け。」と言われて、そこへ行った。戸手（トデ：当時、芦品郡戸手村）まで通うのは、大変ですよ。街なかへおったら配給をもらえるのに、田舎へ行ったばかりにももらえず、不公平じゃ。」と言っていました。

私は三男じゃから、親に「養子に行け。」と言われたんじゃが、「行かん。」と言うて、二番目の兄が養子に行ったんです。養子は、いくら財産があっても、一兵卒と同じですよ。

ずいぶんお話がずれてしまいましたが、戦争でその後の人生が変わるのは、僕たちだけじゃない。みんなそうでした。自分の仕事を振り返っても、けっこう大変だったと思います。

○今日は、長時間ありがとうございました。

証言者 高橋 笑子 (タカハシ エミコ)
昭和13年生まれ
終戦時 6歳 深安郡中条村在住
聴取日 2018年9月27日

○今日は、よろしくお願ひ致します。お名前と生年月日を教えてください。

高橋笑子。昭和13年12月25日生まれです。

○戦後、子ども時代はどんな生活をされていましたか。

終戦の昭和20年は、中条村立中条小学校三谷分校1年生だったね。入学の頃は、学校の窓が障子だったです。終戦後は、教科書は、戦時中姉の使った物で、戦争に関係のある部分は、墨で塗りつぶされてました。分校だったので、男の先生一人で、1年生から3年生まで32人か33人を教えてて、根鞭（ネブチ：紫竹の根の節の多い部分で作った鞭）でぶったり、廊下に立たされたりしました。私も泣きばかりするので、外に立たされて、いつまでも中に入れてもらえんから、そのまま家に帰って、母にも叱られ、牛小屋に入れられたこともありました。

しばらくして、その先生の教育方法が、戦後の教育に合わんかったんでしょう、辞められて、2年生の頃、若い優しい男の先生と女の先生が赴任してこられた。それから、民主的な教育になったように思う。それで、国語なら国語の時間に、自由に「自分は、こう思います。ああ思います。」言いながら、話を進めて、結論を出していくという形よね。社会の時間には、自分らで、「家畜を飼いよってん家を調べてまわろう。」と言うて、村の50軒くらいまわって家畜の数を調べて、表にして発表したりしとったね。わりと、先生に締め付けられるということがなくて、自分らで率先して勉強していました。

学校には、ピアノはないので、女の先生がオ

ルガンを弾いてくれて、歌を歌うのが楽しかったねえ。男の先生は、自分はオルガンを弾けんのに、「しっかり声を出せよ。」と言うて、一生懸命じゃった。ちょうど、あの当時は、川田正子さんの『川田正子全集』という本があったわけ。先生は、それを買って来て、童謡の歌詞を説明してくれて、教えてくれました。みんな、一生懸命うとう（歌っ）て、楽しかったです。いい先生じゃったね。

それから、昔の遠足は、遠くて何キロもある。三谷から山野（当時、深安郡山野村で、現在の福山市山野町）いうたら、結構遠い。発電所のある田原（タバラ）いう所があって、それからまだ向こうに行くんだけど、みんなで歩きながら、男の先生はいろんな民話を聞かせてくださった。自分らの父親は、忙しいから、何もしてくれんでしょう。子どもらは、みんな男の先生と女の先生を、父親、母親のように思うて、話を聞くのが楽しかったです。いまだに、3学年一緒に同窓会をしています。家族みたいに、仲がいいですよ。

ちょうど、私らが生まれた頃が、「産めよ、増やせよ。」って言うてた時期で、同級生が18人もおったの。私たち分校の子どもは、人数も少ないし、仲が良かったから、男の子と同じ遊びをしようたね。「釘立ち」、「にくだん」、「馬乗り」、「かくれんぼ」、「缶けり」。小川で泳いだり、ホタル捕りをしたり、祭りには、遠くまで出かけたりしてた。荒神様や山の神さんの祭りよ。上級生の方が連れてってくれるんじゃけど、10人ぐらいで遠くまで行って、ただ豆をもらっただけよ。煮しめをくれる神社やお堂もあって、豆や煮しめをもらいに行くのが、子どもたちの最高の楽しみじゃったんです。

明治頃は、山を越して向こうに金山（カネヤマ）いうて、金や銀が採れるとこ（所）があったわけ。「間歩（マブ）」いうて、今も残ってるけど、そこから掘る。だから、その辺りの屋号

は、「糶屋（カメヤ）」「金子屋」いうて、今も屋号が残っとるんよ。そんな遠くまで、みんなで行って、一緒に遊びよったね。

4年生になると、4キロ先の本校の中条小学校に通いました。カバンのある者はおらんから、親の縫った手提げカバンで通ってた。人家のない急な曲がりくねった道を、子どもたちは一緒に帰って、途中に溜池が、小さいのと大きいのも二つ、同じところにあつたので、そこでよく泳いで帰ってた。山の頂上のお堂の広場で、男女一緒に「にくだん」をしたり、「鬼ごっこ」をして遊ぶのがとても楽しかった。獣道を尾根伝いに上がって、ビービー（グミの実）をとって食べたりしたね。「スッポン（イタドリ）」と言うんか、私ら「タジンコ」言うもったけど、それも採って食べよった。ずっと遊んで日が暮れるころ、家へ帰るんです。先生に叱られても、親に叱られても、平気だった。

○戦後、お父さまは、いつ頃復員されたんですか。お父さまが復員して帰ってこられてから、生活は変わりましたか。

父親が帰ってきたんが、小学校3年生の時だったかな。父親が帰ってきてからは、山も何十町歩もあるし、工夫して多角経営して、元の裕福な生活に戻ったけど、それまでは、結構大変でした。

戦時中も、おじいさんが心臓が悪いのに、母が病気になったり、男手がないので働いてもらってた男の人が、みな兵隊にとられて、農作業が大変な時もあった。

戦後は、統制下で、警察に引っかかっちゃいけないけえ、ブローカーが来て、野菜でも卵でもいろんなものを買ってくれてたね。家でも、牛2頭、羊3頭、兎2匹、鶏5羽いたから、余ったものをブローカーのおじさんに買ってもらってました。

子どもは、小遣いをもらわんのじゃけえ、収

入いうもんがないでしょ。家の裏に大きな竹藪があつて、そこの竹の皮を開いて乾かして、そのおじさんにこう（買っ）てもろうてた。ブローカーのおじさんは、その竹の皮を肉屋さんへ持って行って、肉の包み紙にするわけ。そういうことやら、飛び飛びでも新聞を十何軒かが取りようから、新聞配達をした。朝刊いうても、晩に配っても誰も怒る者はおらんから、学校から帰って新聞配りして、自分のお金を稼いでた。

○家庭では、どんな手伝いをしていましたか。

子どもでも、家の仕事は、ようしてたよ。水道はないでしょ。井戸があるから、そこから、水を汲み上げて、風呂水入れるのは子どもの仕事。

それと「木の葉なで」って、わかるかな。大きな木小屋があるんじゃけど。木小屋いうたら、木を納めとく小屋よ。冬じゅう風呂を焚く木の枝と木の葉を入れとくわけ。だから、子どもが500メートルくらい歩くけど、山の上から下へ「木の葉なで」いうのをして、木の枝や葉っぱを拾って、籠へ負うて帰って、木小屋いっぱい山のように積むん。枝は枝で、木小屋の外へ積んでな。それが自分ら三人姉妹の仕事じゃったな。親は、木を切って割ったりして、薪を作るでしょ。子どもは、親のそばで、薪を束ねる仕事をしました。

私らが小学校の頃は、「農繁期休み」というのがあつた。田植えや稲刈りなんかの農繁期に、2週間くらい学校を休んで、農業の手伝いするんです。

それから、農繁期ではないけど、田植えの後稲が伸びてきて草が生えたら、田んぼに屈んで草取りをする。子どもでも、父親が兵隊からまだ戻ってこんし、母親も体が丈夫でなかったから、母親と娘三人で、屈んで草を抜きながら、田んぼの向こうまで行くのは、大変な作業でし

た。稲の葉先が体に刺さるし、暑い時じゃけえ背中が焼けるけど、「しんどい。」とは、誰も言わなかった。でも、一番うれしいのは、昼に自分方（カタ）からむすびを持って行って、むすびと漬物だけじゃけど、田んぼのほとりに座って、それを食べるのが、もう、うれしゅうて（うれしくて）、うれしゅうて（うれしくて）、たまらんかった。小川が流れとって、ちょっと石をはぐりゃあ（めくれれば）、エビやらサワガニやらおってね。食べるわけじゃあないよ、それを捕まえたり、水浴びしたりして、楽しかった。

麦踏みもしたし、芋堀りもした。仕事は、しっかりしてました。

○戦後、十分に食べ物はあったんでしょうか。

戦時中は、どこの家も同じように、さつま芋や芋づるを乾燥させて保存したり、イナゴまで食べよった。イナゴは、炒めて醤油をからめて、佃煮にして食べてたね。

戦後すぐは、同じ様な生活よ。10月10日頃、祭りがあるんよ。できたかぼちゃを、その年初めて炊いてくれるんよ。「今日は、かぼちゃが食べられる。」言うて、楽しみじゃったな。醤油も味噌も、自分の家で作っていたので、味付けはそれでしてた。蜂の子、アシナガバチの子を、丸呑みするんは、うれしかったなあ。おいしいんよ。誰かが、「蜂の子は、おいしい。」って言うじゃろ、みんな真似して食べるようになるが。それから、田んぼの中に、タニシとかおるけえ、それを捕ってみそ汁に入れたりして、食べよった。今は、除草剤とか撒くから無理じゃけど、あの頃は田んぼにいろんな生き物がおったから。

うちら辺の家は、どの家にも、明治頃から、飢饉の時に飢えないように、柿・棗（ナツメ）・無花果（イチジク）・夏みかん・枇杷（ビワ）とか、果物の木をたくさん植えとる。私の家に来て、みんなで遊んでいて、お腹が空いたら、そ

の季節になつとる果物を取って食べよった。柿いうても今の富有柿じゃないんです。「キネリ」と言いよったな。小っちゃい柿をもいで（もぐ：木からとる）かじる。柿は、ハズ（高い場所の柿を挟んでとる先を割った竹の棒）というもので、もぎよった。（もぐ：木からとる）

昔は、粃や豆のような物を干すのに、筵（ムシロ）を使うでしょう。親が織ったのが、何十枚も積み重ねてあって、私の家の蔵のちょっと控えた所に、積んであった。それを舞台にして、友だちとうとうたり（歌ったり）、踊ったり、そういうこともしてたね。それが楽しかった。

○お父さまが復員して帰ってこられた時のことを、覚えていらっしゃいますか。

覚えとるよ。小学校3年生ぐらいじゃったから。中国から帰って来たんよ。

父親が帰った時は、体中、皮膚病だらけで、べちゃべちゃになってた。薬がないでしょう。母親がするの見よったら、古縄があるでしょう、それを持ってきて、焼いてその灰をつけよったよ。それで、父は、帰ってから2カ月くらい寝とったんかな。

私ら、父親が兵隊に行ってから何年も会ってらんけえ、近づかんの。最初は、怖いくらいじゃけえな。懐（ナツ）くまでには、だいぶかかった。でも、父親も母親も優しい人じゃったから、漫才師になれるほど、朗らかに笑って過ごした。

成長してから、私は、村でも一人か二人ほどしかおらんのに、大学に行かしてもろうて、有難かった。褒め育てをしてくれよったね。「ようできる。ようできる。」と言うて、勉強えっと（たくさん）せんのにじゃけど、とにかく褒めばかりしてくれたね。それで、積極的になれたと思います。

分校の子は、自由に伸び伸び育つとるいうか、民主的な教育を先生がしてくれとっちゃった。

本校へ行っても気後れせずに、級長とか生徒会長とかになって、頑張ったよ。

○戦時中のご家族構成を教えてください。

戦時中は、お父さんが戦争に行っていて、母親と私ら娘三人とおじいさん。5歳上の姉と、2歳上の姉と私。おじいさんは、軍人さんじゃったけど、心臓病で働けなかった。私が生まれた後、母親が病気になって入院してね。おじいさんが、ほとんど3年ぐらい私の面倒をみていたらしいよ。その間に、おじいさんに懐いてしまって、母親にはなかなか懐かんかったみたい。おじいちゃん子じゃったよね。

昭和35年に結婚したんじゃないけど、実家とは180度違っていて、大変だった。学校の教員になるつもりが、商売屋へ嫁に来てしもうたからね。

それに、戦後結婚するまでは、映画を観たり、スキーに行ったり、結構自由にしとったけえ、そういうことができんのが、嫌だった。ノーベル賞をもらった湯川博士の講演会を、公会堂に聞きに行ったりしたこともあった。私は、読書家のほうで、暇があったら本を読んでたけど、嫁に来て、同じようにしてたら、舅に、「女が、新聞読んだり本読んだり、けしからん。」と言って、説教された。私が、大学を出とるのも気に入らんかったみたい。昭和35年でも、女は自由がなかったんよね。

○子どもの頃、どんなものを着ておられましたか。

着る物は、親がみな作ってくれよったからね。着物を縫いかえて、モンペを縫ってくれたりしてた。上は、ブラウスとかを縫うてくれて、着てたね。洋服いうても、たいしたもののは着とらなんだと思うんじゃないけど、私のお古(おさがり)を、よその子にあげよったよ。昔は、貧乏な子は、着替えがないから、鼻水で袖口がガリガリ

になっても、それを着るしかなかったからね。

父親が帰ってから、羊3頭飼いだしたん。その羊の足を縛って、家族でハサミを持って、毛をチャッチャッチャッチャツ刈って、子どもじゃけえ、羊の身も摘んだり、自分の身も摘んだりね。それを、母親が洗うてね、糸に撚(ヨ)って、最初の毛糸で、私の赤いセーターを作ってくれたん。赤いモンペをはいて、赤いセーターを着て学校へ行ったら、「赤服さん。」って言われてね。後には、お母さんが糸撚りせずに、羊毛を加工所に出すようになったね。「糸繰り機」や「機織り機」も、皆、家にあったよ。

昔は、八畳の間が4部屋あって、蚕(カイコ)飼いよつたらしい。だから、ふすまを全部取り払うと広いでしょう。そこで、私が小さい(小さい)時は、神楽(カグラ)をしちゃったことがある。そこを舞台にして青年団の演芸会をしたこともあったね。家は、広かったのよ。庭も結構広いし。

父が帰ってきてから、麦の栽培をやめて、「ラミー」(からむしも言い、イラクサ科の多年草で、漁網・ロープ・縮・上布の材料にする)というものを植えとったよ。葉はちいと(ちよつと)大きくて、麻みたいな繊維になる。繊維だけ残るように処理して、それが服になりよつたんかな。

○履物は、何を履いてましたか。

藁草鞋(ワラゾウリ)。草鞋は、すぐ鼻緒が切れるでしょう。布を割いて藁に足して、鼻緒が切れんようにしていたね。遠くへ行くのには、親が下駄のすり減ったのを裏へ打ちつけて、使わしてくれよった。ズックになったのは、ずつとのち。ズックは、小学校の6年くらいにならにゃあ、ないんじゃない。配給でズックが来よつたんじゃないけえど、みんな履いてなかったな。

もちろん、カバンはなかったよ。手提(サ)

げを持って、学校へ行った。布の手提げよ。何でも、姉にばかり作ってもらうわけにはいかんけえ、型を作ってもろうて、パンツは自分で縫うとったよ。キャラコ（インド産の平織りの綿布）という布で、縫うんよ。糊で固めたんかな。そんな様（ヨウ）な布だったね。度々洗うし、丈夫で長く持つように、糊で固めたんかもしれん。ミシンは、父がどっかからはよう（早く）にこう（買っ）てきとったんか、どうしとったんか覚えてないけど、家にあったから、姉に縫ってもらったり、自分で縫うたりしてたね。

ズックの前にね、ゴム草履いうのがあったよね。藁草履の後、ゴム草履で、その後ズックじゃけえ、ズックは、だいぶん後じゃと思うよ。

○藁草鞋は、自分たちで作っていらっしやいましたか。

そう。縄のなえん（なえない）者は、おらんけえな。子どもでもみんな、できよったな。だけど、藁草履だと、今と違って当時は寒かったから、雪が降ったら足が冷たかった。足袋もなんもあるわけじゃないし、親が分校まで連れに来てくれて、おんぶして帰ってもらうたのを覚えとる。

○足袋を作ることはできませんでしたか。

そりゃあ、できんでしょう。買わにゃあ。足袋が履けるような子は、田舎にはおらんよ。袖口は鼻水でガリガリじゃのに、足袋を買うような余裕はないじゃろ。だから、服は一枚きりで、それを着たら、あとは下着も着とらなんだよ。お父さんは戦争に行くでしょ。残ったお母さんは、昔は産めよ増やせよだから、子どもが10人はおって、養わにゃあいけん。上の子が下の子の守りをするようにして、やっと働けたんじゃけえね。それで、上の子に着せても、下の子の服までそんなにあるわけじゃない。人にお古をもろうて着るとかね。だから、足袋が

履けるようになったのは、もっと後じゃないかなあ。

それで、寒い時期には、学校で、先生がストーブを焚いてくれよっちゃったけえな。初めは、ガラス窓がなくて、障子だったから、よけい寒い。先生が、校庭で芋を育てて、焼いて食べさせたり、いろいろ温まるようにしてくれちゃった。

その代わり、私ら子どもが、障子を川へ持って行って、みんなで洗うたり、障子紙を貼ったりしてたね。分校の校舎は、ボロじゃった。私らが、4年生になった頃、戦後金が入るようになったんか、建て替えてくれた。舞台のある、発表会ができるような部屋がある校舎になったね。前は、そういう舞台がなかったから、なんかある時は、中条小学校まで行ってた。中条小学校の本校には、講堂があって舞台があったから、学芸会もそこでしてた。

研究授業なんかがある時は、先生が、子どもをみんな連れて行って、中条の小学校の教室で研究授業して、たくさんの先生が、参観に来っちゃたことがあるよ。その授業を見て、先生達が驚かれたらしい。複式学級なんで、級長が質問を出して、子どもが自由に考えを出し合って、結論を出すというのが、授業だったけえな。本当に民主的な教育だったから、先生が皆、感心されたらしいよ。

○下着などは、どんなものでしたか。

下着が買えるような人は、おらんかったんじゃないかね。適当に作ってたんかな。パンツは、自分で縫ってたけど、下着はどうしとったかな。

メリヤス（平編みで編んだニット・布地で、靴下類や下着類、手袋や帽子など日常衣類の多くに利用されている）なんか、ずっと後だからね。真冬でも、服を一枚しか着とらん。震えても、一枚しか着とらんかったと思うよ。考えても、思い出せんから。

下着も、足袋もないくらいじゃけえ、便所に紙もなかった。田舎にゃあ、木の葉っぱをとって、便所へすけて（置いて）あった。新聞をとってない家は、新聞紙がないけえな。新聞を取ってる家は、新聞を切って置いとくん。それを手で揉んでお尻を拭いて、便所にボンと落とすんじゃけ。新聞紙が、落とし紙なんよ。いつ頃、チリ紙になったんかな。田舎は、長いこと新聞紙じゃったと思うよ。

○戦後、食べものには、あまり困らなかったのですか。

父親が帰ってきてからは、困ることはなかったな。帰る前は、みな供出させられるけえな。検見（ケンミ）いうて、軍隊にとられん男の人が、「ここはなんぼで、何石盛（ナンゴクモリ）。」と言って、供出する量を決めて供出させられるけえ、自分方（カタ）に残るのは、少しじゃけえな。

芋の蔓とかは、おかずにしよったよ。それぐらいは、みんな同じじゃけど、自分は、苦労はあんまりしてないほうよ。

晩ごはんは、「今日、晩ごはんは、あんたがする番じゃ。」というて、交代で作とった。晩ごはんには、よう雑炊を作りよったな。子どもでも、雑炊ならできるでしょう。醤油かなんか入れりゃあね。雑炊つくったり、うどんにしたり、いろんなことするわけ。けど、昼間庭の果物を、お腹いっぱい食べたりしとるけえ、ひもじい記憶いうのはないね。

前にも話したけど、明治の頃から、ちょっとした大きい家は、飢饉に備えて果物を植えてたわけ。昔の分家いうんは、何ももらわんと、菰（コモ：イネ科の多年草マコモの葉を粗く編んで作ったむしろ）ひとつで分家をするようなことだったらしい。だから、分家は貧乏なんだけど、本家は、どこの家にも門構えがあったり、大きな木があるし、実のなる木を植えとるんよ。

それで、本家筋の家へ行って、みな遊んで、生（ナ）つとる果物をもいで（もぐ：木からとる）食べるわけよ。よう（よく）うちへ、友だちが遊びに来て、小腹がすいたら果物をとって食べよった。

○成長して、一人で外出できるようになったら、福山の街なかへ、よく来られてたんですか。

戦後いうても、昭和30年過ぎてからよ。K〇劇場や日米館、名劇に、映画を観に来てた。福山市内には、映画館は結構あった。中条は、バスは通りよったからね。バスが、福山駅前を、夕方の6時過ぎでないと出んから、そのバスに乗るのに、時間は十分にあるでしょ。早くに仕事が終わるから。三吉町で塾をしたりしてたからね。教員採用試験に受かったのに、親が、「遠い。」というて行かせんけえ、勉強を人に教えてたんよ。土曜日だったら、午後2時か3時くらいには、塾が済むけえ、映画観て、バスまでの時間をつぶしてたんよ。洋画は好きじゃったね。何遍も、時間が来るまで同じ映画を観とった。

大学へ行きようるときにも、門限が過ぎても、結構映画館にいたね。

大学は、当時、広島女子短期大学というて、今の県立広島大学。私が卒業した時は、短大だったけど、私らの卒業のすぐあとに四年制になった。2年で、教員の資格は取れたんよ。保母の資格も取れたしな。

○進駐軍を見かけたことはありますか。

1年生の時にね、田舎にも進駐軍が来たんよ。チョコレートもろうたような気がする。みんな、外国人を見たことないでしょう。進駐軍の兵隊を恐れて、溝の方へ駆けて逃げた。ちゃんと覚えてないけど、後で、先生が、チョコレートを私らに渡してくれちゃった。進駐軍は、田舎へもちゃんと来たよ。

戦時中、遠足の時に、そこの横尾（ヨコオ：

当時、深安郡横尾村)の辺まで来たら、飛行機がバーっときて、先生が、みんなを溝へ入らせよっちゃった。隠れにゃいけん。撃たれたらいけんけえな。その頃は、戦後に、チョコレートをもらうとは、思ってもみんかった。

戦後まもなく、おじいさんについて、家から福山まで12キロ歩いて来たの覚えとるんよ。福山の焼け跡を見て、田舎に帰ったの覚えとる。野山を駆け回って育ったから、足は丈夫だったね。

それから、福山空襲の時、おじいさんが、子どもを起こして、山の上も上、「金山(カネヤマ)」というところまで上がった。福山城が焼けるところは、そりゃもう、子どもでも鮮明に覚えとる。高いところじゃけえ、福山城が見えるんよ。飛行機が、「ピューン。」というて低う飛んでるん。飛行機が上がったり下りたり、「ウン。」というて、「ジャッ。」と音がして、火が「バババー。」と広がるのが見えた。子どもだったから、うまく説明できんけど。姉も覚えとるから、間違いないよ。

当時、街なかに住んどった人は、「川へ入って、布団を被ってじっとしとった。」と言うけど、私ら、遠くから眺めるほうじゃけえ、怖さが違うよね。また、話が福山空襲になって、戦時中に戻ってしまったね。

○詳しくお話していただいて、ありがとうございました。

証言者 檀上 裕 (ダンジョウ ユタカ)

昭和13年生まれ

終戦時 6歳 松浜町在住

(新涯町疎開中)

聴取日 2018年9月13日

**○戦後のことを中心に伺いたいと思いますので、
よろしく願い致します。**

戦争の事は、いい思い出が一つもない。老人会へ行っても、戦争の話が出たら、口をつむぐ(噤む：ツグム)んよ。皆さんが、「ああじゃ、こうじゃ。」と、話していると、どうしても、私は、過去のことがバツと蘇ってくる。それが嫌で、福山空襲のことは避けてきた。

福山空襲については、中央公園にも、それから福山市人権平和資料館にも、母子三人像があるでしょう。

**○檀上さんは、母子三人像の男のお子さんと、
同じぐらいの年齢だったんですね。**

中央公園のグラウンドで、いつもグラウンドゴルフをしてる。行って、あの母子三人像をチラッと見ても、極力、人様(ヒトサマ)の生い立ちまでは、知ろうとも思わなかった。「福山空襲に関係がある人」と、いうぐらいはわかっていたけど、チラッ見る程度で、あまり気にとめていなかった。

ある時、老人会のほうから、『次世代のメッセージ』という本への原稿依頼があって、初めて福山空襲のことを書いた。できあがった本を一冊いただいて、見ると、冒頭に、母子三人像がバツと出てる。あの親子さんは、住吉町の田んぼのなかで、被災したと書いてあった。それを読んで、母子三人像の存在を近くに感じるようになった。

当時は、お父さんは、みんな兵隊に取られる。そして、年寄りの男の人が町内連絡員で、あと残ったのは、女性と子ども。連絡員のおじいさ

んが、「なんぞことがあったら、防空壕に逃げえよ。」と、時折言っておられた。私も、福山空襲の時、もし防空壕に逃げとったら、今は、もうここにいないかもしれん。かろうじて、ちょっと離れたところへ、疎開したから助かった。

あの親子さんは、あの夜、焼夷弾のなかを、右往左往して逃げまどって、最後に、住吉町の田んぼのなかへ倒れとった。そういうことが、『次世代のメッセージ』の冒頭に載っとなる。その時に、初めて、「うわあ。私が疎開してなかったら、あの母子三人像の男のお子さんと、全く同じだったかもしれない。」と感じた。

だから、もう、関心を持たざるを得ないようになった。その親子がモデルになっている絵本があって、男の子が5歳だった。私が6歳。私の家のある松浜町と、男の子の住んでた住吉町は隣なんよ。それだけに、気持ちが重なる。一日か二日でも早く、私みたいによそへ疎開しとれば助かったのに。

今までは、あんまり戦争の話をしたことがなかった。4年前に、戦争体験を語る機会があって、断りきれんで、記憶を手繰り寄せて話したけど、それまでは、話してもわかってもらえんし、暗いことを思い出したりもしたくないと考えてた。実際、同級生の中には、「戦争の話は、時代遅れじゃ。」と言う者もいる。当時のことは、なかなか、全部話した気がせん。まだ話していないことが、いっぱいありそうな気がして。

○戦後は、どんな生活をされていましたか。

戦時中は、ろくに勉強もしてないけど、戦後、みんな、それぞれに努力したと思うよ。それは、戦前と戦時中の教育の力もある。

その当時は、学校の授業も、「修身」中心で、厳しかった。宿題を忘れたら、先生が帳面を見て、帳面をトントン叩きながら怒った。授業中は、先生が鞭を持って、生徒の間を行ったり来たりして、緊張したね。学校としては、几帳面

な人間を育てようと思ったんでしょう。

戦後、世間は暗いし、そういうなかで、自覚して、一生懸命勉強した人は、伸びてる。だけど、みんな家に帰れば、親が子どもに、「あれせえ、これせえ。」と言うて、家の仕事をさせられた。

○檀上さんは、昭和13年11月25日のお生まれですよ。生まれも育ったのも、松浜町ですか。

生まれたのは新涯町。新涯町はお母さんの出所（デショ）。里帰り出産よな。うちの両親は、山本家に、「取り子、取り嫁」で入ってきて、私が生まれた。父が養子に入った先が、山本家だった。おばあさんの名前は、山本ナヲ。おばあさんは、従業員を使ってお菓子を作ってた。

家は、松浜町。昔は、ある会社の資材置き場が北向き、わが家は南向きに家が建ってた。私が物心ついた頃には、隣には防空壕が掘ってあったね。

おばあさんは、陸軍歩兵第四十一連隊の御用商人だったから、お菓子を作っては、軍に納めてた。船町に「廣川日進堂」というパン屋さんがあって、そこはパンを納めてて、うちは菓子を納めてた。菓子というても、松葉菓子とかの駄菓子。納品の日には、おばあさんの後を、私がついて行ってた。石炭も販売しようたね。頑張り屋さんで。



旧歩兵第四十一連隊正門

○ご兄弟は、いらっしゃいますか。

私は、四人兄弟の長男で、妹が一人、弟が二人おる。

父がお菓子屋を継いだけど、菓子の原材料が入ってこない。作れんようになった。石炭は、石炭船が入ってきてたけど、もう途中で入ってこなくなった。石炭場はあったけど、実際は、石炭は積んでなかった。

リーデンローズの前、イトーヨーカドーとの間は、もともと入江があった。リーデンローズの向かいが、日本火薬（日本火薬製造株式会社で、昭和20年日本化薬株式会社に社名変更）、帝国染料（帝国染料製造株式会社）、略して、帝染。その帝染の工場の排水口が、今のケーズデンキのそばのマンションの所にあった。海の干潮の時に、樋門を開ければ、排水がドンドン出る。それで、海の水が年がら年中汚い。でも、魚は、そこにおるんだから、人畜無害だったんかな。もし、排水が、水銀、カドミウムに汚染されとったら、海でよく遊んでた私は、今こうして元気ではいられない。染料で海の水は汚かったけど、害はなかったということでしょう。でも、子どもがそこの魚を釣っても、臭うて、食べる者は誰もいなかった。戦後、工場がストップして排水が流れ出なくなったら、海の水が、きれいになってた。

戦時中は、米軍が日本火薬をめがけて攻撃して、松浜町でも四つ樋は攻撃されてない。

○空襲の時は、疎開先の新涯におられたんですね。

私は、空襲の一週間くらい前に、新涯町に移動しとった。移動するということでも、みな歩き。歩いて、お母さんの実家まで行った。

○空襲で松浜町の家が焼けたのを知ったのは、いつ頃ですか。

家が焼けたのを知ったのは、空襲の直後。「帰ったら、家も何もないし、荒れ放題に、荒れとるんじゃけえ、帰るな。お前は、そこへおれえ。」と、言われて、当分新涯におった。

○松浜町の家には、誰がおられたんですか。

父親は兵隊に取られてたから、おばあさんだけ。おばあさんは、近所の会社の人が、空襲の時どこかへ連れて行ってくれたんだと思う。おばあさんが、空襲の時どこへおったんか、確認してないな。でも、無事で、戦後も元気で、私たちの面倒を見てくれた。家は、跡形もなかったけど。

○ご兄弟は、当時、何歳でしたか。まだ小さいですよ。

当時は、まだ弟は生まれてない。妹がおった。妹は、昭和16年生まれだったから、小さかったけど、私と一緒に新涯町に疎開してた。

○新涯まで歩いて行くのは、遠かったですね。

遠いよ。大人の足で歩いて、結構あるから、子どもの足では、ものすごく、遠く感じた。被災したいうても、すぐに、走って帰るわけにはいかんかった。当分新涯町へおって、おじさんらが情報を入れてくれた。

新涯町というても、今の曙町で、昔の地名が新涯だった。空襲で、松浜町の家も何もかもなくなって、土地だけが残った。もう、啞然とする以外、他の言葉がなかった。

○お父さまは、すぐに復員して、帰ってこられたんですか。

う〜ん、すぐかどうか、覚えとらん。復員して、近所のある会社に、少しの間籍を置いて、その後で、その会社の燃料部を離してもらって、父が独立したんよ。その会社で使う燃料の炭や薪を、父が山の奥から仕入れて、そこに納めるという形でやらせてもらうことになった。

そうこうしてたら、豆炭とか炭団（タドン）とか、そういう物も仕入れて、それらも一緒に販売するようになった。戦後よりずっと後になるけど、その後、おがくずを固めたオガライト

いうのが出てきて、もう少ししたら、石油ストーブの石油というふうに、時代によって、その時々燃料を扱うようになった。私は、その手伝いをしてた。

○戦後は、バラックか何かを建てて、生活されましたか。

もちろん、バラック。それまでに、父親が復員してたかどうか、覚えていない。復員前なら、誰かに手伝ってもらおうと思うよ。なんぼバラックでも、女手で建つわけではないから。

寄せ集めのバラックを建てて、みんなでそこで暮らしたけど、その家は、瓦の燃え残ったんやら、その辺に転がるとる重しになるものを、屋根の上に乗せてた。夏は蚊帳を吊っても蚊が入って来るし、冬はスースー冷たい風が入るんで、段ボールかなんかで風を防ぐ。時間が経つと、その段ボールも破ける。雨漏りは、ちよくちよくする。ほんまに、人間が住むような家じゃあない。でも、そこへ住まにゃあ、いつまでも親戚に甘えとるわけにはいかんしな。

○小学校は、普通に、学校に行かれてたんですか。家の手伝いもあったでしょ。

学校は、南小学校に行ってたよ。1年生や2年生の時のことは、あまり覚えておらんけど、3・4年生のことは、よう（よく）覚えとる。その担任の先生は、よう（よく）怒るんよ。忘れ物をしたら、「廊下に立っとけえ。」と言うてな。でも、怒るわりに、よう可愛がってもくれる。班ごとに勉強を競い合うと、「今度の日曜は、ボートに乗せてやるけえ、しっかり勉強しよれよ。」と言って、頑張ったら、褒美に子どもが喜ぶことをしてくれた。私たちの班が一番頑張った折には、次の日曜日に、5、6人だけど、ボート2艘ぐらいで、海を行ったり来たりしてな。それだけでも、楽しかった。

○それは、小学校3年生の頃ですか。

小学校3年生。私は、海のほとりで育つとるから、なんぼでも、舟は漕げた。ボートはオールで漕ぐ。伝馬船は櫓（ロ）で漕ぐ、貨物船についとる伝馬船は、櫓（カイ）で漕ぐ。この三つを漕ぐことについては、私はうまかった。鞆へ、海水浴に行っても、先生に言われて、伝馬船にみんなを乗せて、櫓で漕いでたなあ。

○小さい時から、小船がいつもそばにあって、乗って漕いだりされてたんですね。

そうそう。私が小さい頃は、生活物資を運んでくる貨物船が、往来してた。戦前は、あその海は、一文字沖からずっと入り江に入ってきたって、今の手城の遊歩道の辺りから、渡し船があった。手城の人はそれへ乗って川口へ、川口の人はそれへ乗って手城へ、というふうに行き来しとった。

その海では、貨物船が、時々往来してたし、貨物船の他に、ポンポン船という、蒸気で走る船も往来してた。

そんなある日、飛行機が飛んできた。一文字沖で宙返りをして、今のリーデンローズから元月世界辺りで、また宙返りをして、向こうへ帰る。それを何回か繰り返していた。戦前、わが家その辺りにあったから、ある日、海のほうへ顔を向けたら、その飛行機が、パイロットの顔が見えるぐらい、ものすごく低う飛んできた。

「あらっ。」と思うてな。そうこうしようたら、エンジントラブルで、ちょっとおかしい音がした。子どもの私は、「これは落ちる、落ちるぞ。」と言ってたら、また、大きな衝撃音がしたから、本当に落ちたと思った。

でも、その時は、子どもの私一人が騒いどるだけで、まわりのおとなは、少しも騒いでない。落ちた辺りを見ても、一つも飛行機の残骸らしいものはない。「おかしいなあ。」と思うたら、それもそのはず、この飛行機は、水上飛行艇だ

った。水に着水する時の摩擦音が、私には異常な音に聞こえただけだった。臭いも、普通のガソリンを燃やしたような臭いじゃあなくて、何か混合油を燃やしたような臭いで、エンジン音もどこか頼りない。その音が、私には衝撃的に聞こえただけのことであって、飛行機は、すぐ飛び立って、また一文字に行って、また、こっちへ入って来て、そんなことをあの入り江で繰り返してた。訓練だったと、後で知った。大門（当時の地名は深安郡大津野村）の海軍航空隊から、来てたんだと思う。

その飛行機は、名付けて、「赤とんぼ」。赤とんぼというのは、飛行機の車輪のどこへ、船を二つ付けて、飛行機は一人乗り。2月の南公民館での会合の時に、廣保さんに、「黒トンボいうのもおった。」と言われた。どういうものかと聞いたたら、飛行機に船を一つしか付けていないのを「黒トンボ」と呼ぶらしい。「一文字沖の上空は、黒トンボと赤トンボが行きかっていた。」と、廣保さんが言ってたね。私は、赤とんぼは見たことがあるけど、黒とんぼがあるのは、知らなかった。

それから後に、私が確認したのは、敵の飛行機。敵機は、西から東へ、ダーッと通り抜けるだけ。雲と雲が切れた時に、爆音がして、機体がキラキラと光って、また次の雲に入る、また、抜けて出る。そういうのを、下から眺めてた。爆音だけが怖い。「あの飛行機が、いつ来て、爆弾をおとすんじゃろうか。」と考えると、幼い私は、ただただ恐怖心が出てきた。町内会のお年寄りの連絡員が、いつも「防空壕に、逃げえよ。」と言うてたから、私らも、米軍の飛行機が来たら、すぐ防空壕へ入ったこともある。体を半分、防空壕から乗り出して、「ああ、通り越した。」と言うて、また防空壕から出てくる、そんなことを繰り返してた。

飛行機の爆音も怖かったけど、警戒警報や空襲警報が、怖くてたまらんかった。静かな街に、

大きな音が鳴り響く感じ。おとなはどう感じたかわからんけど、小さい私は、頭の先から足の先まで、怖くてしょうがなかった。ちなみに、警戒警報というのは、ちょっと音程が高い。ところが、空襲警報というのは、音程がものすごく低い。それが、私には怖くてたまらんかった。福山空襲の前あたりだから、6歳ぐらいの時かな。

○他に何か、お父さまが出征していく時とか、戦時中の記憶がありますか。お父さまは、何年ぐらい戦争に行っておられたか、お聞きになったことはありますか。

さあ、それはよくわからんな。父親は、私らにはなん（何）も言わなかった。ちょっと聞いたのは、父親は、山の中で警備をしていたこと。それが、どこかは聞いてないんよ。父親は、詳しいことは、一切、私らには何も言わなかった。

○お父さまは、戦地でしんどいこともあったのかもしれないから、家族には言えなかったのかな。お父さまと、あまり話をしてなかったんですか。

それは、そうよ。口喧嘩いうか、口答えばかりしてた。私は、とにかく父親が怖かったから。

でも、父親は、信仰心の厚い人ではあったよ。四国霊山石鎚山の隣の瓶ヶ森（カメガモリ）の信者で、7月1日の山開きの日に、山伏みたいな恰好でお参りしてた。お参りの1カ月前から、身を清めるためか、魚も肉も一切食べない。そんな戒律があったんだろう。父親は、私も連れて行くから、その戒律を守らせようとするけど、子どもだから守るわけがない。それでも、父親について瓶ヶ森へ行って、一緒に拝んではいた。

母親は黒住教、おばあさんは岡山の最上稲荷かな。家の中は、「宗教の間屋」みたいなものよ。父親は、毎朝、おくどの三宝荒神様からずらっ

と並んだ神さんの水を、順に換えて、丁寧に拝んでいたから、信仰心はあったと思う。

○海の工場排水の話に戻りますけど、戦後、しばらくは、工場は機械が止まっていたということですが、機械が動き出したら、やっぱり、汚い水が流れていましたか。

そりゃあ、動き出したら、そうよ。

松浜町に四つの樋門がある所がある。「四つ樋」と言うてな。そこは、多治米、川口の川とつながって、工場の排水が出てくる。それに伴って、川の魚も出てくる。入り江いうのは、川と海の魚が混じつとる所だから。

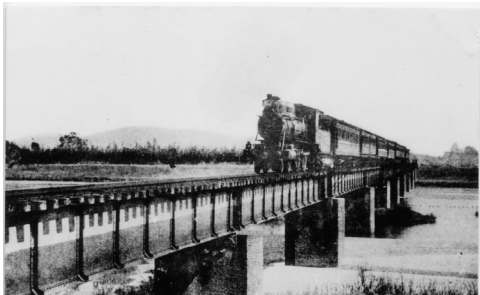
潮が引くと、下はヘドロ、当時は、ヘドロの事を「ダベ」と言ってた。もし、猛毒が流れとったら、生き物は生きてないんじゃないけど、近所の年上の男の子から、「おい、今日は、沖へ釣りに連れて行つたけえ、餌を掘っとけえ。」と言われて、ダベの中に手を入れると、「チロリ」いう長いミミズみたいなのが、箱にいっぱい捕れようた。そのドベには、栄養があったかどうか知らんけど、猛毒じゃったらチロリも生息せんわな。入江いうても、リーデンローズの前は、磯の香はせんよ。染料で水が汚れとるから。でも、潮風は吹いてきてた。

そういえば、水呑の河口堰ができた頃（昭和56年竣工）に、友だちとサイクリングに行ったことがある。河口堰の線が引いてある所に、地元の子どもさんが魚を釣ってるのに出くわした。ほとんど、鯰（イナ）がかかるんじゃないけど、その鯰は、みな体が曲がつとる奇形。それを見た時に、ふと、あの頃のことを思い出した。

「芦田川も、死んでしもうた。」と思った。芦田川は、私が子どもの頃は、シジミとアサリとハマグリが採れて、潮が引いたら、水たまりの中に、鯛（コチ）の子がおる。夜、ガスランプを持って、その鯛をヤスで突いて採ってた。おかげでできるぐらいは採れる。そういう楽しみ

があった。河口堰ができてから、もう全然、芦田川の魅力はなくなってしまった。

三之丸から鞆へ向かると「軽便(ケイベン)鉄道」、当時の鞆鉄道に乗って、鞆までに駅が二つあった。「葛城(カツラギ)」を過ぎて、「田尻(タジリ)」というところがある。そこへ、海水浴や臨海学校で、何回か行った。その頃は、河口堰もない頃だし、水はきれいだった。ただ、汽車から降りて、家の軒先を通過して、ずっと向こうの海岸へ出るのに、海岸へ入った途端に、牡蠣の殻と石ころで、もう、水の中に入るまでに、足の裏は小さい傷だらけになるようなところだった。そこに、学校から行って、遠泳大会をして、先生が飴湯(アメユ)をくださった思い出がある。田尻へ海水浴に行くのは、楽しみだったね。



○田尻の海岸で、岩牡蠣が取れてたんでしょね。

牡蠣は、身を食べて、牡蠣の殻を小さく砕いて、鶏にやると、ものすごくいい卵を産むんよ。それは、父親の仕事。父が牡蠣をどこかでもらうて来て、中身は焼いたりして食べて、殻は鶏の餌にしてた。

○戦後の暮らしなどは、どうでしたか。家は、しばらくはバラックだったとおっしゃっていましたが。

煮炊きを外でするから、外も家の中も、アミノ酸臭い。うちばかりじゃない。近所がみな、肩を並べて、外で煮炊きをするというような時があったからな。海沿いなんで、風が吹くと、

同じ方向にみな流れてくるから、匂いが集中する。

どこの人も、食べては行ってたよ。うちも。母も、仕事を手伝っていたけど、大変だったと思う。と言っても、当時、食べていた物は、限られとる。まず、「外米」、次に「メリケン粉」。メリケン粉は、加工食品なんで、いろいろ用途があって、鍊ってからうどんにしたり、蒸しパンにしたり、それから、お焼きにしたりしとった。

メリケン粉を、袋にちょろっと入れて、廣川日進堂に持って行くと、目方によって、「はい、3個。」「はい、5個。」と言うて、コッペパンを渡してくださる。子どもの頃は、いつも、同じ食べ物ばかりだから、プロの職人の作った物は、一味も二味も違って、おいしかった。だから、配給でもらうたメリケン粉を、こっそり親に見つからんように持って行って、コッペパンと交換してもらった。それが楽しみよ。弟も妹もおるから、持って帰って、分けて食べてた。メリケン粉より、お腹が太るのは、「米」と「芋」。米と言っても、「外米」。

当時は、親は親で、家族を食べさせるのに必死だった。食べ物は、被災していない所から分けてもらう。被災してない所も、そんなにたくさん分けてくださるわけじゃあない。食べ物に対しては、世の中、みんな餓鬼状態。さつま芋でさえ、手に入れるのに大変だった。うちも、新涯の母親の里で、米や野菜も、時々はもらっとった。じゃがいも、里芋、南瓜に、季節の果物を少し。

新涯町に行くときはずっと徒歩だったけど、そのうち、自転車に乗って行くようになった。父親が、田舎の山の方を駆けずり回って、22インチか、24インチの中古の自転車を探して、手に入れてきてくれた。父親が、自転車を持って帰ってくれたのが、とてもうれしかったので、よく覚えてる。

○炭や薪を仕入れている農家を訪ねて行った時に、仕入れのついでに、その自転車も手に入れたということですかね。

そう。それに、その頃は、荷台が大きくて、後ろだけタイヤが太い重荷用と、自転車とリヤカーはあったけど、車を持つてる人はいなかった。

終戦後、職業車というか、営業車やタクシーは、走ってた。自家用車というのは、一台も走ってなかった。それから、バスはあまり記憶がないけど、トラックは木炭車で、炭で火を起こしてエンジンをかける。うちの近くに、よくトラックが止まっていた。トラックが止まったら、すぐ、私ら子どもがそこへ寄り集まる。それは、トラックの荷台の下に、炭をおこす竈（ファイゴ）というのが付いとって、これが暖かいんで、火にあたりに来る。運転手が「そこは危にやあけえ、あっちい逃げえ。」と言いながらも、しばらくは、あたらせてくれる。火がいこ（熾：オコ）ったところで、エンジンをかけて、スーッと走り去る。従って、その頃の物流は、自動車ではなくて、主に馬、馬車。

○いつ頃のことですか。

戦後すぐよ。馬車屋さんが繁盛してた。うちも現地の薪を仕入れるのに、山の中で薪をこさえて、それを馬車へ積んで、峠を越えて、持って来てもらった。峠は、そこの大埵（オオタオ）の坂。その坂を越して、薪を持ってきてくれた。馬は、うちで飼っていたのではなく、得意先が飼ってた。

その時には、まだ、食糧の統制が、撤廃になってなかったんだと思う。馬車の荷台に薪を丸く積んで、その真ん中に、内地米の米を隠して、あの手この手で米を仕入れて、うちは家族の命を繋いでた。

○檀上さんとご家族は、そうやって商売をして、

何年ぐらいいまでそのバラックの家に住んでいらしたんですか。

いつ頃までかなあ。でも、建て替えたんじゃないんで、継ぎ足して住んでた。そのうち、そこが、市の区画整理で、全部立ち退きになった。

○仕事は、中学校を卒業する前から、お父さまの手伝いをされてたんですか。

父親は、ずっと「手伝いをせえ。」言うんじゃないけど、遊びたい年頃でなあ。でも、いやいやながら、手伝った。

○子どもの頃の生活で、他に、何か覚えていらっしゃいますか。

そういえば、小学校の時には、鉄くずなんかを拾って、小遣い稼ぎをしてた。鉄は、屑屋へ持って行っても、いい値で買ってくれない。「真鍮」と「赤」は、いい値で買い取ってくれた。「赤」というのは「銅線」のこと。これを持って行くと、ちょっとした小遣いになる。どこの家もバラック建てのような頃に、子どもだから、街じゅうの焼け跡をずっと拾って歩いていた。「ボロ屋」という言い方をしたけど、買い取りをする業者が、前から港町にあって、そこへ持って行ったら、秤にかけて買い取ってくれた。

本庄町（ホンジョウウチョウ）に陸軍の射撃場があったけど、近所の友だちから、「不発弾の弾を、拾いに行こうや。」と言って、誘われたことがある。私は行ってないけど、それを拾ってきて持って行ったら、それも買い取ってくれたらしい。子どもも、お金がないから色々考える。友だちと一緒にするから、楽しくて面白い。そういう時代だった。

○今日は、どうもありがとうございました。

証言者 土屋 輝子（ツチヤ テルコ）

大正14年生まれ

終戦時 20歳 船町在住

聴取日 2018年5月14日

○今日は、戦後、特に、昭和20～25年の福山市の復興の様子や、ご自身の戦後の暮らしについてお話を伺います。よろしく願いいたします。お名前を教えてください。

土屋輝子です。前の昭和天皇のお嬢様が同い年で、照宮（テルノミヤ）さんです。当時私だけでなく、字は違っても、「てるこ」という名前を付ける人が、割合多かったです。

○お名前も時代を反映するんですね。

お生まれは、いつですか。

大正14年6月12日です。西暦で言うと、1925年かな。

○戦時中は、どこにお住まいでしたか。昔の町名でもかまいません。

戦時中、焼けるまでの所在地は、福山市船町です。家は、銀行の隣にありました。その銀行は、最初、農工銀行と言っていたんですが、日本勧業銀行に替わってました。日本勧業銀行が遊び場だった。後に、勧銀が大黒座さんと等価交換して、駅前に出られました。

○そこで誰とお住まいだったか、家族構成など教えて下さい。

戦時中の家族構成は、父と父方の伯母。母が亡くなっていましたから、伯母が、ずっと面倒をみてくれました。子どもの頃から父が店をしてたので、その関係で幼い時は、伯母の家で面倒をみてもらって、両方を行き来してた。その頃は、母はおったんです。私が、今でいう高校1年生の時に亡くなった。太平洋戦争より前に亡くなりました。病気ではなかったのに、突

然にね。悲しかった。ずっと子どものころから商売で、水商売をしょったから、子どもは邪魔だから、伯母の家で育ててもらいました。伯母の家に、私と弟はおりましたね。姉らも小さい時は伯母の家におって、大きくなって親の方へ帰ったらしいですけど。私も女学校に入って、船町の親の家に帰ったんですよ。両親と同居したんです。兄弟も、だからちょっとバラバラで大きくなったようなかんじです。

○ご兄弟は、お姉さんと弟さんですか。

兄弟は五人おります。一番上から兄、姉、私、妹、弟です。私が真ん中です。弟と兄とは16歳違ったから、弟が「お姉ちゃんばかりじゃ。」と感じていたみたいです。それに、兄はもう独立してましたからね。兄の実感が、私らでも無いですね。

○ちょっと年が離れていたからですかね。

福山空襲時は、兄は私より12歳年上で、船町の実家の二軒隣にいました。もちろん、空襲時には、軍隊に行って、家にはおりませんでした。姉は、私と7歳違いで、女学校に行っていました。大正7年生まれで、今年100歳になります。

○妹さんは、どうされていましたか。

妹は、弟といっしょに母の所におりました。私と弟と妹は、弟と四つ、妹と二つ違う。妹は、昭和2年生まれで、弟は、昭和4年生まれです。二人とも、もう亡くなりました。

○戦争でお亡くなりになったんですか。

病死です。弟はね、たまたま中学から三菱へ徴用には行きましたけど、戦争には行ってません。兄だけが行きました。兄は福山が空襲で焼けた頃には、日本にはいませんでした。どこにおるかさえ、分らなかった。どっか行ってしも

うて、音信不通でした。どうも、遠方のニューギニアへ行っていたようです。

○ご家族を残して行かれて、残されたご家族もご心配でしたね。

はい。兄の家族は、兄嫁と姪とおったんですけど、それが兄のおらない間に、兄嫁と姪も、次にできてた赤ちゃんも一緒に亡くなりました。だから、兄が帰った時には、家族が誰もいなかった。兄嫁さんたちが亡くなっても、父が「絶対手紙に書くな。」って言うてね。「兄に言うちゃいけん。自棄（ヤケ）を起こして死んでくれたらいいから。」と言うてました。もっとも、もう手紙も届かないような場所へ行っと思ったんでしょう。皆、行き先がわからなかった。だから生きてるか、死んでるかもわからなかった。

○復員されたのは何年ですか。

昭和20年に帰って来たと思いますね。まだ私も結婚してなかったから。実家で、兄を迎えましたからね。夏でしたね。蚊帳をつつたからね。焼け野原でしたけど、家はもう建ててました。

○戦時中、船町辺りの様子はいかがでしたか。

船町は、昔は船が出入りしてました。海でした。海いうか入江で、砂じゃないドロドロの「ダベ」でした。でも、カニがおったりね。家の中に、カニが入ってきたりしてました。

○船町は、船が付く地名だから船が入ってたんですね。

船町の北側と南側で、真ん中もないでしょ。入江を挟んでこっちの浜と、むこうの浜とあった。天下橋と木綿橋を挟んでね。ずっと入江だった。うちの前の辺は広場で、荷揚げ場で、いろんな物を船から揚げたりね。その仕事の方の銭湯があったり、稲田屋さんのような食べ物屋

もあったり。そういう「沖仲仕（オキナカシ）」という船の荷揚げをしたりする職業の方が、食べに来られるお店がずっと続いていた。うちも食べ物屋だったんですけど、うちはそういう人を対象にしない社交場みたいな店でした。

○お父さまの商売が、社交場ということですか。

戦前は、カフェにしていたんです。昭和になって、最初駅前で喫茶店から始めたらしいですけど、資金ができて、船町で商売してた所が空いたんで、それを買い取って船町へ住んだんです。昭和の初めにできた、いわゆるカフェです。よくテレビのドラマに出てくるでしょ。女給さんがいる流行の先端のカフェ。そういうところだから、戦中はひっそりとやってました。取り締まりがあるからね。物資も無くなるし、音楽を流したりするのは、だんだん禁止になっていったから、自然消滅みたいになった。8月8日前は、営業できない状態でした。

私は、カフェの娘で、いろいろ言われましたね。昔だから、差別ですね。水商売ですからね。私が日本舞踊を習ったら、「水商売じゃけ、なろう（習っ）てじゃ。」とかね。だから、反面教師じゃないけど、「くそ！」と思うてね。職業の差別するんじゃないかなと思うて。私は、あの頃から「職業差別」という意識があって、女学校の卒業前には、その事をレポートに書きました。公民の授業の時に、何か考えていることがあれば書きなさいと言われたのでね。広島県立福山高等女学校、県女ともいいますが、卒業一年前ぐらいの時です。私は、結婚する時差別は無かったですけど、妹は田舎へお嫁に行ったから、水商売の事をあれこれ言われたようです。

○地域的に違う、ということですか。

地域的に。「息子の嫁に、そういうの（者）をもらわれん。」と言うてね。

私はそういう苦労はなかったです。私は、知

らずにお嫁に行ったんだけど、主人の方も似たような商売でした。

でも、県女だから、お医者さんのお嬢さんとか、銀行の支店長さんのお嬢さんとか、割合とそういう人が同級生でね。ただ、同級生は皆、そんな差別せずに、同じように接してくれたから、私もそんな引け目はなかったけど。「勉強で負けんようにせにゃ。」とは、思ったよ。お陰でね、皆さんからもそんな嫌われずにすみしました。

私は、チビでね。昔は、女学校でも軍事教練があった。ちゃんと分列式をしたり、中隊をつくって中隊長を置いて。分列に、「前へ進め。」と言うたり、そんな号令する隊長に、皆さんより小さいのに選ばれたりして、母は泣いてましたよ。

○みなさんの信頼もあって、選ばれたんですね。

母は、めったに外に出ないし、自分は学がないから、「父兄会へもよう行かん。」と言うてました。やっぱり、位とか家柄が重視される時代でしたからね。

○お母さまは、いつお亡くなりになったのですか。

昭和16年8月に、母が亡くなりました。夏休みの終わりに大阪に行って、いい気になって遊んで帰ったら、亡くなった。突然亡くなった。心臓麻痺みたいなかんじ。

親戚が向こうから来て、帰る時、私と妹と弟の三人が一緒について行って大阪で遊んでたの。夏休みだから、子どもは、商売には邪魔でしょ。親に「ついて行ってき。」と言われて、一週間行って帰ったら、亡くなった。

○突然のことで驚かれましたね。大変でしたね。

夏の終わり、8月の終わりだった。父親が商売しょうるでしょ。食堂を海水浴場へ出していた。手城の海水浴場。今の鋼管になったとこ。三軒

あって、その中の一軒の方と共同で、夏だけ海水浴場へ店を出していたの。食堂と売店を出張みたいな形で、ちょっとした駄菓子を買ったり、氷を買ったりしてた。父は、商売を一生懸命でしたからね。なりふり構わずに、一生懸命してくれてました。

それからの苦労は大変でしたね。食べ物屋だし、食べることも経済的にも父がおるんだから困らないけど、母親がいないと、天国から地獄に落ちたみたいな状態でした。

○戦時中の暮らしは、どのようなものでしたか。

戦中は、はじめは、戦争そのものが本土でなく戦地でやっていたから、実感はないけど、私が小学校6年生の時、昭和12年の満州事変の頃から、やっぱり生活が変わってきましたね。学校生活も、家庭生活も、物が不自由になりました。

もともと、南小学校は割合行事が多くて、夏は移動臨海と宿泊臨海の二通りあって、移動臨海というのは、松浜、今のリーデンローズのある辺りから船が出でいて、専用の船に乗って笠岡の島に行ったりします。宿泊臨海は、一週間、浜辺の学校を借りて、先生方も生徒と兄弟親子みたいに、一緒に寝泊まりして、泳ぎに行くんです。学校に、男の先生が宿泊に来られるんです。女の先生はいなかったです。うちは、両方行かせてくれましたけど、そんな行事もあって本当に楽しい時代でした。でも、戦争がひどくなったら、そういう事もなくなって、女性の先生も、七、八人学校へ泊るようになりました。男性の先生も、三、四人。

私は、戦争の最中、昭和18年から20年3月春までは、尾道の郊外、栗原小学校で働いていました。3年生と4年生を担当していました。学校を出たらすぐ教員になったので、生徒と10歳しか年が違わない先生でした。生徒が、私にお餅を持って来てくれたりして、うれしかった。

たよ。戦争中でも、尾道の栗原は、田舎で、のんびりして平和だった。高等科（高等小学校略称で、昭和16年より国民学校高等科）や青年学校があった。青年学校から満蒙開拓青少年義勇軍（マンモウカイタクセイショウネンギユウグン）へ、ようけい（たくさん）、送ったよ。その後、昭和20年4月に、栗原小学校から福山の南小学校へ転勤になりました。

（注）青年学校とは、昭和10年に設置された尋常小学校（後の国民学校初等科）卒業後、進学しない青少年を対象にした社会教育を行う学校。

○着るものについて、お聞かせください。

終戦前、就職するのに、男の紺をつぶしてもんぺを作りました。スーツは、上は父のセルとか毛の織物の着物があって、その着物をつぶしてもらって作ってた。女物だと柄があるから向かないけど、男物は無地でしょ。大島いうわけにはいかんから。細みたいなんか。どっかで仕立ててもらったんじゃないかな。

○1945年8月8日以降について伺いますが、学校の様子はいかがでしたか。

昭和20年4月から、転勤で母校の南小学校で働き始めていました。福山は、尾道に比べると大変だった。給食もないしね。戦争が長引いて、農家の留守家族の手伝いに麦刈りや稲刈りをしたり。そんな中で、空襲にあいましたから。20歳の時です。農家の手伝いに行っていて、その夜に空襲で焼けたんです。今日がそうなるとは知らずに、いつもと同じようにカバン一つで、いる物だけちよびっと（ちよっと）入れただけです。だから、大事なものは全部家に置いてあって、みな焼けました。

南小学校は、私の母校で、恩師もようけい（たくさん）おられました。学校も全焼しました。東小学校は残ったから、一校舎を借り受けても

らって、南小学校の残った生徒をみてました。5年と6年生をみていました。

終戦後も、着物をつぶして、もんぺやスーツを作ってた。戦後最初の卒業式の写真は、着物に袴で写ってる。

昔は、天長節とか、紀元節とか、明治節があって、学校でも式典がありました。先生方は、校長はモーニング、女性は袴、男の先生もモーニング着てました。私らも、学校の生徒だった頃、式服いうて式の日に着る制服と、普段に着る制服とありました。私らは、自前のセーラーでした。

教育勅語は、奉安殿いう鉄筋の中に入れてあって、それを白い手袋をはめて校長が持ってきます。その持って来る間ずっと、みな頭を下げて会釈。校長が、壇上にあがって教育勅語を机に置いて、それでやっとな員「直れ。」になる。

疎開というのがあるよね。私の父は、引野（当時、深安郡引野村）の出でしたから、引野に同級生がおられて、そこへ、荷物もある程度疎開させてもらっていたんです。姉のいいものは、家に蔵があったから、蔵へ入れた。蔵は焼けないと言われてて、箆箆ごと蔵へいれたり、ピアノもあったので入れたり、レコードも、ようけい（たくさん）あったのを入れたり。「蔵なら大丈夫。」と言うて。兄が借りて商売してたその家が、お茶屋さんで、蔵が二つくらいあって、お茶の葉を、その蔵へ入れたらいいと言って。でもその蔵も焼けて、戦後はないです。

○土蔵に入れてあった物も、燃えたんですね。船町はどうでしたか。

船町は、全焼です。水道管が残っただけです。防空壕の中で一夜明かして、校長が「そろそろ、各自実家を見てこい。」と言われて、みんなそうしました。

○学校にいて、空襲にあわれたんですか。空襲

は夜でしたけど、学校にいらしたんですか。

警戒警報が鳴ったら、駆けつけることになってたんです。空襲警報が鳴っても、いつも解除になってたから帰ってたんですけど、その日は、照明弾が落ちた。「ああ、今日はほんとよ。本気よ。」と言うて。学校の真ん中に大柳があって、その下に防空壕がありました。そこへ、みんな50人くらい入ってましたかね。一般の人も、駆け込んで来たからね。

○学校命令で、そうされていたんですか。

ええ。「警戒警報が鳴ったら、学校を守りに来い。」という命令でした。私は船町で、特に近いから。たまたま、当直か宿直で、当日居合わせた先生もいらしたけど、蔵王とか千田とか郊外の先生は、その晩は来られなくて。朝になって、蔵王の先生も千田の先生も、大回りしながら駆けつけて、大変だったみたいですね。私たちは家に帰って、またすぐ学校に戻って、生徒の区域がほとんど焼けてるから、対策を話し合いました。

○生徒さんのことや、ご家族のことが心配だったのではありませんか。

私は警戒警報が鳴って、すぐ学校へ行ったから、弟と妹が、父と姉を先に逃がして、後で逃げたというんです。兄もいないから。弟と妹は、だいぶたって逃げたんで、妹は火傷してましたね。弟は怪我はしなかったけど。妹の火傷はなかなか治らんでね。かわいそうだった。その時は分らんかったけど、着とる物に火が付いたらしいです。

戦時中は、町内ごとに、万一の時どこに避難する、どこどこへ集まる、最終的にはここに集まるというふうに、避難先の家を町内で決めて、町内みんなの生死を確認しようということになっていた。船町は、野上町が集合場所だった。周辺からドーナツのように焼けて、野上町はド

ーナツに入らんかったから、街のなかでも、三吉町の辺りや野上町の辺りは残ったんですよ。そこには、弾に当たったお母さんがおられて、一晩中「痛い、痛い。」言うて、苦しんでいらっしやったようです。集まったところで、炊き出しのおにぎりをもらいました。

私は避難先の野上の家にとどまらずに、同僚が「家へおいで。」と言うってくれるから、そこで二晩くらい泊めてもらったかな。同僚は同級生で、お父さんが三吉町の誠之館中学校の英語の先生で、その舎監もしておられたので、そこへ泊めてもらいました。大変な時泊めてもらって、ありがたかったです。なぜか、そこ焼けなんなんですよ。三吉町の、元三愛病院のあるちょっと北の辺りは、焼け残ってた。

○そこからどうされましたか。8月8日以降は、どこで生活をされたんですか。

うちの父は、引野の出身だったから、引野に同級生のお家があって、そこをお借りすることになりました。疎開の荷物も、そちらに預けたから。農家だから、門から入ったら母屋とは別に、離れがあってそこを貸してもらって、生活しました。建物は別だし、一戸建てで平屋だし、広さも8畳くらいあったから、助かりました。家族は六人か七人おったけど、八畳一間にごろ寝して、お風呂は、本家の風呂をよばれんといけんかったけど、トイレは、離れにあってよかったです。庭がちょっとあるから、そこへ仮のレンガを積んで「おくどさん」みたいなものを作ってご飯を炊き、七輪でおかずを炊いたりしましたね。

農家だから、お米も分けてもらったりしたのかな。その辺の事情は、私も聞かされてないから知りませんがね。平素からおつき合いがあったから、父の同級のお友だちが、「おお、ええぞ。」言うてくださったんでしょ。平素から、果物なんかをできたら、分けてもらいに行った

りしてたし、父と仲が良かった。父は、以前から、引野の小学校へも寄付をしたりしてたみたいですよ。その方の弟さんは、学校の先生で、私と南小学校で一緒でした。ご縁があった。

○食べるものは、どうされてましたか。

食べるものは、豊富には無かったけど、南瓜（ナンキン：かぼちゃ）なら南瓜ばかり。南瓜がよおとれたんですよ。焼け野原でも、すぐ南瓜を植えたり、さつまいもを植えたりしたでしょう。さつまいもは、よう植えましたよ。

学校でも植えました。野草を取ったり、蛙をとって、裂いて、生徒にももの肉を食べさせたりしました。大きな蛙は捕れんけど、小さい蛙は捕まえられるから。たんぱく源でしょ。

○イナゴもですか。

空襲で焼けたからか、その年はイナゴはいなかったよ、たぶん。田んぼの稲が残ったり、イナゴもおったかもしれんけど。

○ご家族は、食べるのに困ることはなかったですか。

量は少ないけど、食べるのに困ることはなかったね。私たちは、父のお友だちもおったから。お陰で、お米も分けてもらえたから。

お金は焼けても、預金は銀行にあったけど、「預金の封鎖」（昭和21年実施）があっただけ。出し入れが自由にできない。私の給料は、当時、親がかりでいらんから、貯金してもらってたんですよ。それは自由だったから。そのお金を使って、「カーテン買う。」って言うから、「ええよ。」と言うたんです。給料は戦後もらったのは、自由にできたのか、よく覚えていないんだけど。

○住むところで、困ることはなかったですか。

困ることはなかったね。引野の疎開先に、一年以上おったかな。

手城の海水浴で商売しよったから、そこへテントとか、多少の物は置いてあったんです。だから一番にテントを持って帰ってきました。うちは、隣が日本勧業銀行のコンクリート広場だった。そこへ、福山市が船町連絡事務所みたいなのを建てられて、市の避難なんかの受付に、そのテントを使ったようなことを、父から聞きました。市の所有のテントは、焼けてるからね。お貸ししたというか、使ってもらったんじゃないかな。家族や親戚が消息を尋ねてくるから、市が出張所を開設して、対応されてた。

私らの学校でも、重要な物は、ちゃんと防空壕の一番立派なのを作って入れてましたから、市の重要な物は、きちんとしとってでしょうけど。普通防空壕は、素人がつくったりして、入口にも筵（ムシロ）を一つ下げたぐらいの簡単なものでしたから、そこにある物は、残ってないでしょう。

○特別の防空壕があったんですか。

重要な物を入れるのは、学校の「御真影（ゴシンエイ）」というて、天皇陛下、両陛下の写真とか、教育勅語が入れてあった。奉安庫の隣くらいに特別に頑丈なのを造って、そこに入れてあったと思います。学校の重要書類。学校の焼けてはならない物があるでしょ。

○その両陛下の写真、学校の重要書類、教育勅語とかは、焼け残ったんですか。

焼け残ったね。ただ、大事な学籍簿とか残したのに、戦後、校舎再建後に、また火事で焼けてしまいました。

卒業生の学籍簿が全部あったんだけど。6年間の成績とかもちゃんとあってありましたよ。各学年で。わたしも全部は見たことはないけど。校長と、教頭と、その次の先生しかご存知ないわけで、誰でもは見られません。あの頃でも、個人のプライバシーは守ってありましたからね。

○戦後の食べ物についてですが、米はありましたか。

米はヤミ米よ。全部ヤミ米。配給はあったけど、お米だけくれることはなかったから、配給も大変でしたね。配給所というのが各エリアにあったんですけど、お米の統制、配給は一人どれだけ、人数によってこれだけみたいな受け取り方でした。

食糧切符でね。毎週のように取りに行かんといけん。配給所は、今の広島銀行の近くのコンビニ辺りにありました。私が嫁いだのは、今でいう住吉町ですから。むかし新町いうてましたけど、今国道になったんですけど、まだ普通の道でした。配給品を乗せる車も、自分たちでこしらえんといけんかったから、木を集めて車をこしらえました。ゴムも無いから、鋳物の車輪でね。ガラガラ、ガラガラ大きな音がする車を押して配給所に行って、人数分の切符でお米をもらうんです。お米とは限らんけど。

「今月は、じゃがいもです。」いうて、お芋だけもらった時もありました。お米の代わりに、お砂糖をもらった時もあった。どうやって主食にします、お砂糖で。麦もない。粟もくれない。砂糖をもらった時はね、うちなんか人数が多かったから、もう困りましたよ。カルメラするいうても、大変だしね。メリケン粉でもあればお団子にでもできたんでしょうけど。昭和22年に結婚した以降の話ですけど。

戦後すぐ、物は何をもらうにも、配給でしたよ。米穀通帳みたいなのがあって。じゃがいもでも人数分一人何キロとか。アメリカからもらったんでしょう。大きな袋で、ダダダダダッーと上の方から入れよっちゃった。「土屋さん方は、何人だからこれだけじゃ。」言うて、ドンゴロス（主に穀物などを入れる、麻の繊維で編んで作った袋）という袋からじゃがいもを出して、もらって帰ったことがあります。まだじゃがいもは吊るしとけば何とかなるけど、お砂糖には本

当に困りました。戦後、私が実家におった頃は、そういう配給はなかったから、各自何とかしておられたんでしょうかね。結婚して22年から、配給の記憶がありますけど、それまでは、あまり覚えていません。父がどこからどうやって調達してきてたのか、食べなかった日はないように思いますよ、代用食にしても。戦後は、麦やら、いろんな粉が入った饅頭だったか、塩も入ったかな、草みたいなのが入ってたのもあったね。

○厚生団子ですかね。

そう呼んでたかね。それでも、お腹がへったら食べれましたね。配給だけで十分というわけにいかんから。力のない方、お年寄りや、子ども、知り合いのない方はね、ほとんどが配給が頼りでしょうから。私たちは、引野の疎開させてもらったとこ（所）で分けてもらってたから、欠食はなかったです。おかずらしいものは、ないです。南瓜が多かったから、今日も明日も、南瓜のお汁に、南瓜を入れたご飯だったりね。不自由はありましたけど、みんな我慢してましたよ。

うちの父も商売人だったから、引野から町へ出て、後片付けとかいろいろ用事があるでしょ。行き帰りの途中に、進駐軍がおった。進駐軍さんもお小遣いがいるから、チョコレートや、キャラメル、コンデンスミルクやコンビーフ、煙草、ガムを日本人に売るんです。誰にでもは売らんのんでしょうけど、顔馴染みになったら、売ってくれるんでしょう。商売でそれらを買った人は、一般の人に高く売るんでしょうけど。

三吉町にあったんですよ。今の医師会館がある川の辺りに、進駐軍さんの寄り合い所みたいなのが。父は、そこを歩いて引野へ帰って来た。子どももおるから、片言の英語で交渉して、売ってもらってたみたいです。

日本円で、買って帰ってくれよりましたよ。

進駐軍さんも、日本円で買いたいものがあるんじゃないですか。そこはわかりませんが、父がそういうのに長（タ）けていましたから。交換して帰ってくれてました。子どものおやつに、ハーシーとか、分厚いチョコレート。転売はしてないです。家族のために買って来てたんです。正式に公認というのがあるのかどうかしらんけど、後に英語のできる人は、商売にされる人はありましたよ。チョコレートもだけど、コンデンスミルク、おいしかったよ。甘いものが、珍しい時代だったから。

○引野に間借りされた期間は、どのくらいでしたか。

疎開期間は、2年くらいかな。いつまでおらしてもらったかは、定かではないですね。勤務先の南小学校が全焼して、東小学校を借りて授業をしていた頃も、そこから通っていたから。風呂は五右衛門風呂で、母屋の家族が入った後でいただくので、残り湯は少なくて。でも、贅沢は言えないですよ。父は引野の鍛冶屋の出で、郷里の引野によくしとったから、かわいがってもらってたね。他の人も、「うちの風呂に入りにつき。」言うて、声を掛けてくださいました。もちろん、疎開先の同級生の方には、よくしていただきました。

2年くらいして、家が出来たから船町へ帰りました。土地までは焼けないし、そこへ家を建てました。蔵王におばあちゃんの実家があったんです。その次の代になっても親戚付き合いを濃くしてあったんです。蔵王の親戚は焼けなかったし、しかも大工だったから、船町に家を建ててくれました。父が、息子のようにかわいがってましたし、材料はもちろん持ってるから。兄が帰っても商売ができるように、店と住まいの両方を建てました。

その辺りに住んでた人も、親戚が新市にあるとか、府中にあるとか、駅家にあるとかいう人

は、そこへしばらく身を寄せとってです。おいおいに戻ってきて、みんな復興して。南学区は、町屋が多いからね。船町いうたら、商家が多いでしょ。御門町とか光南町はサラリーマンが多かった。

○戦後、瓦礫とかでぐちゃぐちゃな状態で、「自分の土地だ。」と主張することは大変でしたか。

あの時、ごちゃごちゃで、盗んだ人もおるよ。丸焼けだから。

○復興計画もあって、道路とかが影響しましたか。

換地もらった人は、船町でもありましたよ。埋めたでしょ。中町いう辺りが、狭かったから、その辺りの人が、船町へ出てきちゃったですよ。こっち側しかなかった町が、すぐ道路挟んで向かい側にも家ができ、入江を埋め立てた所に家ができ、北側にも家ができ、銀行も建った。中町いう辺り、国道に取られた辺りが、いろいろ換地をもらわれたんじゃないですか。国道2号線を造ったからね。あれもだいぶ後ですから、当面、交番所のある辺りは、広っぱじゃった。都市計画が出来てから、家を引いたりしてね。嫁ぎ先の土屋は、交番所の並びの筋にあったから、国道になった。北側の家は残ったんだけど、うちは南側だったので、換地になった。だから、ずっと引っ張ったんです。

○引き家や住まいについて、詳しく教えてください。

はじめに台所だけ持って行って、次に真ん中持って行ってみたいに、家を分けて引くんです。Nさんいう「引き屋さん」がおられて、あの頃ものすごかった。そうやって国道を造った。元は、あんな広い道じゃなかった。どこも、焼けた跡が、広っぱだった。北側で、家も建てて暮らしておったですけど、結局こっちへ引っ張ったん

です。あの頃、家を引っ張った家は、いっぱいありました。一軒の家の設計図があるでしょう。こことここ、こことここを、どう切れば引っ張って運べるとか、よう考えてじゃね。Nさんという家引き屋さんは、今でもあるよ。

私もその頃は、子どもを二人産んでいたから、一人おぶってたね。先に台所だけ持って行って、囲いも何もない所でおんぶして煮炊きしてたので、子どもに風邪ひかせて、肺炎になりましたよ。でも、しょうがないですよ。家を一度には、引けないんだから。落ち着いてから、その家に建増しして生活しました。

○娯楽について、何かご存じのことがありますか。

映画館はありました。大勝館があつて。テレビが普及する前は、映画しかないからね。子ども向けの映画館が、角にあつたんです。子どもを連れていきよつた。

舅も、岡山で映画館をやつてました。モダンボーイでね。

○占領下の暮らし、特に進駐軍について聞かせいただけますか。

占領下の暮らしでは、進駐軍が怖かつた。MP (Military police。憲兵) といったかな、兵隊さんの中にも、警察みたいな兵隊を取り締まる役の人がいました。警察じゃないよ。軍人さんだけど、オーストラリアから来た兵隊さん。やっぱり体が大きいでしょ。おまけに軍靴をはいて、拳銃を持って、軍刀をさげてました。近くに来ると怖いですよ。

父が、「進駐軍が来た！はよ（早く）、中へ、奥へ入つとれ！」と言うてました。父は、女の子ばかりで年頃だったから、娘を守らにゃいけんでしょう。MPさんが、見回りに来てんこともあつたんかな。その人らは、普通の兵隊さんとは違うんですよ。何しにきよたんか知らん

けど、歓楽街だったからかもしれんね。むこうは、親しくなろうと、チョコレート持って来たり、キャラメル持って来たりして、それをくれよつちやつたですよ。うちは商売してたから、そういう人の出入りもありました。

占領下で特に困つたり、被害にあつたというのは、聞かんかつたね。自分も、もちろん被害もないし。占領下つていう、厳しい状況はなかつたよ。私たちも、「占領された国の人間だ。」という意識はあんまりなかつた。負けたんだけど、卑屈になることもないし。悲しかつたけどね。

戦争は、訳がわからん時に始まつて、訳がわからん時に終わつた。空襲は、怖かつた。いつかやられると思つていたからね。でも、福山が、直接戦場にはならなかつたから、本当の戦争の怖さを知らないでしょ。戦争を間近に見てないからね。占領されても、「ワー！」と攻め込んできたわけでもなかつたからね。沖繩のような状態だったら、思いも違つうでしょうが・・・。

でも、終戦はびっくりしましたよ、突然で。それも、福山が焼けて、一週間でしょう。校舎もないし。

玉音（ギョクオン）放送は、勤務先の学校の校庭で聞きました。「今日、玉音放送があります。」と伝えられて、それまで天皇陛下の声を聞くこともないから、緊張しましたよ。天皇陛下は、絶対的な存在だったからね。本当に、驚きました。いろいろありましたね。

○今日は、長い時間、ありがとうございました。

証言者 松井 元相（マツイ モトゾウ）

昭和7年生まれ

終戦時 8歳 御門町在住

聴取日 2018年5月17日

○戦後のことを伺いたいと思います。よろしく
お願い致します。まず、お名前と生年月日、終
戦当時にお住まいになっていた町名を教えてく
ださい。

松井元相です。昭和7年2月16日生まれ。
御門町で終戦を迎えました。今は、明治町に町
名が変わっています。

○空襲の後のお家の様子をお話ください。

空襲後、家の後片付けをしました。瓦一枚、柱
一本から、全部、家族や自分の手で運んで片付
けました。誰も、手伝ってくれないですからね
え。

それから、これは自分のことだから、家の片付
けもやらにゃああかんし、空襲後一週間ほどし
たら、学校へ行かなければならない。学校は焼
けずに残ったので、授業があったわけです。広
島県立福山工業学校です。

○広島県立福山工業学校は、空襲で焼けなかつ
たから、講堂が救護所に使われたと聞いたこと
があります。

軍服とかそういう物が、学校の中にいっぱい
置いてあったんじゃから。軍事物資とかね。食
べる物はなかったよ。ここは、大丈夫いうて、
入れてあったんじゃろう思うんです。

○軍の物資を、備蓄してあったんですね。

それが、いつの間にかなくなってるんでね。
日に日になくなっていった。運び出したんか、
盗まれたんか、よくわかりませんが。親父が
勤めていた福塩線の沿線の駅でも、軍事物資や
なんかがいっぱい積んでありました。

○空襲後の一週間は、家の片付けを家族でされ
たんですね。

いやいや、片付けは一週間どころじゃあない、
ずっと毎日。

○お母さまと松井さんとで片付けをされたんで
すか。お父さまはお仕事に行かれてたんでしょ
う。

親父は、国鉄だから仕事に行かにゃあいかん。
行くけど、帰って来たら、すぐ片付けをする。
おじいさんとおばあさんも、みんなで。

○空襲の次の日から、電車は走ってたんですか。

1日ぐらい、休んだかな。

○終戦時は、県立福山工業学校の何年生でした
か。

僕は2年生でした。13歳で。

○国民学校を卒業して、それから、実業学校と
して、工業に進学されたんですね。

ええ。百姓をやったもので、親が田んぼ
をほっとくわけにもいかんと言うて、家の片付
け以外に、田んぼの補修もせにゃいかんかった。
その当時、空襲で田んぼはぐちゃぐちゃになっ
とるから、直さにゃあ米がとれん言うて親が言
うから。僕は、学校も行かにゃあいかん、片付
けもやらにゃあいかんし、田んぼへも行かにゃ
あいけん。子どもながら忙しかった。

○田んぼは、どの辺りにありましたか。

うちから歩いて、ちょうど10分ぐらいの所
にありました。今の、緑町のエブリィのところ
に。前の町名は、沖野上じゃったかな。陸軍歩
兵第四十一連隊の庭先があって、その向こう側
にありました。水替えとかなんとかで、水車の上
に上がって、足踏みで水を汲み上げてた。歩
兵第四十一連隊の周りは、全部田んぼじゃった。

そういうことで、農業の手伝いなんかで、大変でした。田んぼも家の片付けも、誰もやってくれんですからね。

家族が頑張ったおかげで、11月には、やっと小さな家ができました。あの時は、7坪以上の大きな家は、市が絶対許可せんかったから、7坪の家を建てました。平屋です。二階やなんか、全然造られんです。

できてすぐ、屋根の上にあがって駅のほうを見ると、福山城天守閣の焼け落ちた跡が見えました。福山駅の構内も、一望できたわけです。視線をさえぎるものが何にもない。何もないんだから、汽車の音とかがよく聞こえる。焼け落ちた天守閣と福山駅が一望でき、胸が詰まる思いでした。



○11月に家を建てられたのは、市内では、早い方ではなかったですか。

その当時、どこも建ってないですね。

○空襲の時に、一旦、避難されたのはどこですか。

明王院です。

○明王院へ行って、次の朝、地面が熱いなかを帰ってこられて、片付けを始められたんですか。焼け跡には何か残っていませんか。

何も残ってない。甕（カメ）の中へお米をいっぱい、30キロ入れた物があつたけど、土をかぶせてあつたし、その上に木が倒れていたが、これは、全然どうもなかった。それだけ。あとは焼けて、何もない。

家が建つまでの間、寝るのは、防空壕で寝て

ました。床下に防空壕が掘ってあつたんです。空襲の時、おじいさんとおばあさんは、そこへ逃げていて、助かつたんです。造りは、立派なことはないけど、助かつた。広さは、膝を抱えなければ、寝られんぐらい狭かつた。

空襲の後のことを詳しく話すと、空襲の翌日は、家ではなくよそへ行きました。蔵王の向こうの辺の親戚の家。空襲の直後から、食べる物もないし、寝るところもないんで、母と二人歩いて行ったわけです。明王院から降りてきてすぐ。

親戚の家へ行く途中、いろいろなものを見ました。防火水槽の中へ頭を突っ込んで亡くなっている人が、何人もいるわけです。一人や二人じゃない。焼夷弾の直撃を受けた人も見ました。親戚に向かう途中、そういう情景が目に入ってくる。

空襲の後、翌朝には食べる物も寝るところもないし、家の防空壕は祖父母がいるし、しょうがないから母と親戚へ行こうとしたわけです。

○空襲の時、お父さまは家にいらっしゃったんですか。

家におりました。親父に「お前は、もう逃げえ。」と、言われたけど、親父も家を守ろうと思って、火を消していた。途中まで消したんですが、無理でした。逃げる時も、何も持たずにそのまま逃げるのがやっとで。田んぼの中を、必死に逃げていると、シャーッと、焼夷弾が落ちてきた。僕の1メートルくらい左側へ落ちました。あれが直撃してたら、私は死んでたでしょう。

○それでは、蔵王の親戚から戻ってきて、防空壕で寝泊まりしながら、3カ月間せつせと片付けをして、家を建てられたんですか。

そうそう。ただ、家の防空壕はせもう（狭く）で、ゆっくり寝られないから、親父が勤めてい

る所が戸手駅でしたので、そこへ行って駅舎に寝たりもしていました。毎日、防空壕はしんどいから。

○家を建て終わった後は、どのように過ごされていたんですか。学校は、続けて行かれてたんですか。

そりゃあ、ずっと学校に行っていました。

○田んぼに被害はあっても、その年の秋、収穫ができたんですか。

できました。

○秋には、一応お米が収穫できて、家族はそれで食い繋いで、家を建てられたんですね。家が建ってから、昭和21年も、22年も同じような状態で学校へ行かれたんですか。卒業されたのは、いつですか。

学制がコロコロ変わって、学校には6年行くとるんです。

誠之館も盈進も、全部同じです。学校側は、「辞めてもいい。行くんじゃないら、行きなさい。」といった感じです。結果的に、だいたいの学生が6年行きました。18歳まで。

○じゃあ、普通の高校に学制が変わるまで、ずっと工業学校にいらしたんですね。残りの2年間で工業高校になったんで、6年間ですね。

そうです。

○でも、実際、昭和19年、20年は、ほぼ勉強が全然できなかつたんじゃないですか。工業学校に入って、動員なんかに行かされましたか。

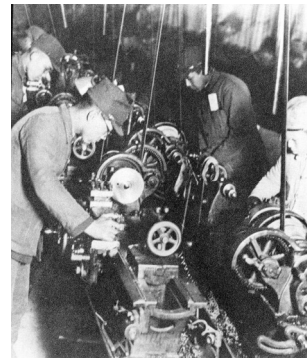
それが、動員は、あまり行ってないんです。

○工業学校は、戦争に必要な技術者になる可能性があるから、勉強させてくれたんですかね。

それはどうか、わからんけど。その当時、文

系の人が学徒動員に行っていました。旧制中学校の学生とか。

僕が学徒動員に行ったのは、一日だけ。一日行ったらすぐ空襲で、終戦になった。一日行っただけから、日当を何十円かもらった覚えがあるね。



○専攻は、何科でしたか。

電気科。当時、どこがいいかわからんから。

でも、電気科というのは、終戦になったら、今度は電気科に行く人がおらんから、電気科はやっていけんでしょ。電気科というのは、僕らが入る時に作った科らしいんです。設備がなかったわけ。最初の間は、机で授業だけですが、それ以降は、実習をやらにゃあいかんでしょ。そしたら、実習用の道具がないわけです。他の紡績科とか染色科とかいうのは、何十年もやってきたから、いろんな機械があるけども、電気科は機械がない。だから、「もう廃止です。あなたたち、どうしますか。」と聞かれて、選択肢がなかった。

○もともと備後緋の織物の工業学校ということで、そこから始まったんですね。

だから、しょうがないなと思うたね。「紡績科か染色科のどっちかに、行かなければいけない。」と、先生に言われて、「染色科に行きます。」と言うしかなかった。機屋（ハタヤ：織物屋）になってもしょうがないと思うたから。途中から機械科と応用化学科ができたけどね。

○学制が変わったために、しっかり勉強する機会もなくて、学校に行って、勉強して、どういう仕事に就くのかを、決めることが難しかったですね。

松井さんがご卒業の頃、福山工業学校は、福山工業高等学校に替わり、一年後に福山南高等学校に変わっていますが、福山南高等学校で卒業されたのですか。

いや、広島県福山工業高等学校。

○戦後の学制改革によって、移行措置もとられて、スムーズに移行していると思っていました。でも、実際には、松井さんのような状況に置かれていた人もたくさんいらしたのですね。

電気科のほうは、学校のほうから、「やめさせてくれ。」ということだったから、電気科に残れるということはない。入学してからも、戦争が終わってからも、専攻科ができたりなくなったり、本当によく変わった。だから、僕も間違えて話していることがあるかもしれません。

○ありがとうございました。お疲れ様でした。

証言者 森近 静子（モリチカ シズコ）

昭和12年生まれ

終戦時 7歳 野上町在住

聴取日 2018年10月25日

○お名前と生年月日、年齢を教えてください。

名前は、森近静子。昭和12年11月8日生まれ。80歳です。

○福山空襲時は、どちらにいらっしゃいましたか。

野上町二丁目です。ただ、当時は番地が違っていました。

○その二丁目というのは当時もあったんですか。

いや、役所が後からつけたみたいです。野上町は大変広く、一丁目・二丁目・三丁目があります。私の家辺りは野上町古地（コジ）だけど、今はその古地という呼び名はなくなってます。当時のとおりにいうと、福山市野上町古地〇〇番地。

○お生まれは、どちらですか。

現在の霞町三丁目です。霞小学校の真裏の商店街。昔は、西霞町と言いました。

現在、私が住んでる所は、自宅と店と工場（コウバ）がありますが、戦争中は、そこは工場だけでした。というのは、父が召集になった時すでに私は四人姉妹で、更に母のお腹には五人目がいました。四人も五人もの子どもを残して戦地に行くということで、父は、中心街にいるよりも、少しでも外れにある工場の側へ連れてきておく方がいいと思ったんでしょうね。工場の軒に建て増しをしてもらって、家族みんなでも移りました。霞町の店は、その時はそのままでした。

○ご両親は、どんな方でしたか。

父は、明治39年生れ。昭和46年に亡くなりました。母は、明治45年生まれ。平成13年に亡くなりました。

父は、厳格でしたね。もうそれは、本当に。子ども同士が喧嘩をして、母がなだめても、その声が聞えると、すぐに父が、部屋に入ってきましたね。

それと、12月に二学期の成績をもらうでしょ。成績が悪かったら、昔は井戸があったから、12月の寒い時にバケツに井戸の水を汲まされて、両手に下げさせられた。母がなかへ入って、断りを言うてくれて、ようやく許してもらった。私は、先生から成績をいただく時より、毎回、家に持って帰る時の方がドキドキした。そのくらい厳しかったね。

今は、私の子どもたちが言うのね。「うちのお父さんとお母さんも厳しいけれど、おじいちゃんというたら、おばあちゃんがかawaiiそうだった。おじいちゃんは、福山じゅうにない『化石』じゃ。」言うのよ。そのくらい、父は厳しかったからね。福山中、知らん人がいないくらい厳しい父だった。それを、常に母がそっと後ろに添って、助けてくれた。母は、父が亡くなって約30年ぐらい、一人で頑張ってくれて、私たち姉妹は、皆、母を大事にしました。当たり前ではあるけど。でも、本当に余所（ヨソ）様から見ても、「お宅のおばあちゃんは、恵まれているね。」と言うてくださって。それが、「私は、当たり前のことをしてるだけ。」と思えるぐらい、母はたくさん苦勞をしております。そのような家庭で育ちました。

○ご兄弟何人ですか。年齢も教えてください。

一番目は、昭和9年生まれ。二番目は、私。三番目が、昭和14年生まれ。四番目が、昭和17年生まれ。五番目は、昭和19年生まれ。女の子ばかり。五番目の妹は、「末枝（マツエ）」といって、末の字がついてるんです。今はそん

なことを言ったら人が笑いますが、父は昔の人で男の子が欲しかったから、女の子をこれで終わりにしようと思って末をつけたんだと思う。ところが、またその後も生まれてきてね。六番目は、昭和22年生まれ。七番目は、昭和26年生まれ。本当は、一番上を死産で亡くしてるから、八人姉妹だけ。

福山広しといっても、女の子ばかり七人。それでも、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学まで、学校へ行かせたのはうちだけだろうと、父は常にそのように申しておりました。良しにせよ、悪しきにせよ、そういう環境の中で大きくなっております。

父は、自分が明日食べるお米がなくても、子ども七人には勉強をさせる。下から二番目は私立へ行ってるけど、原則は国公立でないで行かさないと、これが父のモットーです。厳しかった。でもね、母が良かったから、皆その父の厳しさのなかで大きくなりながら、それだけのものを学んできたと思います。

○「女は大学に行かんでいい。」と言われた時代ですよね。

ええ、「行く必要ない。」と言われた時代です。

○お父さまは、寝具屋さんをずっとやってらっしゃって、お母さまがお嫁にいらしゃったんですか。

そうです。父がそこへ工場をもったのが昭和4年8月。そこへ、母がお嫁に来た。父は田舎の三男なので、町へ出てきてね。だから私たちは、ものすごく貧しいなかから大きくなった。ただ、父親のそういう精神に、どの子どもすべてを依存して大きくなったからね。どの子ども、父に背かず、新しい考えも持たないで大きくなったから。まあそれも良かったんじゃないかなと思います。今じゃ、そんなのおかしいと言われるけどね。

○お父さまの田舎とはどちらですか。

今の熊野町（当時、沼隈郡熊野村）です。

○どんな暮らしをされておりましたか。

本当に、貧しい暮らしでした。それはもう、言うに言われない。でもね、家がある私たちなんか、まだ良い方かなあと。お米は、うちは両親とも熊野だから、二人で熊野あるいは沼隈の山南（サンナ）の方まで足を延ばして行って、薄い親戚、知人、そういう方々にご無理を言って、譲ってもらってました。なんたって子どもがたくさんいるんだから、ご飯を食べさせないといけない。お米を調達するのに、初めのうちは、親戚とか知人も快く譲ってくださってたけど、次第にその人たちも持ち分が少なくなってきたら、良い顔はなさらないからね。だから、母が私を連れて、新涯の方までお米を買い出しに行っておりました。そういう大変な生活も味わってきております。

○お米を手に入れるのは、お金ですか。物々交換ですか。

うちの場合はね、戦後は父が新円を持っとったらしい。旧円はもう効かなくなって、新円の時代（昭和21年新円切替）になった時の記憶です。

父はワンマンなところがあって、「男が動いたら分かるから、お母さんとお前、行って来い。」って言われて。帰りはそのお米を隠すために、母が乳母車を押して、乳母車の上に私を乗っけて帰る。小学校3年年より上になって、そういうことさせられて。中学校へはまだ行ってなかったけど、小学校高学年になっても、そういうことをしなければならなかったね。

○その乳母車は、何でできておりましたか。

乳母車そのものは金属でできておりました。箱は木製で、箱のほとは国防色のごつい太い糸

で編まれた布でぐるっと囲ってありました。底へ板が敷いてあって、自転車のタイヤを小さくしたような車輪が、四つ付いていました。タイヤはゴムだけど、今のような感じじゃない。箱の大きさは、70センチあるかないかじゃろうね。幅40センチ、長さ70センチくらいの箱の中に、底へはお米やお麦を入れて、時期によってはお芋を分けて下さる方もあって、そういうものを購入して、私が上に乗って帰っておりました。

戦後すぐのころ、五女の末枝が2歳くらいで、自分のことを「まっちゃん」と言うてたんですが、ご飯が炊きあがったら「まっちゃんに、白い、いいところ（ところ）をちょうだい。」と言いました。私は、今でも、その言葉が耳へこびりついてます。麦は上に浮くんですが、どんなに洗っても灰汁が出て黒くなるんです。だから炊き上がったご飯は、上の方は麦ばかりで黒くなっていて、下のお米の所は白い。母はそれを底から混ぜて、皆に同じようにして食べさせてくれる。その2歳の妹でも、おいしいところをわかってたんですね。「まっちゃんに、白い、いいところ（ところ）をちょうだい。」と言ったんです。大人になった今、姉妹でその話をする時、本人は覚えてないから、恥ずかしいんでしょう。「ああ、そういう時代が、私にもあったんじゃないか。」と、言ってます。

なにせ、家族が大勢だからね。大勢の者が、助け合って生活しないと生活できない時代でしたね、本当に。

○ご家族の着るものは、どのようにしていらっしゃいましたか。

私が小学校3年のとき、初めて「お針」いうものをさせてもらいました。母から和裁を習ったんです。というのはね、戦後は着るものがないから。母の銘仙（メイセン）を解いて、もんぺを作るのを教えてもらいました。銘仙とは、

絹織物の着物のことです。母は戦前に嫁いできてるでしょう。その当時は嫁入り道具として銘仙を普段着として持っていくのが一般でした。今は、ウール・お召（メ）し・一越（ヒトコシ）・羽二重（ハブタエ）、何でも絹織物があるけれど、その当時は銘仙。銘仙なら惜しげもなく、何枚でも解くことができます。一枚で子どもたちのもんぺが、二枚から三枚くらい取れました。

着物をほどいて布状にしたら、自分で、「すいしばり」をするんです。「伸子張り（シンシバリ）」とも言います。布を、細長い竹の棒針で、ピンと伸ばして留めていく。板張りにする人もおった。こうやって乾かすと、布がしわにならず、アイロンがいらぬんです。今はクリーニング屋さんがあるけれど、その当時はありません。だから、全部自分たちでやりました。どこのうちにもこういう板が立っておりました。母が夏の暑いときに作業して、ちゃんと畳んでおいたものを、冬には、母が断って（裁断して）、夜なべをして縫いました。それもいい加減じゃと思うんです。「あんた、ちょっと来てみ。」言うてね。布の丈を、足と腰の位置に合わせて決めて、そうやって断ってくれたものを、私とすぐ下の妹と姉と三人で、夜なべにもんぺを縫うのを習いました。上にも下にもゴムを入れて、今の作務衣のようなものです。

○下がもんぺなのはよく知られていますが、上はどんな物を着ていましたか。

上は、有り合わせのお古（おさがり）を着てただけ。母が銘仙で、作務衣の上着に似た物を作ってくれてね。下は、「軽袷（カルサン）」と言ったと思うけど、日本が発祥じゃなくて、ポルトガルからきたものなのよ。冬は、母がセーターを編むのも教えてくれたから、古いセーターを解いて、その毛糸へ糸を混ぜて自分たちでセーター編んでました。

だから、上は何かあるんだけど、下がね。

銘仙は、朽（ク）ちとるんじゃないか思うくらいすぐ破れるんです。必ず横裂きに裂ける。脛当（スネア）てとお尻に居敷当（イシキア）ては、しっかりしておかないと、すぐ裂ける。居敷当は、お尻の部分の中側にするんです。同布があれば、同布で。同布がない場合は似た様な布でね。ちょっと穴があきかけたかなと思うとき、母が補修をしてくれる。穴当てをしながら、何重にもステッチをかけて丈夫にする。だから、ちょっと横裂けに裂けたと思ったら、もう一度それを縫い合わせて、使わされてたからね。

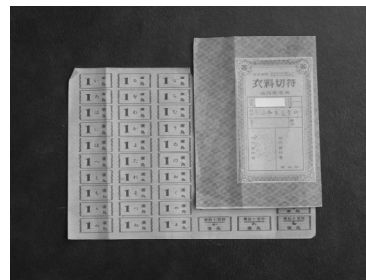
だから、本当に、若い人に言っても、決して分かってもらえないような、そのような生活をしてまいりました。でも、皆元気で、そろって大きくしてもらったということは有難いこと。そういう工夫をしながら生きてきたという、そのことが、戦前・戦中・戦後はよかったんじゃないかと思います。生きることに必要な知恵も、与えてくれるしね。だから、私さっきも言ったように、両親に感謝しています。

○戦前も、そのように工夫されてたんでしょね。

そうそう。戦前ぐらいからね。

○衣料切符のことを、お話いただけますか。

衣料切符というのは、昭和16年からあったんです。でも、18年になったら、物資不足でなくなりました。ところが、今度、戦後に闇（ヤミ）がはびこってきた。闇市ができる前は、こっそりと裏で手を回して、普通よりちょっと余計にお金を出しさえすれば、どこかに品物はあったんです。なければ、進駐軍の品物を手に入れた。本当に、目に見えないところで色々動いていたみたい。そういう流れのなかで、戦後昭和22年から闇が流行りだした。この衣料切符制度も、昭和22年から始まって、26年には終わったんです。



私たちはまだ小さかったけれど、年頃のお子さんを持った家庭では、衣料切符は余計に貴重でした。それがないと、お嫁入りができません。福山市なんかは、最高が80点くらいだったからね。単衣（ヒトエ）の浴衣で12点。普通の着物が24点だったかな。それと、裕（アワセ）の着物があるでしょ。それこそお召しとか訪問着とかいうような、裏のついた裕の着物だったら48点。そうしたら、もう下着も何も買わなくても、それ一枚ずつで嫁入りするのに、80点が消えてなくなるでしょ。だから当時はね、この子が20歳になるまで待ってもらえんか、というお話もあったそうで。それは20歳にならないと衣料切符が手に入らないということだね。お父さんお母さんの衣料切符は蓄えて、その子のために使うという、何とも涙なくしては話せないような、痛ましい実態があったんだと思います。でも、私一人でなく、社会一般の人みんなも、それを乗り越えてきたんだからね。だから時々言うでしょ。「戦中戦後を凌（シノ）いで生きとる者は、急に、電気がなくなっても生活ができる。」ってね。そこらへんだと思います。辛抱ということをするから。

私ら、着る物を買ったら長く着ますからね。やっぱり、それが小っちゃい時から植えつけられた教えだと思います。今の人のように、何でもいいから、そこらへんにあるもの買って、あつというまに「ゴミ箱行き」と言うようなことはできません。気持ち的にね。

○お父さまが、復員なさったのはいつくらいで

すか。

昭和19年1月に召集されて、翌月2月には帰ってきたんです。広島に行っただけで、帰ってきました。というのは、父は喘息があった。軍医が、胸を押さえた時に、「君は結核だ。帰ったら、すぐ名医に診てもらいなさい。」と言うて、押し返された。

それで、「ふうが悪くて、ふうが悪くて。もう男として、自分はだめだ。」というような言い方をしていたら、ある人が、「四人も五人もおる子どもさんを、そのままにしたら大変だ。今、ここは目をつぶって、福山へ帰って、福山のために必ず何かすべきことがあるから。」と言うてくださったそうです。だから、父は戦前からそうだけど、戦中・戦後にも、かなり、みなさんのためになるようなことはしていました。

○8月8日の空襲の時、お家は大丈夫でしたか。

焼けませんでした。8月8日の空襲の日、防空壕は、畳の大きさを言うと、三畳足らずの防空壕が作ってあって、それに母と子ども五人、最後に父が滑り込みました。その防空壕を蓋(おお)っていた栗の八分(ブ)板の角に、焼夷弾が落ちたんです。そういう几帳面な父だから、どこへ行って探してきたのか分かりませんが、栗の八分板じゃ言うて、厚さ2センチ5ミリぐらいの栗の木の板を調達してきていました。その板の角へ焼夷弾が落ちた。すごかったですよ。今でも覚えてます。「シュウシュウシュウシュウ」いう音を立てて。

父親は、そういう立場だったから、皆さんと一緒にバケツをもって、東の方へ消火に行っていました。みんなが「森近が一！森近が一！」と言うのを聞いて、早く駆けつけるように諭されて、飛んで帰ってきました。父が「もうだめだ！」と言うて、防空壕へ滑り込んできた途端、焼夷弾が落ちました。父が入って来るから、入口を開けているでしょう。私たちは、そのすき

間から落ちてくる焼夷弾が見えました。「シュウシュウシュウシュウ」というたかと思ったら、何とも言えない地響きがあって、それで栗の八分板がパンと割れてね。朝起きてみたら、割れた板が、3メートルと5メートル先へ、分かれてすっ飛んでた。

○他は、大丈夫だったんですか。

みな、不発弾だったんです。それで助かった。爆発しとったら、それはもう無理だったと思います。

私の家の位置は町の端にあたり、焼夷弾が落ち止まりになった場所だと思います。どこへ落ちとるいうんがわかるんでしょうね。「警察」と言わずに、当時、何て言ってたか・・・「駐在」さんじゃろうか。朝、その人たちが、収集しにきてくれた。憲兵でもなくて、取り締まりをする人。そういう方が、不発弾を引き取にきてくれて、それでいいように治まったけどね。

うちの屋敷の焼夷弾が落ちたあたりの土は、もう全体が油だらけ。その油が混ざった土が隣の家の二階の屋根まで飛び散って、屋切りに、逆さまの日本地図のような模様ができていた。焼夷弾が落ちた衝撃というものは、栗の八分板が二つに割れて地面に突き刺さり、隣の家の屋根まで、土が飛び散るほど激しいものだった、ということ。

以前、公民館で平和関連の行事があった時、それこそ大昔のことだけど、公民館で話された方の中に、それを見たいと言われた方がいました。うちはもう焼夷弾の落ちたあとは何もないけど、まだお隣の屋切りに、この逆さの日本地図の模様が残っていたので、ご案内しました。私はね、子どもたちの平和教育のために、常にそれを見せて話をしてきました。ただ土が散ったというだけでなく、人に話して、人が印象深く記憶してくださるものが残っていたということが、滅多とあることではなく、貴重なもの

だったと思います。

○森近家の防空壕は、当時だから、自分たちで作られたんですよね。

いえ、おそらく素人でなく、その道の人が、作っていたと思います。まだ住まいをする前に、防空壕だけは掘っとったらしいから。180坪の敷地全部が工場ではなくて、半分工場で、半分は田んぼで、その端のわずかなスペースに野菜を植えとったという記憶があります。

○8月8日の空襲のあと、家自体は無事だったので、そこへ住めたんですね。

だから、私は他の人に比べたら、まだましだったと思うてね。戦後は、それこそどこのお家も焼け出されて、住まいということについては大変でした。うちなんかも、5所帯も6所帯も移ってきて、「あんな親戚いたんかな。」というような、見たことのない人が家に入っとりましたからね。

○焼け出された人たちが、移り住んできてたんですか。

はい。私たちがその方たちを存知あげなくても、両親が、遠い親戚になるのか、普段おつき合いのない人、どこかでお世話になったのか、他人に近い人を同居させておりました。最初、家族だけで七人。昭和22年に六女が生まれて、八人になっとりますからね。だからうちも大変なのにね、みんな雑魚寝ですよ。

○たくさんの家族が同居していらっしゃると、どんな風に生活なさっていたんですか？

工場は、倉庫もあるでしょ。そういう状況のなかで、皆お互いに気を遣っていたんでしょうね。うちの父は、厳しいけれど、人間的には優しさを持ってたんかなあ思うんです。何もトラブルは起きなかった。

同居していた方は、そのうち親や兄弟に助けられて、家を建てて出られた方もあるしね。そうこうしよると、福山市が昭和20年12月には500軒という市営住宅を建てた。それに入居した方もあった。それから、今の市の体育館の入り口あたり、当時の護国神社のあった場所に、「引揚げ住宅」というのが並んでたんですよ。あの砂地の上へね。そういうのができて、そこへ出ていかれ方もあったね。父の同窓の方で、その人も田舎から町へでてこられた方でしたが、外地へ行かれて、引き揚げて帰ってこられてました。うちへしばらくおられたけど、引揚げ住宅ができて空いとるといふからと、そこへ行かれましたね。

印象的だったのは、友だちの家の事です。夏の朝方お友だちの所へ行ったら、ポッテンポッテンという音がしたんです。それは、露が落ちてたと思うんです。というのは、トタン板で、それも焼けトタンで屋根がふいてあったんです。うちは、焼けトタンはどこにも使っていない。

友だちのことを思ったら、私は家ということについては幸せなんだと、その時初めて感じました。「家に、大勢入ってこられてるけど、文句を言ったらいけない。こういうなかで生活してらっしゃる方もいるんだから。私は幸せよね。ささやかな幸せではあるけど、幸せを感じて生活していくべき一人だなあ。」と、思いました。それは、大きな家で焼けなかったからというんではなくて、その当時、うちに焼夷弾が落ちたけれど、家族みんな助かった。うち以外は、その辺りの半分は、農家でした。家が焼けずに済んだご近所の皆さんも、よその方を自分の家に住まわせていらしたからね。思いは、同じかな。

○ご近所のどこの家も、焼け出された人を受け入れて、一緒に住んでらっしゃったんですね。食事とか、それだけ大人数だと、支度とか大変だったんじゃないですか。

父としては、うちがして差し上げられることはしてあげてたと思います。でも、倉庫に七輪を持ちこんだりして、煮炊きをそれぞれ自分でされた家族もある。うちは人がよく集まる家で、父は人をもてなしたり、お世話をするのが好きだった。母は、父に従うのが当たり前だと思ってるから。でね、うちには「おくどさん」が三つあった。「おくどさん」というのは丁寧な言い方で、普通は「くど」だけど、土で囲って竈（カマド）を作ってたの。それを、自由に使ってもらっていました。「おくどさん」の上に釜をすけて（置いて）、下から火を焚くの。

○火を焚くのに、燃料が必要ですよ。それはどうなさってましたか。

それは、みんな自由に使ってもらってた。薪がほとんどでした。

父親も母親も熊野の人間だから。裾狩り（スソガリ）して帰りさえすれば、落ちている柴とか大きな枝も手に入るでしょ。それを運ぶのはリヤカーだった。今のように車がないからね。父が、リヤカーで洗谷（アライダニ）の急な坂を登って、支度して持って帰ってた。今は道がよくなってるけど、当時は土の道が掘れ込んで、大変な坂道だった。

○当時の勉強・学校生活・遊び・楽しみについては、どうでしょうか。

遊びはねえ、それこそ、女の子でも「缶けり」したりしていました。缶は、あったんです。そりゃ、進駐軍がいっぱい缶詰を持ってきていますからね。あとは、「かくれんぼ」したり、遊びのなかには楽しいことがいっぱいありました。女の子でも柿の木の上へあがって隠れたりした子もおったし。そりゃあ楽しかったねえ。

とてもよく遊んでたけど、でも、うちはそのように父が厳しかったから、もう小っちゃいときから、朝起きたら、「誰々は、お便所掃除。

誰々は、ご飯の支度。」、夕方も「お風呂は、誰々が焚く。」というふうに、役割を決めて手分けしてやりました。

ずっと後の事だけど、私の妹が結婚して分家しても、しばらくうちを手伝ってた。その妹の婿は、母が起きてご飯の支度しないで、姉妹がご飯の支度をするのを見てびっくりしたと、言っていました。とにかく何があろうとも、ずっと「掃除は誰、洗濯は誰、取り込みは誰」と分担して家事をこなしていたから、友だちと長い時間は遊べなかった。でも、今の時代と違って塾があるわけじゃないし、十分、友情を深めてきてます。

○学校は、戦後すぐ再開されましたか。

私たちは、霞小学校が焼けたので、西小学校に行きました。西小学校は、「二部式」と言って、西小学校の校舎を、午前と午後に分けて交互に使っていました。

西町と言えば、今も忘れられないのが、焼け跡の匂いです。西町のあたりは、人があっちこちで焼け死んでおられるから、臭いが鼻について、その臭いが、今でも記憶に残っています。現在のように、衛生的な管理ができてるわけじゃなしね。学校は焼け残ったけど、亡くなった方は多かった。

話が逸れましたが、中学校は、当時鷹取中学校がなかったので、みんな城北中学校に歩いて行っていました。

○陸軍歩兵第四十一連隊の兵舎を、校舎に使っていたのはいつですか。

中学校で入学試験を受けて、広島大学付属中学校に合格してからです。この前の南公民館でのお話で、「仮校舎として兵舎を使った子ども達は、あんまり良くない裏の校舎を使って、広島大学付属中学校の者ばかり、前のいい校舎を使った。」と、言われていましたね。でも、それ

は違って、私たちも裏の校舎も使ってたよ。けど、私たちは国立の学校だったから、国のそういう建物を利用せざるを得なかったんでしょね。

市の中学校の名称は、第一・第二・第三中学校と言っていました。第一中学校は東中学校、第二中学校は城北中学校、第三中学校が城南中学校です。市立は、そのように数字で呼んでました。戦後、六・三・三制になって、しばらくして草戸へ鷹取中学校（昭和24年設立し、一時的に第四中学校の名称で呼ばれた。）ができましたが、それまでは、まだ学校が新設できてなくて、校舎がないので、鷹取中学校区の学生は、城北中学校へ行ってました。

○陸軍歩兵第四十一連隊の建物を、校舎として使ってた時期というのは、いつ頃ですか。

昭和22年には、もう使われておりました。私が入学したのは、昭和25年で、中学校・高等学校と6年間、そこを使わせていただきました。

○校舎の床板に、すき間があったとお聞きしましたが、何だったんでしょうか。

私が床板にすき間がある理由として考えたのは、木を板にしようと思ったら、曲がっているところを落としていくでしょ。もったいないから、それを落とさずそのまま使ったからすき間があるんじゃないかと。でも、軍隊が土足で床の上を歩くんだから、板は厚いの。そのすき間から風が吹き上げてきて、冬とても寒かったのを覚えてる。本当に寒かったから、みんな座布団を持って行って、それを敷いて正座して座ってました。しかもスカートで脛をしっかりカバーして。

○その頃、制服はありましたか。

広島大学付属中学校は、最初から制服があり

ました。上級生はセーラー服にグリーンネクタイ。それが、昭和26年から襟なしブレザーに切り替わることになり、前の年に入学した私たちも、その制服を着ることになりました。下は、前に二つ、後ろの二つボックスがあるスカートだった。ちょっとフレアーがあったね。

これは私の娘の時だけど、PTAの役員会で、制服をどう思うかというて聞かれた時、私のこの経験をお話したら、「今、子どもたちの制服は変えんほうがいい。」という事になった。制服を変えるのは、とても難しい問題です。

○当時、この制服は高かったですよね。

そりゃ高いですよ。父がびっくりしてたね。私だけでなく、妹たちも行ったからね。「国立学校じゃいうから、安い思うて行かせたのに、何が安かろうに。」と、父が何度も言ってました。

○昭和9年生まれのお姉さまは、進学されたんですか。

姉は、城北中学校へ1年まで行って、2年くらいから新しい校舎の鷹取中学校へ行きました。教育制度は六・三・三制になっていて、葦陽高校が校区だったので、鷹取中学校から葦陽高校へ行って、奈良女子大学へ行きました。

私の時は、適性検査というのはなかったんだけど、姉の時に、初めて適性検査といって、センター試験に似たようなものがあったらしいです。

その姉が大学2年の時、突然亡くなった。「盲腸切る。」という電報と「死んだ。」という電報が、同時に届きました。当時は、盲腸の手術でも危険だった。

○戦後は工場も残ったから、お仕事は、そのまま続けられたんですよね。

はい、続けてます。父親は、頑張っって土地やなんかも買ってたけど、子どもの教育費で、み

な土地は手放しております。

○物が無い時代に、どのように、布団製造をされていたのですか。

その当時は何にもないから、ずうっと、「打ちかえ」だけの仕事でした。

布団が作れるようになって、綿花は全部輸入綿でしたね。神戸から運んでいました。日本の綿花は、なかった。でも、昔はね、綿を田舎では栽培していたようです。

○戦後、どんな履物を履いていましたか。

みんな、作っていました。昔は、草鞋を作る木でできた道具があったんです。工場に50センチくらいの長さで、幅が一間くらいある敷石（シキイシ）があったんです。父親が先生になって教えてくれて、みんなでその石へ座って草鞋を作っていました。

○大人の娯楽・大衆文化・文学について、ご存知の事があったら、お話しください。

それは結構ありましたね。今、なくなってるけど。美空ひばりが来たのは、昭和25年くらいで、KO劇場だったね。

戦後は、福山にはKO劇場と大勝館、Oさんという人が持ってた。それから、千鳥座と地球座。地球座はよく行っていました。Hさんという人が持ってたと思います。それから、日米館と大黒座とスバル座、それをFさんが持っていました。昔でいう、興行師でもある。そうそう、福山劇場もあったなあ。それでも、あれはすぐ無くなったねえ。あれは、日本勧業銀行のところ、今のみずほ銀行の場所にあったね。

船町に「ヨカロ」という食事屋があった。船町の角っこ。今の中華料理の青冥（チンミン）やウエスギの辺り。あそこらがね、当時は娯楽の中心地でした。

映画館は、小中学生だけでは入れないんです。

だから、行くときは親子同伴です。その頃はナイトショーというのがあって、ナイトショーは安いんです。夏の暑い時期なんか、よくナイトショーを観に連れてってもらってました。娯楽と云ったら、まだテレビもない頃だしね。

うちは、テレビは早かった。昭和31年に取り付けた。父親がそういう性格の人じゃから、みんなに見せてあげよった。畳の部屋があったのを板の間に替えてね。そうしたら大勢で見れるでしょう。そういうことで、早くからテレビは見せてもらった。このあたりは、テレビが普及するまでは映画館しかなかったからね。だから、近所の皆さん見にくられるの。皆さん来てくださるのが、父は嬉しくてね。テレビは、幅があって奥行きもある、本当に、出始めの頃のものでしたね。

○普通は、みなさん、昭和39年のオリンピックの頃を買ってたわけでしょう。それよりはるか前ですね。

福山の電気屋さんは、電気屋さんが1台持つとただじゃいけないかな。注文しても、しばらく届かんかったからね。

○車の免許も、福山では、早くに取得されたとか。

女性では、二番目。女性第2号。昭和31年に、取りました。大学浪人中に。

私に免許を取らず時も、父が「誰もとってないから取れ。」って言うて、取らせました。それで、免許もらいに行ってみたら、「女性第2号です。」と言われて、「第1号は、どなたですか。」と聞いたのを覚えています。

父親が、何でも新しいことがいいという考えで、寝具の一級技能検定士という資格を取りに、広島まで8日間通いました。女性では、広島県で初めてだったとかで、父は喜んでいました。父は、新しいことも好きでしたが、教育を付け

ることも大事だと言って、経済的に大変でも、学校に行かせてくれました。

○進駐軍のことで、覚えていらっしゃることはありますか。

進駐軍のことは、子どもだったのでよく分かりません。進駐軍の軍人さんに、チョコはもらってないけど、ガムはもらったことがあります。缶詰は、シャケだったと思う。それと牛肉。大和煮みたいな感じで、噛んでも「これが肉かいな。」という感じでしたが、おいしいんです。こんなもの、食べたことがないっていう感じでした。

○戦後、食べ物が変わりましたか。

変わってきたと感じたのは、副食ですね。おかずが変わってきた。それと、私たちがそんな物をどうやって食べるのと思うような物も出てきた。「南蛮（ナンバン：とうもろこし）」と言ったね。コーンのこと。そういうものが、缶詰で入ってきた。私ら、長いままの南蛮をかじってたから、缶詰のコーンが珍しくって。

○そのように、食事が欧米化したと思われたのは何年頃でしたか。

昭和28、29年頃かな。30年までにはなっていなかった。まだ、うちにテレビがまだなかったから。

都会で生活して手に入れた物を、福山の田舎に持ってくる身内がおられる家は、もっと早く欧米化を感じておられたと思います。「都会へ行ったら、こんなもんがあるんよ。日本でも、こんなもんがあるんよ。」と言えるような食品や商品を、子どもが都会から持って帰ったり、親戚が送ってくださったり、というようなことをしていらしたと記憶しているからね。

○何か次世代の子どもたちに、伝えたいことは

ありますか。

世界の平和について、「アナログの心」と、「デジタルの知能」とを十分に駆使して、親から子へ、子から孫へと、伝え続けてほしいと願っています。私も、できることはやっていきたいと思っています。

○今日は、ありがとうございました。

証言者 渡辺 早苗（ワタナベ サナエ）
昭和15年生まれ
終戦時 4歳 紅葉町在住
同席 駒形昭子（コマガタ アキコ）
〔実妹〕
昭和17年生まれ
聴取日 2018年8月29日

○お名前と生年月日を、教えてください。

渡辺 渡辺早苗です。昭和15年9月20日生まれです。

○福山空襲の日は、どちらにいらっしゃいましたか。

渡辺 紅葉町の社宅にいたんです。昔の社宅は、今みたいにアパートじゃなくて、一軒ずつの家だったんですよ。隣には友達がいて、よく遊んでいましたし、お向かいには風呂屋のおじさんがいて、社宅全体が、まるで大きな一つの家族のようでした。

私は、神戸で生まれました。昭和20年には、神戸に大空襲があったんです。でも、家族はみな無事でした。神戸の空襲は怖かったけど、福山空襲の時ほどよく覚えていないのよね。

父は三菱電機に勤めていて、会社から、「子どもがいる人は、福山にも工場があるから、みんな避難してください。」と言われて、みんなに見送られて、電車に乗って、私たち家族と3～4軒の父の同僚の家族で、福山に来たんよ。母は、地図を広げて、「えらい田舎に、行かにゃあいけん。」って、言ってたけど。

○お父さまもお母さまも、福山のご出身ではなかったんですか。

渡辺 父は鹿児島出身で、母は福岡出身です。二人は、東京で知り合ったらしいけど、転勤が多かったみたい。

○じゃあ、慣れない土地で、大変だったでしょうね。

渡辺 そうだったと思います。

○ご兄弟は何人でしたか。

渡辺 終戦の時、5歳の姉と4歳の私、そして、2歳の妹の三人姉妹でした。終戦の年の10月には弟が生まれ、昭和27年に、一番下の妹が生まれて、兄弟は五人になりました。

○福山空襲の時、お母さまのお腹の中には、弟さんがいらしたんですね。

渡辺 そうです。

○お父さまは、出征されなかったんですか。

渡辺 父は兵隊に行っていないんですよ。三菱電機で、重要な兵器を作りようたでしょ。出征する父を駅へ送って行ったけど、もうあくる日には、父は汽車を降りて、家に帰って来とった。他の家はどうだったか知らんよ。でも、社宅の友だちの父親は、みんな家におったよ。社宅では、どこの家もみんな、お父さんが出征しても、帰って来てたんよ。後になって、三菱電機や日本火薬を狙って、福山が空襲を受けたことを知って、その頃は幼くて何もわからなかったけど、私たち家族は、死と隣り合わせだったんだなと思いました。

○戦争中や福山空襲の頃のことを、何か覚えていらっしゃいますか。

渡辺 何度も防空壕に入りました。防空壕に入っている時に、父親が、「声をだすな！」って、言ってたのを覚えてます。

福山空襲の日、入学前に買ってもらった姉のランドセルが、玄関に置いてあったんだけど、焼夷弾が、そのランドセルの上をダーッと走っていった。本当に、一番怖かった。春の入学のために、もう、ランドセルが買ってあったんで

す。早めに、準備してくれとったね。三菱だと、手に入れやすかったんかね。

父は、私に、「お前にも、来年は買うたるけえ。」と言ってきてました。姉は、買ってもらったランドセルを、うれしそうに、一日中、提(サ)げて歩きよした。その姉を見て、私は羨ましかったわ。空襲が来ても、一番に持って逃げようと、玄関に置いてあったんです。飾り物のように、大切に。

みんな、防空壕に入ろうとして、ランドセルを取る前に、あの焼夷弾がダートと走ってね。一瞬の出来事じゃった。防空壕に入っても、姉が泣くけえ、父が、「また買うちやるけえ、もう大きな声を出すな。」って言うてね。空襲で、家も全部焼けてしもうて、よう生きとったと思う。でも、あのランドセルの色は、今でも、よう忘れんけどねえ。グレイだった。その頃は、馬糞紙(ボール紙)でできたのがあったけど、姉のランドセルは、落下傘か何かの布で縫ってあったんだと思う。私が入学する時も、母が、「このランドセルは、空から降りてくる落下傘じゃったんよ。」と言うて、教えてくれた。チューリップとバラの絵が描いてあって、「どっちがいい。」って聞かれたので、私は、「チューリップがいい。」って答えた。私がチューリップのランドセルを選んだから、近所の友だちが、バラの絵のランドセルにしてたね。私は、ランドセルを買ってもらって、戦争の怖さも吹っ飛んだけど、姉は、焼けたから、また何も絵が描いてない無地のランドセルを買ってもらった。

母も、たくさん子どもがおるんじゃけえ、大変じゃったと思うわ。

○空襲で、何も持って出る暇はなかったんですか。

渡辺 ないない。父が、荷物を積んどった乳母車だけを引いて出るのがやっとじゃった。

○防空壕は、家族みんなが入れるような大きなものだったんですか。

渡辺 大きかったよ。穴を掘って、作ってあったね。

駒形 今の通安寺の近くで、大きなお風呂屋さんがあったところがあったよね。

渡辺 社宅の人とみんな掘ったから、大きかったよ。空襲の時は、10人以上入ってたよね。ひとしきり焼夷弾が落ちて、しばらくして、「どこかに逃げなくてはいけない。」ということになって、私たち家族は、防空壕から出て社宅の人とみんな一緒に、紅葉町から芦田川へ逃げた。私は父の着ていたワイシャツを持って、姉はワイシャツの反対側を持って、父は荷物を積んだ乳母車を押してね。一緒に逃げたのに、いつの間にか、母と2歳の妹は、はぐれてしまって。社宅の人たちは、どうなったかわからん。みんな、それぞれに逃げたんじゃろうけどなあ。

○芦田川を越えて、明王院へ逃げたんですか。

渡辺 芦田川の橋を渡らずに、手前の辺り。明王院へ行く橋は、人でいっぱいだったから、手前までしか行けんかった。

○足元も熱かったでしょ。

渡辺 熱かったかどうか、覚えていないわ。私は、藁草履(ワラゾウリ)を履いとったように思う。父は勤め人だったから、地下足袋を履いてた。藁草履だったら、熱いかどうかわかるよね。でも、覚えてないね。父も、荷物の入った乳母車を押してたから、私らを、抱っこできるはずないしね。

駒形 私は、2歳だったけど、母親に背中におぶってもらって、逃げたんです。「昭子、しっかり、つかまっとけよ！つかまっとかんと、落ちたら

死ぬる（死ぬ）んで！」と言った母の声が、今でも、脳裏に焼き付いている。でも、「死ぬる」ということが、何のことなんか、その時はようわからなかった。母は、お腹が大きかったから、私をおぶって、大変だっと思います。

渡辺 池田小学校の事件（平成13年に起きた大阪教育大学附属池田小学校、小学生無差別殺傷事件）があったでしょう。あの事件の時、私はすぐに空襲のことを思い出したね。怖くて、一人で逃げまどったんでしょう。あの小学生たちが、かわいそうでね。私は、父がいたからね。空襲の時、怖くても、安心だったから。

父は、私に、「目を開けとけよ。飛行機がウンウンしょうる（旋回）から。目を開けとけよ。」と言うたけど、私はもう眠たかったから、気がついたら寝てた。姉は、起きていて、空を見てたらしくて、「きれいかった。」って、後になって、私らに話してくれた。

でも、昔の親は、偉かったと思うよ。どこへ集合するか決めてたからね。

○空襲のあと、芦田川の手前に逃げて、明け方ぐらいから、どこかに移動されたんですか。

渡辺 芦田川からずっと歩いて、大埵（オオタオ）の坂を渡って、深津の父の同僚の方のところへ行っただね。荷物は、早うに、そこに疎開させとったから。遠かったわ。でも、子どもだけど、姉も私も、父親が大変だというのがわかるから、文句も言わなかったよ。

駒形 私も、母に負われて、辻の坂の辺りに行ったのを覚えとるわ。

渡辺 父の同僚の方の家に行ったら、先に着いてた妹が、「姉ちゃん。」言うて、さつま芋を二つ持って出てきたんよ。そしたら、母が深津の同僚の人に、「本当にすいません。すみません。

ありがとうございます。」って、気を遣って、何度もお礼を言ってた。

何かあったら、深津の父の同僚の所に行こうと、家族で決めてたの。もう、母と妹が先に着いとったんで、安心したよね。お姉ちゃんたちが着いたら、食べさせてあげようと思って待っていたのかもしれないよね。幼いながらも、「腹いっぱい食べ。」って、言いたかったんじゃないかな。あの時は、妹もうれしそうな顔をしてなあ。それまで、何も食べてなかった。草戸からの道中には、食べ物は何もなかったから。

歩いている時、父が、突然、「目をつぶれ！」って、私らに怒鳴るんよ。道には、死体が転がってるから。死体には、トタンがかけてあるんだけど、みんな人を探しているから、トタンをはぐって（めくって）見て通るでしょ。いっぱい、死体が並んでた。何もかけてないものもあったね。

その深津ところへは、二日か三日、お世話になった。その後、会社から連絡があって、「鶏小屋だけど、床が張れて住宅ができたから。」っていうので、神辺に行ったんよね。場所は、神辺の駅の裏だったね。そこまで、歩いて行ったんです。だって、乗り物はないし、大八車というかりヤカーに、荷物を乗せて。母は妊婦さんじゃったから、母と妹も乗って。私と姉は、黙ってついて歩いた。

○鶏小屋は、一鶏舎ぐらいの大きさでしたか。縦に長くって、何世帯も住めるように仕切られていたんですか。

渡辺 小屋の中を、仕切ってくれたてたんだと思う。前の社宅に住んでいた人たちが、一緒に住んでた。半年ぐらい、そこにいたかな。新しく社宅ができて、またそこへ移りました。

新しい社宅は、二軒ずつくっついていて、裏に畑もあって、みんな、そこに野菜を植えてた。縁の下で鶏も飼ってたりして。

駒形 二軒続きの家と家の真中に、外に水道があって、二軒共同で使っていたよね。水を汲んで家に運んで、炊事なんかに使ってたんです。

○社宅が半年後にできるというのは、早いんですね。やっぱり、戦争を支えている重要な企業だったから、一般の家庭とは違ってたんですね。お父さまは、三菱電機で働いておられたけど、戦後、生活は大丈夫だったんでしょうか。

渡辺 三菱だからかどうかわからないけど、給金は、一度も遅れたことはなかったと、母が言っていました。お母さんは、家賃も払うたことがなくて、社宅の家賃はタダじゃと思うとったみたいよ。後に、企業が家賃をはろう（払っ）たらいけんことになったよね。私が、中学校ぐらいからかな。

○昭和19年から、福山に住まれていて、配給中心の暮らしだったでしょう。子どもさんが四人とご夫妻で、戦後は六人家族だから、お食事など、ご苦労をされたんじゃないですか。

渡辺 じゃろうな。でも、お母さんは、私らに、ひもじい思いをさせたことがないんだわ。裕福ではないのに、裕福なように見せてたのよ、母が。

ある日、家族でおうどんを食べてて、母の茶碗を見たらね、ねぎも何も入ってないから、「おかあちゃん、どしたん。」って聞いたら、「嫌いじゃけえ、ええんじゃ。」と言うわけ。その時、私らには、小さい肉も入ってたんじゃないけどね。子どもが、腹が減ってたんじゃない。我慢してたのは、親の方よね。私たちには、ちゃんと食べさせてくれてた。

○お母さまは、食べるのが大変な時代に、「我慢しなさい。」とか、言う人ではなかったんですね。

渡辺 「我慢しなさい。」とは、全然言われな

った。じゃけえ（だから）、子どもながらも、私たちが遠慮して、「たくさん食べたらいいな。」と、思ったりしてね。

父親が勤めてたから、ボーナスがあって、お盆と正月には、私らも服を作ってもらってた。お母さんが絹の着物をくずして、ブラウスにしてくれて、お姉ちゃんと年が近いから一着ずつ作ってもらったりもしたね。布がピカピカ光るから、「あそこの子は、シルクの服を着とる。」とか言われたけど、それは、元は母の絹の着物じゃもん、裕福だからじゃないよね。今は、もうその写真もないけど、かわいらしい提灯袖の服で、写真に写ってたのを覚えとるわ。

あの頃、アメリカ軍の払い下げの服を、もらいに行きよった人がおったよ。婦人会の人だったか、「今日は、アメリカ衣料が来るから。」いうて、言いに来るん。うちの母も、行ってたよ。もちろん、古着よ。赤十字かなんかかね。アメリカのおさがりよ。

○姉妹だから、お姉さまが着た服を、妹さんが着たりはしなかったんですね。

渡辺 だって、背格好が違うのよ。私が大きくて、姉が小柄だった。姉は、プライドがあるから、妹のお古は着んからね。それに、破れるから、おさがりばかりはできんわ。

それに、新しい服は、何日か経ってからあの服を着ようかなと思ったら、お母さんが、「ないよ。」言うけえ、「どしたん。」と訊いたら、「貸したげとる。」と言うけど、違うんよ。もう質屋へ行っとるわけ。

母の服も、箆箆をあけたら、空っぽじゃった。衣装持ちの母親だったのにな。売り食いだったんよね。私らには、何も言わなかった。

今から思うと、うちの母は、心がバリアフリーだったわ。戦争から、帰って、手足のない体の不自由な人を見ると、「歩くのが大変そうだから、あのおじさんに、ぶつからんようにしいよ。」

とか、そのおじさんが何か重たい物を持ってたら、「提（サ）げたげえよ。」とか、よく言った。

近所には、朝鮮の人がたくさん住んでいて、他の人がとやかく言ったけど、母は気にせず、「お互いさん。」って言って、付き合ってたよ。朝鮮の人からキムチをもらったら、こっちから味噌を持って行ったりしてたよね。よく、家へ来ていた朝鮮のおじさんが、自分で作ったもやしを持って来てくれると、母は、そのお返しに、おじさんに買ってきたばかりのお芋をあげたりね。子どもの私らも食べる物が無いのに、母が、「おじさん、食べていき。」言うて、ご飯を出してあげたりして、仲良くしてた。そのおじさんのことを、私らはいっつも、「もやしのおじさん」って呼んでたね。おじさんが来ている時に、母が出かける用事があったら、おじさんがそのまま家において、私たちを見てくれてたりね。私が、中学校を出るぐらいまで、家へ来よちゃったね。

○その頃は、朝鮮半島から来ている人を差別しないまでも、付き合わないようにする人が多かったでしょうからね。お母さまのような人は、あまりいなかったでしょう。

渡辺 私も50、60歳になって、ボランティア活動でも同じじゃないかと思うようになったね。心を、バリアフリーにしないとダメ。母は、「棚からぼた餅」を期待するようなことは、全然なかったね。母の心は、いつもバリアフリーだったわ。

○学校での生活や町の様子などは、どうでしたか。

渡辺 社宅では、まわりは、みんなお父さんがいたわ。出征してないからね。小学校の3年生ぐらいの時に、学校から靖国神社へ行くことがあって、先生に、「先生、私も靖国神社に行きたい。」言うたら、「お前、親が生きとるのに、ど

うして行くんか。」と、言われて、面食らったわ。その頃、意味がわかってなかったんよね。

○親が兵隊や軍属で、亡くなった人の子どもさんを、靖国神社に参拝するために、学校が連れて行ってってくれてたんですか。

渡辺 それは、わからんけど。先生から、「親が生きとる者は、行かんのだじゃ。」と言われたら、「なんで、よその親は死んで、うちの親は生きとるんじやろう。」と思うたよね。戦争のことがようわからなかったから。

○クラスに、お父さまが戦争で亡くなった子どもさんがいらしたんですね。

渡辺 親が、まだ戦争から帰ってない人もいたね。その頃、福山駅へ行くと、「伝言板」があった。「誰々を知りませんか。」とか、「お母さんを探しています。」とか、書いてあったんよ。

ラジオでも、『尋ね人の時間』（正式番組名『尋ね人』昭和21年7月1日開始、昭和37年3月末日放送終了）という番組をやってたでしょ。とても、悲しい番組だった。「尋ね人の時間です。」って、ラジオから声が聞こえただけで、震えてた。『尋ね人の時間』は何年も何年も、長くやってたと思う。

ラジオで『尋ね人の時間』が始まる前、終戦後すぐには、さっき言った駅の「伝言板」があって、役に立ちよったね。普通の黒板でね。「汽車が来たから、先に乗ります。」とかの簡単なものから、「誰々を知りませんか。」と消息を尋ねるものまで、書いてあった。迷子になったり、人と待ち合わせをしたりする時にも用件を書いて、用件が済んだら消してた。電話も何もない時代だったから、みんな、助かってたよね。戦後、しばらくの間あったと思う。そのうち、使い方が変わって、デートの時間の約束に使われるようになったね。そして、いつの間になくなった。

○戦前に比べ、戦後の生活はどうだったんでしょうか。

渡辺 私は、社宅で大きくなったでしょ。今の人は、社宅を嫌がるけど、昔の社宅の付き合いは、家族が多いと、朝トイレを借りたり、母が留守の時は隣の家で過ごしたり、お互い世話になったり、世話をしあげたりしていた。

そういえば、家で兎も飼ってたんだけど、学校から帰ったら、兎がいないんよ。父は、「探さんでいい。どこかに逃げたんじゃ。探したらいいけんぞ。」って言うんよ。でも、その時には、訳がわからなくてね。後で、わかったんじゃけど、その兎は、いつの間にか私らのお腹の中に入ってたの。父は30歳ちょっとぐらいじゃけど、兎を殺して、私らの胃袋に入れたんだから、あの頃の親は、賢かったし、強かったよ。最初から、食べさせるつもりで飼ってたんよね。

そのことを、孫たちに話したら、「ひどいことをする。」って言われた。「今は、あなたたちも、牛肉も鶏肉も食べてるじゃない。」と言っても、生きてる動物が、死んで肉になるのを見てるわけじゃないから、分からんのよ。

○新しい社宅に移る前の半年間に、神辺の鶏小屋の社宅で、弟さんも生まれ、お母さまも産後を過ごして、それから、社宅に移ったんですね。実家にも帰れず、大変でしたな。

渡辺 大変とか、言うたられんかった。父も、よく家の用事をしようたよ。布団をたどん（畳ん）だり、掃除をしたり。母も、母乳が足りんとは言ってなったから、出てたんでしょ。

○戦後も生活大変だったんですね。お母さまは、着物を全部売って、家族のために食べ物に換えてたんでしょね。

渡辺 母は、深津の父の同僚に、荷物を預けとったでしょ。後で、私に、「深津のおばさんここには、服から着物から預けてたけど、何にも

なくなったものがないんよ。」って、ビックリしたみたい。昔は、みんな、着物やなんか預けとったら、その家の人が盗ったりしようらしいんよ。母は、「あの着物があつたから、お腹に入るものがあつたんじゃ。」言うて、深津のおばさんに感謝してた。

私は、野上町の社宅から、霞小学校に入学したんだけど、入学の時には桜の花が散りょうたのを覚えとる。

○その頃は、もう、落ち着いて勉強ができたんですか。

渡辺 私が入学したころは、落ち着いて勉強できた。でも、姉は、終戦で半年間、勉強ができんかったけえね。だから父は、姉は勉強できんでもいいって、言ってたね。私は、「お前は、勉強ができなければいけん。」って言われた。もう墨で塗った教科書はなかったしね。

昭和15年生まれのは、小学校に入学して、ひらがなで書かれた教科書で勉強したんだけど、昭和14年生まれのは、国民学校に入学して、カタカナで書かれた教科書だったそうよ。夫は、カタカナとひらがなで、同じところを2回も勉強したと言っていました。

○一年違うだけで、戦後になると、そんなに違ってたんですね。

渡辺 そういえば、戦後、コレラが流行った時、私は小学校2年か3年だったけど、母から、「絶対に、生水（ナマミズ）を飲んだらいいんよ。」と言われたことがあつたね。その時は、母は、お湯を沸かすのが大変だった。

○学校生活では、何が楽しかったですか。

渡辺 運動会もあつたよ。

駒形 夏は、毎日、臨海があつた。毎日、海へ通うんよ。

渡辺 遠泳とかもあったね。

○どこの海ですか。

駒形 4年生以上がね。毎日、笠岡の北木島や白石島の海へ行くんです。船で。

渡辺 1クラス50人で、1学年4クラスだったから、200人ぐらいが、船に乗って行ったわ。船も、定員オーバーよね。引率の先生も少ないし、人数が多いから、一人ぐらいいなくなっても、わからんかもしれんよね。

○ 臨海は楽しかったでしょうね。

渡辺 いつも、できたての熱い飴湯（アメユ）をもらって、飲んだ。私らは冷たいのがいいのに、先生らも、お腹を下さんように、考えてくれたったんよねえ。まあ、飴湯が熱いから、子どもらもゆっくり飲むしね。先生も、時間稼ぎになっとなか、子どももじーっとして、おとなしゅうしてるから。

駒形 体も冷えとるしね。

○姉妹は仲が良かったんですね。

渡辺 そんなに、けんかいうほどのけんかをしたこともないね。

でも、姉は、早くに病気で亡くなった。45歳ぐらいで。母も生きていたから、娘に先立たれてかわいそうじゃったね。

○子どもの頃は、どんな遊びをしていましたか。

渡辺 「ケンケンパ」とか、タダの遊びばかり。「縄跳び」ぐらいが、遊びでは一番しゃれたかな。

○ロウ石（セキ）で、道に印を付けて、ケンケンパをしてたんですね。

渡辺 そうそう。

駒形 昔は、ボールもなかったから、瓦の端を立てて、それを狙って、石を投げて倒して遊んでた。それから、自転車の輪っかを、竹棒を持って、ガラガラ回したりして。その遊びに、名前は付いてないよ。

渡辺 自転車の輪っかで遊べる人は、豊かな人よ。自転車の車輪がある家の子よ。二つないと、競争できんしね。「あやとり」や「おじゃみ」とかもしてたね。

○他に、遊びや娯楽で、何かおもしろかったものがありますか。

渡辺 父が相手をして、私たちと麻雀をしたた。

○子どもでも、覚えることができたんですね。

渡辺 小学生でも、父が相手にしてくれてたから、覚えたんじゃろうね。おとなになってからは、したことがないけど。今は、もうだめよ。しないから、ルール忘れたし。

○社宅には、いつ頃まで住んでたんですね。

渡辺 私が結婚するまで。父が会社を辞めて引っ越してからも、母は75歳ぐらいまで、社宅の人と付き合ってた。私も、今でも社宅で一緒だった人に会うと、「お姉ちゃん。」って、昔と同じ呼び方で声をかけるよ。

○ご親戚がお近くいらっしやらないから、社宅の人が、本当に、家族みたいだったんですね。

戦後、映画を観た覚えはありますか。

渡辺 観に行きようたね。学校でしようたけえね。

○学校のグラウンドですか。屋外で、白い壁に映してたんですね。

駒形 夜よ。今日は「映画の日」って、言ってたね。

渡辺 娯楽映画よ。家族や近所の人と観に行っていた。楽しみだった。小学生の頃よ。中学生になったら、もうなかったね。映画館では、ずうっとやってたよ。お金がいるから、私らは行けないよね。学校の映画は、タダだから。

○学校では、誰が、映画を上映されていたんですか。

渡辺 町内会じゃあないかねえ。

○じゃあ、盆踊り大会とかも、町内会でしていたんですか。

渡辺 そうそう、町内の人やっていた。町内で運動会もあって、「チーム社宅」っていうチーム名で競技にも出てたよ。町内会名が、「社宅」だったから。子どもの数が、100人近くいたからね。

○社宅の跡地に、今は何か建物が建てられていますか。

駒形 今は、フレスタ草戸店。野上が50軒ぐらい、草戸が40軒ぐらい。草戸の社宅は、今の福山工業高校の北の方に寮があって、草戸大橋の幹線の両脇に、向こうとこちに、社宅があった。

○三菱電機福山製作所は、従業員が多かったんですね。

渡辺 2000人ぐらい、おったよ。三菱は、昔、第一工場が駅前（現天満屋）にあって、第二工場が今の郵便局本局の所、第三工場が今の場所（沖野上町）。福山工場は、戦後、家電を生産したことはないよ、電気の配電盤を作ってた。

駒形 配電盤というより、メーター機。電気を調べるメーターがあるでしょ、あれです。ブレーカーとか。

○戦時中は、「爆弾投下機のスイッチ」を製造していたとか聞いたから、イメージは近い製品ですよ。その後、お父さまの転勤はなかったんですか。

渡辺 それから後はない。

○お父さまは、生まれ故郷の鹿児島に、帰りたかったことがあるかもしれませんね。

渡辺 私ら、子どもの時は、よく、鹿児島のお父さんの実家に行ってたんよ。小学校の3年から4年生頃。

戦後は、ご飯を、十分に食べれなかったからね。夏休みには、父が、姉と妹と私を鹿児島に連れて行ってきて、父は先に帰って、私らは1カ月置いとかれた。父の実家に行ったら、おじいちゃんとおばあちゃんがおって、昔の人じゃけえ、いっぱい食べさせてくれるがあ。行く時は空っぽのリュックを持って行って、帰りは、いっぱい食べ物を入れて帰るんよ。重たかったのを覚える。

行きしなは、父親が姉をおんぶするんよ。私は、父がどうして姉をおぶるんか、わからなかった。どうしてかわかる？電車賃をタダにするためよ。妹は歩きようたら、小さいってわかるでしょ。姉は、年上でもちょっと小柄だったから、私じゃなくて姉。父が、足が出んように、「足を引っ込め。」って言うたら、姉が足を引っ込めて、赤ちゃんにみせてね。

○お姉さまが2歳か3歳に見えるようにして、子ども料金一人分を浮かせたんですね。

渡辺 そうそう、浮かせたんよ。大変な頃だから、父も考えとるわ。

駒形 帰りは、みんな、食料のリュックを我慢して負うて、汽車に乗ったよ。

○まるで闇市（ヤミイチ）状態ですね。

渡辺 そう。リュックの中には、メリケン粉、そば粉、麦なんかが入ってた。米は、子どもでも、運ぶんはだめなんよ。帰りはね、高校生ぐらいの親戚のお姉ちゃんがおって、そのお姉ちゃんが、従兄弟を福岡へ降ろし、私らを福山に降ろし、神戸に降ろすというふうに、みんなを送ってくれるんよ。

○孫が、全員、一斉に鹿児島に行ってたんですか。

渡辺 全部で、20人ぐらいおった。

○おじいちゃん、おばあちゃんは、その孫たちを、一カ月間養ってくれて、帰りには、大きい年長のお姉ちゃんが、順番に駅で降ろしてくれるわけですね。駅には、お母さまか誰かが迎えに来てくれて。

渡辺 そうそう。

○妹さんは、小さかったから、お母さまと離れて、淋しかったでしょ。

駒形 それは、全然、覚えてない。ただ、食べるものがね、お椀の中にご飯がなかったんを覚えとる。米粒がないんよ。デンプンと片栗粉を溶かしたたようなものだけじゃった。私が、「ご飯がない。」と言うたら、誰かに怒られたんよ。

○20人もおったら、蔵が空になるから、十分なことはできなかつたでしょう。

渡辺 でも、まあ、ようしてくれたよ。おじいちゃんも、おばあちゃんも。父は、六人兄弟だった。その六人の孫20人が、全員、鹿児島に一カ月もいるわけだから、大変だったと思うよ。昼ごはんは、高校生のお姉ちゃんが、そばを打つんよね。中学生や高校生の従兄が、みんな手伝わされてね。あの時、私は、そば粉100パーセントのすごい、ええそばを食べてたんじゃ

など、今になって思う。昼ごはんは、毎日そばじゃった。「ああ、またそばか。」と、思うだけど。

駒形 今、思うたらね、そばは、そばの殻いっか、黒いのがいっぱい入った、蕎麦掻（ソバガキ）みたいなものじゃったね。

渡辺 それから、塩も作るんよ。父が着いた日に、筵（ムシロ）の上に、海水をかけて、乾燥させて、塩を作るんよ。濃い塩水を作って、それを釜に入れて、夜中じゅうかき混ぜて。

○塩造りは、おばあさんの仕事だったんですか。

渡辺 おばあちゃんと父親。父は、それを作ってから、福山へ帰りようたんじゃけえ。そして、私らが帰る時には、姉か私のリュックに、その塩が入ってた。私らが家へ帰ったら、母が、その塩を干しようたよ、まだぬれとるけえ。それに、筵（ムシロ）の藁も混じっとるし。

駒形 福山へ帰る日、私らに荷物を持たず時に、おばあちゃんは、「重たかったら、捨てえよ。」と言うんよ。でも、捨てんかったなあ。

渡辺 口減らしに行くんだから、帰りのリュックが重たくても、待ってる母の笑顔を思ったら、捨てて帰る気にもならんかった。

鹿児島に行ったことは、今では、大切な思い出じゃね。桜島も、目の前に見えとった。父は、関門海峡を渡る時に、「これは海の下を潜りようんじゃ。」と、言うたのも覚えとる。父から、海の中じゃと言われても、海水も見えんし、「うちのお父さんは、絶対、嘘つきじゃ。」って、思うてたね。このことは、人には言われんと思うて、誰にも言わんかった。後になって、父が言ったことは、正しかったということがわかったんよ。

駒形 私も、お父さんが作りごとを言うてたって思ってたね。ずうっと、思ってた。

渡辺 父はやさしかったけど、やっぱり鹿児島
の男、「九州男児」。「男と女が、同じやかんで水
を飲んじゃあいけん。」とか、「女が、男より先
にご飯を食べたらいいけん。」とか言ってたし、洗
濯も、「たらいを別々にしなさい。」というのは、
言ってたよね。そういう考えだった。

○戦後の復興で、何か、頑張ろうと思うきっかけになりましたか。

渡辺 いい先生。小学校1年生の時の女の先生が、「ええ子じゃ、ええ子じゃ。」言うて、私をほめてくれた。小学校6年の時の女の先生は、吉屋信子さんの『花物語』という、一冊の本をくれちゃったんよ。それをもらって、夜中じゅう、何遍も何遍も読んだ。だから、私は、今でも、本を読むのが好き。お金持ちの子はね、親から本を買ってもらってたん。でも、私は買うてもらえなかった。友だちに、「なんで、先生に本をもらったん。」って訊かれて、「貧乏じゃけん。」って言ったら、みんな何も言わなかった。

○先生からもらったその本は、宝物ですね。

渡辺 そう、宝物よ。本をもらって、うれしかった。ずっと読んでたら、母に、目が悪うなるとか、電気代がかかるとか言われて、私は、布団の中に潜って読みよした。

○1年生の時の先生は、どんなことをほめてくださったんですか。

渡辺 私は兄弟が多いのに、本を読んだりして過ごして、人とけんかをせんかったから、「ええ子じゃなあ。」と言うて、ほめてくれたんよ。

うちの父は鹿児島の男だから、弟に、「姉ちゃんらに手を出してみい、足腰が立たんようにするぞ。」って言うぐらい、私たち姉妹を大事にし

てくれてた。弟が、かわいそうでしょう。弟は、穏やかな性格なのに……。私たちが、お稽古ごとに行くと、弟が、毎日迎えに来てくれてたね。父が、行かせてた。

父は子どもを大事にしてたから、家族をいろんな所へ連れて行ってってくれてたね。お金がかからないように、工夫して。全員自転車に乗って、鞆へ泳ぎに行ったり、夜店に連れて行ったり。月一回は、デパートに食事に連れて行ったりもしてくれてた。

でも、いいとばかりは言えんよ。父は、飲兵衛（ノンベエ）で、うちは米櫃（コメビツ）が空でも、床下を開けたら、酒瓶はズラーツとあったから。

○一番下の妹さんが生まれた昭和27年頃は、もう世の中も落ち着いていましたね。

渡辺 ええ。妹が生まれて、本当に嬉しかった。私にも懐（ナツ）いてくれてね。可愛かったわ。

○若い世代の方々に、何かメッセージをお願いします。

渡辺 私は、世の中で一番怖いことは、戦争。自然災害は、人間の力では、どうしようもないけど、原爆だの戦争だの、人間がすることだから、やめられるでしょ。それを、なんでやめられんのかな、と思う。この、「人間がすることなのにやめられない。」というのが、一番怖いね。戦争は、しちやあいけんのんよ。

○貴重な体験を、ありがとうございました。

証言者 北村 富喜子 (キタムラ フキコ)
昭和7年生まれ
終戦時13歳 満州国龍江省齊齊哈爾
聴取日 2018年3月1日

○お名前、生年月日、どこでお生まれになったのかを教えてください。

北村富喜子。昭和7年2月16日に、深安郡千田村で生まれました。

○いつ頃、満州に行かれたのでしょうか。またその経緯を教えてください。

父は、農業大学を出て、外地へ行きたかったようなんじゃないけど、親の強い反対で、当時は珍しかった温室を吉津に作って、新しいことを始めたらしいよね。その温室は、福山で初めてのものだったんで、当時みなさん、見に来られたと聞いてます。

そうこうしてたら、軍や開拓団の入植で、日本人がどんどん満州に入って来るということで、日本人の食糧や軍の糧秣（リョウマツ）の確保が、重要になった。陸軍の幹部から、声がかかって、満州の龍江省（リュウコウショウ）、齊齊哈爾（チチハル）の農業試験場へ行くことになったんです。軍に入るんじゃないかなくて、満州国龍江省の公務員よね。農場の管理と農業指導が、父の仕事。寒いところだから、何でも育つわけじゃないから、研究も必要だったんだと思うよ。

父は、すぐ満州へ渡ったけど、満州の冬は厳しいし、私が少し大きくなって、兄と母と一緒に満州に行きました。昭和8年の6月か7月、向こうの気候のいい時期に。私が1歳5カ月ぐらいで、兄は3歳上だから4歳ぐらいだったかな。父も母も若かったよね。

○戦前、満州でどのような暮らしをされていたのですか。

生活は、恵まれとったよ。父が公務員だし、国からの要請で赴任してるし、関東軍の食糧を確保するという任務があるわけだから。それに、軍の兵隊だけでなく、「糧秣」と言っ、軍用馬の食糧も確保せんといけんしな。

だから、農場には動物もたくさんいたよ。馬も豚も。馬というのは、当時は今の自家用車みたいなもんじゃけえ、どこへ行くんも、移動は馬かそれに荷台を付けるかだからね。広いんじゃないから、歩いて移動はせん。

父は、その土地に何が適するか研究せんといけんわけじゃけえ、温室も仰山あったよ。大きな陸軍病院があるから、そこへ飾る花を、作って持って行かにゃあいけないし。陸軍の大きな部隊が、南と北にあったんだから。暁部隊より大きな部隊よ。まず、その人たちの食糧を確保するというのが、最重要事項。

花を温室で育てるといのは、齊齊哈爾は、戦前は平和な街じゃし、花は必要じゃった。

街にたくさん住んどるロシア人は、花を大事にするしね。冬は、零下20度ぐらいになるんじゃないけど、それぐらいでも、部屋の中は、すごく暖かいからね。薄着をしてたしね。冬は、外が零下20度というんは、普通。濡れたタオルをピッと出して、プッと振ったら、凍るぐらいよ。

○齊齊哈爾には、北村さんのご家族以外にも、日本人がたくさんいらっしゃったんですか。

そりゃあ、日本人はいっぱいいましたよ。学校ができるぐらいだから。街なんだから、軍関係者もいれば、公務員や勤め人もいるし、商売が成り立つから、商売人もいっぱいおった。もちろん、農場で働く人もおるわな。

さっき、馬の話をしたけど、馬に乗るのは、おとなよ。子どもは、高学年になったら、ラバいうて、雄のロバと雌の馬をかけ合わせたのに、乗ってた。鞍（クラ）がなくても乗れるから。

私は、農場にいたからロバに乗ってたけど。これも、鞍もなんもなくてピッと乗って、たてがみが短いのでピュと持って、チャッチャカ、チャッチャカ進む。ロバも慣れたもんよ。

男女で区別はないんよ。うちらはロバじゃったけど、普通は、低学年のうちにはロバで、高学年になったらラバに乗るん。そして、もう少し大きゅうなったら、「満馬(マンバ)」というて、満州の馬に乗るの。日本馬は、大きいから。日本の馬は、足が速いけど、足がすごく弱い。氷の上なんか、歩けんよね。でも、満馬は、慣れたもんよ。氷でガリガリに凍とつても、カッカカッカと歩けるの。その代わり、足が短くて太いの。その土地に適した体なんよね。

○学校での生活を、教えてください。

満州の旗というのがあってね。「赤(紅)・青(藍)・白・黒・黄」の5色じゃったの。黄色の旗地の左の上に、赤と青と白と黄色の横縞があるいうたら、わかるかな。その5色をとって、クラスが赤組・青組いうように5組あった。1学年が200人ぐらいで、6学年で1200人か。日本と同じよ。尋常小学校と尋常高等小学校よね。もちろん、日本語だけの教育。

もちろん、教科書も日本のもの。日本と同じ教科書で勉強するんだから。だから、いくら日本人の1年生で、「サイタ サイタ サクラガサイタ」と教科書に書いてあっても、「サクラって、なんだろうな。」って感じよ。見ることはないんじゃないもん。

だから、父親が、温室で盆栽の桜を作って、学校へ持ってくるんよ。1年生5クラスと校長室と職員室へ持って来てくれる。子どもらは、それを見て、「はあ、サクラって、小っちゃいんじゃない。」って、思うわけよ。花はわかって、木の大きさを知らんのだから。「桜の花びらがはらはらと散り、花吹雪が舞う。」なんていうイメージは、湧く訳ないがあ。こんな小さい盆栽じゃ

あ、どうなろうにいねえ。見当もつかんよね。まだ、満州は雪が残ってるんだから。5月まで雪がある土地だから。

4月から5月は、まだ雪が残つとるけえな、運動会は、7月にしとったん。齊齊哈爾には、二つ日本人学校があつて、一つは「進栄小学校」。私は、もう一つの「宮前小学校」というところへ行ってたんじゃけど、そこは7月に運動会をしてたね。

もう一つ、合同運動会というのがあって、満人(中国人)小学校・朝鮮人小学校・蒙古人小学校・ロシア人小学校の子どもたちと一緒に、運動会をするわけよ。その学校が集まって、マゲームやリレーをしたり、それぞれの学校が競技を持ち寄って、ショーのようなことをするんよ。「五族協和」ということかどうかわらんよ。私たちは、やらされとただけだから。でも、楽しかったよ。言葉は通じんけど、楽しくて、楽しくて。国際色豊かなそれぞれの学校が、それぞれの言葉で応援もするし、リレーの時なんか、1年生がどべ(びり)でも、グググ、グググと他の国の選手を追い抜かして順位を上げていくと、盛り上がるしな。一番早かったのは、中国の子よ。大地を走り回って育つとるからな。それに、他の学校に比べたら、人数がものすごく多いから。リレーは、より抜かれた選手が出るから、人数が多い方が、有利よな。

ロシア人の1年生が、日本の6年生ぐらいの体格の差があるけど、小さい日本人の子どもが、はよう(早く)走ると、みんなビックリして、「オー！」と言うて、歓声が上がるしな。運動会は、ほんまに楽しくて、楽しみじゃったね。

それに、蒙古が近いからね。5月、6月というのは、「蒙古風」というのが、すごいんよ。日本のここら辺でも、そういう時期があるけど、そんなもんじゃあない。前が全く見えないし、眼が悪くなる。当時でも、家庭に目薬はあつたし、学校でも、保健室で眼を洗ってくれよった。だ

から、その時期の外出には、子どもたちは、みんな、「蒙古眼鏡」というのをはめてた。どんなんかと言うたら、バイク乗りの眼鏡みたいな、いや、スキーのゴーグルみたいな感じよ。

冬は、子どもの遊びは、スケート。スケートをするのが、当たり前。って言うか、冬は、スケートしか遊ぶもんがないんじゃないもの。大きなリンクがあったの。運動場は、冬凍るから、スケートリンクを作る。幼稚園や小学校の頃から、自分の家にスケート靴を磨く台を置いて、スケート靴を、シュシュ、シュシュと磨くんだから。フィギュアスケートの靴とは違うんよ。長い距離走るんだから、スケート靴でも、刃が違う。スピードスケートの靴は、刃が長いでしょ。

スケートは、言葉が通じんでも、子ども同士スケート靴を磨きながら、「ふん、ふん、ふんふん。」と、身振り手振りで話せば、相手もなんとなく何を言ようるか悟って、「うん、うん、うんうん。」と言うて、ニコッと笑う。両方が笑って、すぐ仲良しになる。また会ったら、お互い覚えとるけえな、また訳のわからん言葉でコミュニケーションをとるわけよ。子どもには、戦争は無縁よ。

夏は、短いけど、何でもできた。広い大地じゃけえ。5歳ぐらいから、平気で自転車に乗ってたけど、千田の祖母は、「女の子なのに、お転婆な。」と言って、あまりいいことだとは思ってなかったんよ。遊びは、日本の女の子と同じで、ままごとをしたりしたよ。

○満州に行ってから、福山へは帰られなかったんですか。

いや、冬に帰ってたよ。齐齐哈尔の学校は、冬休みが長い。夏休みは、ちょっとしかない。それに、日本へ帰るのに、誰かおとなが付いて帰らんといけんしね、度々いうわけにはいかんけど。

でも、兄が小学校の5年生の時から、誠之館

中学校へ行くために福山へ帰って、祖母の家にいたから、私にも時々帰って来いというし、その頃は、福山へ帰りよったね。

父は、兄を齐齐哈尔の中学校へ行かせたくなかったんでしょ。「誠之館中学へ行かすのなら、小学校の間に帰って、生活に慣らせた方がいい。」と、祖母が言うから、兄は、小学校5年生の時に日本へ帰ったの。

冬しか内地へ帰れんのじゃけど、冬に内地へ帰るのは、いやだった。日本は、寒いじゃない。冬でも、障子や襖があるだけで、部屋全体を温める暖房がないんだから。向こうは、きちんと戸を閉めたら、温突（オンドル）といって床暖房があるし、ペチカ（ロシアの暖炉兼オーブン）はある、ストーブも焚いてるし、外はすごく寒いけど、家の中は温かかったから。

夏も、日本のようにムシムシと蒸し暑くないしね。向こうは、夏涼しいんよ。

齐齐哈尔では、わりとハイソサエティの家庭が多かったから、内地に帰ったら、子どもながらに、日本の生活の方が惨めに感じたよ。冬というものもあるんだけど、スカートをはいたり、洋服を着て歩いてる人が少なかった。私が、外を歩いていると、近所の人が、「まあ、ビロードの服を着とってんじゃないなあ。」と言うて、私の服をはぐって（めくって）見よっちゃった。

日本では、その頃、おとなも子どもも、継ぎはぎの着物を着て、袖なし（袖のない半纏）を着てたから。オーバーコートなんか、みんな持ってなかった。気候の違いもあるんだけど、齐齐哈尔では、子どもも毛皮を着てたね。男の子のオーバーコートは、内側に毛皮が付いてて、女の子のは、外側が毛皮になっとった。だから、福山に冬帰って来ると、「まあ、こぎゃんかっこうをして。」と、あからさまに言われるし、シュミーズでも着とったら、それも珍しゅうて、下着じゃのはぐって（めくって）見よっちゃた。「まあ、満州でええ生活しようってんじゃないなあ。」

ええ格好してから。」と、露骨な言い方をされたよ。子どもでも、あまり気持ちが良くなかった。だって、斉齊哈爾では、学校に行くのでも、ハイカラないろんな帽子をかぶって行ってたし、それが当たり前だと思っと思ったから。

○暖房の燃料は何だったのか、もう少し詳しくお話していただけますか。

まず、ストーブは、石炭で焚くんよ。じゃけど、床は、温突（オンドル）といって、石炭や薪のような火力の強いものは、使わんの。枯草を燃やして、その温まった煙を床下に通すんだから、床が暖かいという感じ。強い火だと、床が焼けるからね。

そういった薪割りや枯草の準備や、燃やす作業は、ボーイさんがしてくれてたのよ。ボーイさんは、二人いたね。中国人の裕福な家庭も、ロシア人も同じ。みんな、どこの民族も、経済的に余裕のある人は、家のことを手伝ってくれる人を雇ってた。

内地の人から見れば、いい生活かもしれんけど、外地では、日本人としての誇りがあるからね。現地の他の民族も、「日本人の子どもは、礼儀正しく、優しくて思いやりがある。」と、信じてるから、それを裏切ってはいけないが。それが、蒙古人であろうと、朝鮮人だろうと、学校だけでも5民族の学校があるわけよね。言葉は通じなくても、笑顔や挨拶は、お互いわかるんだから、言葉より態度をしっかりとしないといけん。

○外地では、日本人であるということも意識されてましたか。

もちろんよ。日本人は、日本人としてのプライドを持たなきゃいけないからね。日本人の子どもは、礼儀正しくて、いつも身ぎれいにしないといけないと、意識していた。学校へ行くのも、帽子をきちんとかぶり、革靴を履いて通学していた。

○統治側である日本という国を、背負っている気持ちがあったからですか。

そりゃあ、そうよ。日本を負うて、大陸へ行つとるんだから。子どもといえども、背中に背負ってるわけよ。内地におつたら、外国人を見たこともないんじゃないけえ、そういう感覚は、わからんと思うよ。

白系ロシア人にしても、ソ連を嫌って満州へ来た人たちだから。商売人とか裕福な人たちよね。いろんな民族がいて、日本人だということを、誰も教えなくても、意識するからね。おとながそういう意識を持ってるから、子どももそうなるんか、日本人以外の人間が見ても、恥ずかしくない行動をしようと思うよね。日の丸の旗を見たら、それだけで、ピシッと背筋を伸ばしてたよ。

○お父さまのお仕事のことを、もう少し教えてくださいいただけますか。

父は、四男だったんじゃないけど、当時は、子どもの職業を、親が決めてた。みんな、祖父が決めたとおりの仕事に就いた。「長男は、師範学校に行つて、学校の先生になり、ゆくゆくは村の村長になれ。次男は、医者を受け継げ。三男は、法律を学んで弁護士になれ。四男は、百姓をせにゃあいけんけえ、農業を勉強せえ。」と、親が勝手に子どもの職業を決めつとったらしいよ。

父は、小学校を出たら、兄のように誠之館中学へ行かずに、西条の農学校へ行つて、それから農業大学へ行つたんじゃないよ。卒業してから、日本へおりとうないけえ、とうとう満州へ行つてしまった。祖父は、大陸は危ないと考えて反対したけど、結局、行くことになってしまったわけよ。

高粱（コウリヤン：モロコシというイネ科の1年草で、炊いて粥にしたり、酒の原料とする）というのは、渋みがあるから漂白して食べるんだけど、日本人は、食べんよ。粘りがいいから、

パラパラしていておいしくない。白米に麦を入れて炊いても、麦飯はあまりおいしくないって
いうけど、麦は、まだ粘りがある。高粱は、粘りが全くないんよ。

だから、極寒の土地でもお米がとれるように、研究していたのが、私の父たち農業試験場の人だったのよ。日本人は、諦めないから、何とか米ができるようにしようと努力するから。日本人は、まじめで、コツコツ努力する国民性があるよね。これがだめなら、こうしたらどうかと、諦めずに考える。研究熱心で、粘り強いわけよ。父たちも、頑張っ
て米がとれるようにしたよ。

満州は、5月ぐらいまで雪が降るからね。父は、ほんのちょっとの間でも、内地の農業大学へ帰っていたからね。そうすると、農大の学生が、50人ぐらい満州について来るわけよ。表向きは、満州の農業の勉強とか、作業の手伝いとか。食糧の増産は、国家的事業だから、名目はあるわけだから。お父さんは、ついてきた学生を寮に入れて、肉を食べさせてやるから、喜んで、また来たいと思うじゃろ。父が日本に帰って、農大に行って、「齊齊哈爾に行く人はいるか。」と聞くと、みんな手を上げるんだって。日本では、食べ盛りなのに、肉どころか白米も食べれんから、学生は、楽しみなんよ。学生だけでなく、大学の先生も、たくさん来ておられた。

それに、日曜日になると、日本の兵隊さんがよく来てたね。家庭の味を味わいたかったんかね。ご飯を食べて帰ってた。

それから、叔父とその友だちが、父を頼って満州へ来てたから、同居してたよ。

ボーイが、家にいたと言ったけど、他にも、手伝いとか使用人のような人は、たくさんいたよ。中国でも、いい家庭の子が、日本人の家庭へ入らせてもらってたから、その家庭で、日本語を覚えて、生活習慣や礼儀を学んで、ゆくゆくは日本の学校へ留学することを希望している人もいたよね。父には、「カン」と言っ

て、通訳の人がずっと付いていたし。

齊齊哈爾は、市長は満人（中国人）だけど、副市長は日本人。名前だけで、仕事はしていなかったと思うけど、その副市長の娘さんも、よく家に来てた。

○太平洋戦争が始まって、満州の日本人の生活に、変化はありましたか。

いいえ。全然変わらない。困ることも、なかった。「戦争は、南の方でやっていること」と、いう感じ。戦局の情報だけは、ラジオで入ってくるから、ラジオで言ってるとおりでたと思ってたね。

地図を広げて、ニューギニアでもボルネオでも、「勝った！」と言って、次々日の丸の旗をたてて、喜びよった。嘘ばかりだったのに。私らは、勝って転戦しとると思ってたから、それをラジオで知らせてると喜んでたけど、兵隊さんは、南方へ行ったら行ったっきり。島流し状態じゃが。船も、南方へ行っても、敵に沈められて、無事に帰られんわけでしょ。内地の人はもちろん、外地の人も、嘘ばかりの情報を信じてたわけよな。

でも、満州で暮らしてる私たちは、生活に必要な物を日本からでなく、その土地、その土地で、つまり現地で調達するわけだから、南方の兵隊さんのように、船で輸送されたもので生活しているわけじゃあないから、すぐには困らないし、戦場の状況も、私ら誰も想像できなかった。

○終戦を知った時のことを伺いたいのですが、玉音放送のことはご存知でしたか。

朝から、知ってたよ。街なかには、情報が早いんよ。開拓団の人たちには、情報は届かんの。

軍隊がいても、軍人の幹部は、大急ぎで南下していくんですよ。だけど、一般の人は、「いたい、何だろう。」というような感じよ。日本の

軍隊は、秘密主義だから、何も知らせたりしないわけよ。

私なんか、学校から「お昼の放送を、必ず聞きなさいよ。」と言われたけど、ラジオは、ゴーゴー音がするだけで、何を言ってるのかわからんわけ。その後、学校から「学校へ集まれ。」と、電話がかかってきたの。うちは、農業試験場だったから、電話がかかってきたけど、電話がどこの生徒の家にもあるわけじゃあないよね。

「終戦」という言葉を使うけど、正確には「敗戦」だからね。負けた国の人間が、どれだけ惨めな思いをすることか。戦争というのは、勝つか負けるしかないんだから。負けた国の人間の哀れさ、惨めさ、辛さ。命の保証は、まったくない、生活の保障もない、「生きる」ということすら、保証されない。今まで、軍隊や警察がいて平和が保たれていたけれど、それが全然なくなるわけでしょう。そうして、ソ連が、南下してきたしね。

そりゃあもう、当時のソ連の兵隊は、強盗みたいなもんだったから、どんどん、どんどん入ってきて、日本人の家をぶち壊して、パッパッパッパッと銃で撃って、物を盗って帰るんよ。

「国破れて山河在り。」じゃあなくて、「国破れて山河無し。」よ。山も河も命も、何もかもがなくなる。負けた国の国民というのは、どれだけ哀れか・・・。「生きる」ということが、保証されない。今日会った友だちが、次の日には殺されているとか、そういうことがあるのよ。ソ連兵は、自動小銃を持って歩いてるんだから。狙ってじゃなく、相手を見ずに撃つから、弾に当たった者が運が悪かってことになるわ。

○戦時中は、まさかソ連がそういうことをするのは、思ってもみなかったでしょうね。

そうよ。ソ連は、日本と「日ソ中立条約」を結んでいたわけだから。それなのに、日本の軍隊がどんどん南下して、ある日突然、ソ連がさ

っと入ってきてね。残っていた軍隊は、封鎖されるんだから。日本の兵隊さんは、武器を取り上げられて、トラックに乗せられて、まっすぐソ連へ連れて行かれてしまうんよ。

軍隊だけじゃないよ。警察もよ。だから、残ったのは、その家族だけ。女性と子どもと年寄りだけ。

戦争に負けたとわかった途端に、家で働いていた中国人のお手伝いのおばさんにしても、石炭を持って来てくれていたような出入りの人も、態度をプルッと、変えたからね。同じ家に住んで、ご飯を食べて、言葉を教え合って、一緒に生活していた人が、日本の敗戦を知った途端によ。でも、その人たちも、他の中国人に何をされるかわからんし、仕方なかったというの、少しはあったんでしょ。中国人同士で、「日本人を相手にするな。」と、言い合ってるから、一旦は姿も見せなかったけど、情があるっていうか、隠れて訪ねてくれる人もいたからね。

「日本が負けた」と知ったからか、農業試験場に揚げられてた日の丸の旗が降ろされ、破られて、焼かれて踏みつけられたのを見た時は、子どもだったけど、本当にさめざめと泣いたよ。泣いたのは、「国がなくなる。」と、思ったからよ。その行為は、玉音（ギョクオン）放送を聞いたとほぼ同時だったから、日本人以外の人は、日本の敗戦を知っていたんじゃないだろうね。情報が漏れてたか、ソ連の条約破棄の裏切りがわかっていたんでしょ。終戦前の8月8日には、ソ連は中国へ入り込んでたんだから。

ソ連の戦車は、見たこともないような戦車で、「ガリガリ。」というものすごい音がして、みんなが、「何、何、あれは何なん。」と、言うとの間に、すぐ目の前に迫ってきた。そして、パッと軍隊が閉鎖されたんだから。

それを見て、「えーっ。」と言って呆然としている間に、暴動が起きて、日本人の家の中の物が、ドッドッドッド略奪されて、日本人は、

みんな逃げまどった。

玉音放送を、家で聞いてたといっても、ザーザー雑音が入って、何を言ってるのか、まったくわからなかったんじゃないか、それで父に電話した。そうしたら、父は、「落ち着け。日本が負けた。命が危ないから、家から出ちゃあいけない。」と言った。それから、窓ガラスは二重窓だから、「戸を全部閉めて、二重窓の間に戸板を入れなさい。何が入って来るかわからんから。」と、指示したんよ。石を投げられて、ガラスを割られても、戸板があれば、家の中までは、飛んでこないと思ったんでしょ。

父は、戦争に負けたら、外地ではどんなことが起きるかわかってたわけよね。暴動を起こそうとしている人にとっては、またとない機会だから。

齊齊哈爾の現地の人が、一番怖かったよ。人数が多いんだから。満州に住んでる中国の人たちも、今までの不満が溜まって、日本が負けたんだから、この際日本人の持ち物を盗れるだけ盗ってやろう。」というぐらいな気持ちだったんでしょ。

暴動が起きたばかりの最初の頃でも、石を投げるぐらいのことじゃあない。鉄砲の玉が、ピンピン飛んでくるんだから。中国人も、護身用の銃を持ってる人は結構いるし、日本兵の身に着けていた武器を、盗ってる人もいたんだから。

暴動というのは、そりゃあもう、計り知れないものがあるよ。群集心理が働くから、日本人と仲良くしていた人も、お世話になったとか、助けてもらったとかいう気持ちは、暴動の時には消えるのよ。「よーし。やっちゃろう！」という気持ちになるわけ。それに、使用人や出入りしていた人は、その日本人の家には、どこにいい物が置いてあるとか、金庫がどこにあるとか、みんな知ってるんだから。だから、暴動が起きて中国人が家に入ってきたら、日本人は床下へ

逃げたり、二階の天井に隠れたりしてた。それに、「日本人は、どこどこへ集まれ。」という連絡があると、みんな情報が欲しいから、行って集まってた。

そこからは、「本当の戦争」よ。今まで味わったことのない経験を、そこから積んでいったわけよね。戦争に負けるということは、大変なことだった。沖縄の人が味わった恐怖を、日本の本土の人は、味わっていないでしょ。本土の人は、空襲以外の攻撃を受けてないからね。「国破れて山河在り。」だって、外地の人間には当てはまらないのよ。

中国人にしても、ソ連兵にしても、日本人の家に入ってきたら、日本人は床下に隠れるしかない。床の上でドンドン音がしょうる間は、私たちは、じーっとして、体を固くして、その人らが出て行くのを待ちよう。木造の日本の家と違って、全部レンガでできているから、床下に潜ったり、壁へ穴をあけて向こうの部屋に抜けられるようにして、その穴をわかりにくい物でふさいで見えないようにしたり、タンスを置いて、その裏側を通過して向こうへ行けるようにしたりしたよ。人間というのは、そこはかとないい知恵をもっているもんよ。

うちの家族だけじゃあなく、近所の日本人もうちへ来るんよ。そりゃあ、お父さんが兵隊に行行って、家にいない人ばかりだし、子どもが小さい人もいるからね。現地で陸軍に入隊してるから。だから、その人たちもうちへ来てて、人が侵入してきたら、子どもを泣かすと隠れているのがわかるから、おっばいを飲ましてギューっと抱きしめていたら、窒息してしまう。赤ちゃんの鼻を押さえつけたようになるから、窒息死するよね。お母さんにとっては、おっばいを飲ませて身を屈めとって、気がついたら、我が子が息をしていない状態よ。赤ちゃんが、乳を飲んだまま、おっばいに鼻がくっついてひちゃげ（つぶれ）てしもうて……。今度は、お母

さんが狂ったようになる。赤ちゃんを揺すったり、逆さまにして背中を叩いたり、水を掛けたりするけど、生き返らんの。

侵入した者が、物を盗ったりしてひとしきりしたら、引き揚げる。引き揚げて行って、しばらくして、これで大丈夫と思うたら、みんな床下から出てきて、若い母親が泣き叫ぶ、そういう光景が何度もあった。

集まっている日本人は、うちにそのままおったよ。日本人は、固まっておらんと危ないじゃろ。公務員だから、官舎があったのよ。第一官舎、第二官舎というふうに、その官舎ごとのブロックが、日本でいう部落、町内会なんよ。官舎なんだから、そこへ日本人が住んでるのは、現地の人もようわかっとるから、そこへ物を盗りに入る。盗って帰られるものは、皆盗って帰るよな。

○どんなものを食べておられましたか。

父が、道路工事に出てくれと言われれば出ていくから、賃金をもらって、いっぱい出ている露店で、食べ物を買ってくるのよ。中国の人たちも、朝鮮の人たちも、自分たちが作った物を売らなけりゃあ、生きていけないんだから、日本人も、お得意さんよ。終戦直後は、夏でもあるし、物も腐りやすいからよけいにね。

お金いうのは、使えない。軍票（軍用手票）だったよな。軍が作って、齊齊哈爾だけでしか通用しないお金の代わりになるもの。父が働いて、その労働に対して支払われた賃金の分だけ、帰りに食べ物を買って帰る。それしか、方法がないんじやから。まだ、父が40代だからよかったのよ。年を取ってたら、それはできなかったから。

父は、兵隊に召集されそうになったけど、農場に農場長がいないとどうにもならんから、兵役免除になってたんよ。

だから、中国から引き揚げて帰って来る時は、

うちの父が、何百人もの人を連れて帰って来た。もちろん、広島県人会の会長もするし、日本人全体の世話もしていた。そういうわけで、私たち家族は、父と一緒に行動することはなかったね。母と子ども二人の三人が、父の率いる集団のメンバーみたいなもんよ。父親が、全体の交渉係みたいなもんじやから、母も、私たちだけじゃあなくて、戦死した人の子どもさんの世話をしたりしてたよ。

○終戦から齊齊哈爾を脱つまでの間、お父さんが日本人会のお世話をしているけど、食糧を配ることはできなかったんですね。

そうよな。でも、そうは言っても、豊かな土地はあったわけだし、父は農業の技術者だし、その季節にあった作物を植えて育てて、それをみんなに分けてたよ。農場は、そのまま使ってたから、ずっとみなさんにそうしてあげてたね。中国の人は、農業試験場で、何をどういうふうにして育てたらいいのかわからないんだから、何もできんよな。技術は、盗めんってことかな。

そうは言っても、食べていくのは、どの日本人も苦労しよったと思うよ。

○他の家族の男性は、シベリアに連行されたんですか。

ほとんど、連れて行かれた。ソ連軍が、日本軍の兵隊を連行するんだけど、100人とか、大きい単位で人を移動させるから、途中で逃げる者や亡くなる人もいる。頭数が合わんと、その辺を歩いてる男性を引っ張り込んで、連れて行くわけよ。それで、その家は、「お父さんが帰らん。お父さんがおらんようになった。どこへ行ったんじやろう。」というようなことになる。だから、兵隊でなくても、兵隊に行く年齢でない人でも、そんなことが起きるんだから、残された家族は、誰も頼る者がいないじゃない。そういう家庭は、私の父を頼るしかないよな。

○そんな生活が続くと、終戦から帰国までの期間は、本当に長く感じられたでしょうね。

長かったね。子どもの私でも、学校もなくなったわけだから、一日の時間をとってみても長く感じたし、実際長かった。

内地と違って、学徒動員もないわけだから、終戦まではしっかり勉強できてたからな。日本人は、本をいっぱい持ってたから、帰国までの3年間は、本をひたすら読んでた。内容がわかっても、わからなくても、たくさん読みよした。難しい本でも、辞書で漢字を調べて、読みきるんよ。わりとインテリが多かったから、本箱にいっぱい本を持ってる人が多いいけえ、借りて読んだりしたから、ものすごい読書量よ。危険で、外へあまり出れないから、よけいにね。私じゃあなく、みんなそうよ。

女の子は、手芸もした。刺繍も結構したね。刺繍糸は、冬に刺繍をするお母さんがいたから、提供してくれたり、持ってる布を出し合ったり、セーターを解いて編み直したり、いつもみんな一緒におったし、周りのおとなが教えてくれた。ミシンはないから、何でも手で縫ってたね。

外では、堂々と遊べないからね。男の子も、女の子も、外では親の目の届く範囲内で遊ぶしかない。それでも、子どもは遊びの天才よ。限られた場所で、そこにあるものを使って、遊びを考えて遊ぶんだから。

○お母さまも、他の女の方も、夏場は農場で、作物を作っていたらっしゃったんですか。

いいや。お母さんたちは出ないよ。農場の職員は公務員だから、終戦までは、現地の人を使って作業してたからね。終戦後は、現地の人は、敗戦国の日本に雇われてたんじゃなくて、日本人が開発した技術や知恵がほしいから、慕ってやって来る。土一つとっても、父たちが、どうやって作っているか、知りたいわけよね。「これは、カルシュウムが足らん。」とか、「これは、

窒素を加えにゃあいけん。」とか、教えてあげよった。農作業をしながら、覚えるんでしょ。

○終戦後、約三年間、中国におられたんですか。

そうよ。南にいた人より、満州にいた人の方が、帰国が遅かった。引揚げには、アメリカとソ連のかけ引きがあったのか、よくわからないけど、なかなか帰国できず、やっと昭和23年に帰国できた。

実は、日本の中学に入れるために、兄だけ日本へ帰してたんじゃけど、肺門リンパ節結核(肺結核の初期に見られる病変)を患ったの。だけど、戦時中だから、日本へおったら肉も魚も卵も、栄養のある物を食べられんじゃない。だから、父が満州に帰したのよ。それで、終戦を一緒に満州で迎えたの。日本へ帰ってる頃には、学徒動員があったから、それでは体に良くないという考えも、あったんでしょ。満州には、動員はないから。そうしたら、日本が戦争に負けてしまって・・・。

父は、後になって、「戦争に負けた国の国民が、外地でどんなことを経験するかということ、家族みんなで知ることができて良かった。あのまま子どもを内地へ置いておいたら、外地で家族がどんな惨めな思いをして帰って来たか知らないままだった。」と、言っていましたね。

兄は、終戦の時、16歳で、中学4年生だった。引き揚げてすぐ、東京の母方の祖母の所へ行って、大学の神学部に入ったんよ。兄は、多感な年頃で、人が次々殺されたり、死んでいくのを見たのが、辛かったんじゃろうな。人間の生き様や戦争が人間を変えていくのを見て、自分は、どう生きるか考えたんだと思うよ。

○昭和23年に、齊齊哈爾を出発されてからの様子を教えてください。

雪が解けてから出発したんだから、5月に出発して、日本へ着いたのは、11月の終わりじ

やったな。

中国の葫蘆島（コロトウ：現中華人民共和国遼寧省にある港湾都市。当時は、日本への引揚船の出発地。）から、佐世保へ上がったんよ。乗ったのは、興安丸じゃった。興安丸は、満州からの引き揚げが、私たちが最後で、その後ソ連からの引揚者を乗せて舞鶴へ入っていたと聞いたことがあるけど、確かかどうかはわからんよ。何カ月もかかって帰っても、検疫があつて、船の中に留め置かれたよ。「病気を持つとつてもいけんし、虱(シラミ)を持って帰つてもいけん。」と言うて、DDTを真っ白になるほどかけられたりもしたな。

日本に着いた頃には、一緒に斉齊哈爾を出発した人の三分の一は、亡くなってたから。年寄りと小さな子どもは、ほとんどが死んどった。最初、斉齊哈爾を出た時は、鉄道で、無蓋車（ムガイシャ：砂利・鉱石・木材など雨に濡れてもよい積荷を運ぶ屋根のない貨車）に乗って出発したわけ。その途中、中国にいる間に、ほとんどの人が死んだ。生きとつても、佐世保の港について、日本の日の丸の旗を見たら、安心してしまつて、弱った年寄りはそのまま息を引き取つた。

外地で終戦を迎えた私たちにとっては、そこから戦争じゃもの。身近にいた中国人や朝鮮人の暴動に始まつて、ソ連の兵隊にまでひどいことをされて、常に身の危険を感じながら、帰国までの長い日々、本当に「生きながらえる」ということすら、難しかった。

みなさんご存知のように、中国残留孤児が、たくさんおられたよね。日本人が子どもを中国へ置いて帰つて、その子たちを中国の人が育ててくださった。

我が子を中国の人に預けて本国へ帰るつて、そんな教育を、日本のお母さんたちは、受けとらんよ。自分は死んでも、子どもは生かそうという教育を受けてるんよ。だけど、自分が、

これから何カ月かかつても日本へ帰れるという保証がないから、その道を選ぶしかなかった。夫は、兵隊に行つて、ソ連兵に連れて行かれて、この先どうなるかわからん。「この子は、夫の忘れ形見じゃから、何とか生かしてやりたい。生かさなかつたら、夫に顔向けできん。」と思つて、中国の人に託して、中国を出てるんですよ。子どもの耳をかじつたり、体のどこかにわざと傷をつけて、成長してもわかるようにと願つてね。その時のお母さんの、身を切られるような悲しみというのは、その母親でないとわからんよね。日本に住んでたら、人に託しても再会できると思えるけど、中国なら二度と会えんかもしれん。

引揚げの時、乗り物といつても、無蓋車だから、屋根もなければ壁もない。貨車の真中に荷物を置いて、その荷物にへばりついて、みんな体を結び合つた。結び合つていないと、貨車の揺れがひどくて、振り落とされるから。それから、道中、現地の中国人たちが、長い棒を持って、その棒で荷物をひっかけて盗ろうとするから、油断はできんよ。真中に大事なものを置いてみんなで取り囲んでいるんだけど、雨が降つたり、風が吹いたり、おまけに、運転手が中国人だから、途中のとんでもない場所で汽車を止めたりするのよ。運転手も、お金がほしいから、「お金をだしてくれりゃあ、汽車を動かす。」とか言つてね。

○斉齊哈爾を出て、日本に帰り着くまでの6カ月余りの間、一番怖かったことはどんなことでしたか。

暴動が、一番怖かった。徒党を組んでくるから怖い。汽車といつても、無蓋車だから、動いとしても物を引かけて盗るわけだから、停車している時は、何をされるかわからん。斉齊哈爾を出てから、哈爾濱（ハルピン）・新京（シンキョウ）・奉天（ホウテン）を通つて、葫蘆島へ出るまでの、長かつたこと。距離もだけど、時間

的にもな。運転手次第だから。哈爾濱で降ろされた時は、大変だった。

夜、寝る時には、女の人はいつ連れて行かれるかわからん。辱めを受けたら、生きてはおれないという気持ちは、女性は持ってたから。それに、どんなに困っても、物もらいをするものは、おらんかったね。たとえ荷物を盗られても、みんなで助け合っとなんとかしっとたからね。日本へ帰るんだという気概と、日本人という誇りは、みんな持っとなんだったから。

汽車だけでなく、もちろん歩くんよ。高粱畑に隠れながら歩いたりな。赤ちゃんは、この頃まで生きてる子はおらんよ。窒息死せずに済んだ子ども、母親が栄養不良で乳が出んようになるんだから、子ども育たん。小さな子ほど、生きられん状況じゃったね。

○佐世保に上陸してからのことを、教えてください。

佐世保から福山へ帰るのに、各駅停車の汽車じゃけえ、丸一日はかかったよ。その頃の汽車は、ぎゅうぎゅう詰め。窓から乗り込むんじゃけえ。

福山に着いたら、千田(当時、深安郡千田村)にすぐ帰ったよ。千田にうちの父の分かれ家をしてあって、家があったからな。でも、帰り着いた時には、そこへ二つの家族が疎開というか、間借りをしとったんで、出てもらうまでの間、しばらくは伯父の家に世話になったよ。その後、自分の家に入れたから、よかった。

○帰国後は、どんな生活をされてましたか。

父は、地方事務所の中に、耕地出張所というのがあって、指導者としてそこへ勤めた。いわゆる、引き揚げて帰ってきた人の入植した地域を回って、指導したり、相談に乗ったりするわけよ。引き揚げた人が、土地をもらってそこへ住み着いて、開墾をしたたからね。その人た

ちは、ずっと苦勞して、帰っても難しい土地を開墾してるんだから、大変なことも多いよね。福山市の近隣よ。開墾するような場所だから。父がその仕事に就いたのは、引揚者の気持ちがよくわかる人がいいからということじゃったね。主に、農業指導をして歩いてたね。仕事は大変だったかどうかかわからんけど、生きて帰れただけでも有難かったし、その仕事は、「自分の使命だ。」と、思ってたかもしれんね。

帰国後の家族の生活は、あまり困らんかったと思うよ。

でも、帰国後すぐは、私も栄養失調だったから、私だけ尾道の医者をしている親戚に行って、毎日本を読んだりして、ぶらぶらさせてもらっとな。育ち盛りじゃのに、6カ月もの長旅で、おまけに持ってる物を切り売りして、親が食べさせてくれとるわけじゃけえ、十分な栄養状態じゃあないわな。

学校は、昭和24年の4月に復学したけど、帰国した年、ちょうど学制改革が行われて、新制高等学校ができたばかりだった。私は深安郡だから、神辺に行かなきゃあいけんかったん。こっちの市内の学校に行くんなら、寄宿しなけりゃあいけないから、父も考えて、親戚が勤務していた広島県門田女子高等学校へ行くことになった。満州でも女学校だったし、3年以上学校に行っていないから、その方がいいような気がした。私も、勉強してないけど、内地の同級生も戦争で勉強してないから、復学しても、ついていけないということもなかった。本はたっぷり読んでたし、文章の読み書きは、苦にならんかった。3年の遅れた分を1年で取り戻した形にして、昭和7年生まれの子と一緒で卒業したの。19歳じゃった。

私らの大学受験の時は、共通一次のような試験があったの。「恐怖の一次」と、言ってたね。何点以上だと国立大学へ行かれるというような、基準があったわけよ。広島は通えんから、岡山

へ行くことにして、朝6時に家を出て、福塩線と山陽本線を乗り継いで、各駅停車で2時間かけて通ったわ。道中勉強もできたし、本も読めたし、いい時間が持てた。

○なぜ、教師になろうと思われたのですか。

おしゃべりだし、声は大きいし、人の世話をするのが好きだったから。父は、女の子だから、家政学部に行った方がいいと言うたよ。「結婚して、早く夫を亡くしても、女性は洋裁でも和裁でもして、子どもを大きくしている人がいるから、女の子は、何か手に職をつけさせなきゃあいけない。」とも、言っていた。

兄の進路は、すぐに決まったからいいけど、私の進路はどうしようかという時に、奨学金制度があると聞いて、大学に行かそうということになったわけよ。大学で、教授に、「小学校課程と中学校・高等学校課程のどちらがいいか。」と聞かれて、ピアノはバイエルが弾ければいいし、中学や高校のように、その教科しか教えられないのは面白くないと思って、小学校の先生になったの。

○若い人たちや子どもたちへ、何かメッセージをお願いします。

私は、外地で育って、戦前・戦中・戦後とその国で生活してきたでしょ。内地にいたら、自分が日本人じゃということさえ、考えることはなかったと思うよ。外地にいたから、常に日本人だということを意識したし、誇りに思ってたんよ。若い人は、許されるなら、外国で勉強するのはいいことだと思うよ。自分の国を、中から見るのと外から見るのとは、違うんじゃないか。観光じゃあなくて、留学や仕事で外国に行くと、外国の人から見た日本や日本人の姿が、わかると思うよ。日本人が見ている日本人とも違うしね。それに、人を羨むのなら、羨ましがられるだけの努力をして、人間として尊厳を持たない

とダメじゃと思うよね。私も、日本人としての誇りを持っていたことが、日本に帰り着くまでの心の支えじゃったしね。

私たちは、中国という国へおらしてもらおう立場じゃったの。中国の人にとっては、日本人は侵入者なんだから。五つの民族と一緒に運動会をした満州の経験は、相手を認めることからのスタートだった。だからこそ、小さくても自分の国や民族を代表しているという気概が育つ。戦争で関係が壊れると、そのことばかりに目がいくけど、いい関係が築けたり、交流があったことも、戦争の一面。加害者と被害者というとらえ方だけでは、これからの関係も築けなくなるよね。

戦争というのは、国民の誰もが「戦争しましょう。」と言うわけじゃあないんよ。73年前に終わった戦争も、日本の国が小さいから、資源がないから、少しでも国の領土を広げようと、一部の政治家と軍部が戦争を起こしたんであって、国民の意思ではないんだから。資源を平和的に取引しようとするのではなくて、盗ろうとするんだから。日本は、頭と体で稼がなきゃいけないのだから、外国に知恵を渡して、資源を譲ってもらわなきゃだつたのよ。

今こうして、長く話してきたけど、本当は戦後のことや引揚げの話をするのは嫌だった。思い出すと、反吐（ヘド）が出そうになる。

話しても、わかってもらえるわけじゃないし、眼をつむると、その場面がバーッと浮かんできて、胸が締め付けられるよう思いをしてるのに、今更、思い出しようない。文字にもしようない。被爆者の人と同じ気持ちよ。「言いたくない。思い出したくもない。」と、思っとたわけよ。人に話すなんて、もっての外（ホカ）じゃった。

夫にも、息子にも、一度も話したことはないんだから。夫は、内地にいて福山空襲を体験してる。誠之館中学校の生徒で、中心街に住んでいて焼け出された。私は、空襲は経験してない

し、焼夷弾の怖さも知らん。夫も私も、お互い
わからんのよ。お互い、そのことは言わずにお
った。でも、お互い、心を焼夷弾で焼かれてる
のはわかつとるんよ。

じゃけど、今こうして話したことは、良かっ
たと思つとるよ。今日は、ありがとう。

○貴重なお話、ありがとうございました。

証言者 皿海 久治（サラガイ ヒサハル）
昭和4年生まれ
終戦時 15歳 満州国奉天省撫順
聴取日 2018年3月7日

○お名前と生年月日、お生まれになった所を教えてくださいいただけますか。

皿海久治。昭和4年9月16日生まれで、生まれも育ちも、光南町。



○ご家族のことを教えてください。

両親は、洗張り屋をしようった。洗濯屋と言った方が、わかりやすいかな。たぶん、祖父の代からじゃあないかな。

兄弟は、八人兄弟で、長男が15歳上で、私が次男。3歳下の弟が一人。兄と私の間に、女ばかり五人おった。戦時中は、兄が出征してから、兄嫁さんが子どもを連れてうちへ帰ったから、一緒に住んどった。

○満蒙開拓青少年義勇軍に入隊されていたと伺っていますが、入隊のきっかけを教えてください。

うちのすぐ近くにお寺があって、兄が3歳ぐらいからそこへ出入りして、院主さんについてちょこまかしとったらしい。そのうち、お経も覚えて、小学校を出たらその寺に入ってしもうた。そのお寺の関係で、兄は大阪のお寺に行って、得度して僧侶になったわけよな。五人の姉は、その伝手を頼って、大阪のお寺へ女中奉公に行って、家にはおらなんだ。今と違って、女

性は稼ぐことはできん。女中奉公では、食べさせてもらうだけで、親元に仕送りするほど給金がもらえるわけじゃあないけえな。

それで、うちも貧乏しょうるし、「3年訓練を受けたら、10町歩の土地をくれる。」と言って、国が約束してくれたから、3年辛抱して10町歩の土地を持ったら、親を呼んでも、食っていけると思ったわけ。

当時、男の子は、志願兵に憧れとった。私は、チビだったけえ、志願兵は155センチないといけんに、153センチで2センチ足らんかった。義勇軍だと身長のこと関係ないし、志願兵と同じようにお国の為にもなると思って、自分で決めたんよ。

○ご家族は賛成されたんですか。

いや、大反対よ。親父は、「勘当だ。」とまで言った。親だけじゃあなくて、小学校の時の担任のS先生も、「義勇軍へ、行っちゃあいけんぞ。」と、言ったけど、行くことに決めた。

S先生は言わなかったけど、義勇軍に行った先輩が、病気になって帰ってきたりして、情報がいろいろ入ってきてたんじゃろうと思う。義勇軍は、昭和13年から始まっとったから、私ら昭和19年に行った者は、7次の義勇軍。その頃には、いろいろわかってきていたし、難しいことも起こっていたんだと思うよ。

でも、実際、学校に通達があって、各学校に人数の割当てがあるから、担任の先生も決められた人数を送り出さなきゃあいけん。どうしても、片親がいないとか、次・三男とか、経済的に恵まれん子に声を掛けるようになるわな。私と尋常高等小学校まで8年一緒だったO君も、父親がおらんかったけえ、私と一緒に義勇軍に入った。

○入隊が決まると、茨城県の訓練所に入られたとお聞きしましたが、どんな生活でしたか。

昭和19年2月29日。ちょうど閏年（ウルウドシ）で、卒業式どころか卒業証書ももらわずに、29日に入隊してなあ。前日の28日に、福山市の公会堂で、福山市から行く20名の壮行会をしてもらうた。代表で、答辞を読んだ覚えがあるんよ。20人のうち、10人が樹徳小学校出身者で、あと霞とか旧市内の小学校の子どもじゃったな。

今の茨城県水戸市（当時、東茨城郡下中妻村）にある「満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所」に入って、5月に満州の孫呉訓練所へ行くまでの2カ月と10日、そこで主に、軍事教練と農業の勉強をするわけよ。農業の勉強といっても、実習よ。でも、それ以外に、私は、「灸療特技生」といって、灸や鍼治療や按摩の勉強もした。満州の開拓地には、医療設備もないし、医者もおらんから、病気の治療に役立つ専門の勉強もしたくわけよ。みんなと同じように、軍事教練も農業訓練も受けるけど、その時間中に抜けて、専門のことも習った。

そうして、5月12日に、内原訓練所を出て、19日に下関から釜山へ渡る連絡船に乗って、陸に着いたら、それからはずっと鉄道。汽車に乗って、24日には孫呉訓練所に着いた。連絡船は、8時間か9時間乗っただけじゃけえ、そうそう長旅ではないよ。

内原訓練所を出る時、壮行式をしてもらって、5月14日に、尾道の千光寺公園でまた盛大な壮行式をして、親とか親戚が来て、面会する者もおった。私は、親は来んかった。西条（現在の東広島市）に訓練所があったので、そこに寄って3～4日、滞在したかな。

尾道で壮行式をしたというのは、義勇軍の中隊が三個中隊あるうち、福山・尾道・三原・御調郡・世羅郡・深安郡で、一個中隊を組んだからよ。一個中隊が250名余りかな。後で、遅れて渡満した者もおったけえ、最初は、幹部3名と200人弱の隊員じゃった。

○孫呉訓練所での訓練は、3年間だったとおっしゃっていましたが、そこではどんな生活をされておりましたか。

5月24日に孫呉訓練所に着いて、それからも、軍事教練も農業訓練もしたなあ。夏は、主に農業訓練、冬は軍事教練が中心よ。向こうは、ほとんど草原。羊草（ヤンソウ：牛馬の飼料や敷床用に使用する牧草）の草刈りや、畑をドンドン耕して作物を植えたりした。作っていたのは、麦・大豆・馬鈴薯（バレイショ：じゃがいも）なんかじゃなあ。馬が5頭いたけえ、馬で畑を耕したり、鋤で耕したりして、植え付けをした。

孫呉訓練所は、満州国黒河省（コクガシヨウ）の南、ソ連との国境へは、1～2キロあるかないかの山岳地帯なんよ。冬は、マイナス50度ぐらいになる。寒いとか言うもんじゃあないよ。瞬間に物が凍る。

訓練は3年間あって、中隊の人数も多いけえ、炊事だのなんだの役割を持って、それぞれ訓練せにゃあいけん。私は、岡崎吉郎庶務幹部付きということで、本部の仕事をするようになった。ずっとじゃあなくて、みんなと一緒に農作業の途中に抜けるような形よ。他の役割をする者も、同じように、その時だけ抜ける。ひととおり、開拓に必要なことを学ばせるといことは、子どもじゃけえ、したことのない作業や、開拓生活や集団生活に必要なことも習うわけよ。私らは、7次じゃけえ、それまでずっと、先輩が訓練を終えて入植しとる実績がある。必要な役割も、幹部はわかっとなる。

○軍事訓練と農業訓練以外の役割は、誰が決めるんですか。

幹部。小学校の成績も素行も、全部訓練所に送られとるわけだから、役割の向き不向きは、それを見て、幹部が判断したんじゃる。

○訓練所では、どんな食事をされていましたか。

軍隊より義勇軍の方が、悪かったと聞いたけれど、日本におるより良かったように思う。大陸の食べ物に慣れんと、開拓地での生活に馴染まんけえ、高粱（コウリヤン）とかも食べたんじゃないと思うけど、私はあまり記憶にない。初め、下痢した者がおったけえ、食べたんかな。

○孫呉訓練所で3年の訓練が終了するまでに、1年3カ月で終戦になりましたが、終戦を迎えた時は、どこにおられたんですか。

入所してから一年後、昭和20年の5月になったら、挺身隊としてよそに行くことになった。まず、5月30日に、私らの中隊から25名、哈爾濱（ハルピン）の満洲飛行機株式会社というところ（所）へ行って、7月に私らが、撫順（ブジュン）へ行く事になった。7月18日に桑田中隊長と隊員150名が、孫呉訓練所を出発して、南下して20日に撫順に着いたんじゃないかと思う。

他の中隊と合わせて530人ぐらい行ったんじゃないけど、なんで行ったんか言うと、撫順には大きな炭鉱があって、そこで働く中国人が仕事をしなくなって、人がおらんようになったわけよ。その補充に私らが行かされた。私らが知らなかっただけで、中国人は日本が負けそうなのを、よう知っとして逃げ出したんじゃないだろう。私らは、なんで撫順に行くんかも知らんで行ったんじゃないけえ。

行った先は、正式な名前は、南満洲鉄道撫順炭鉱機械製作所という所じゃった。何をするか言うたら、炭鉱で使う電車や機械類を作ったり修理したりするんよ。撫順は、珍しく日本にあるのと同じ型の電車がかった。それも、修理するということで、ハンマーの使い方やヤスリのかけ方なんかの基礎訓練を受けた。25日間の訓練が終わって、明日から実践という日に終戦にな

ったんよな。

孫呉訓練所を出発した時のことを思い出すと、今も胸が苦しゅうなる。悔やんでも悔やみきれんし、ずっと忘れることができんことがあって・・・。

撫順に出発する時、残留者が33人おって、そのうち幹部や在郷軍人や医療施設なんかの他の所へ派遣されとる者を除いたら、体調不良の者と病気療養中の者、体が弱い者ばかりじゃった。その中の一人に、小学校からの同級生がおって、結核になって療養所に入っとったんじゃないけど、その友だちが、撫順へ出発する前の日に退院して帰ってきたんよな。それで、中隊長が、「皿海君、結核が治って帰って来たばかりで、撫順に連れて行ったものかどうか。君はどう思う。」と、聞かれて、私も悩んでなあ。残っても農作業が大変だからと思って、「一緒に行きましょう。」と、中隊長に言って、一旦は撫順に行くこと決まった。

ところが、本人が残ると言うし、「行き先が炭鉱だからしんどいし、胸を病んでいるのに、粉塵とかが良くない。」と、中隊長も言うし、迷った末に、本人の申し出どおりにすることになったわけよ。これが、いけんかった・・・。一緒に撫順行っとたら、・・・死なずに済んだんじゃないのに・・・。残ったために、まだ15歳じゃのに、軍に編入されて、兵隊扱いを受けにゃあいけんようになった。その上、ソ連軍に連行されてシベリアに抑留されて、死ぬ羽目になった。それも、どこでどういうふうになつたんかも分からんまんまじゃけえ・・・。

このことが、悔やんでも悔やみきれんのよ。どうして、一緒に行動せんかったんかと思うて・・・。後悔が、この胸にずっと残るとる。私が、一生涯背負っていかんやあいけんと思うとる。

○終戦を知ったのは、いつ、どのようにしてで

すか。

撫順に、東公園というのがあって、休憩所みたいな所にラジオが置いてあったんよ。隊員の一人が、玉音（ギョクオン）放送をたまたま聞いて、大急ぎで中隊長に、「日本が負けた。」と報告したら、中隊長はビックリして、「君は、何を言っとるんだ！」と言って、いきなりその子を殴ったらしいわ。いつも穏やかな中隊長が殴るぐらいだから、本当に驚いたんじゃないかと思う。中隊長の隊長も知らなかったんだから、私らも、日本が負けたとは、信じられなかった。

兵隊は、南方へ送られて、いなかったから、軍から義勇軍に連絡があるわけないわ。まあ、それでも、夕方にはみんなに知れて、本当だというのがわかるんで、設備のいい満鉄の社員寮を出て、郊外のあまり設備の良くない満鉄の社員寮に移った。それは、あのまま撫順の中心部におったら、何があるかわからんからじゃろう。そこへは、一週間ほどおった。

○その後、どんな生活をされていたのですか。

終戦後すぐは、軍の糧秣（リョウマツ：軍隊の兵士と軍馬の食糧）が、いっぱいあったんよ。それを放出したから、缶詰でも何十個いうてくれた。砂糖もどんぶりに1～2杯はもろうた。子どもじゃけえ、それを取っとかずに、すぐ食べてしまって、その後放出もなくなった。

3カ所目の「万達屋」という所に移動してからは、食事とは名ばかりの高梁が少し入った汁になって、本当に食べる物がなくなった。

その頃、撫順の炭鉱本部の採炭所に、ソ連の少佐が監督官として来とってな。中隊長に、その監督官の用務員というか、小使いに命じられて、M君と二人でそこへ行ってた。採炭所の200メートル坂の上に事務所があって、その二階よな。終戦後、全部ソ連の支配下に置かれてしもうて、日本に替わってソ連が入ってきとるからな。でも、中国人が、働くんじゃないか、実

際に監督しとるんは、中国人よ。

M君と一緒に採炭所の本部に行っても、何もすることがないんじゃない。私らが二階におって、一階は中国の保安隊がおる。保安隊は、大きな釜で、白米を炊きようるんよ。二階の監督官の部屋の外に、ソ連の見張りの兵隊がおって、その見張りの兵隊の部屋に日本の軍隊から没収した飯盒（ハンゴウ）が、20～30個積んであってなあ。砂糖や煙草が、部屋いっぱいあるわけよ。見張りの兵隊がトイレかなんかで時々おらん時があって、その時様子を見て、飯盒を盗んだが、誰も気づきやあせん。煙草や砂糖を失敬してもよ。

一階にいる中国の保安隊の炊事班の者に、煙草を見せて、「マイマイ（取引する）。」と言うて、白米と交換するわけよな。中国の兵隊は、煙草を喜ぶんよ。それで、煙草と白米を交換して、寮へ帰って、蒸気で炊いて食べよった。寮は、スチームは通とるけど、暖房に使うわけじゃあない。コックが閉めてあるけえ、それをひねって開けると、「シュー。」とって蒸気が出るけえ、それを利用して、ご飯を炊いて食べよった。私とM君は、それで何とかなつた。

みんなにも、多少は分けるけど、それぞれ任務が違うけえ、それぞれ工夫して、食べ物を調達して来とった。日本軍の衣類や軍服とかを、中国人に盗まれんように見張りの警備に行く者は、勤務に行くとき自分の服を着て行って、帰る時には、その服を何枚も何枚も着込んで帰って来て、その夜すぐ、中国人に売りに行とった。そういう者もおった。中国人の畑の野菜やなんかを、盗んだりな。みんな、そんなことをしとったなあ。

万達屋では、10人ぐらいが一部屋におったんじゃないけど、夜O君が、「糧秣破りに行ってくるけえの。」と言って、倉庫をこじ開けて中の物を持って帰って、床下へ隠したんよ。私は、その時、偶然倉庫の鍵を持とって、O君もそのこ

とを知つとるのに、私に「鍵を貸せ。」とは言わんのよ。私も、鍵を渡したわけではないので、そのことは、見て見ぬふりよ。ずっと、知らんふりをしとった。床下の隠した食べ物は、盗んだ者が食べる。

みんな、食べるためにあの手この手よ。食べ物の中で、揉めたり暴力をふるったり、先輩に脅されて食べ物を渡したり、いろいろあった・・・。

10月過ぎて寒くなったら、暖房はないし、服や掛けて寝る物も売ってしもうて、いよいよ寒さと空腹でどうしようもなくなった。「脱走」と言よったけど、夜、中隊の寮を抜け出して、中国人の家へ行く者が増えたな。15～16歳で、まだ子どもじゃし、腹をすかせとるんで、中国人もかわいそうに思うて、家に入れて食べさせてくれるしな。それに、商店や飲食店が多い所じゃけえ、手伝いをさせたり、使い走りをさせたり、おったら便利じゃろ。働かせて給金をやらんでも、文句は言わん。食べさせてもらえりゃあいわけよ。農家や漢方薬の薬局へ行った者もおった。

そうこうしよったら、栄養失調で衰弱して死んだり、脱走したりして、150人の隊員のうち、中隊に残つとるのが、半分の75人しかおらんようになった。私は、なんとか食いつないで、中隊へ残つとった。

○帰国されたのはいつ頃ですか。

昭和21年5月の中頃、帰国できると聞いたんかなあ。中隊長が、いざ帰国が決まると、死んでもうた隊員のことを思うて、「親御さんに申し訳ない。」と言うて、泣いておられた。その姿を見て、私も辛くなった。昭和21年6月25日だったと思うけど、撫順を出て30日に葫蘆島(コロトウ)からアメリカのリバティ船(戦時中に大量に建造された輸送船)で、日本へ帰って来た。着いたんは、7月5日、舞鶴。福山

にコレラが流行つとるいうのも、そこで聞いた。中国人の家に住み込んだりしとった脱走組は、私らより後に、7月中に日本へ帰ってきたらしい。中国人の家庭に入つとった者のなかには、「このまま残って、うちの子どもになれ。」と、言われた者もおつたらしい。全員帰国したけど、引き留められた者もおった。

○福山へ着いてからのことを、話してください。

昭和21年7月7日に、福山に帰った。夜中の3時頃に福山駅に着いたけど、まだ暗かった。

さっき言ったように、福山で当時コレラが流行つとって、一旦福山へ入ったら外へ出られんと聞いとったし、福山が空襲で焼けたことも、前に聞いて知つとった。駅に着いた時、まだ暗いし、家も焼けてるかどうかわからんから、いろいろ考えてな。お袋の里が、千田じゃった。どうせ、家へ帰っても焼けとつたらわからんし、もしかしたら、家族はお袋の実家に行つとるかかもしれんから、そこへ行った方がいいかと迷つとたら、駅員が声を掛けてきてな。「じつと立つとるけど、どうするんか。」と、聞くんで、「明るくなるまで待つとるんじゃ。家に帰っても、家が焼けてなくなつとる思うけえ、誰もおらんかもしれんし、それなら、母親の実家を訪ねた方がいいか思うて、考えようるんよ。」と言うた。そうしたら、「きみの名前と住所は。」と聞かれて、答えたら、「ああ、それなら、きみのお兄さんが2週間前に帰って来たから、家はあるぞ。」と、駅員が教えてくれた。「ぼくは、野上に帰るから、霞町まで一緒に行けば、自分の家の場所はわかるじゃろう。ぼくの勤務があけるまで待つとつてくれ。」というてくれて、朝の6時頃かな、その人の勤務があけて、霞銀座通りまで行ったら、よう見ると、うちの近くの寺の五本松が、一本だけ焼け残つとった。それを目標に帰られると思うたけえ、その人にお礼を言つて、そこから一人で家へ帰った。その寺の前が自分

の家だったから、たとえ何もなくなっても、松の木でわかった。兄も、南方から復員して、2週間前に帰ってたんよ。なんで、駅員さんが知ってたんかなあ。

兄は、南方の島におったんじゃないけど、戦争のことは、一切話をせんよ。まったく、せんかったな……。兄は、坊主だったから、殺生をするのも、それを見るのも、いやだったんじゃないろう。弔う意味でも、決して話すまいと決めてたんかもしれん。兄も大変だったと思うけど、その後も、戦友の供養はしとった思うよ。兄嫁さんは、兄が出征してから、子どもを連れて光南町の家へおったから、兄も復員してすぐに家族に会えた。でも、兄は、すぐ大阪の寺へ戻ったんよ。

○家に帰って落ち着いてからは、仕事をされたんですか。

真ん中の姉が、「どこか、仕事を探さんといけんよ。」と言うんで、南本通りにあった「山口ラジオ復興社」へ勤め出した。戦時中は、「山口軍服店」という軍服を取り扱う店だったけど、戦後、商売替えて、ラジオ屋をやとった。

店主は、陸軍士官学校出の頭のいい人だった。電気を専門に勉強していて、数学も電気関係の知識も、はんだ付けも、順番に教えてくれる。私も、若かったから、直ぐ覚えるしな。出勤したら、店主がすぐラジオ作りの勉強を教えてくれてたけど、そのうち、店へ出て来んようになって、私一人でラジオを組立てるようになった。

学校も、小学校の担任の先生が声を掛けてくれて、2年ブランクがあるのに中学校へ行った。入って1年生をほとんどせんのに、すぐに2年生に上がることになって、このままで大丈夫なんかと、心配になって先生に聞いたら、「100点満点で、平均点が25点。皿海君は27点だから、平均より良かった。最高点が29点だった。」と、言われた。みんな、戦時中ろくに学校

へ行っとらんし、学校に戻っても、あんまり勉強できんかったんよな。私は、それから誠之館の夜間(定時制)に行った。学校へ行きながら、ラジオを作りようたんよ。

ラジオは、当時よう(よく)売れた。商品が7000円で、材料費が3000円ぐらいじゃけえ、大儲けよ。テレビがない時代じゃけえ。仕事ができるようになって、落ち着いたら、店主に勧められて、昭和27年12月に、電気屋として独立した。メーカーが、次々製品を出したけど、自分が組立てた物が、メーカーが作った物よりも、商品として劣っているわけじゃあないから、これから独立してもやっていけるんじゃないかと考えて、独立したわけよ。店には、電球やソケットを置いて、ラジオを組立てて売った。修理もするし、販売店としても成り立った。そのうち、テレビも売れるようになったし。

○「拓友会」という桑田中隊の同窓会のような会を作られて、50年くらい会長をしてこられたそうですが、それはどういった経緯からですか。

初めに話したように、私は、孫呉訓練所の本部で、主計担当の岡崎吉郎庶務幹部の所で、手伝いをしてたから、経理やいろんな集計をしたり、隊員の役割の割当て表を書いたり、何かにつけて、隊員の名前を書く機会が多いんで、早くに全員の名前を覚えたわけよ。先生も、中隊長も、名前をあげてその子がどんな性格かとか、役割の向き不向きを聞くので、「誰々は、体が弱いです。」とか、「誰々は、しっかりしとります。」とか、それぞれの特徴いうか、長所や短所を言えるようになっていくわな。そんなふうにして、本部へずっと勤務していた。

それで、日本に帰ってからも、中隊長が県へ報告に行くときも、「皿海君、一緒に行こうや。」と言って、一緒に行ってた。中隊の資料が、中

国で没収されとって、中隊長も大変だったから。まあ、そういうこともあって、帰国して、みんなの世話をするようになったんよな。それで、会を作って、昭和48年に慰霊碑をつくったり、平成3年に中国への旅行を計画したり、平成6年には、中隊の記念誌を作ったり、みんなで協力してやってきた。

満蒙開拓青少年義勇軍に行った者は、広島県が全国でも一番多いんじゃないか、慰霊碑は広島市にあるんよ。でも、近くにないと、仲間が参られんか、五人のメンバーで発起して、慰霊碑を造ったんよ。仲間が、何人も死んどるんじゃないか、私も一生懸命だった。

中国の旅は、行ける者だけで行ったんじゃないけど、お世話になった中国の人にも会えて、お礼も言えたし、いい旅だった。

記念誌は、『孫呉に陽は落ちて』という表題をつけた。全部で400万円ぐらいかかったかな。福山市や三原・尾道など関係のある自治体や広島県にも、図書館にも贈った。ドイツの国立図書館から問い合わせがあって、そこへも送ったね。それから、隊員全員と、亡くなった隊員の遺族にも届けた。個人情報が多いので、図書館でも貸出ししとらん。

私は、自分の子どもにもやったけど、読んだかどうかは、知らんな。自分の体験を、子どもには話したことはない。面と向かっては、話せんよ。

400万円は、隊員みんなが出し合ったんよ。まあ、出し合ったより、「おまえ、10万円な。」と言ったら、出さんといけんかな思うて、出してくれたり。

資料は、私らが苦労して揃えたんじゃないかなくて、昭和15年3次生の先輩が、資料を集めたり、調べたり、整理しとって、それを使わせてもろうたんよ。あれは、助かったわ。

○大変な責務を全うするにあたり、心の支えに

なっていたものは何ですか。

それは、一つには、「生きて帰った仲間の団結」、二つ目には、「無念に亡くなった仲間の慰霊」、そして、三つ目に、「生かしてくださった中国の人たちへの感謝」かな。その三つを支えにやってきて、形として何か残したかったし、ずっと拓友会を続けて来られたというのが、本音よ。

隊員の仲間は、皆同じ気持ちじゃあないかな。

○今日は、長い時間、ありがとうございました。

証言者 廣川 進（ヒロカワ ススム）
昭和4年生まれ
終戦時 15歳 満州国黒河省孫吳
聴者日 2018年6月11日

○今日は、主に満蒙開拓青少年義勇軍での生活や、戦後の引揚げ、帰国後の生活について、お話ししていただきます。よろしくお願い致します。

まず、お名前と生年月日、どちらでお生まれになったかを、教えてください。

廣川進。昭和4年8月17日生まれ。沼隈郡山南（サンナ）村で生まれて、14歳までそこで育った。

○ご家族のことを教えてください。

家族は、両親と、上から順に、姉、兄、兄、姉、私、弟の八人家族じゃな。

8歳年上の長男は、軍隊に行って、落下傘部隊入ったし、5歳年上の次男は、私と同じように、満蒙開拓青少年義勇軍に入って、満州に渡った。

○廣川さんが、満蒙開拓青少年義勇軍に入れたきっかけを教えてください。

昔は、それなりに裕福な家だった言うんじゃけど、私が生まれた頃は、貧乏でなあ。まあ、それが理由じゃけど、一番大きい理由は、他のことよ。

うちの村は、500軒ほど家があるが、一つの部落の一つずつぐらいの割合で、寺があるんよ。仏教寺院よな。全部で10カ寺ぐらい。どの家もその寺の檀家なんじゃけど、うち一軒が、大正時代、おばあさんの代に、天理教に入信したらしい。当時も、かなり村の人の抵抗はあったと、言ったな。500軒のうち、たった一軒天理教だというんで、私もさんざんいじめられたよ。学校へ行っても、「屋敷を払って、首吊

り給え、天理教。」言うて、いじめられるし、おとなも、いいことをしようが悪いことをしようが、名前を呼ばずに、「天理教の餓鬼か。」と言って、蔑むような言い方をするし、毎日、学校へ行くのも、嫌でたまらんかった。朝、「腹が痛い。」と言うて学校を休むんじゃけど、飯は食うから、おそらく、お袋には仮病がばれとったと思うけど。そうやって休んだり、学校へ行く途中、学校へ行かずに、友だちと「山へ上がろうやあ。」と言うて、山で一日中遊んどった。大方（オオカタ）、学校が終わるいう頃に、山から道路端へおりて、家へ帰ったりしようたな。

この村におっても、いじめられるし、いいことはないんで、「新天地へ行こう。」という気になった。兄貴も、ぼろっと「いじめられた。」と言うたことがあったんで、同じ思いをしとったんじゃろう。兄も、義勇軍に行った。まあ、それで、私も、義勇軍に行くことに決めたわけよ。

でも、お袋は、二番目の兄が義勇軍に行った後、一番上の兄貴が歩兵第四十一連隊に入ったから、「うちは、二人も国へ捧げたんじゃけえ、お前だけは、家へおってくれ。」と、えっと（たくさん）言うたけど、先生も勧めるし、心は決まっとった。

毎年、村で四～五人は、義勇軍に入っとったけど、ほとんどの人は、満州へ行ったら行ったきり、帰って来んのだから。たまに帰国して、報告会で演説する者がおるが、その人は、いいことしか言わんのよ。いいことしか言わんように、注意を受けとるんじゃろうな。義勇軍の隊員が帰国したら、あっちこっちで講演会をするから、話を聞いて、「義勇軍に行こうか。」という気になるわな。

うちも、貧乏じゃし、最初反対しとったお袋も、先生に、「いずれ、一家をあげて、満州へ渡ればいいんじゃけえ、義勇軍に行かせた方がいい。」と言われて、納得させられてしもうたわけ。

お袋も、貧乏じゃけえ、ゆくゆくは、次男か三男と、満州で一緒に暮らす方がいいと思うたんじゃろう。

○満蒙開拓青少年義勇軍に入隊後、訓練所では、 どういう生活でしたか。

まず、卒業式をせんうちに、満蒙開拓青少年義勇軍の内原訓練所に入った。昭和19年の3月から、70日ほど訓練を受けたんじゃが、軍事教練と農作業よな。私は、土浦の分室に行ったんじゃけど、関東の土は、勝手に違う。火山灰で、サラサラで粘りが全くない。使う鍬も、家で使った物とは違う。土の中に石が混じっとらんのはいいけど、土が良くないから、いい作物が作れるとは思えん。肥料をしっかりやって、土を改良して作物を植えるわけよ。

私は、学校へも行かず、勉強もしとらんから、だいたいテストも白紙か零点よな。だから、技術を身に付けたり、技術を必要とするような仕事には、就かしてもらわれんわ。特技生のような特別訓練もさせてはくれん。成績が、小学校から訓練所へ行つとるんだから。

軍事教練と農事訓練だけ受けて、70日して5月に満州へ行った。途中で、壮行会があって、お袋と祖父母が尾道まで会いに来てくれた。最後になるかもしれないと思うたんじゃろう。散々、お袋に泣かれて、私も少し辛かったな。

下関から満州へ行くのに、船と汽車じゃけど、途中、奉天（ホウテン）と哈爾濱（ハルピン）に下車して、一日とか半日とか、休憩させてくれた。気持ちとしては、今までで一番のんびりして、開放的な気持ちになったな。白系ロシア人の女の人を、初めて見て、人形かと思うぐらい色白できれいな顔立ちなので、びっくりした。哈爾濱では、川で半日ぐらい遊んだな。鉄道沿いに、わりと日本人がようけい（たくさん）住んどるから、停車駅ごとに、国防婦人会とか、県人会とか、詳しいことはわからんけど、日本

人の女性が、お茶の接待をして、歓迎してくれた。出発してから壮行会やお茶の接待、おまけに遊ばせてくれるから、気持ちはよかったよ。

孫呉訓練所に着いたのは、もう一つの班より一日遅く、昭和19年の5月24日じゃったと思う。寒くないよ。もう6月に近いんだから、一番いい季節よな。

訓練所では、寮母さんがおって、料理や裁縫を教えてくれたな。靴下は、よう破れるから言うて、電球や瓶に靴下の丸い部分を当てて繕う方法とか、ボタンの付け方をなろう（習っ）た。そりゃあ、何でも自分でできるようにならんと、軍隊と同じなんじゃけえ、人を頼ることはできんよ。訓練所に着いて、一カ月ぐらいしたら、それぞれに役割が与えられて、いろんな仕事をするんよ。作物の植え付けや収穫、馬や鶏や豚の飼育とか、醤油や味噌の醸造、もちろん草取りや畑を耕すといった、コツコツやらんとけん農作業もあるわな。

中隊には、正月までおったんじゃけど、正月過ぎに、小隊長が、「廣川君、本部当番に行ってくれ。」と、言うわけよ。私は、本部付ではないのに、なんでかと思った。小隊長が、「あんたの一番得意なことじゃ。」と言うので、行ってみると、ペチカストーブを焚く仕事だった。寒い時期は、暖を取るのにペチカストーブを焚くんじゃけど、うまくいかないと、煙が出て煙たいわけよ。その度に、中隊で私が上手く燃えるようにしとったら、それを見とった人がおったんじゃろう。そんなことでも特技になるんかと、おかしかった。家で、風呂も飯も炊きようたけえ、煙たくならんように、うまく火を焚くことができた。

当時は、中隊も、幹部が軍人ではなく、学校の先生や農業指導者とかで、無理やり徴用されて、中隊を任されるんよ。230人ぐらいの中隊を統率するのに、あまりにも幹部の人数が少なすぎた。忙しゅうて、幹部もペチカを焚く暇

はなかったろう。訓練中の私らは、そうやっていろんな雑用をしとった。でも、本部当番でペチカを焚いたのは、2週間だけだった。

その前に、孫呉訓練所の所長が亡くなった。虱(シラミ)で発疹チフスになったのが原因で、出張中に亡くなったんじゃけど、後任がおらん。それで、止む無く孫呉訓練所病院の院長が、新任で赴任してきたから、代理で孫呉訓練所の所長を務めることになった。それで、病院は、院長が不在のまんま。訓練所の病院は、風邪だの、下痢だのといった程度の病気や軽傷の訓練生を治療するだけだから、院長がいなくても看護婦(看護師)さんがおるから、簡単な治療はしてくれる。それに、3年次生ぐらいになると、仮病やちょっとしたことで病院へ来る者も、おらんよ。年頃だし、寮母さんと幹部の奥さんぐらいしか、女の人がおらんのだから、病院で、看護婦さんに優しくしてもらえると、うれしいからな。何も用がなくても、手当をすと言って、ガーゼをもらって帰る者もおるし、ひどいのは「消毒するから、消毒用アルコールを小瓶に入れてくれ。」と、ひつつこく食い下がって、手に入れる者もおる。消毒に使うんじゃあなくて、それを飲むわけよ。美味くはないと思うけど、飲めんことはない思うよ。酒の代わりにしとったんじゃろう。

そんなことを詳しく知ってるのは、私が、本部当番でペチカを焚いた後、訓練所病院勤務になったからよ。本隊で仕事をせずに、あちこちの雑用をしたりする勤務の仕方があるんよ。週に一度、幹部や職員がいる官舎の水汲みをしたり。その頃、官舎にいた男性は、現地徴収で兵隊に行ってしまうと、男手がなかった。力仕事なんかの官舎の雑用を、義勇隊の訓練生がするようになったんよな。毎週木曜日に当番で水汲みに行く時、先輩にさせんで済むように、初年次生の私が、「先輩。初年兵の私が、行きます。」と言って、先に先に仕事を買って出る。でない

と、先輩が、すぐ「貴様、生意気な！」と言って殴るんじゃけえ。ちょっとしたことでも。本隊にいとそうでもないけど、中隊以外の雑用や出先機関へ出かけて行く勤務は、先輩と行動を共にするんじゃけえ、しんどいこともあるよ。「初年次生は奴隷で、2年次生は上等兵並み、3年次生は神様」じゃけえな。

私は、作業はしんどいと思ったことはないよ。体を動かして、仕事をするのは好きだから。勉強は、ダメじゃけどな。

病院へは、ほぼ毎日詰めていて、本部に帰っても寝るところはないから、病院内の物置で寝泊まりしとった。朝起きて、朝食準備・病室の清掃・昼食の準備・薪割り・風呂の水汲み・夕食準備をこなす。動けない患者がいると、夜も介添えで起こされることもあったが、重病患者や手術の必要な重症患者は、陸軍病院へ入るんじゃけえ、生死に関係するような患者はおらんのよ。

○病院勤務の時の食事は、中隊と同じものですか。

いいや。病院で看護婦さんと一緒に食事を作るけえ、中隊の物とは違う。米かとうきびの入ったごはんを食べよったな。病人に、高粱(コウリャン)のような、あんまり消化の悪いものは、食べさせられんけえな。私らは、看護婦さんと同じ食事なんで、中隊より食事がよかった。イカデンプと言うて、細かく刻んだイカの佃煮があつて、それが病院で一番おいしいおかずじゃった。野菜は、自分らで作った大根や人参や南瓜(ナンキン：かぼちゃ)を使って料理しようた。

病院勤務者は、一カ月ぐらい陸軍病院へ研修に行くんじゃけど、楽しみは、やっぱり食い物よ。毎週日曜日の夕食に、食パンが出るのが嬉しゅうてな。昼から早めに風呂へ入って、夕方4時頃食パンを食べる。極楽みたいな日曜日だっ

た。一カ月の研修じゃけえ、3回だけの極楽じゃったけどな。それに、森永キャラメルが1箱出る。それも、楽しみよ。軍隊じゃけえ、待遇がええんじゃ。研修中は、学科と実地指導があったけど、ペチカで暖かい部屋の中で学科の勉強するんじゃけえ、つい気持ちがよくなって眠ってしもうて、ろくに勉強せんまんまよ。

病院勤務は、昭和20年の2月の終わりぐらいからずっとよ。私らのような病院の下働きは、一中隊から2名ずつなんじゃけど、3年次生は、自分たちの入植が近いんで、その準備で5月頃には来んようになるから、それ以外の者2名ずつという状況よ。

○昭和20年5月頃から、たくさんの訓練生がよそへ駆り出されたそうですね。

孫呉訓練所に入って、ちょうど1年たった頃、孫呉訓練所の訓練生が、勤労挺身隊として、よそへ勤労奉仕に行くことになった。5月の末に哈爾濱（ハルピン）へ行ったし、7月の下旬には、桑田中隊のほとんどが撫順（ブジュン）へ行った。それで、中隊には私ら出向組や病弱な者と幹部二人が残った。その時は、全く知らなかったけど、満州の南の方でB29の攻撃を受けるようになったらしゅうて、中国人が働かんようになったんじゃいう話よ。

○終戦まで、そのまま病院にいらしたんですか。

私は、そのまま病院に勤務しとった。そうしたら、8月9日にソ連が侵攻してきて、孫呉の百二十三師団の司令部から、残留しとる各中隊の訓練生や幹部、それから官舎に住んどった幹部の家族や訓練所の本部職員は、孫呉の街なかの師団司令部へ避難するように指示があったらしい。その日、孫呉訓練所を出て、そこへ避難したら、「11日に、全員軍へ編入されるから、全員お国のために尽くそう。」と言われて、ビックリよ。岡田幹部と私らは、孫呉の歩兵第二百

六十八連隊第一大隊へ編入・配属されて、二等兵になったんじゃ。「少年と言えども、日本人である。天皇陛下の御為に、戦って死ぬ。」と訓示されて、山の上の部隊の陣地へ行ったけど、さすがに、そうは言っても、私らは戦闘には参加せんでもよかった。炊事とかの雑用をしとった。

終戦は知らなかった。炊事班の班長から、「日本が負けた。広島にマッチ箱ぐらいの大きさの爆弾が落とされて、広島全部が灰になって、何年先までも草木が生えんらしい。」と聞いた。

8月17日だったか、よく覚えておらんじゃけど、陣地の山で武装解除して、ソ連軍の捕虜になった。その直前、一人の日本人将校が、天皇万歳を叫んで拳銃自殺を凶つたのを見た。そういう自殺者を見ても、戦争いうのは感覚が麻痺しとるから、「なかなか勇気のある人じゃ。」思うたけど、怖いとは思わなんだ。

当時のソ連は、戦闘の主力は西で、ドイツとかヨーロッパへ、ちゃんとした軍隊が配属されとった。東の中国との国境にいる兵隊は、急遽召集したような急拵え（キュウゴシラ）の軍隊で、服装も、軍服を着てない兵隊やゴム長靴を履いた兵隊やらで、よっぽど日本の捕虜の方が、まともな服装じゃった。

○捕虜になったあとは、どんな生活でしたか。

捕虜になってからは、2週間ぐらい孫呉の街なかの官舎の焼け跡におって、9月に入ってソ連軍から、「ウラジオストック経由で、日本へ帰国できる。」と聞いた。

それで、捕虜全員とソ連兵と一緒に航空写真を撮ると言うから、日本の将校は、きちんと正装したわけよ。そしたら、ソ連兵は、自分らがひどい恰好なんで、やれ服を脱げ、靴を脱げ、と言うて脱がして将校から取り上げて、拳銃に腕時計や万年筆なんかの目ぼしい物も取り上げた。捕虜だから、仕方ないよなあ。将校も言うことを聞くしかない。

日本人の通訳がどう訳したんか知らんけど、日本人の捕虜には、「ウラジオストック経由で、日本へ帰る。」と伝わって、道中で必要な食糧やなんかも支度して、孫呉の収容先を出発したんよな。みんな帰国できると思うとるから、元気はあった。じゃけど、三日三晩、「朝は朝星、夜は夜星」よ。ほとんど休まずに移動するんじゃ。残留組は、病弱な者はおったけど、動けん者はおらん。でも、こんな移動の仕方は、身体にこたえた。少しずつ後尾が遅れていったね。大八車に食糧や薪を積んでそれも運ぶんじゃし、みんな日本へ帰ると思うとるけえ、持てる物は全部持って移動しようるんじゃろ。馬は、ソ連に全部取られとるから、自分らの力だけよ。ソ連で抑留されるとは、誰も知らんから、逃げる者もおらんじゃろ。

ソ連兵の警備も手薄で、少年兵のように見える者もおったぐらいで、最初から抵抗されんように、日本へ帰すと、嘘をついっとったんじゃろうな。

黒龍江（コクリュウコウ）を渡って、ソ連のブラゴベシチェンスク（現ロシア連邦アムール州州都）に着いた。街なかを移動しとる時に、日本の捕虜とわかると、現地の子どもに、唾を吐きかけられた。黒龍江を渡る前に、雨が多量に降って水量が増えたけえ、船で渡ったんじゃけど、向こう岸が見えんくらいの広い河じゃのに、雨が降らんかったら、それを歩いて渡らせるつもりだったんか思うたら、雨が降ってよかったわ。

毎日、1000人単位で作業大隊にして出発させとった。私らの連隊だけじゃあない。あっちこっちから、1000人ずつにして、捕虜が集められて先に元気な者を出発させて、私ら子どもや病弱な者が、最後の出発だった。みんな、日本へ帰れると思うとるから、ウキウキして出発していくわけよ。大嘘じゃった。

孫呉から黒河（コクガ）までも、ブラゴベシ

チェンスクからも、鉄道はあって汽車は走ったけど、ソ連が日本軍から奪った保管物資を回収して、本国へ送るから、貨物列車でドンドン運んどる。火事場泥棒よな。ソ連は、中国に侵攻して、多量の日本の物資を中国人に分けるんじゃのうて、自分の国へもって帰るわけじゃけえ。

ブラゴベシチェンスクから、汽車で東へ移動した。私らの連隊だけじゃあない。あっちこっちから、1000人ずつにして、そこへ捕虜を集めてくるんじゃから。私らは、途中で降りて、コルホーズでじゃがいもを掘る作業をしたが、10月初めに雪が降って凍ったので、作業を中止して、引込み線に止まっとった汽車に乗ったんよ。そしたら、今度は、西に向かって走り出した。また、アマザル（現ロシア連邦ザバイカリエ地方）という駅で停車して、水道工事をしたんじゃが、寒いとこじゃけえ、水道管が凍らんように背丈の深さぐらい土を掘って、新しい水道の本管を埋めるんよ。掘るのはいいんじゃけど、スコップがカーブしてない団扇（ウチワ）のような形で、平たい鉄板に棒をはめただけのような代物じゃけえ、作業がはかどらん。それで、土を掘って地上へ投げ上げるんで、大変よ。でも、雪が降る時期までの間だけだから、それは短い期間だった。

最終的に、ブラゴベシチェンスクの西にあるスコボロジノ（現ロシア連邦アムール州中心都市）のエロフエパーロビッチ収容所に送られた。そこでは、機関車の石炭の積み下ろしを、三交代でした。発電所の雑役やら、水道工事、兵站（ヘイタン：軍の諸活動・機関・諸施設の総称で、ここでは、施設を指す）倉庫の雑役をする者もおったよ。それから、街じゅうのトイレの凍った糞を掘り出したりな。

石炭の積み下ろしは、日本人の兵隊たちと一緒にするんじゃけど、身体が小さい私らと組んだら、自分らがしんどいけえ、私ら子ども同士

が組むようになるじゃろ。日本兵はトロッコまで、石炭を早く運んで休憩しとるけど、私らは、同じ仕事でも時間がかかって、休憩なんかできん。おまけに、夜勤明けで朝帰って収容所で寝とって、石炭を下ろす作業があると、叩き起こされて作業に行った。一日も休みがなくて、みんな痩せこけとったよ。

初めの頃の捕虜の食事は、粟、高粱、小豆とかの粥よ。粟なら粟、小豆なら小豆だけの粥じゃけえ。その食糧は、私らが運んだ日本軍の糧秣よ。それ以外で、みんなで分配したのは、缶詰じゃった。ソ連の兵隊が缶詰を開けて食べて、缶を捨てるじゃろ。それを拾うて、食べ残しが缶に付いとるのをこさげて食べるんよ。それは、味が付いとるから、味の無い粥の足しになった。

捕虜は、暇があると、食べる物の話ばかりよ。「ゆうべ、夢に、てんこ盛りの銀シャリが出てきて、お袋が『食べえ。』と言うけえ、腹いっぱい食べた。」だの、「白い飯だけでええけえ、腹いっぱい食べたい。」だの、そういう話ばかりで、盛り上がる。

そんな生活をしとったら、前に中止になっとった水道工事現場へ行くことになった。確か、昭和20年の12月じゃたと思う。作業は、前よりもっと大変で、地面が凍ってコンクリートみたいだったんで、火を焚いて氷を融かして配管工事をしたな。食事も、黒パンが送られてくるんじゃけど、それが寒さで凍とって、二人引きの鋸で、10分の1ずつに切り分けて、その時出たパンの粉も、10等分にしてパンの上に乗せて食べた。凍とる黒パンを、口の中で溶かして食べるんじゃけど、味は、冷とうてわからんよ。その時期は、結構、きつかったな。

昭和21年1月9日の朝10時ごろ、水道工事の現場から収容所へ帰ったんよ。そしたら、「今朝、18歳未満の者は、日本へ帰った。」と、聞かされた。ほんの2時間の違いで、自分たちは置き去りにされた思うたら、何とも言えん気

持ちになったよ。

水道工事の作業中に、跳ね上がった石が足に当たって、青痣（アザ）になっとったんじゃけど、それが腫れて、2～3日したら化膿した。日本人の軍医がおって、「ロシア人は、捕虜の足は、すぐ切り落とす。どんな状態になっても、自分の足があるのが一番いい。麻酔が無くて辛抱すれば、私が手術してやる。」と言って、手術してくれた。麻酔なんかありゃあせん。ハサミで切り取るんじゃけえ、2枚の刃先で肉をえぐられるんで、痛いものなんのって。

○では、足を怪我しているのに、そのままずっと、シベリアに抑留されていたんですか。

それが、日本へ帰るのをあきらめとったけど、昭和21年の5月の終わり頃、急に「働かざる者は、日本へ帰す。」と言われた。ソ連全土の収容所から、病人や手足を失った日本兵の捕虜を北朝鮮に集めて、日本へ送り返すということじゃった。私も、松葉杖をついて、トラックや貨物列車に乗せられて、東へ向かったんじゃけど、ウラジオストックの外港に着いて、今度は船に乗せられた。それで、北朝鮮の清津（セイシン：チョンジン。現在のハンギョンブク道道都）に上陸して、無蓋車（ムガイシャ）で北へ向かったわけよ。屋根がないのに、途中で雨が降るし、皆傷病兵なんじゃけえ、次々に死んでいってな。北朝鮮に入る頃は、暑い時期で、夏バテのような感じで、衰弱して亡くなるんよ。古茂山（コモサン：コムサン。現在ハンギョンブク道プリョン郡）の小野田セメントの工場跡が病院いうか、収容所になっとった。建物の土間とその傍に掘った防空壕が、私ら傷病兵のねぐらだった。

水が悪いんか、動けん者ばかりで地べたに寝るんがいけんのか、次々アマーバー赤痢になった。私も、血便が出始めた。毎日健康状態を聞いて回るんじゃけど、一日数回の下痢では、取り合ってくれん。ずーっと垂れ流し状態にな

ったら、初めて気に掛けるような状態よ。

その頃、また足の甲が浮腫(ムク)んできた。それで、毎日衛生兵が、おんぶして治療するとこまで運んでくれてなあ。足は、治らんまんまよ。でも、毎日おんぶしてくれとった衛生兵と仲よくなって、その衛生兵が、ソ連兵からもらったという薬を飲んだら、アメーバー赤痢が、一発で治った。

食い物は、粟か高粱か、そういうものよ。海が近いけえか、塩鯖の頭もよう出たな。いや、おかずじゃあない、塩鯖の頭だったら、それだけが出るんじゃけえ。焼くんじゃのうて、蒸すか湯がいてあるんじやろう。身は、ほとんど付いとらんけえ、その頭をストーブで炭みたいに焼いて、骨ごと食べるんよ。塩っからいのなんのって、身体によくないのに、水をがぶ飲みするようになるんよ。

昭和21年の10月に、やっと、その古茂山の收容所を出て、與南の收容所に移って、引揚げ船を待つことになったけど、なかなか日本へ帰れんで、昭和22年の3月まで、そこにおったな。別に、薬もなければ、治療もほとんどない。傷のある者には、それこそ赤チンを塗るぐらいのことよ。

そこでは、広島県出身の衛生兵が二人おって、同郷のよしみで、私の面倒をようみてくれてな。一人は、西条の人で、もう一人は沼隈の千年(チトセ)の人じゃった。一度、リンゴを差し入れてくれたな。病院や收容所では、人が亡くなったら、遺体を片付ける時に着とる物を皆脱がして、現地の人に売るわけよ。その売ったお金で、リンゴを買って差し入れてくれたんじやろ。リンゴなんか、日本における頃から食べたことがない。いつ食べたんか忘れるぐらい食べとらんから、嬉しゅうてな。同じ部屋の者で分けて食べたんじゃけど、みんな珍しがって、喜んだよ。

○いつ、日本へ帰ることができたんですか。

3月じゃったけど、何日だったか、よう覚えとらん。夕方、「大安丸」に乗って港を出た。一日で佐世保に着いたよ。検疫があつてDDTを撒かれて、私は、担架に乗せられて国立大村病院(元大村海軍病院で、現在の国立病院機構長崎医療センター)に連れて行かれた。そういうことで、傷が治らんまんま、日本へ帰ったわけよな。治療の必要のない者は、みんな佐世保から家に帰ったよ。

私は、軍属扱いにもならず、一般の引揚者扱いじゃった。詳しく聞かれたわけではないし、義勇軍にいたことは話してなかった。関東軍の二等兵だったことが、どう報告されてたのか、仲間と一緒にないからか、手続きが全くしてなかったらしいんよな。ずっと後に、事情をよく知っている中隊の幹部が、県へ出向いて手続きをしてくれたから、解決したけどな。

大村病院では、復員兵は看護してくれるが、一般人は看護の人を付けにゃあいけん。病院が、看護の家族を呼べと言うから、家へ葉書で知らせて、お袋に看護に来てもろうた。姉は、私が義勇軍に行ってから嫁に行つて看護に来れんから、お袋が来てくれたけど、ずっとはおられん。私の症状が落ち着いたら、山南に帰った。それからしばらくして、杖をついて歩けるようになったけえ、兄が迎えに来てくれた。

收容所にいる時から、軍医が足の状態を、「骨膜炎」だと診断しとったけど、長い間、何も治療ができなかった。痛みは、軽くなつとったけど、歩けんかった。歩くと、悪化するから、どうしようもなかった。

それで、兄が、佐世保から国立福山病院(元福山陸軍病院。現在の国立病院機構福山医療センター)へ、転院させてくれたんよな。当時は、今の緑町にあった。歩兵第四十一連隊の所に。福山駅に降りたら、人力車で移動した。兄と一緒に歩かんといけんから。

入院しても、手当は、傷を消毒する程度だっ

たんじゃが、奇跡的に治ったんよ。オーストラリアの進駐軍が引き揚げる時に、余った食糧や薬品類を、全部福山へ置いて帰ったらしい。

それを、国立病院がもろうたんじゃろう。急に、缶詰が配られたり、チーズも、生まれて初めて食べたが、おいしかったよ。レンガぐらいの大きさの缶詰に、全部のおかずが入ると、おそらく野戦用食糧と思われる缶詰を、5～6個もろうた。

それから、病院がもらい受けた薬の中に、ペニシリンもあったようで、岡山大学から新しく病院長としてきた先生が、「廣川君、これをちょっと、試験的に使こうてみちやろう。」と、言うて、患部を切って骨を削って、そこへペニシリンを入れて縫い合わせたんよ。しばらくしたら、それが効いて、症状がよくなってきた。それで、足の反対側をまた切って、同じような治療をしたわけよ。最初の手術は、あくまでも試験的なものだったから、骨の片側にしかペニシリンを入れてなったけど、両方に入れたけえ、すぐによくなってなあ。本当に、運が良かった。今まで、運が悪かったけど、やっとな・・・。

○すぐ退院できたんですか。

いや。昭和22年の夏頃、長崎から福山へ転院して、退院したのが、昭和22年の秋じゃったと思うけど、正確な日は、覚えとらん。もう長いこと松葉杖で生活しとるから、その頃は、松葉杖と片足で、普通より早く歩いたり走ったりできるようになっただけで、使わん方の足は、筋肉も萎えとるし、病院でリハビリも少ししたなあ。

上の兄は、落下傘部隊において、あっちこっち転戦しとったけど、終戦の時には、日本へおった。特攻隊に入っていて、終戦になったら、「特攻隊のことは機密が多いから、アメリカに調べられる。すぐ帰宅するように。」と言われて、特攻隊で知り得たことを公言しないよう、釘を

刺されて、早くに家へ帰されとった。下の兄は、義勇軍で鉄驪（テツレイ：満州国北安省鉄驪）訓練所へ入ったけど、現地召集で軍隊に入って、シベリアに抑留されとった。それで、私より帰国が遅かったんじゃけど、どこで終戦を迎えたんか、どこの収容所にいたんか、聞いてない。本人が話さんので・・・。昭和22年の暮れ、シベリアから帰って来た。

私は、家に帰って、農業の手伝いをしとったけど、物が運べんから雑用しか手伝えん。当時、上の兄が、ブドウをつくりよった。沼隈のブドウ栽培の初めの頃よな。まだ、まともな収入にはなっとらんかった。しばらくは、家におったけど、大して農業の助けにもならんし、いつまでも兄の世話になるわけにゃあいかんと思うて、福山へ出て、仕事に就いたんよ。引揚げ後に、国立病院に入院しとった時に知り合った人が、わざわざ山南の家に訪ねてきてくれて、「映画館で働かんか。」と言うてくれたんで、兄に相談もせず、すぐ決めて家を出た。最初に行ったのは、地球座だったな。紹介してくれた人は、経営者と知り合いだったんで、「映写技師がいる。」と言うて、声を掛けてくれたわけよ。映写技師の資格を取って、仕事を始めたが、雑用もした。看板は、専門の人が書くんじゃけえ、その看板を設置したり、ポスターを電信柱に張ったり、何でも雑用をこなしとった。それに、住むところはなかったんで、楽屋に寝泊まりして、自炊しとったな。捕虜より、ずっとましな生活よ。配給を頼らんでも、一人じゃし、食ってはいけた。でも映画館は、午前中は仕事がないけえ、給料は安いんよ。時間に余裕はあるから、アルバイトもしとったよ。30歳の時に、映画館のオーナーが家内を紹介してくれて、結婚した。アルバイトもして、頑張ったよ。

そのうち、映画や芝居も、難しい時代になってな。映画館が潰れるごとに、次へ移る。私が移籍する度に、入った会社が潰れるんじゃ。ま

あ、そういう時代よ。映画が一番の娯楽じゃあなくなって、テレビも普及したしな。福山の映画館を、大阪の興行会社が引き継ぐ頃まで、私も勤めとったけど、昭和48年頃には辞めて、酒造会社へ勤めた。退職してからも、建設会社で働いて、考えてみたら、ずっとよう働いてきたな。身体が丈夫だったけえ、何とかな。

○満蒙開拓青少年義勇軍に行かれて、一個中隊200人以上の集団が、同じ訓練所で生活されたわけですが、問題は起きなかったのですか。おとなばかりの軍隊と違って、男の子ばかりですから、喧嘩とかはありませんでしたか。

いいや。それは、問題だらけよ。私の所属しとった桑田中隊は、幹部が五人ぐらい必要なのに、最初三人しかおらんかった。私らが、満州の訓練所に入った頃は、日本でも、満州でもずいぶん年齢が上の人まで、召集されて入隊しとったから、人材不足だったんじゃないや。子どもとはいっても、14・15歳の男の子ばかり220人以上おるんじゃないやけえ、幹部も訓練生の把握ができんのよ。目が届かん。

西瓜を現地の満人（中国人）部落の畑に盗みに行くんでも、夜じゃあなくて、真昼にリュックを担いで盗みにいくし、高粱をちぎって盗ってきたりする者もおった。自分や仲間の敷布や毛布を持ち出して満人に売って、飴を買って来る者もおって、さすがに、桑田中隊長が、朝みんなを集めて、「この中に、恐れ多くも天皇陛下の物を盗んで、飴をかうて帰った者がおる。」と言うて、説教されたことがあった。子どもいっても、あれだけの人数がおって、生まれも育ちも様々じゃろ。おとなの言うことを聞かん奴もおるし、小さい時から悪さをしよった者もおるわな。私は、痛めつけられる方じゃけえ、そがな（そんな）ことはせなんだ。

中隊の一部のグループが、別の中隊と小競（コゼ）り合いをしたり、なんてこともあった。草

削りの金属の部分をのぼして武器にして襲撃しようとして、軍隊に止められたり、子どもとは思えんようなことも、あったらしい。なんか盗もうと思うたんか、満人部落へ行ってゴソゴソしようたら、満人しかいないはずじゃのに、満人部落に潜り込んだる特務機関の人間に出くわして大目玉いうのも、聞いたことがある。所属がわかったら、大変なことになるけえな。

そういえば、訓練所で飼つとる豚を殺して食べた者もおったな。怒られんよ。いないことになつとる豚じゃけえ。親豚が子どもを産んだ時に、産まれた子豚の頭数を本部へ報告するんじゃないけど、6頭生まれたのに、1頭ごまかして5頭じゃいうて報告するわけよ。そして、少し大きくなったら、殺して食べてしまう。そんな悪知恵が働くんじゃないから、貯蔵庫のじゃがいもを盗むなんて、朝飯前よな。

悪知恵が働く者は、どこにでもおるわな。それに、やっぱり、食べることは欲望じゃけえな。ごまかしたり、盗むんは、スリルとか、また別の喜びなんかな。

私は、訓練所の生活が、気持ち的にしんどかった。捕虜いうのは、上官も二等兵も私らも区別はない。食べる物も、作業も同じ。それで、私は、捕虜になってやっと気持ちも楽になって、伸び伸びできた。捕虜になってから、やっと「生きとる」という気がしたな。

孫呉訓練所は、開拓だけじゃあなくて、家畜の世話から、味噌・醤油の醸造、養蜂など、分担して仕事を覚えて、3年後にそれを生かして開拓団に入植するわけよな。訓練所では、開拓地で困らんように、食べる物一切を自分たちで作ったり、賄うわけだから。開拓地は、広い。畑も、端から端まで作業して移動すると、一日の作業が終わるほどじゃけえな。それでも、満州より、ソ連の方が、広大な土地よ。

私は、頭は悪かったけど、労働は、嫌いじゃあなかった。中隊の本隊にいと、仲間と同じ

作業をしたりするんじやが、本部当番で他の作業や、他の出先施設に行かされると、先輩と一緒にだから、先輩にいじめられることが多かったな。何かにつけて、殴られる。訓練所病院勤務の時でも、突然先輩がやってきて、「どうしょうか、見に来た。」と言って、言いがかりをつけては、殴られた。夜は、先輩が「歌を歌え。声が小さい！」とか、「芸をして見せえ。」と、命じられるし、先輩の靴下も、毎晩洗わされた。靴下は、作業があるから、汚れがひどいじゃろ。しんどいから、自分の靴下は洗わずに、先輩に「靴下を洗いましょう。」と、自分から言わんと、「貴様！生意気な！」と言うて、殴られるわけよ。娯楽が全くないだだっ広い土地に、若い男の子ばかりで力が有り余っとるんじやし、ストレス解消に、憂さ晴らしをするわな。軍隊より、ひどかもしれん。兵隊さんも、そう言っとったね。ほんまに、「初年次生は奴隷で、2年次生は上等兵並み、3年次生は神様」じゃったから。

○かなり、お辛い毎日でしたね。

いや、先輩いうものは、そんなもんよ。私は、よくいじめられとったしな。

これは、あんまり話したくないんじやけど、一番本当に辛かったことじゃけえ、話したほうが、わかってもらえるかもしれんな。

昭和20年の5月に、桑田中隊の25人の隊員が、勤労挺身隊として、哈爾濱へ行くことになった。勤務している病院から本隊へ、帰るように指示があった。本部から電話で、「明日、10時までに帰れ。」と言われたので、翌朝、仕事を終えて10時頃に本隊に帰ってみると、誰もいないんじや。哈爾濱の挺身隊のことで、食堂に集まっとるんかと思った。それで、小隊長に、「帰りました。」と言うて報告に行こうと、無人の兵舎前を通っていたら、後ろで音がして、私の後ろに人が付いた気配がした。中隊のボスいうか、中隊一の悪い奴が、私を呼び止めて、「お

い！廣川！こっちへ来い！」と言って、兵舎の入口から一番遠い奥に連れて行かれて、「貴様！」と言うなり、いきなりぶん殴られたわけよな。後ろへ隠れとる者も入れたら4～5人おったと思うけど、殴ったのは2人よ。「お前が、中隊のことを、先輩にしゃべりようから、しごう（お仕置き）する。中隊のことが、先輩に知られた。犯人は、お前に違いない。」と、言うのが理由じゃった。因縁をつけられたようなものよ。先輩と中隊の話をする間（マ）はなかったし、話した覚えもない。病院勤務を、妬むいうことはないと思うしな。殴る蹴るの暴行の末、意識がなくなった。

私は、自分で勤務先の病院へ戻った覚えがないけど、2キロ近く離れた病院の玄関に置かれてたらしい。玄関で音がしたので、看護婦さんが、誰か来たのかと思って玄関へ出てみたら、私が倒れとったんじやそう。目が覚めたら、外科の治療室のベッドの上に寝かされて、毛布を掛けて、頭に水枕がしてあった。

頭を殴られたり蹴られたりして、意識を失う直前、最後に見たのが蠟（ロウ）引き紙（パラフィン紙）が巻いてあった蹄鉄（テイテツ）用のヤスリじゃった。蹄鉄用のヤスリは、片面が平たくて、もう片面にギザギザの細かい突起が付けてある。それが目に入って、最後に聞こえたのが、「平（ヒラ）でいけえよ。反対側じゃあ、型がつくけえ。」と言う声じゃった。たぶん、蹄鉄用のヤスリの突起のないほうで殴られて、それで意識を失ったんじやと思う。私だけでなく、前にも他の者に、同じようなことをしていたのは、聞いたことがある。

○そのことを、看護婦さんは、中隊長に報告されないんですか。

看護婦さんは、報告なんかせんよ。そんなこと、しょっちゅうで、普通のこと。義勇軍は、殴られるのが当たり前のような社会じゃけえ。

軍隊と同じか、それ以上かもしれん。上下関係は軍隊並みで、野蛮さは手加減を知らんから、もっとひどい。

今なら、病院でCT検査（コンピュータ断層撮影検査）とかで調べられるけど、設備がほとんどない上、医者もいない訓練所の病院で、何もわからんよな。治療といっても、意識が戻って、目が覚めたから、自然治癒よな。重症だったら、陸軍病院へ移されたんかもしれんけど、3日目に病院勤務に復帰した。殴った連中とは、私が本隊におらんから、顔を合わせずに済んだ。

私は、情けのうて、情けのうて、失望と淋しさで涙が止まらんかった。訓練が明けたら、私を殴った連中と、また一緒に開拓地に入植するわけじゃけど、「あいつら人殺しと、一緒には行きとうない。どうすればいいんだ。」と思うたら、泣けて、泣けて、仕方がなかった。看護婦さんが、「廣川君、誰もおらんから、声を出して泣きたいだけ泣きなさい。」と言うてくれた……。忘れられん。

この怪我のことがあって、挺身隊として派遣されず、日ソ開戦まで病院勤務で残ることになってな。この事実は、誰にも話してないし、知られてないことなんよ。

今でも時々、殴られた所が痛む。たいてい、夜寝床に横になると痛み出すけど、その部分を、自分でなでてやると、いつの間にか治まって、寝入ることができるんじゃけどな。いつもは、頭のその部分だけが痺れてるしな。後遺症よな。でも、医者は、大きなダメージの跡はないと言うんじゃけど。

私は、中隊の同期の連中にやられたけど、中隊の仲間の中には、先輩にも、同期の連中にも、ひどい暴力や辱（ハズカシ）めやリンチを受けた者もおる。それでも、一言も誰にも言わん。私も、人が何かをされるのを見ても、他の人に話したりはせん。ましてや、自分の身に起きたことは、言えん。こういうことは、本人にとっ

ては、「恥中の恥」じゃけえ、誰にも言わんよな。

私には、訓練所のいじめや暴力の中でも、これが一番辛かった。忘れることができん。いまだに、胸が苦しゅうなる。だから、中隊の集まりがあっても、リンチの話題だけは、誰も言い出さん。みんなも、同じなんじゃろ。

私は、義勇軍や捕虜の時の話を、家内にも、二人の子どもにも話したことはない。話しようない。思い出すのも嫌じゃ。辛い話は、人にはできんじゃろう。そういうもんよ。

私は、足を悪くして、帰国のため北朝鮮に足止めされたんじゃけど、私と行動を共にした孫呉訓練所残留組の仲間は、病死や衰弱死した者もいて、行方不明じゃ。それだけじゃあもう、18歳未満の者を捕虜にはいけないということで、ソ連が逆送して真冬の黒河へ置き去りにしたけえ、国民軍と中共軍の内戦に巻き込まれて、集団処刑された者もおる。その時、逃げ切ったたった一人の者は、国境を越えようとして「国境侵犯」でソ連に拘留され、昭和30年頃まで帰れんかった。今は、話しても、もう問題はないけど、その人は、解放後も全てのことを秘密厳守だった。その男の人生だって、取り戻せんよな。

私たちは、子どもだった。でも、心に受けたこの辛い傷は、いまだに癒えんし、消すこともできんでおる。

○今日は、思い出したくないとおっしゃっていたお話をしていただいて、お辛いのにすみませんでした。ありがとうございました。

証言者 門田 隆三郎
(モンデン タカサブロウ)
大正5年生まれ
終戦時 29歳
ニューブリテン島ラバウル駐留
聴取日 2018年6月27日

○門田さんは、町内でもいち早く召集され、長く激戦地で軍隊生活を送られたとお聞きしています。本日は、戦後の生活を中心に、お話をお聞きしたいと思います。最初に、お名前と生年月日、それから、どこでお生れになったかを、教えてください。

門田隆三郎です。大正5年6月26日生まれ。102歳。光南町生まれ。

○最初の召集のことから伺います。何年に兵隊に行かれたんですか。

昭和12年7月に、支那事変が起こって、陸軍歩兵第四十一連隊からも、大勢出征した。私は、8月2日に臨時召集令状を受取って、同じ町内のK君と第四十一連隊に入隊したわけよ。戦争に行く頃は、家業のレース会社は、編み機を増やして、従業員5人で生産も順調だった。会社も活気もあって、安心して入隊した。21歳よな。

3カ月訓練を受けて、補充要員として徐州戦から始まって、ようけい(たくさん)の作戦に参加したな。バイアス湾敵前上陸・広東三水(カントンサンスイ)攻撃・北支(ホクシ)警備・ノモハン増援の為の移動・南寧(ナンネイ)攻撃の賓陽(ヒンヨウ)作戦・ベトナムのフランス軍との戦闘というように、次々転戦して、戦闘の毎日だった。当時、ベトナムは、フランス領インドシナだった。そこへ進駐して、上海に上陸した後、一時帰国が許された。一旦除隊するということよ。昭和16年の初めよ。三年半、軍隊に行ってた。

そりゃあ、軍隊いう所は、軍籍があって、13年おったら、「軍人恩給」を出さなきゃいけん。軍隊に長くおらして、軍人恩給を日本中の兵隊に配りよったら、国が潰れて大事(オオゴト)になる。それで、一旦除隊させるわけよ。その時の軍の規定では、「引き続き」と言う文章が入ってるから、「引き続きなければ」足して13年になっても、恩給を払う必要はないわけで、国もよう考えとるわ。三月(ミツキ)でも、半年でも、家へ帰せば、「引き続き」じゃあないわけよ。

昭和16年の初めに除隊して家に帰った。帰ってる間に、結婚した。その間に結婚せにゃあ、一生嫁さんをもらわれんわな。その当時の風潮としては、男は25歳、女は22歳が適齢期で、それを外した者は、「嫁にも行かれず、嫁ももらえず。」というようなことじゃったんでな。男も25歳を超えると、「あそこは、いけん、いけん。ろくな者じゃあないじゃろう。」という噂が立って、誰も結婚の世話をする者がおらんようになった。当時は、仲人というて、どの町にも結婚の世話をする人がおったからね。その頃は、結婚のほとんどは、見合い。女性も、学校を出たら、「お宅の娘さんに、ちょうどいい人がおっせんじゃが、どうじゃろうか。」とか、「お宅の娘さんを、あこへどうかの。」というような口利きで、妻合(メア)わせとったんじゃけど、当時はそれがうまくいっていったんじゃ。

そういうことで、私は家内と見合いして、結婚することになった。当時は、家内も、「また戦争へ行くけえ、一緒におれる生活は短いものじゃろう。」と、覚悟して嫁に来たんじゃけえ。「そんなことなら、嫁に行きません。」と言ったら、当時は嫁入り先はない。戦時中なんだから。当時の若い女性は、戦死するかもしれん男性と結婚せんでもいいようなもんじゃけど、若い男は、皆兵隊にいくわけじゃけえ、「嫁に行かん。」というて、ずっと嫁に行かんまんま、親元へおる

わけにはいかんわけよ。

〇次に出征されたのは、いつ頃でしたか。

結婚して、3カ月で、また出征した。昭和16年の12月末だったと思う。除隊して、11カ月ぐらいで再入隊ということになるわな。

第四十一連隊の補充要員で召集令状が来たのに、輸送船で香港に着いたら、第六十五旅団歩兵第四百一連隊に変更されて、フィリピンのリンガエン湾に上陸して、バターン半島で第四百一連隊第一中隊に編入された。少なくなっていた第四百一連隊も、補充が続き、人数的にも戦闘にふさわしい体裁が整ったわけよ。それで、最初はよかったが、昭和17年の末頃になると、米軍の反撃が始まった。ガダルカナル島増援のため、私たちはニューブリテン島（現在のパプアニューギニア独立国）の東部にあるラバウルに上陸して、その西にあるラクネの警備に着いっとったけど、それも、2カ月したら、島の西端にあるツルブへ移動して、警備にあたることになった。駆逐艦で上陸して、宿舎や飛行場を造るというのに、敵機の爆撃で作業が進まんし、米軍の艦砲射撃で壕を掘ることさえできなくなった。やっと、陣地を造ったが、米軍は、夜も赤々と灯りを付けて、飛行場を造りようるんよな。日本兵が急拵（キュウゴシラ）えのモッコとスコップで、ろくに道具もなく、何百人がかりでやりようるのに、米軍は重機を持ち込んで、4日で飛行場を造ってしもうた。これを見て、日本の勝ち目はないと思うたな。

その頃、第四百一連隊が一個大隊増えて、再編成されてな。所属中隊の中隊長も、K中尉になった。でも、三角山での戦闘で、次々中隊が全滅し、隣接する青桐台（アオギリダイ）でも、夜襲で、我々中隊の一小隊が全滅した。日本の兵隊は、どんどん少なくなる。敵は、どんどん多くなる。「連隊旗は、兵隊にとって天皇陛下」なんじゃけど、その大切な連隊旗を掲げ

て、「最後の夜襲をかけて、あの万寿山（マンジュヤマ）をとったら、みんな万歳して、終わりにしてくれ。夜襲せよ。」という命令が、連隊長のK大佐から下った。

兵隊というものは、どこかに所属して、上の指示でしか動かんじゃから、どんな兵隊も、単独でぶらぶらすることは、脱走以外ないわけよ。自分は、分隊・小隊・中隊・大隊という軍組織の一員なんだから、上の指示や命令は、絶対なんよ。だから、反抗する者はおらん。

私たちの中隊は、ずっと青桐台において、米軍とドンチャラドンチャラ撃ち合っとたわけじゃけど、最初は何とか持ち堪えとった。でも、米軍はどんどん上陸してきた。米軍は、兵隊が戦死するとすぐ補充するけど、日本は補充できん。戦死したら、戦死しただけ、どんどん兵が減るわけよ。だんだん、米軍何百人に対して、20～30人で応戦するというような状態に、追い詰められた。米軍が、上空からグルグル回って見ようるけえ、「明日は、たいていアメリカが来るぞ。今日晩だけじゃのう。」と言うて、みんなと話しよった。私も、その時は、「いよいよ人生の最期が来たな。」と思うた。みんな、覚悟を決めたよな。

明日の朝、3時に突撃することになった。自分の髪を切って、遺髪として遺族に届けられるのを願って、封筒に入れた。遺骨は、絶対に遺族に届かんわけじゃから。家内や両親の写真やら、現金一万円やら、その時まだ持つとる物全部、ドッド、ドッドと雨の降る中、土を掘って埋めたよ。そのまま身に着けとったら、アメリカ兵に殺された後、「日本兵から取り上げたぞ！」と言うて、面白がられるだけじゃろ。それが嫌で、埋めたわけよ。これで、いつ死んでもいいというところまで、準備しとった。「錦用（ニシキヨウ）」という物だけ持って、「いついつ、決起して死にます。お前とは短い縁じゃったが、・・・。」とか、「親父、お袋、長い間お世話

になりました。」とか、遺書のような物を書いて、一緒に埋めて、本当に覚悟を決めた。

人間、これが人生最期じゃと思うと、やっぱり家族のことを思うよ。誰に聞いても、皆そう言うよ。もう何時間かしたら、この世におらんと思うと、親の恩を思う。「結婚して、家内とあんなことがあったな。こんなこともあったな。」とか、思い出しとった。

そんなことを考えながらじっとしとったら、敵がこっちへ来ようるんじゃ。私らの一個中隊だけ、ずっと前に出ておった。突撃まで2時間あったんじゃけど、あと1時間という時になって、急に「戦争をやめて、全員引き揚げろ！」と言われた。私らの所属する連隊に、「戦闘を中止し、ラバウルの防衛に当れ。」との命令が、方面軍から下った。前線におった私たちは、雨の降る真っ暗な中を、後方の清水川まで後退したわけよ。「命はあった。」と、思うたよ。

○青桐台にいる時は、具体的には、アメリカ軍とどんな戦闘状態だったんでしょうか。食糧は、補給されていたんですか。

米軍は、どんどん上陸してきて、戦闘態勢を整えとった。私らが突撃を命じられたんも、勝ち目がなところまで追い詰められたからじゃけえ。

近くに30メートルぐらいの高さの台地があった。そこへ米軍がズラーっと機関銃を据えた。米軍の戦争の仕方は、私らのとは違う。それまで知らん顔をしとって、午前8時になったら、まるで、仕事で出勤してきたかのように、ダッダッダッダッダッダと、撃って来る。「ありやあ、戦争じゃあない。遊戯をするようなものじゃのう。」と、みんなで悪口を言ようったんよ。

もう、この頃には、食べる物が全然ない。食べ物がないのは、みんなわかっとなるのに、「なんか、食う物はないかのう。」と、誰かが言うと、「こがあなとこに、あるわけなからうがあ。」と、

別の誰かが答える。こんなことを言い合って、諦めをつけるわけよ。それじゃのに、米軍は、ひとしきり機関銃を撃った後は、飯を食い出すんよ。コーヒーの匂いや、パンを焼くいい匂いがするんじゃ。100メートルも離れとりやあせんじゃけえ、近い、近い。向こうの話し声も皆聞こえるし、食べ物の匂いもする。飯を食うた後は、皿を洗うような音がして、また機関銃で撃ち始める。夕方になったら、ピタッとやめる。飯を食べるためじゃろう。ほんまに、サラリーマンみたいな戦闘で、とことん戦って日本軍をつぶす気があるようには思えなんだ。すぐそこに敵がおって、対峙しとるんじゃけえ、お互い動きはなんとなくわかる。戦争というのは、そんなもんじゃ。

なんでそんなに近くにおったかと言うたら、戦闘機は上空を飛びようる、艦船から艦砲射撃は始まる。戦争と言っても、私らは、敵と対等に戦うような状況ではない、撲滅状態じゃったんだから。敵の砲弾がドカーンときて、大きな穴があく。しまいには、私らは居り場がないけえ、その穴に入っておれば、一番安全なわけよな。それぐらい接近しとった。敵の手榴弾が届かん範囲の至近距離で、安全な所と言え、100メートル程度の近い所になる。地上戦というのは、そんな状況よ。

小さな山に日本兵がいる間は、すごいジャングルじゃったけど、米軍が入ってきたら、その木や草を全部伐採して、禿山（ハゲヤマ）にしてしまう。私ら中隊の後方に大隊本部があって、「このままではいけない。第一中隊は、何をしとるんか。早くしろ！」と、最後の突撃までにも、何度か突撃要請をしてきとった。でも、すぐに、突撃態勢に入ったわけじゃなかった。

私らの第一中隊の中隊長は、40歳を過ぎとったが、経歴も面白いが、人間的にも面白い人でな。日本の農業界で重要な新品種開発をした植物遺伝学者で、勲三等かなんかの叙勲受章を

しとった。その道では、知らん人がおらんような有名な人じゃったが、私のように身近におる者には、「私は、一万円で将校になった。まともに戦争の指揮官の勉強はしてない。」と言とった。中隊長が言うのには、「親父が、初年兵の時に苦労した経験から、私を将校にしたかったようだ。将校不足のため、大金を積んで、2年かかるところを1年の訓練で将校になれる制度を利用してなった。私は、将校になりたくなかった。だから、能力はないし、向いてもいない。第一、戦争は嫌いだ。」と。実際、日露戦争後に、将校不足になったんで、にわか仕立てで育成した時期が、10年間ぐらいあったらしい。中隊長のお父さんは、「お前、軍隊というところは、将校と兵隊では、大違いだ。将校は、何でも人に世話してもらえるが、兵隊は惨めなもの。お金を出してやるから、将校になれ。」と、勧めたらしい。

そういうわけで、中隊長は、私らの前でも格好をつけずに、「お前たちは、本当に死にたいか。」と聞く。私も、正直に「死にとうないです。」と答えた。

大隊本部から、「第一中隊は、今日、夜襲をかけるように。」と命令が来ても、中隊長はすぐには動かんかった。「自分は、今日は腹が痛いから、指揮がとれません。」と、言っていたが、違うのは明らかよ。大隊には三つの中隊があったんじやが、それぞれ違う場所で戦とった。大隊長は第一中隊が、命令に従わないと思ったのか、ものすごい剣幕で怒ったが、中隊長は、最後まで、ずっと一言も言わずに黙っていたな。

それでも、最後の突撃命令で、中隊長も私も覚悟を決めた途端、方面軍から撤退を指示されたわけよな。中隊長のお陰で、死なずに済んだ。

○中隊長の言動について、お詳しいですが、中隊長付きのお役目だったんですか。

私は、中隊の行動を記録したり、極秘文書を扱う係りじゃったんよ。それで、中隊長の近くにおることは多かったな。

○では、ニューブリテン島の西の端から、東端のラバウルまで移動するときも、その極秘文書を運ばれたんですか。

もちろんよ。雨に濡れんように、極秘文書をゴムの袋に入れて持つんじやけど、重さが20キロぐらいあって、本当に重かった。自分の荷物も持たにゃあいけんしな。それらを背負って1000キロの道のりを歩いた。1000キロといたら、四国の端から端までよ。その上、毎日、スコールのような雨が降る。100日かかった。戦況から見て、船での移動はあり得んかった。かと言って、海岸沿いには、米軍がおるから、ジャングルの中を移動するしかない。現地の人を通るジャングルの「獣道」よ。

いよいよ戦況が悪くなって、「ラバウルだけ守る。」という判断での移動じゃったが、無謀なものじゃった。「1000キロ歩け。食糧は、現地調達。」と、言われた。毎日スコールの中を、行軍した。木の芽や草の葉、蛙、蛇、鼠をつかまえて食べた。野生の豚や鶏、その辺の名前も知らん鳥も、銃で撃ち殺して食べた。鼠は臭うてあまり美味しゅうないが、蛙や蛇はうまいから、「味の素」と呼びようった。蛇はうまいが、骨が硬うてなあ。たんぱく質を摂らにゃあいけんいうても、タンパク質の中身は、そんな物よ。

現地調達と言うても、現地の人のお物を盗んだり無理やり取り上げると、摩擦が起きるし、下手をすれば、逆にこちらがやられてしまう。だから、略奪などしない。そういうことはしないように、教育も受けとるわけだから。だから、物々交換よ。私も、禪（フンドシ）を三つも四つも持とったけど、最後は禪まで交換に使うて、たった一枚だけになった。禪とタロ芋（サトイモ科の植物で、根茎を食用にする）を交換した。

現地の人は、禪を禪として使わんかもしれんが、そんなことはどうでもいいわけよ。紐の付いたただの白い布なんじゃけえ、現地の人は喜んで交換する。後で、それを何に使おうが、現地の人の勝手じゃけえな。最初は、それでもやっていけとったが、終いには、村の住民が皆逃げたしもうておらんじゃけえ、何千人、何万人という兵隊にとっては、逃亡した住民が残した少々の畑のタロ芋なんか、食糧とは言えん。行軍の途中のウプモダンという所で、一度だけ「梅干し一個」支給されたことがあったな。塩分と言うものを摂っていなかったから、ほんまにうまかった。その時は、梅干しを舐めて、舐めて、舐めまわして、種まで食べた。

ものすごい人数が、出発をずらして行軍しとるんじゃから、移動の最中に他の中隊の兵隊の落伍者や遺体、白骨までも見た。道は細くて複雑に交差しとる。隊に後れを取ってはぐれたら、生死不明よ。今まで歩いていた者が、ふらつき始めて倒れたら、もう二度と立ち上がれん。本当に、地獄じゃった。

○では、ラバウルに到着した時は、かなり隊員の数が減っていたんですね。

私らの第一中隊は、ツルブでの戦闘前には、150人おった。それが、戦死したり病死したりして減とったけど、100日行軍する間に、餓死したり、衰弱して動けんようになって落伍してしもうて、最後まで残ったのは、私を入れて25人じゃった。ラバウルに着いたのは、昭和19年の4月じゃったな。マッカーサーが、ラバウルを何とか落とそうと思つて、豪州（オーストラリア）におるんじゃけえ、こちらも防衛に努めにゃあいけん。

私は、自分の荷物以外に20キロの機密書類を運んだのがこたえて、当分寝込んだ。しかし、ここでも、食糧は自給するように言われた。米はあっても、私らには一切支給してくれんよ。

「現地調達から現地自活」になった。広大なジャングルを切り開いて農地にした。さつまいもを植えるんじゃけど、暑いところじゃけえ、植えた作物の成長もはよう（早く）て、すぐ収穫できた。三カ月で収穫できるから、年に4回収穫できるよな。さつまいも一個が、ものすごく大きいくけど、甘みも何もない。そんなさつまいもでも、腹は膨れる。長いこと食べ物に恵まれなかったから、喜んで食べた。元々、タロ芋はあったが、成長に時間がかかるから、さつまいもが、メインじゃったな。唐辛子は、自生しとった物があつたから、それを調味料代わりに使った。終いには、現地の人と物々交換で鶏や豚も手に入れて、それを飼つて、塩や味噌や醤油も造った。本当に自給自足だった。ラバウルの生活は、戦闘というより、食糧の確保が第一優先だった。一年余りそんなことをしてたな。

私は、二度の出征で、北は満州から、北支、中支、南支、ベトナム、フィリピン、ニューブリテン島と、あちこち転戦した。10年近く20代全てを、戦場で過ごした。戦つた相手は、うんざりするほど、ようけい（たくさん）おつたよ。最後がラバウルじゃったが、そこは方面軍の司令部があつて、性能のいい受信送信機材があるわけで、日本だけじゃあない、アメリカの状況も、それで傍受しようたんだから、敗戦はわかつとったんよな。

ラバウルの司令部は、戦況だけじゃなく、本国の状況も知つとったんじゃろうが、ある日全員集めて、「畏（カシコ）くも、天皇陛下が・・・。」と、訓辞があつた。「連隊旗を焼く。」と言つて、全員の前で焼いた。さすがに、この時は、みんな涙を流したな。でも、どこか心の片隅に、「これで、戦争をしなくて済む。」という安堵感があつた。

ずっと、米軍の戦闘機は上空で旋回しとつたが、攻撃はしてこなくなった。全員解散して、自分の隊に戻り、すぐに撤収作業に取り掛かっ

た。アメリカ兵が来て、武器を捨てて投降したというわけよな。捕虜になった途端に、武器を取り上げられたわけじゃあないよ。私らに処分させたんよ。私らが持つ武器を自分たちでドンドン集めて、それをザーッと海に捨てる。アメリカ兵は、それを見ようるわけよ。「武装解除」が、そういう形よ。その後は、米軍から、「自分たちで、責任もって、ちゃんとやりなさい。」というような指示よ。

○収容所生活になったんですね。どんな生活でしたか。

収容所といっても、アメリカ兵が作ってくれるわけじゃあない。陸軍も海軍も、併せて10万人兵隊がおった。全員の入る収容所を自分たちで建ててるんよ。1万人単位のグループにして、第一、第二、というように呼んだ。私は、第十一だった。一つの収容所に、二個中隊ぐらい入ったと思うよ。アメリカ兵によるいじめや嫌がらせ、見せしめは、一切なかった。

収容所に入っても、一生懸命作物を作って、自分らの食べる物を確保しようとした。人間は、願望があるけえ、もっと何かいい物を作りたくなる。元々、戦地で作物を作るという発想は、方面司令部におった名将が、思いついたことらしいよ。軍隊と言うものは、たとえ駐留しても長くそこにおらんし、糧秣は本国か現地で調達して、輸送されてくるから、軍隊が自ら耕作して収穫する必要はないじゃろ。その名将は、日本が勝っている頃から、「いつかこの島（ニューブリテン島）も孤立するから、その時の食糧確保のため、できるだけたくさんの野菜の種を、日本から集めて島へ持って来ておく必要がある。」と、言っていたらしい。

それで、まだ輸送船がまともに南方へ来ていた間に、種を運んできて、自ら畑を作りようたんじゃ。そういう司令官を見て、部下でさえ笑よったらしいが、1～2年経つと、輸送船も撃

沈されて、食糧が不足したわな。それで、その司令官は、先見の目があったということよな。そういうこともあって、自給自足は、島国の日本が、国外で戦う以上、手立てとして必要なことじゃったんよ。

でも、収容所の食事は、驚くことなかれ、ものすごくおいしいご馳走なんよ。アメリカから皆持って来てくれる。パンはもちろんじゃけど、じゃが芋や肉なんかも、皆バケツみたいに大きい缶詰で来るんだよ。こっちは、それをよう知らんから、この大きな缶詰を開けて、どうするんじゃろうかと思うとったら、「好きなように、分けて食べなさい。」と言われる。煮炊きせんでも、すぐ食べられる缶詰よ。こっちが、面食らうわな。毎日、山のように届けてくれる。

軍隊というものは、統率がとれていて、ずっとそれでやってきてるから、捕虜になってもいっしょよ。それでないと、示しがつかん。それで、もちろん役割を決めて、それに従って、規律のある生活をするわけよ。だから、炊事班もおったんよ。

本当に、100日歩いてラバウルに着いた時とは、大違いよ。その時は、ガリガリに痩せて、髭はボウボウ、服はボロボロで、敗残兵のようななりじゃった。それから自給自足で太りはせんけど、飢えまではしない生活じゃろ。捕虜になったら、大ご馳走よ。みんなホッとしたりした。米軍の食糧のお陰で、目方の増えた者も多かった。

今まで、飢えたり、栄養失調で衰弱して死んだ者のことを想うと、辛かった。のちに、日本へ帰って、シベリアに抑留された人の話を聞いて、本当に気の毒じゃと思うたな。

○日本へ帰れることやその日程は、早くにわかっていましたか。

いや、全然知らなかった。じゃが（だが）、いつか日本へ帰れるとは思ってた。

陸軍も海軍も仰山おるんだから、「何月何日何時、500人。」というように、分かれてたくさん停泊していた帰還船に乗り込んだ。

昭和21年5月5日、リバティ船という速度の速い船に乗船して、11日目の5月16日に名古屋港に着いた。検疫を済ませ書類を作って、日本の土を踏んだんじゃけど、名古屋に降り立って、一番印象的だったのは、日本の女性よな。日本人の男は、いっぱいおるけど、もう何年も、日本人の女性を見とらんから、「日本の女の人は、こんなに色白で、綺麗な人ばかりだったか。」と思うたよ。初めて見た女性も、別に若くもないし、美人でもなかったのに、そう思うた。まるで、浦島太郎よな。

リバティ船の中でも、食べる物は、いい物を食べさせてもらった。長い軍隊生活の中でも、肉の支給は一回もなかったから、捕虜になって初めて、外国産の肉の缶詰を食べさせてもらった。それは、忘れられんな。

○福山に帰られた時の印象は、どうでしたか。

汽車に乗って、福山に着いたんが、5月18日の午前4時頃じゃった。復員兵じゃけえ、電車賃は払わんでいいんよ。

福山に着いたら、ビックリした。バラックがいっぱい建っとった。両親や兄の生死は、全くわからん状態で、福山に着いたんだから。家に着いたら、まず父が、「まあ、よう帰って来た。」と言って、喜んでくれた。父と母がバラックで生活しとったが、私が帰ってきても、寝るところはないんよ。兄夫婦と三人の子どもたちは、別のバラックを建てて、生活しとった。家内は、金光（コンコウ：当時、岡山県浅口郡金光町）に実家があったんで、焼け出されてから実家に世話になっとったが、私が帰るのを電話で知らせたから、家へ帰って来て、会って一晩は話ができたんじゃけど、私さえ寝るところがないんじゃから、家内は翌日には、金光の実家

に帰った。私も、数日バラックへ潜り込んで寝よったけど、狭いから家内の実家に行って、3～4日そこへおって、親戚に帰国の挨拶をして回った。と、言うても、こちらが、「ただ今帰りました。」と言って、先方が、「ああ、どうもご苦労さんでした。」と言うぐらいなものよ。家内の実家は、「身を寄せてはどうか。」と言ってくれたけど、戦争から戻ってきて、自分には何もない。住むところも、食べる物も、仕事もないんだから、家内を引き取ることもできん。かと言って、家内と一緒に世話になるわけにはいかんじゃろ。

家内だけ、もうしばらく金光へおらしてもらうしかなかった。何とかしようと思っても、長う戦争に行っとるんじゃから、食べていく手段が思いつかん。しばらくは、ボケーっとしとりました。ボケーっとしとったら、両親は、配給の物、外米やら豆やらで、やっとなんか凌いどるような状況で、自分でも、これではいけんと思うばかりで・・・。

その頃は、家を建てようにも、区画整理予定で土地がない、金がない、金があっても材料がない。材料がまず、手に入らん。まあ、都市計画でまともな家は建てられん時期じゃったし、バラックでもみんな我慢するしかなかったんよな。両親も、食べるのがやっとなんで、当分バラック小屋から脱出できそうもないし、毎日考えばっかりしよった。

○お仕事は、どうされたんですか。

うちは、戦前レース車を製造しとった。うまくいったけど、私が二度めの召集を受けた昭和16年以降、統制が強化されて、材料が入らんようになった。

これは、帰国後に聞いた話じゃけど、人絹とか木綿とか全て配給制になって、終いに、配給する繊維もなくなった。「工場をストップせい。」と言われて、製造をやめさせられたと、兄から

聞いとります。それで、兄は、白紙召集で軍需工場へ働きに行くことになったんじゃないんです。当時は、仕事に就いとらん者は、動員された時代なんで、兄もそうだったんじゃないだろう。

当時、小規模の工場を5～6軒一緒にして、一つの会社を作って、機械を寄せ集めて軍需品を造るようになったんじゃない。そこで働く人間がおらんのじゃけえ、働ける者を白紙召集で集めよったんじゃない。働ける男は、皆兵隊に行くとるわけで、集めた人間は、皆素人ばかりじゃ。穴一つ開けるんでも、ヤスリ一つかけるんでも、「こりゃあ、ろくな出来じゃあない。使い物にならんで。」というような、仕上がりがじゃったそう。作業を覚えてたで、材料をまっすぐ切ることさえできんのに、そんな状態で、流れ作業の工程の最後には、ひどい製品が出来上がってくるわな。そもそも、工場におった熟練工が、兵隊に引っ張られておらんのじゃけえ、技術を教える者がいるわけもないしな。

うちの工場は、もちろん空襲で焼けてしまつとるし、取引先も同じ有様よな。最初、食べる物もどうやって手に入れたらいいんかわからんで、困った。闇（ヤミ）買いを、全く知らなかったからね。稼ぐのには、稼ぐ手段がいる。

帰国して1年ぐらいたった時に、広島県の産業関連の役人が来て、「戦前国外に輸出していた優良企業に、県が融資をして工場の再開を早めることになりましたから、資金が必要でしたら申し出てください。」と、言うてくれて、お金が借りられる目処（メド）が付いて、兄と一緒に工場を再開することにした。

まず、その復興資金で工場を建てて、編機の機械を据えた。編機は、空襲でも焼け残つとったんよ。手直しすれば、動いた。元々、戦時中も、特殊な機械じゃというんで接收せずに残してもいいという許可を得ておったから、残してあった。県が事業の再開を支援してくれるんだから、仕入れの糸などの必要な材料も、優先し

て提供してくれてな。その当時、日本の国としても、外貨がほしいわけだから、輸出できる品物は、優先して作らせたかったわけよな。製造再開の話聞きつけて、M物産の課長が訪ねてきて、こう言われた。「輸出しようにも、扱う商品がなくて困つとる。早く仕事を再開してくれ。レースは、当分ダメだけど、綿でラウンドメッシュの蚊帳地（カヤジ）を作ってくれ。頼む。」

当時、蚊帳地は、日本の網のような織り方と違って、丸い目（ラウンドメッシュ）でないといけなかった。それは、イギリスがそういう製品を作っていて、それが世界に広まって主流だったんで、蚊帳地の常識になってしまつて、それ以外の物は需要がないわけなんよ。レースを作っていた時の技術が生かせるから、うちはできたわけよ。戦前は、カーテンなんかのレース地を作つとったけど、戦後は売れるわけないし、レース地作りの技術を生かして作ったラウンドメッシュの蚊帳、それも「綿」でないといけなかった。綿は、糸に毛のような毛羽立ちがあつて、それが蚊の侵入を防ぐということで、材料が綿という指定だった。

蚊帳地は、現地では、一日中吊りっぱなしになるから、染色が悪いと変色するじゃろ。それで、染色技術の進んだドイツに、なかなか勝てんかった。散々研究して、国際検査をパスできる染色方法を開発した。これで、勝ち抜ける自信がついた。

日本では、蚊帳地は麻で作った物が多く、張り方も一部屋全体に被（カブ）せるように張るじゃろ。でも、外国から発注の蚊帳地は、綿のラウンドメッシュで、ベッドをすっぽり覆（オオ）う大きさの規格だから、日本の物とは、全く違うわけよ。みんな一人ずつベッドで寝るんじゃないけえ。この蚊帳の使用地域は、東南アジアなどの地域で、国連のユネスコの援助物資や、国際赤十字などからの入札による注文もあった。それに、蚊帳地は、M物産だけじゃない。他の

取引先も、よく売れるから、商品を探し回った。広島県内は、うち一軒だけが作っていたから、注文が殺到した。すごい数よ。一枚いくらか、もう金額は覚えてないよ。

でも、国の統制があつて、材料も材料の値段も決まるとし、製品の値段も決まるとるんだから、こちらが自由に値段を決めたりはできん。材料も、自由に仕入れられんし、輸出用だから内地用には作れん。つまり、外貨を稼ぐ製品についてのみ、材料を融通してくれるような状態だから。当時、小さな有限会社だったんじゃけど、「輸出貢献企業」として、通産大臣から表彰してもらったなあ。

それで、私もよう働いたよ。当時は、みんな銭湯を利用しようたけえ、銭湯もようけい（たくさん）あつた。銭湯は、夜11時には閉まるから、そのギリギリまで仕事をして、銭湯へ滑り込んだ。朝6時から夜11時近くまで、長時間労働もいいところよ。一日も早う家族と暮らしたいけえな。体は丈夫だったから、ほんまによう頑張れた。

○ご家族とは、ずっと離れて暮らしていらしたんですか。

そうよ。昭和26年に、やっと家内や子どもたちと一緒に暮らせるようになった。それまで、いつも家族に会いに行つた。寝るところがないけえ、金光の実家におらしてもろうとつたんじゃけえ、しっかり働いてお金をしっかり届けておりました。家内の実家の両親には、本当にお世話になった。

家を建てて、私の両親にも孝行できたかどうかわからんけど、両親と娘四人と私ら夫婦、八人で暮らすようになった。私は、仕事が忙しいし、家内は家族の世話や家事で大変じゃったと思うけど、ようやってくれた。感謝しとるよ。

○その後、お仕事は、順調でしたか。

仕事は順調で、儲かった。でも、金持ちになつたという感覚は、全くなかつた。相変わらず忙しいし、生活もそうかわらん。よう働いて税金も納めとつた。それじゃのに、追徴課税が何度も来て、払わにゃあいけんかつたな。それで、ようわからんのに、高額納税者になつた。

一番忙しい時は、蚊帳地だけで、一つの仕事が1億円ぐらいの仕事をしとつたから、従業員も、一番多い時で、50人ぐらいおつたな。

でも、それも、いつまでも続かんわ。田中角栄さんが首相の頃まで上り調子で、そこから下つた。蚊帳は、簡単な製品じゃろ。後進国、今でいう発展途上国に、機械メーカーが編機を売り込んで、丁寧に使い方を教えるから、現地でも蚊帳地を作るようになった。蚊の発生地域は、東南アジアのような地域で、賃金も安い。そうこうしているうちに、円高の影響もあつて、国際競争に負けた。日本の業者は、全滅よ。

○生き残って、一緒に捕虜になつた戦友の方と、交流をお持ちでしたか。

帰国して、10年ぐらい経ったら、みんな生活が落ち着くから、その頃から、毎年、戦友会をしとつた。中隊の25人の生き残りで集まつてな。本も作つて、図書館にも寄贈したよ。

○長く戦争に行かれていて、兵士としてはベテランですが、その経験から、お話になれることがありますたら、教えてください。

私たちの最終所属連隊は、歩兵第百四十一連隊なんじゃけど、もうその部隊のことを話せる人も、ほとんどおらんじゃろ。だから、少し考えとることを、話させてもらおうかな。

日本は勝つに決まつていて、必ず日本がアメリカに上陸する。その時の警備隊要員として、第百四十一連隊は作られたんよ。私らは、そういうふうに関わつた。一個連隊は、普通5000人から6000人の兵隊がいるんじゃけど、

第百四十一連隊は、わずかその半分の1500人しかおらんかった。持つとる兵器も、ものすごく少なかった。兵士が持つとる武器も、いい物はない。補充隊に編入される者は、鉄砲を持つとる者も少ないし、扱い方のようにわからん者もおるぐらいじゃ。軍は、私たちに、「サンフランシスコに、警備に行く。」と、具体的な計画を説明しとった。「だから、武器はあまり持たないんだ。」という説明までしとった。

でも、敵の武器を見たら、力の差を感じたよ。説明されていたことを思い出して、「そんなことは、あるものか。」と、思った。銃にしても、日本は、「三八式歩兵銃（サンパチシキホヘイジュウ）」という小銃を、少し改良して使うとった。明治38年に作られた小銃よ。ほとんど改良されてない古い武器で、戦争をしとるわけよ。北は満州から南はフィリピンが戦場だから、気候も寒い、暑いが厳しい。その状況で、銃は重い（重さ3730グラム）し、ガチャンガチャンと、銃弾の装填（ソウテン）に手がかかる。寒さによる不具合が起こることもあるらしい。それに比べて、アメリカの銃は、銃身長は短いし、銃弾は自動装填される。タッタッタッタッタッタッタと、撃てる。全然、性能が違うんだから。日露戦争の時、二百三高地でロシアの機関銃に手こずって、それで開発された「十一年式軽機関銃（ジュウイチネンシキケイキカンジュウ）」（大正11年開発）というのがあるって、私らは、まだそれをつこう（使っ）て戦争しようた。中国の方が、チェコ式の、まだいい銃をつこうとった（使かっていた）。チェコは、当時武器を作って、外国に売りようたからな。音も、チェコ式は、タッタッタッタッタッタという音ぐらいで、日本の十一年式は、タッタ、タッタ、タッタぐらいの音の感じなんよ。それに、よう故障するんじゃけえ、役に立たん。はよう（早く）撃とうと思っても、間に合わん。機関銃じゃのに、性能が悪いんじゃ。そんな武

器で、日本はたたこうとるん（戦っている）じゃけえなあ。

武器開発は、されとったじゃろう。陸軍上層部で協議しても、更に上の者が、採用の判断をするかどうかよ。予算がつかんいうことで、没になった物もあるんじゃろうな。

陸軍にしても、精神論が優先じゃけえ、最後は、「大和魂」で突撃させる。「必ず神風が吹いて、必ず勝つ。」と、言っとたんじゃけえ。

私ら兵隊は、軍隊のなかで、いつも言い合ってた。「わしらは1銭5厘よな。馬でも200円じゃのに。」と。1銭5厘は、召集令状、赤紙の切手代よ。兵隊は、1銭5厘で、なんぼう（いくら）でも、集められる。死んでも代わりはなんぼう（いくら）でもおる。しかし、馬はそうはいかん。だから軍用馬の方が大事なんじゃと、ぼやき合うわけよ。兵隊いうものは、そういうもの。

こんなことをいう者もおった。兵隊は、最初は二等兵。三月（ミツキ）すると、一等兵になる。上官には、いじめられる。一等兵の中には、長く一等兵のままの人間もおるんよ。初年兵でも伍長になっとして、3年兵でも一等兵のままの者がおるわけよ。すると、その3年兵が、「軍隊の中では、わしの飯の数の方が多いんど。生意気な奴は、ぶん殴ってしごう（お仕置き）をしてやる。」と言うんよ。軍隊では、階級より軍隊で食った飯の数、つまり軍隊生活が長い方が、幅をきかす。馬鹿げた話じゃろ。それに、2年兵ぐらいになると、どうでもいいことで揉めることがあるわけよ。そうすると、夜の点呼の時に、初年兵を意味なく殴ったり、一晩中立てらせたり、初年兵いじめをする。憂さ晴らしなんかな。そうすると、初年兵が、2年兵になると、また同じことを下の者にするわけじゃ。自分らがやられていやなことを、下にやり返すなんて、馬鹿げた話よ。だから、軍隊はいけんのよな。

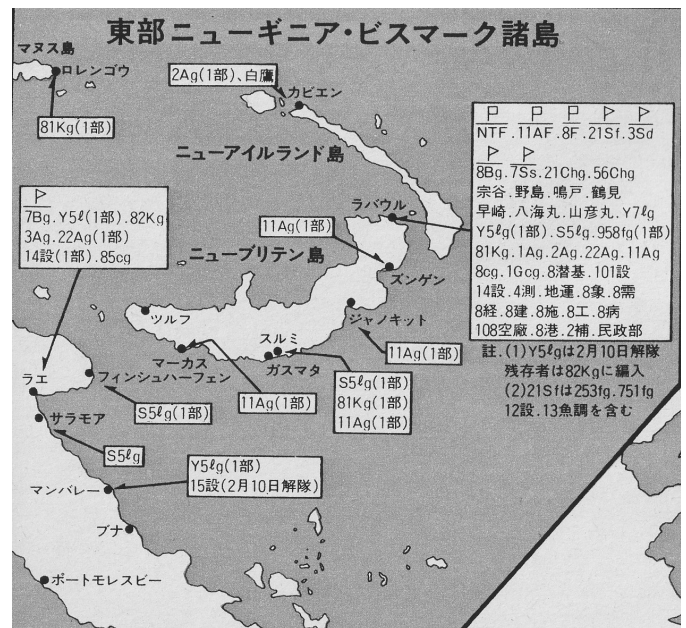
○ご自身の人生を振り返って、どんな感想をお持ちですか。

兄弟は六人おったけど、四人は幼い時や20歳ぐらいで死んで、兄と二人だけになった。最初に一緒に召集されたK君は、モノハンで亡くなったのに、私は生き残った。戦争へ長く行って、ようけい(たくさん)亡くなったが、私は生き残った。銃弾や砲弾が飛んできて、隣の人間が亡くなっても、私は当たらずに済んで生き残った。100日の行軍の時も、責務を全うして生き残った。命がなくなるのを、何度も覚悟したよ。帰国して食えん時代も乗り切って、何とか頑張れた。本当に、運がよかったとしか言いようがないよな。そういう経験があったから、苦しい時も、なんとか乗り切りました。

子どもにも恵まれたし、家内にも恵まれた。家内に大きな声で怒鳴ったこともないが、仕事が忙しくて、いつも一緒におってやれたわけではないし、いい夫だったかどうかわからん。それでも、家内が亡くなる前に、「私は、あなたのような人と出会えて、恵まれた人生を送れて幸せだった。」と、言ってくれた。家内の入院先の病院から帰宅して、眠っていた私の枕元に、家内が旅装束で現れて、夢の中で最後の別れもしてくれてな。

家内は、3年前に96歳で亡くなったんだから、長生きしてくれたとは思うけど、もう少し長く生きてくれてたらと、いまだに思うよ。家内には、本当に感謝しとる。それで、毎朝お経を上げようから、お陰でお経も上手になった。

○とても、貴重なお話を、本当にありがとうございました。武器のお話を伺ったのは、初めてで、勉強になりました。



「1億人の昭和史 日本の歴史」(1979年 毎日新聞社)から

【証言をしてくださったみなさん】

池尻 博さん 内田 温恵さん 岡野 幸江さん 大村 修司さん
北村 富喜子さん 駒形 昭子さん 佐伯 新三さん 皿海 久治さん
高橋 笑子さん 高橋 加造さん 高橋 實さん 田口 正造さん
檀上 裕さん 土屋 輝子さん 廣川 進さん 廣安 登さん
松井 元相さん 森近 静子さん 門田 一巳さん 門田 隆三郎さん
渡辺 早苗さん

(五十音順)

【協力してくださったみなさん】

福山市南公民館 南学区自治会連合会 南学区老人クラブ連合会

【編集委員】

福山市人権平和資料館

ふくやまピース・ナビ (五十音順)

井崎 育子・大井 千賀・高松 智佐・
田中 淳雄・坪山 和聖・中山 由紀夫・
船井 真奈美・堀家 美智子・宮本 峰子・
森近 静子



わたしの戦後体験証言集
Piece for Peace
～戦後復興の記憶をつなぐ～

2019年(平成31年)3月発行

編集 福山市人権平和資料館

ふくやまピース・ナビ

発行 福山市人権平和資料館

〒720-0061

福山市丸之内一丁目1番1号

電話 084-924-6789



福山市街図